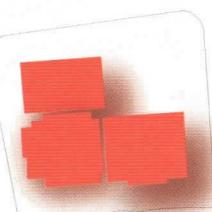


Tokyo Urban Tech

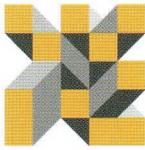
# NICHE

工学院大学建築系学科同窓会誌

<http://www.kogakuin.or.jp/kenchiku/>



2006 Vol.29



国土交通大臣指定住宅性能評価機関 国土交通大臣指定確認検査機関  
(財)住宅保証機構検査機関 住宅金融公庫検査機関・適合証明機関

# 株式会社 住宅性能評価センター

## 建築業界初のインターネット申請

申請ソフト【EFFVISIT】を利用して  
申請書(確認・性能評価)を同時作成。

## 申請のためのオリジナル画面

性能表示標準資料・オリジナル詳細図・  
各申請マニュアル等のご提供。

## 建築に関する検査を合理的に

「建築確認」「住宅性能評価」「適合証明」  
「(財)住宅保証機構」の一括審査・検査。

## 事務所に居ながら申請OK

インターネットによる申請・訂正で  
移動や郵送の時間短縮。

適合  
証明

## 【フラット35】の適合証明業務を開始しました。

OB  
特典

## 工学院大学卒業生の皆様への特典です。

- 申請ソフト【EFFVISIT】及びIDを無償貸与致します。
- 確認申請・住宅性能評価申請専用CADを50%OFFにて提供します。

募  
集

## パートナーを募集しています。

- 建築基準適合判定資格者
- 一級建築士



会社  
概要

- 住所 〒160-0022 東京都新宿区新宿2-3-11  
ダヴィンチ御苑前311 5F
- 資本金 1億円
- 業務内容 · 品確法 設計・建設住宅性能評価：設計審査、現場検査  
· 建築基準法 建築確認審査：設計審査、現場検査  
(500m以内の建築物)  
· 適合証明(フラット35など)公的金融機関の審査  
：設計審査、現場検査、  
「適合証明書」発行  
· (財)住宅保証機構 保証住宅 : 受付窓口、現場検査
- 社員数 58名 建設評価員 約130名(拡充予定)
- 営業区域 · 住宅性能評価業務、保証機構検査業務、適合証明業務  
[日本全国]  
· 建築確認、住宅金融公庫業務  
[東京都(島しょ部を除く)、神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県、  
栃木県、群馬県、山梨県、長野県、静岡県、愛知県、三重県、  
岐阜県、石川県、富山県、新潟県及び福島県の全域]  
(宮城県、鳥取県、島根県：申請中)

OB  
OG

- 代表取締役会長兼CEO 田野邊 幸裕 (建築学科 昭和44年卒)  
(建築系学科同窓会 会長)  
(校友会 監事、学校法人評議員)
- 代表取締役社長 杉山 正博 (建築学科 昭和45年卒)  
(建築学科 昭和44年卒)
- 取締役 大塚 廣 (建築学科 昭和44年卒)
- 技術推進室 宮田 奈津 (建築学修士 平成15年卒)
- 建築基準適合判定資格者 石川 良男 (建築学科 昭和37年卒)  
帯金 貞介 (建築学科 昭和38年卒)  
加藤 肇 (建築学科 昭和39年卒)  
勝谷 尚武 (建築学科 昭和45年卒)  
中島 範義 (建築学科 昭和47年卒)
- 審査統括部・検査統括部 曹 政雄 (建築学科 昭和44年卒)  
漆間 幹 (建築学科 昭和47年卒)  
並木 靖 (建築学科 平成09年卒)  
門脇 賢治 (建築学修士 平成11年卒)  
望陀 佐和子 (建築学修士 平成13年卒)  
加藤 朝子 (建築学修士 平成13年卒)  
小田 恵美子 (建築学科 平成15年卒)  
須藤 光俊 (建築学科 平成15年卒)  
西川 恵理 (建築学科 平成15年卒)  
泉澤 恵子 (建築学科 平成16年卒)  
富田 純子 (建築学修士 平成17年卒)  
吉田 研史 (建築学修士 平成17年卒)

問い合わせ

OB・OGまで、皆様からのお問い合わせをお待ちしております。

TEL 03-5367-8730

FAX 03-5367-8825

E-mail info@seinouhyouka.co.jp

URL http://www.seinouhyouka.co.jp

住宅金融公庫【フラット35】提携金融機関

# 株式会社 優良住宅ローン



## 住宅金融公庫の【フラット35】

### 4大メリット

#### 特長1

金利の変動がないから安心  
(最長35年)

全期間固定金利(35年)!  
お借り入れ時に返済終了までの返済額が決定。

#### 特長2

お借り入れは  
購入価格の  
80%まで!

融資額は100万円から最高  
8,000万円で、建築費用や購入費用などの80%まで利用可能。

#### 特長3

保証料0円、  
繰上返済手数料  
も0円

通常の住宅ローンで必要な保証料も保証人もいりません。

#### 特長4

住宅の質も確保  
物件調査で  
安心

耐久性などを定めた技術基準の検査をクリアした物件のみが対象。

優良住宅ローンでは【フラット35】のお得なプランがあります

**見積り説明や販売で、  
住宅ローンまでご提案できると、  
信用も、営業効果もグン！と上がります。**

**お申込は…**

**工学院大学建築系学科同窓会HP から  
申込書をダウンロード & FAXしてください！**

本社は 新宿校舎 隣の、エステック情報ビル 20階

どうぞお気軽にご相談ください

**■お問い合わせ先**

**TEL 03-5339-8966**

**FAX 03-5339-8967**

平日 9:00~20:00 土日祝 10:00~18:00

賃金業 東京都知事(1)第29316号

株式会社 優良住宅ローンは、  
工学院大学 建築系学科同窓会を応援します

次の世代の資産を創る。

[www.retec-duplex.co.jp](http://www.retec-duplex.co.jp)

わたしたちは、開発型不動産流動化事業の  
フロントランナーとして、時代と土地を凝視し、  
その地にあるべき「建築の姿」を追求しています。  
そしてそれは、レジデンス、オフィス、ショッピングモール  
となって、これから次々と誕生します。  
「ものづくり」の原点を見つめ、ひとつひとつ、丹精を込めて  
建物を創り上げること、そして、人が真に心地よさを感じる  
空間を創り続けること——。  
わたしたちは、この基本姿勢を大切に守りながら、  
未来を見据え、次の世代に引き継がれる、  
優れた社会資産の創造に寄与して参ります。



DUPLEX

リテック・コンサルタンツ

国土交通大臣(2)第5847号(社)不動産流通経営協会会員  
(社)全日本不動産協会会員(社)首都圏不動産公正取引協議会加盟  
〒112-8883 東京都文京区目白台2-9-13 目白台デューブレックタワー  
TEL.03-5976-8888

トルテック都市建築設計事務所

一級建築士事務所 登録番号 東京都19172号  
〒112-8684 東京都文京区目白台2-9-13 目白台デューブレックタワー  
TEL.03-5976-8888

デューブレックス・キャザリング

東京都知事免許(2)第76366号  
〒112-8685 東京都文京区目白台2-9-13 目白台デューブレックタワー  
TEL.03-5976-8885

# NICHE 2006 Vol.29

## CONTENTS

### 同窓会会长挨拶

田野邊 幸裕 NICHE2006 Vol.29の発刊に寄せて

2006年春母校工学院大学は大きく変わります。.....2

### NICHE Topics

①スチューデントセンターのプロポーザルコンペ.....	4
②日本都市計画学会賞「石川賞」授賞 初田亨教授.....	8
③日本建築学会奨励賞受賞 中島智章助教授.....	9
④第24回 三重県建築賞 小林将夫氏受賞.....	10
⑤2004年度学位論文取得者紹介.....	11
⑥国際・国内のコンペで大学院生大活躍.....	12
⑦全国の大学や本大学の設計優秀作品展開催.....	15
⑧荻原研OB会 望陀宣夫.....	16
⑨岩田俊二教授(三重短大)農村計画学会賞受賞	
⑩秋の叙勲島根県の尾崎明雄氏.....	17
⑪難波研OB会情報、小林克弘	
⑫「新潟県中越地震」災害調査報告会.....	18
⑬都市居住・課題作品展、丸ビル7階会場.....	19
⑭イスタンブールにてmAAN国際ワークショップ 「上海工業再生訓練」展覧会開催.....	20
⑮「構造計算書偽造問題」で振動実験TV放映2005年12月 宮澤・小野里研究室	
⑯韓国、水辺をとりもどす都市環境づくり.....	21
⑰「既存木質住宅加振実験」宮澤研究室.....	22
⑱2004年度卒業設計最優秀作品 西岡大輔	
⑲第40期2005年度建築系学科同窓会の総会開催.....	23
⑳「阿佐ヶ谷の賑わいをデザインする」阿佐ヶ谷調査団	
㉑「日本の近代建築の流れ」工学院大学後援会東京支部.....	24
㉒建築を学ぶためのPERFECTガイド 2006.....	25
㉓第1回 大仮装大会開催.....	26
㉔新刊書紹介 10冊.....	28

### 特別企画

「日本デザイン論をめぐって」伊藤鄭爾.....	30
みちもり広場(品川セントラルガーデン) 成田治.....	32
建築生産の変化と今後 北川啓一.....	38
照明デザイナーの仕事『光の料理人』 東海林弘靖.....	42
NICHE鼎談 樋口清先生を囲んで.....	46

### 世界の建築家と工学院大学③

フランク・ロイド・ライト 建築の編成と構造 南迫哲也.....	50
NPO「ライト建築アーカイブス日本」創立.....	54
「ライト建築アーカイブス日本」会員募集のお知らせ、入会のお願い.....	55

### 輝かしき先輩たち⑦

福井房一、工学院大学建築系学科卒業の海外留学・第一号 類洲環	
.....	56

### 同窓生を訪ねて

①アカデミーで木造教育・研究に活躍中 小原勝彦.....	60
②ファッションの世界で10年サイクルの人生 谷口陽堂.....	64

### 同窓生からの便り

①バイオマス・ニッポン総合戦略 岩藤一樹.....	66
②レツ防災しぶとく地道に 小清水早起.....	68
③循環型社会構築に向かって 新田国男.....	70
④倍半分の世界 久保豊.....	72

### A round the world

①豊かで奥が深いイギリスのランドスケープ 宮原かおり.....	74
②中国における商品住宅の最新動向 馬 洪岩.....	78
③社会人入学のチャンスから、ペンシルベニア大学で、 一喜一憂奮闘中です。 渡辺美緒.....	80

### NICHE PASSPORT

①「アメリカの町並みと歴史から」 平井充.....	82
②「ヨーロッパ5カ国66日間建築旅行」 仲村和晃.....	85
③「千变万化な中国」 柳俊文.....	88
④「フィンランドの高齢者福祉を学ぶ」 西野亜紀子.....	90
⑤「都市と農業の共存へ向けて2004in台湾」 増田英朗、中山正樹.....	92

### NICHE GALLERY

①彩の国くまがやドーム 古山六男.....	94
②下館工業高校 岡野芳徳.....	98
③足利の家、太田の家、熊谷の家 小島光晴+小林瓦.....	102
④祝言寺山門・永代供養塔 矢澤清夫.....	106

### 新しい風に聞く 塩田正純 建築学科教授.....

### 建築系学科 ホームページの紹介.....

### また会う日まで

木村幸弘助教授.....	112
宮城千城教授.....	113

### 学科だより

第1部建築系学科の近況 宮澤健二主任教授.....	114
建築都市デザイン学科の近況 倉田直道主任教授.....	115
第2部の現況 宮城千城主任教授.....	116
大学院建築学専攻の近況 嵩英雄教授.....	117
2005年大学入試について 後藤治教授.....	118

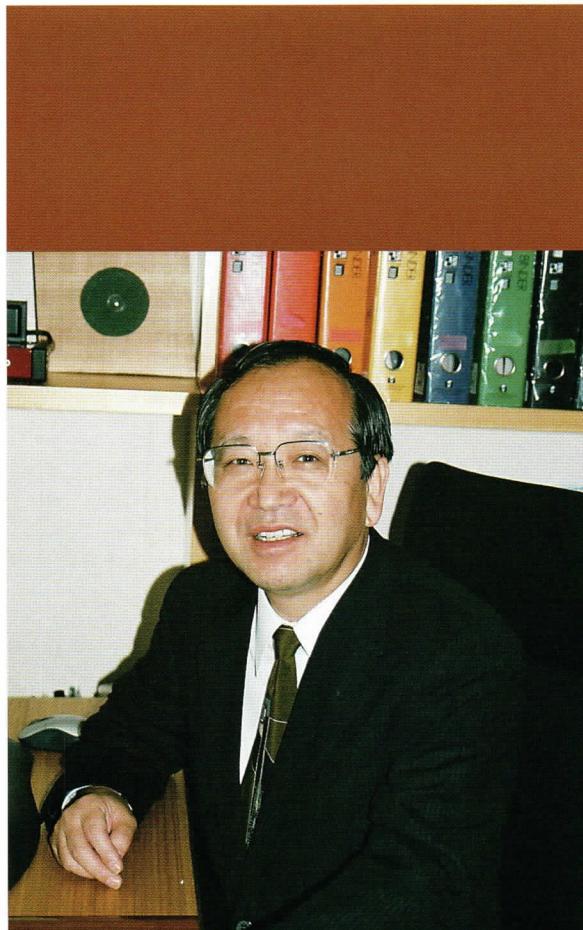
### 2005年度 運営委員会名簿.....

### 2004年度卒業設計・卒業研究題目名簿.....

### 年会費・寄付金.....

### 表紙デザインのコンセプト、編集後記.....

## 2006年春 母校工学院大学は 大きく変わります



同窓会誌「NICHE」お待たせしました!会員の皆様、如何お過ごしでしょうか?

同窓会誌NICHEは、会員の皆様からの貴重な会費で運営しておりますが、少ない予算を有効に利用するために、学園全体のOB組織である校友会の会報と併せて送付する事になりました。また、昨年1月の発刊に向け編集作業を完了した時点で、会費の納付状態と掲載内容について検討した結果、発刊時期を変更し、さらに送料を削減することで、掲載内容の充実と維持に努めることにいたしました。心待ちしていただいた皆様に発刊が大変遅くなりましたことを、お詫び申し上げます。

ところで昨年発覚した姉歯元建築士による構造偽装問題は、建築に携わる我々には激震が走り、憤りを感じた事件でした。

またアスベスト等の建築材料問題でも、社会的な建築の

安全性に対する信頼を裏切り、不安・不信感を広めてしまったことは、誠に残念でなりません。この不信感を回復するために、13,000人を超える我が工学院大学建築学科卒業の皆様が、積極的な役割をはたして頂き、建築基準法第一条「…国民の生命、健康及び財産の保護を図り、もって公共の福祉の増進に資することを目的とする」の初心に返り、信頼回復に貢献されますよう切に願う次第です。

さて、2006年春 母校工学院大学は、「工学部」「情報学部」「グローバルエンジニアリング部」の3学部体制を経て、さらに我が建築系学科も日本初の「建築学部」構想が検討されており、新しい発展が期待されます。

母校は、明治20年、西欧の工業技術教育をわが国に導入し、「中堅の工業技術者の育成」を目的に工手学校として設立されました。昭和3年に校名を工学院に改め、昭和24

昭和44年 大学1部建築学科卒業  
鹿児島県立 鹿屋高等学校 出身

工学院大学建築系学科同窓会 会長

# 田野邊 幸裕

年に新制大学の制度発足と同時に工学院大学となり、現在にいたっています。

今回の新学部・新学科設置に伴う大学改革における基本的な考え方は、建学以来の伝統を受け継ぎ、知識基盤社会と言われる21世紀において、科学技術立国の中核となる優れた技術者の育成を目指すことです。その上で、社会の変化とニーズに応える教育方針を明確にし、人間力も強化して教育内容をより充実させようということから、これまでの教育実績を基盤に教育分野を拡大することで、21世紀にふさわしい学園創りの第一歩として踏み出しました。

OB・OGの皆様、母校の発展する姿・可能性に、大いに期待いたしましょう。

5月末開催予定の同窓会及び校友会総会に出席していただき、ぜひご自身の目で確かめてください。

**「工学部」「情報学部」  
「グローバルエンジニアリング部」の  
3学部体制へ  
我が「建築系学科」も  
新学部構想を検討中**

**報告事項**

**■第40期 2005年度 工学院大学建築系学科 同窓会 総会開催**

日時:2005年5月29日(日)10時30分から新宿キャンパスで開催いたしました。

議案1.39期(2004年度)事業結果及び収支決算(案)の報告について

・運営委員を含む役員は、前年度と同じ(任期2004年4月1日から2007年3月31日の3年間)学生協力担当者…嵯峨彰仁、小林茉莉(大学院2年)

●同窓会誌(NICHE)28号を2004年11月に発刊

担当:大場光博副会長、鰯坂誠之、伊藤真人、高木雅行、谷口宗彦、田野邊幸裕、初田亨、三好薰、学生:小野あゆみ

●発行 15,500部136頁●広告収入17社 97.9万円●全国卒業生へ発送10,500部●在校生配布 3,600部

- 工学院大学受験高校へ発送・輝かしき先輩たちは神宮外苑の「絵画館」の設計者小林正紹
- 表紙デザインをHP等で一般募集した結果:藤原智弥氏(大学院修士2年)の作品を採用
- ホームページの充実 担当:関谷真一副会長、鰯坂誠之+学生+協力者
- 交流事業 担当:三好薰幹事、高城文一、高橋昭彦、+学生
- 大仮装フェスティバルを開催:2004年12月4日(土)於:大学アトリュウム。学生参加者253名、OB参加者64名、寄付金と後援会から30万円の補助金、総費用110万円
- 現役学生に対する支援事業 担当:谷口宗彦副会長
- 【2級建築士アカデミック講座】(2004年度は70名、2005年度は80名の現役学生が参加)
- 名簿の作成等 担当 総務:小野あゆみ(大学院2年)  
●個人情報の機密保持の為、CD-ROM発行を中止した
- 39期総会を、5月30日(日)10時30分から新宿校舎 11階0511会議室に於いて開催
- 議案2.40期(2005年度)事業計画及び収支予算(案)について**
- 同窓会誌(NICHE)29号を2005年11月(2006年3月変更)に発刊
- 大場光博副会長、鰯坂誠之、伊藤真人、高木雅行、谷口宗彦、田野邊幸裕、初田亨、三好薰、嵯峨彰仁、小林茉莉
- 28号と同等水準で計画(約120頁程度 15,000部、内卒業生11,000部予定)・輝かしき先輩たちは「工手学校卒業の海外留学第1号の福井房一」
- 表紙デザインコンペ:学生及び会員(HP等で一般募集する)●広告掲載収入100万円
- 以上を目標
- 現役学生に対する支援事業 担当:谷口宗彦副会長 格安の【2級建築士アカデミック講座】
- OBに対する支援事業 担当:谷口宗彦副会長 格安の【1級建築士受験講座】
- ホームページの充実 担当:関谷真一副会長、鰯坂誠之+学生+協力者(HP等募集)
- 交流事業 担当:三好薰幹事、高城文一、高橋昭彦+学生
- 9月に「海外建築研究」企画実行予定 F.L.ライトの建築ツアー:担当 南追研究室OB <新規事業企画は昨年の企画を改善し、次の条件で継続審議中です>
- 参加することが楽しいこと、自主的参加型イベントで継続性があること
- 同窓生会員に有利で特典となる諸事業交流

# スチュー・デン・トセンタ― プロポーザル コンペ受賞について

工学院大学建築都市デザイン学科  
教授  
**澤岡 清秀**



**最優秀者 澤岡清秀 工学院大学建築都市デザイン学科教授  
(有)澤岡建築都市研究所+ (株)山本・堀アーキテクツ 設計共同体**



現在の八王子キャンパスには、はっきりとした顔がないような印象があります。いいかえれば学生や教職員の皆がともに共有できるような空間イメージをもつ場所がないといいます。そこでまず私たちはこのキャンパスを代表する「顔」となるような建物をつくるべきだと考えました。

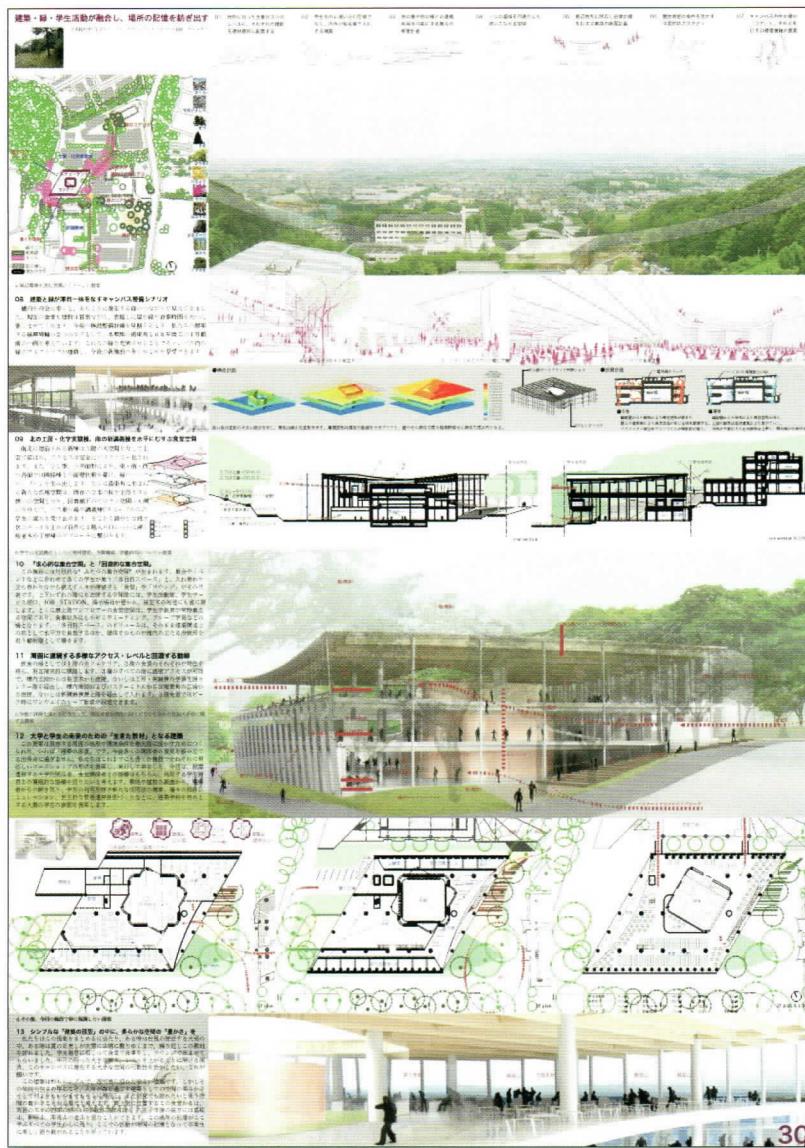
基本方針の第一は建物を周辺の緑にとけあうようにすることです。

敷地はキャンパスを南北に貫く並木道に面していて、さらに東西軸の人の流れとクロスする交差点に位置しています。そこで並木道の連続性を尊重して、建物を十分にセットバックさせます。そして、このキャンパスの交差点におおらかに半外部の空間を取り入れながら、学生たちにとって気持ちの良い居場所を構想したいと考えました。南側や北側に隣接する建

物との間にも緑豊かな広場や中庭をつくることを提案しています。

基本方針の第二は、半外部空間を積極的に取り入れることです。深い庇のある半外部の空間は、室内と外部との中間領域であり、そこは雨をさえぎり、風が通り抜け、夏の暑気を和らげる気持ちのよい空間となります。緑あふれる環境の中であればこそ、その効用は大きいといえます。またそれは学生た

ちがインフォーマルに集い、語り合うために有用な空間であり、学生たちの活動が内部からあふれ出し、建物の表情に生き生きとした賑わいを醸し出すはずだと考えました。桜並木に沿って設けた大きな庇の下の「オープンステップテラス」や、南側の地上階に設けた半外部の「ロッジア」、最上階の学生活動室をめぐる「天空の回廊と中庭」がその例です。



### 優秀者 古谷誠章 (有)ナスカ一級建築士事務所

内部空間としては、790席という大規模な食堂を、内部空間と一体化できるテラスを織り交ぜながらいくつかの部分に分節し、それらをスキップフロアで相互につなぎ、スパイラル状に下から上へと展開させて、一体感を生み出すことを考えました。多目的ホールや学生ラウンジなどの諸室も開放的で気持ちの良い空間をつくることを第一に考えられています。

この他にも環境への配慮と省エネルギーを徹底させるための工夫を凝らした環境設備計画や、高い耐震性を確保するための構造計画、万一の時に避難しやすい防災計画などを織り込んだ提案になっています。

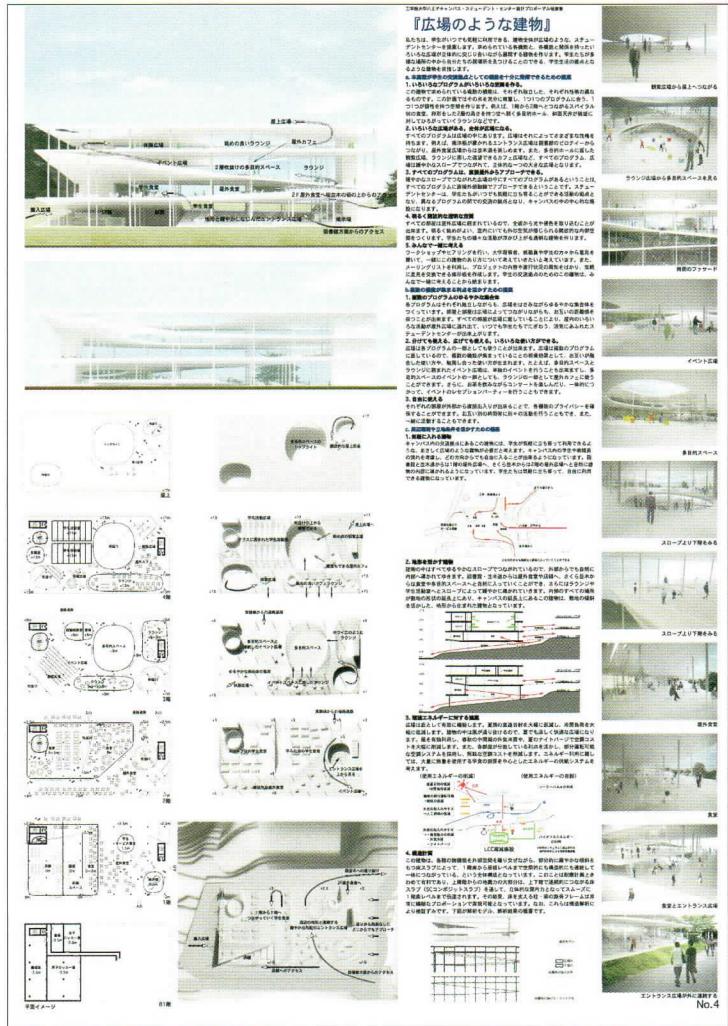
このプロポーザル案の作成には澤岡研究室の院生諸君の多大な努力が結集しています。彼らのパワフルな力なしにはこの受賞

はありえなかったことを強調したいと思います。今後は学生諸君の要望を幅広く取り入れながら設計を進め、八王子キャンパスの新しい顔となる建物をつくりたいと考えています。

**工学院大学  
建築都市デザイン学科  
澤岡 清秀 教授**  
〒163-8677  
東京都新宿区西新宿1-24-2  
TEL／03-3340-3641  
FAX／03-3340-4066  
e-mail:  
[sawaoka@cc.kogakuin.ac.jp](mailto:sawaoka@cc.kogakuin.ac.jp)  
(研究室)

# スチュードントセンター プロポーザルコンペ 審査委員として プロセンターデント

笹原克



## 妹島和世、西沢立衛（有）SANAA事務所

八王子校地に新たに建てられるスチュードントセンターのプロポーザルコンペが平成17年6月に応募が始まり、8月10日に第一次審査会、9月26日に第二次審査会が新宿校舎アトリウムにおいてそれぞれ300人を越える聴衆の中公開で行われました。応募総数は42件、提出者は41件で、第1次審査では6件（妹島和世+西沢立衛、澤岡清秀、成田治、小島一浩、

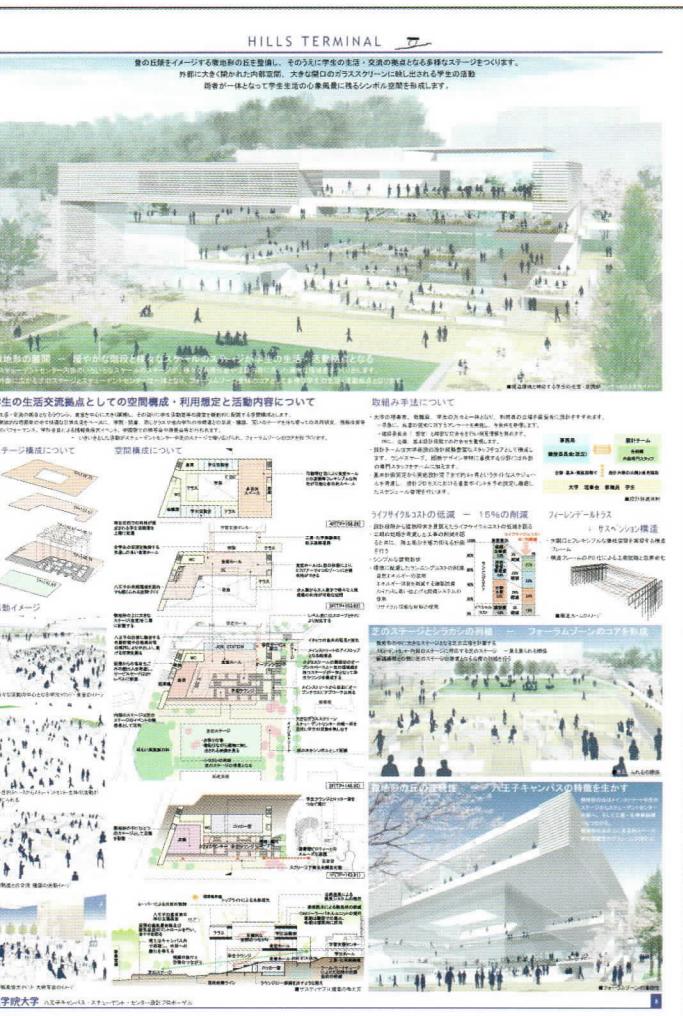
古谷誠章、石川雅博）が選ばれ、第2次審査のための第2次提案がなされました。2次審査会では、6名が各自プレゼンテーションを行い、質疑応答があり、最終投票で澤岡案が最優秀、古谷案が優秀賞という結果となりました。今回の公開コンペについて、審査員の一として参加した視点からまとめてみます。

第1は、現在国内外で活躍す

る建築家が応募者総数の約半数（18件）、工学院大学関係（卒業生、教師）が半数（24件）となり社会的にも関心を集めたコンペとなったことです。また、審査員も外部4名（香山壽夫、富永謙、栗生明、北山恒）、学内5名（三浦弘文学長、中山勝広学生部長、山下司名誉教授、倉田直道教授、笹原克）の9名でした。この中で、建築関係者は7名になります。本

学卒業生は私一人です。このように外に開かれた形で学内、学外の参加者によるコンペは初めての試みでした。

第2は、第1次審査および第2次審査と審査課程を公開で行ったことです。すべてを公開で行うことは大変珍しく、多数の学生や関係者の前で一つ一つ審査していく過程は、外から見れば面白く、関係しているものにとっては緊張

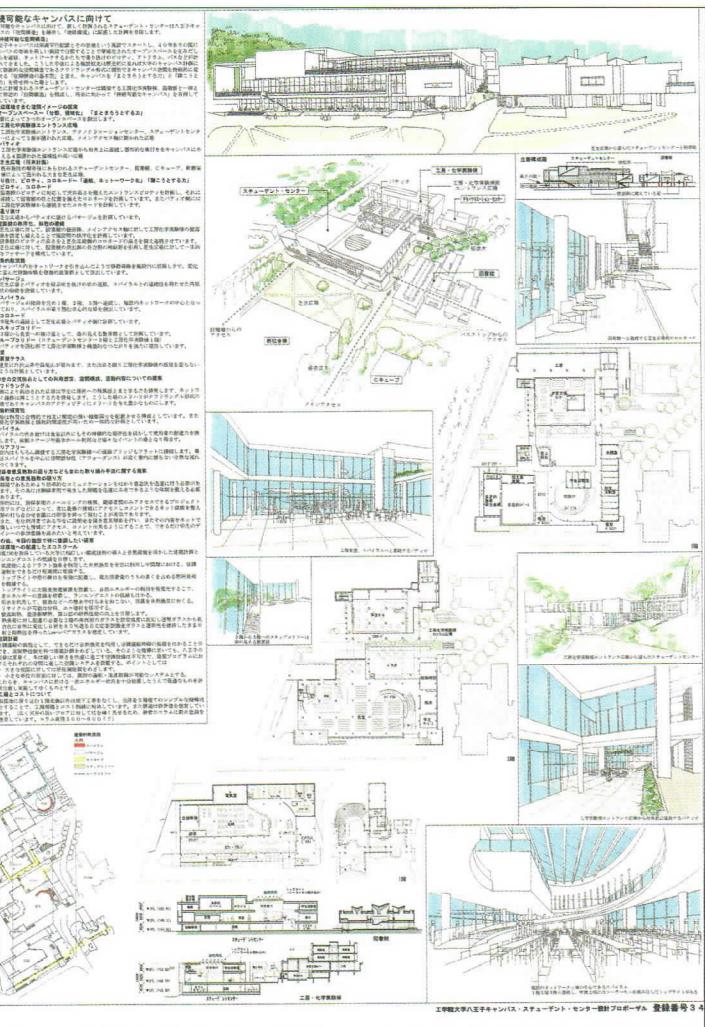


成田治（株）松田平田設計

し、審査するものから見れば大変しんどいものでした。1次審査では、合計4回の投票（内1回は挙手）がおこなれて決められていきました。第2次審査会は、提案者6名のプレゼンテーションがあり、その後6名がそろって審査員からの質問や審査員同士の議論も公開で行われました。

第3は、プロポーザルコンペであったことです。設計コンペは、その

作業量と費用の多さとで参加応募者に過大な負担がかかります。そこで、提案者に負担をかけないという目的で設計コンペではなくプロポーザルコンペとなった経緯がありました。しかし、どこまでをプロポーザルとするのかの範囲が提案者それぞれの解釈があり、迷われた方が多かったように思いました。この点は今後の課題であります。



石川雅博  
(有)デザインプラットフォームアソシエイツ一級建築士事務所

最後に、学内の建物が教育の一環として活かされていくことが大変重要なことであると感じました。今回のコンペを一つのステップとして今後も開かれたコンペ方式で本学の整備が進んでいくことを願っております。

笹原克  
(1975年工学院大学大学院修士課程修了、オイコス計画研究所代表、学校法人工学院大学理事、日本都市計画家協会副会長)

# 石川賞受賞授賞式

教授  
初田亨

工学院大学建築学科



石川賞は、日本の近代都市計画の先駆者、石川栄耀氏（1893～1955）の業績を記念し、59年に日本都市計画学会に制定されたもので、都市計画で独創的、啓蒙的な業績を挙げた個人、団体に贈られる最高の賞です。平成16年度は、初田亨教授のほか、山出保金沢市長（金沢のまちづくり）、安藤元夫近畿大学教授（阪神・淡路大震災のまちづくり支援）の3名が受賞しました。授賞式は平成17年6月20日、日本都市計画学会の大会で行われました。

（NICHE編集部）

## 初田 亨

日本都市計画学会石川賞の対象となりましたのは、『繁華街の近代 都市・東京の消費空間』（東京大学出版会、2004年）という著書で、これからの建築や都市の可能性を考えたいと思ってまとめたものです。銀座煉瓦街の建設とその後、明治期の防火令と土蔵造りの街並み、市区改正と洋風商店街、都市施設としての商店、遊興施設をもつようになつた商店街、都市計画法や市街地

建築物法の用途地域性と商店など、主に東京の繁華街を対象にして、日本の近代にどのような街並みがつくられてきたか、人々が都市の中にどのような楽しみを発見していくかなど、近代都市がもっている特性について考えております。

研究を進めていく過程で考えたことの一つは、スケールの大きな都市と小さな建築とを、同時に考えていく必要があるという点です。また、つくられた制度や具体的な都市計画について問題にすると共に、それらが実際に適用された後に、人々にどのような影響を与えてきたか、人々によってどのように理解されてきたか、などについても考えております。

繁華街から近代の都市をみていくと、近世のように整然と統一された街並みがつくられていくの

ではなく、「不揃いな街並み」を必然的につくっていく特性をもっている、ということがわかりました。そしてこのことがまた、「賑わい」という都市の魅力をもつくりだしていました。整然と統一された街並みが美しいことは否定できませんが、近・現代の都市を考えるときには、近・現代の都市がもっている魅力を失うことなく、いかに都市を形成していくべきかが問われているともいえます。

また、都市の中での商店の役割をみていくと、商店が単に商品を売る施設という機能をこえて、都市施設ともいえるような、半公共的な性格をもっている点も明らかになってきました。

このような商店のあり方は、都市の美観に対する考え方にも影響を及ぼしております。昭和初期には、整然と統一された街並みの美しさを認めつつ、その一方で、賑わいをもつ複雑で変化のある街並みが、都市の魅力をつくりだしていると主張する人も出現しております。商店・商店街のもつ都市施設的な役割と、賑わいがつくりだす都市の魅力という点につい



ては、現代都市の中心市街地を考えるうえでも、繁華街が大きな可能性をもっていることを示しているといえましょう。

1971年 工学院大学大学院  
修士課程修了  
(武藤研究室) 博士(工学)  
東京都 東京都立墨田工業高等学校出身  
現在  
工学院大学建築学科教授



初田 亨教授

# 中島智章助教授 奨励賞を受賞

工学院大学建築学科

助教授  
**中島智章**

奨励賞授賞式

2005年9月1日、建築学科の中島智章助教授は、社団法人・日本建築学会より「2005年 日本建築学会奨励賞」、および副賞として「梅村魁賞」を贈られ、その業績を表彰されて賞状とメダルを授与されました。これは業績発表の時点で満40歳未満の新進研究者による、近年中に発表された独創性・先駆性・萌芽性・将来性のある建築に関する優れた論文等の業績を表彰するものです。

受賞論文は「ヴェルサイユ宮殿新城館の国王のアパルトマンと太陽神神話一天井画と広間の間取をめぐってー」(『日本建築学会計画系論文集』No.543, pp.275-279, 2001年5月)であり、日本建築学会奨励賞選考委員会では次のように評価されました。

「ヴェルサイユ宮殿新城館の着工案が竣工時に変更された理由について、従来見過ごされてきた天井画の寓意性がもつ文脈から再考し、ひとつの納得しうる仮説として理由を提示した論文であ

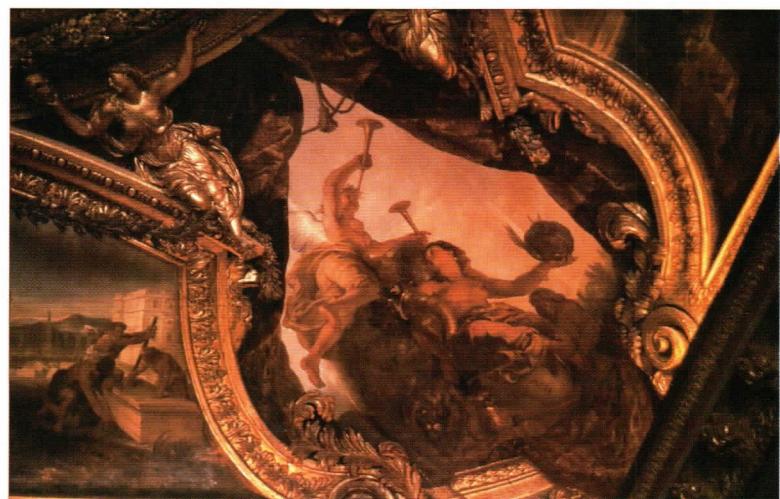
る。当時の建築が総合的な作業として位置づけられていたことを考慮すると予想しうる結論とも言えるが、ル=ヴォーが求めた整然とした秩序を、慣例的な天井画のモチーフからの要請として変更せざるを得なくなる過程を理路を尽くして明らかにした点で労作と言

える。本稿で扱われた対象はかなり限定されたものではあるが、筆者がこれまで取り組んできた寓意的な世界観からのヴェルサイユ宮殿再考の一環として、研究の視点、方法も確立されており、今後の展開が期待される成果である。」

(NICHE編集部)



メダル



「ヴェルサイユ宮殿新城館アポロンの間天井画の一部」

# 小三第24回 三重県建築賞受賞

小林 将夫  
工学院大学非常勤講師



西井耳鼻咽喉科プロジェクトは三重県での初めての作品。外観デザインはガラスの列柱によるガレリアは社殿の基壇をイメージし、その上に住居をのせた高床式を確としています。また、建物の一部が豊受大神宮の軸線と合わせており、伊勢市に建つ建築の一つとして地的オーダーの共有を試みています。

病院と住宅が複合した建築故、2つの機能の動線処理には特に注意を払っています。患者さんが混乱しないよう明快にし、どの方向から来院されても特に意識しなくともエントランスに辿り着くことが出来ます。内部も受付>待合>中待>治療>会計という患者さんの行動パターンを事務室が中心のループとし、自分の位置を見失うことが無いよう計画されています。また、医院の内部は治療室に向かうにつれガラスの面を増やしています。これは医療現場の開放を意味し、外に対して透明硝子を使うことにより庭の光や木々

が治療中や治療を待つ患者さんの心を癒す意図があります。

2階の住宅部分の基本はワンルームです。空間を家具やパネルで仕切り、生活のパターンの変化に対応するよう意図されています。空間は白を基調とし、ポイントで色を使っています。そのステージでどのような生活が営まれるか建築家の立場からも楽しみにしています。

小林将夫  
十岡直子+nXS  
<http://homepage2.nifty.com/nexus/>  
NEXUS/  
NEXUS ARCH.  
TECTURE LAB.

## 経歴書

1960年4月10日 東京生まれ  
1983年3月 工学院大学建築学科卒業  
1983年4月 工学院大学建築学科修士課程入学  
1985年3月 同大学建築学科修士課程修了  
1985年4月 (有)林・山田・中原設計同人入社  
1989年6月 (有)林・山田・中原設計同人退社  
1990年6月 (有)ネクサス建築研究所設立  
2002年9月 現在(有)ネクサス建築研究所代表取締役  
工学院大学 非常勤講師

## 賞

1983年3月 工学院大学卒業制作 最優秀賞  
雑誌「建築ノート卒業設計1983」  
1983年6月 檻櫻画廊主催 優秀作品展出品  
1984年6月 静岡県住宅設計コンペ 最優秀賞  
新聞「讀賣新聞」昭和59年6月9日刊  
新聞「建設新聞」昭和59年6月18日刊  
雑誌「新建築」昭和59年8月号  
1987年7月 相模湖観光ゲートコンペ 佳作  
1989年5月 讀賣新聞社主催住宅設計コンペ 優秀賞  
新聞「讀賣新聞」1988年5月  
雑誌「マイホームプラン」平成元年8月号  
1991年9月 松下電工主催快適住宅コンペ 水廻り部門賞  
雑誌「新建築」1991年12月号  
1992年9月 松下電工主催快適住宅コンペ 第2回 優秀賞  
雑誌「新建築」1992年12月号  
1998年12月 TOKYO GASあたたかな住空間コンペティション特別賞  
2005年6月 三重県建築賞





左より、菊池勝広さん、チョウ・ヨン・ファンさん、阿川将樹さん

学位論文取得者は、歴史系2名、構造系3名、教員の方2名の該当者がおりますが、原稿の締切りまでに入稿しました3名の方の学位論文をご紹介します。

(NICHE編集部)

### ① 論文題目

横須賀製鉄所・造船所とその後身施設における近代的建築技術の導入およびその技術史的展開に関する研究

**菊地 勝広(初田研)**

#### [本文の概要]

本研究は、横須賀製鉄所・造船所が日本における建築の近代化に与えた影響、および、その後身施設である横須賀鎮守府・横須賀海軍工廠における近代的建築技術の導入に関する日本近代建築史上での位置付けとその特色について明らかにしたものです。

旧海軍の中心であった旧横須賀鎮守府・横須賀海軍工廠の施設については、明治41(1908)年に竣工した鉄筋コンクリート造建築など、日本近代建築史上でも重要な施設が建設されていたことが知られています。しかし、横須賀製鉄所・造船所とその後身施設における建築技術の変遷を包括的に扱った先行研究はありませんでした。これに対して本論は、幕末から第二次世界大戦までの旧横須賀製鉄所とその後身施設における建築技術の変遷を論じた点に特色があります。本論は、旧横須賀製鉄所副首長官舎の現存の証明や研究対象の施設に導入された先駆的な建築技術およびその変遷などについて論証したものです。

卒業年度／1996年3月  
工学院大学工学部二部建築学科卒業  
(初田研究室)  
1998年3月  
工学院大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了(初田研究室)  
2004年3月 工学院大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程満期退学(初田研究室)  
出身校  
1993年3月 国立宮城高専建築学科  
プロフィール  
横須賀市自然・人文博物館 学芸員  
(近代建築史担当)  
〒238-0016  
横須賀市深田台95番地  
電話046(824)3688  
E-mail:katsuhiko-kikuchi@city.yokosuka.kanagawa.jp

### ② 論文題目

『近代の韓国・釜山における市街地の変遷に関する研究』

**チョウ・ヨン・ファン 曹榮煥**

#### (初田研)

#### [本文の概要]

本研究は、倭館時代から日韓併合期の韓国の都市・釜山における市街地の歴史的な変遷過程について考えることを目的としています。この時期に釜山は大きく拡大していったが、その変遷過程について明らかにすると共に、都市が拡大していく過程で、市街地のそれぞれの地域がどのような特性をもつようになっていったかなどについて、築港埋築工事を通した巨視的な視点と、人口構成の変化や商工業の発展、及び都市施設の分布など、人々の生活が直接うかがえるような細かな視点の両面から都市の変遷課程を明らかにしています。

日本人による開発や近代化がもっとも進んでいった釜山の発展は、朝鮮半島内でのまちづくりの一断面をうかがわせる先駆的な実例であると思います。また、当時の都市づくりにおける釜山の先進的

な役割は、朝鮮の都市の成立と発達に相当の影響を果たし続けてきたと考えられます。

釜山府の道路網の変遷と地域による在釜会社・工場の増加及び釜山の拡大。(図省略)

卒業年度／1997年2月 国立釜山大学卒業  
韓国釜山市海東高校出身  
生年月日 昭和46年12月9日生  
本籍地 韓国・釜山市  
現住所 東京都多摩市愛宕3-4-1  
Tel/Fax 042-375-5582  
メールアドレス julu111@yahoo.co.jp  
学歴  
平成2年2月27日 釜山海東高等学校卒業  
平成9年2月22日 国立釜山大学  
建築工学科卒業、学士  
平成11年2月20日 国立釜山大学大学院  
建築工学科修了、修士  
平成17年3月31日 工学院大学工学研究科  
建築学専攻博士後期課程修了、博士(工学)  
職歴  
平成11年3月2日 釜山東義工業大学非常勤  
講師任命(近・現代西洋建築史)  
平成11年10月18日 国立釜山大学建築工学科  
助手任命  
平成12年9月18日 法政大学招聘研究員  
(Hosei International Fellowship)

### ③ 論文題目

偏心を有する木質壁式構造の応力およびその動的変形特性に着目した新しい耐震設計法に関する研究

**阿川 将樹**

#### [本文の概要]

本論文では、まず阪神・淡路大地震における被害調査結果、耐震診断の調査結果、新築住宅の調査結果等を精査して、耐力壁配置の実態を分析している。

つぎに耐力壁の偏心によるねじれ振動と密接に関係のある床面の面内剛性に関する実験と、2階建ての倒壊限界に関する実験を行って、以下の理論展開の基礎となるデータを得ている。

本論文の中核をなす偏心を有する構造体における応力の分布の評価に関しては、静加力実験、

# 2004年度 学位論文紹介

振動台実験、及び時刻歴弾塑性解析を行い、剛性の低い構面の応力集中率が動的効果によって大きくなることを、定量的に明らかにしている。

最後に、このような偏心を有する木質壁式構造の変形性能に着目した新しい耐震設計法の提案を行っている。ここで「共軛ねじれ剛性」という概念を導入し、それによって加力平行方向の構面の弾塑性性状だけでなく、直交構面の剛性の効果を積極的に評価したねじれに対する設計法を提案している。

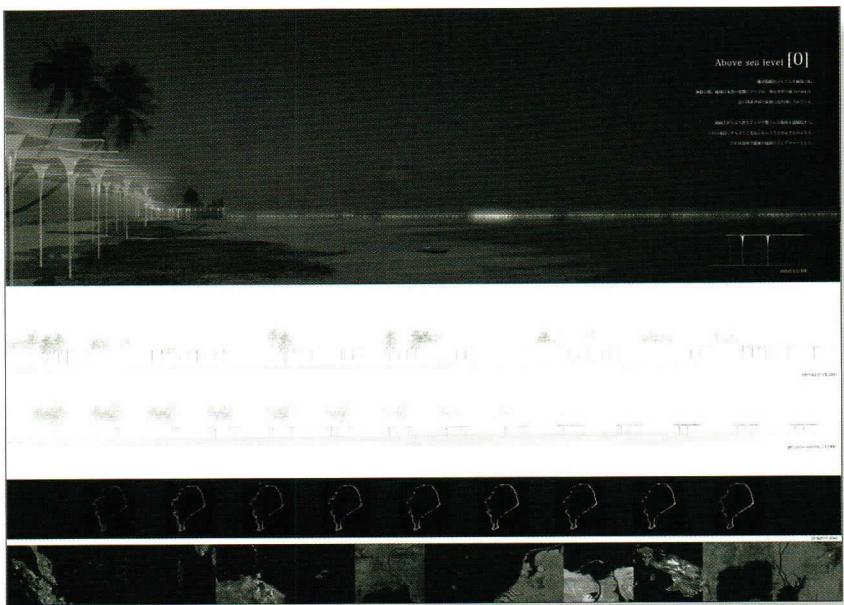
#### 学歴

平成8年3月 東京都私立工学院大学附属高等学校 卒業  
平成12年3月 工学院大学1部建築学科  
建築学コース 卒業・学士(工学)(宮澤研究室)  
平成14年3月 工学院大学大学院工学研究科  
建築学専攻修士課程 修了・修士(工学)  
(宮澤研究室)  
平成17年3月 工学院大学大学院工学研究科  
建築学専攻博士課程 修了・博士(工学)  
(宮澤研究室)

#### 職歴

平成14年4月～ 東京都私立工学院大学附属高等学校情報工学科 非常勤講師  
平成17年4月～ 東京都私立国立音楽大学附属高等学校情報科 非常勤講師  
平成17年4月～ 工学院大学建築学科  
環境建築コース 非常勤講師  
住所/〒193-0802 東京都八王子市犬目町77-2  
電話番号/090-3083-4490  
メール/ku40164@ns.kogakuin.ac.jp(大学)、magawa-kog@jazz.nifty.jp(個人)

# 国際・国内コンペで 工学院大学 大学院生が大活躍



セントラル硝子国際設計競技「Above sea level [0]」優秀賞 大山高志、梅澤宏行、嵯峨彰仁。



同「風化する建築」優秀賞 山形章、照沼恒平、内藤巧

## 建築学専攻院生が セントラル硝子国際設計 競技で優秀賞受賞

大山高志、梅澤宏行(各大学院修士2年、澤岡研)、嵯峨彰仁(同2年、谷口研)の各君、および山形章(同2年、藤木研)、照沼恒平(同2年、倉田研)、内藤巧(同2年、望月研)の各君の2チームが優秀賞を受賞し、2005年10月26日表彰式が行われました。同コ

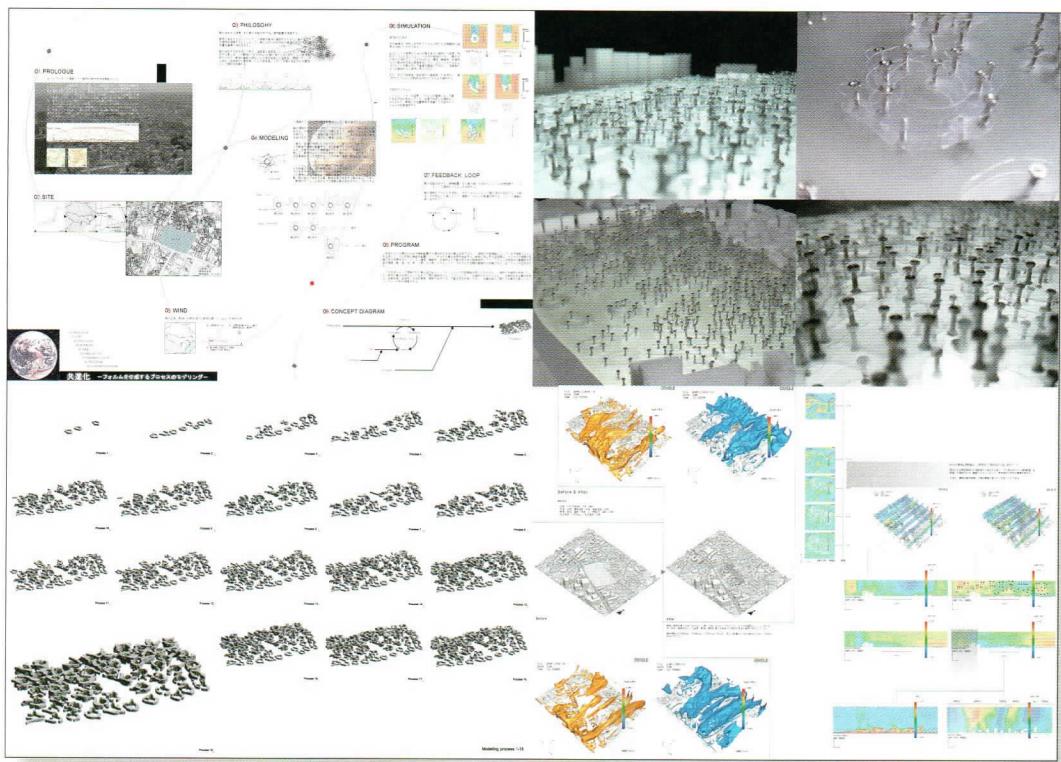
ンペは、1966年から開催されており今回で40回目の節目は、「まちのランドマーク」。応募総数798点(国内391点、海外407点)の中から最優秀賞1点、優秀賞3点、入選7点が選出。本大学大学院生2チームのタイトルは「Above sea level [0]」大山高志、梅澤宏行、嵯峨彰仁(案)および、「風化する建築」山形章、照沼恒平、内藤巧(案)です。入賞作品は「新

建築」誌2005年11月号、季刊「JA」誌第60号誌上に発表、2006年2月2日~9日に建築会館ギャラリーに展示されました。

(建築学科のH.Pより/NICHE編集部)

JIA東京都卒業設計コンクール特別審査員賞(芦原太郎賞)  
JIA全国学生卒業設計コンクール2004金賞

山形章(現/大学院修士2年、藤木研)作品タイトル「共通化～フォルムを生成するプロセスのモーデリング～」  
(作品内容)ヒートアイランドの解消に向けて風を起こす建物を計画。風がよりよく流れるように、フ



JIA全国学生卒業設計コンクール2004 金賞 山形章



「Green Front -緑と都市を結ぶインターフェイス」  
佳作 広瀬雄太、斎藤淳、西山徹、照沼恒平、梅澤宏行

オルムを形成するプロセスをもモーテリング化した。

〈受賞の喜び〉「自分は建築の道でやっていくんだ」という自信が、今回の全国コンクールの賞でつきました。建築には何が可能なのか、また自分が4年間大学で学んできたことをどのように表現したらよいか。仲間と議論したり、藤木先生にご指導を、また先輩から助言を得ながら、3ヶ月間迷走し続け

て、偶然と必然の間に生まれた作品だったと、今では思います。

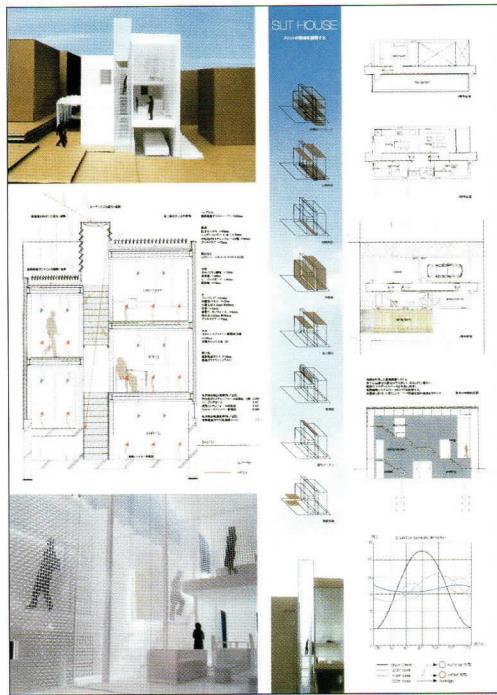
〈中略〉これまで建築の枠があったとしたらそれを広げたい、という思いを持っています。作品を通して、自分が都市や建築に対して抱いている疑問が正しいかどうかを確かめたい気持で参加しました。この賞と大会でのやりとりでの経験は自分の財産です。〈中略〉これからはこの賞に見合うようにさら

に努力を続けていき、自分の信じる建築の道を進んでいきたいと思います。

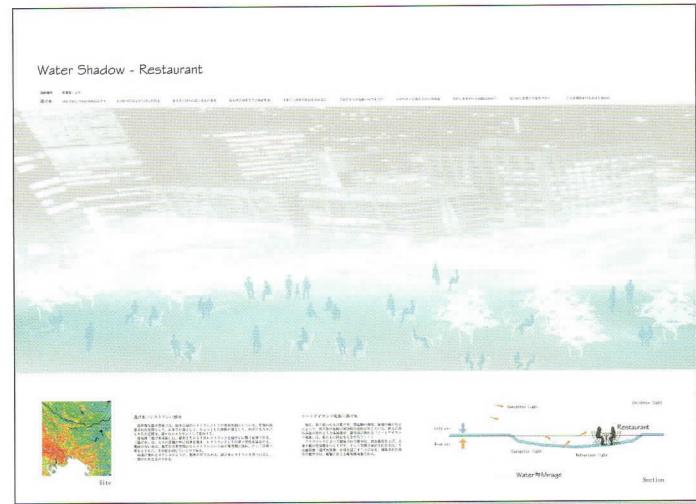
金賞、銀賞の3名は、2004年11月28日から30日に、香港、マカオで行われるARCASIA(アジア建築家評議会)の学生ジャンボリー日本代表に、JIAより推薦されました。

**日本建築学会 都市建築の発展と制御に関する設計競技  
「緑地や公共空間を創出する  
都市建築の原形」  
2005年1月発表**

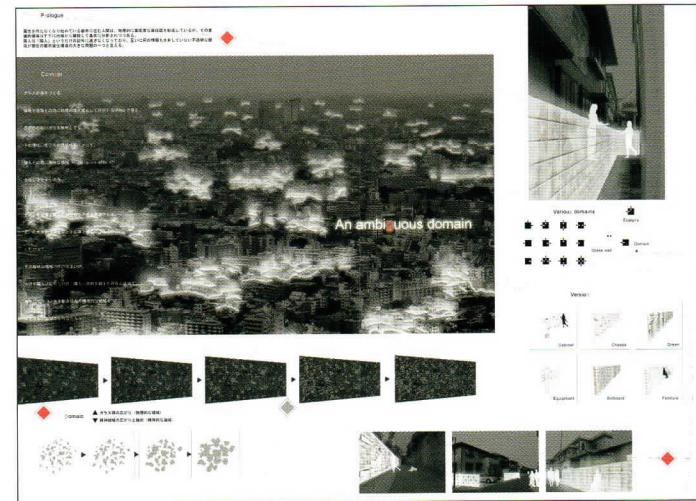
最優秀1点、優秀2点、佳作6点が選出され、(代表者)工学院大学大学院の廣瀬雄太、(共同制作者)、本学大学院の斎藤淳、西山徹、照沼恒平、梅澤宏行の5名が佳作。作品名は「Green



「SLIT HOUSE」佳作 大山高志・梅澤宏行



「Water Shadow- Restaurant」佳作 内藤巧、岩崎裕二、明山泰之



「An ambiguous domain」銅賞 小林拓人、佐藤正彦、高橋寛、山形章

Front-緑と都市を結ぶインターフェイス。

**smart+comfort快適な省エネルギー住宅設計コンペティション**

最優秀賞1点、優秀賞2点、佳作5点が選出され、工学院大学大学院修士課程の大山高志・梅澤宏行の2名が佳作。作品名は「SLIT HOUSE」。第29回 地球環境とエネルギーの調和展(東京ビック

サイト、2005年2月9~11日、インテックス大阪、2005年2月17~19日)で入選作品が展示されました。入選作品は「新建築住宅特集」2005年5月号に紹介。

#### 第31回日新工業建築設計競技課題「水上レストラン」

佳作入選 内藤巧(現/工学院大学大学院修士課程2年、望月研究室)、岩崎裕二(現/工学院大

学大学院修士課程2年、安原研究室)、明山泰之(現/工学院大学大学院修士課程2年、赤木研究室)の3名。作品名は「Water Shadow- Restaurant」で、「逃げ水、レストラン、都市、ヒートアイランド現象、逃げ水」などのキーワードで作品を展開しました。

#### 第11回 空間デザイン・コンペティション

主催: 日本電気硝子株式会社  
A 提案部門、工学院大学大学院修士課程1年、小林拓人、佐藤正彦、高橋寛、山形章の4名。作品タイトルは「An ambiguous domain」銅賞。

# 全工学院大学で 設計優秀作品展開催! 本大学の



第28回学生設計優秀作品展 建築・都市・環境



工学院大学 第42回建築設計優秀作品展



2004年度卒業設計・修士設計展

## 2004年度 卒業設計・修士設計展 内藤 純

2004年度卒業設計と修士設計の展示会を平成17年3月28日～30日の3日間新宿校舎1Fアトリウムで実施。4年間と長い期間をかけた卒業制作ですが、その発表の機会がなかったために学生有志で約30～40作品の展示会を開きました。各研究室で行った3年生のゼミ作品・コンペ入選作も展示しました。

今回の展示会を見た大学院生・学部生から、自分も参加したいという意見が多くありました。そこで今年から実行委員会を設けることにしました。卒業設計・修士設計はもちろん、授業やコンペなどの作品を展示する機会を設けたいと思います。在校生や同窓

生の方々で活動に興味をもたれている方のご連絡をいただければと思います。

工学院大学大学院 建築学専攻  
澤岡研究室  
kou\_arc\_ten@hotmail.co.jp  
mailto:jun-mail@cameo.plala.or.jp

### 第28回 学生設計優秀作品展 「建築・都市・環境」

工学院大学1階  
アトリウムで開催  
谷口宗彦実行委員会委員

会期/2005年5月26日～29日  
主催/学生設計優秀作品展組織委員会、レモン画翠  
後援/(社)日本建築学会、(社)日本建築家協会、(社)日本建築士会連合会、(社)東京建築士会、(社)日本イン

テリア設計士協会  
同時開催 特別企画  
「SPECIAL LECTURE2005」(出品者によるプレゼンテーション)  
同企画

「大学・専門学校 作品集」展示  
工学院大学新宿キャンパス1階アトリウム全体をパネルで囲い、全国の大学建築学科、建築都市デザイン学科、環境システム学科、住居学科など63学科の卒業設計優秀作品が一同に展示されました。赤地に白文字の作品展ゲートをくぐると左手に映写コーナーがあり展示作品を出品者が説明。学生が50～60名椅子に詰めて熱心に聞き入っています。それぞれの作品パネルがボードに展示され作品模型が並べられています。一部には各大学で出版した作品集が本棚に展示、

これらを眺めると各大学の各学科でどのような視点で指導が行われているのか、設計の内容、技術的レベル、表現力などが一気に把握できます。会期中の4日間は会場一杯に約8,000人の学生が参加し人気がありました。

## 工学院大学 第42回建築設計優秀作品展

日時 2005年11月18日(金)～21日(月) 10:00～19:00  
場所 工学院大学高層棟9階建築設計室

展示作品は、卒業設計優秀作品、修士優秀作品、設計競技入選作で、図面と模型を展示していました。

研究室OBで三重県立短期大学の岩田俊二さん（‘73年度卒）の農村計画学会の論文賞受賞祝いを兼ねて、荻原先生の退職パーティ以来、6年ぶりの「荻原研究室OB会」を平成17年5月28日に開催しました。参加者は、大先輩の‘64年卒の吉田駒雄さんをはじめとし、荻原研最後の卒業生である‘99年卒の子安さん、鷹取さん、吉本さんまで、幅広い年齢層のOB58名が全国各地から馳せ参りました。また、参加出来ない多くのOBの方から近況を含めたメッセージも頂きました。参加者の中には、先生の容貌を超えた方や企業の中堅として活躍している若い方、お子様連れの女性、ご夫妻での出席など、年齢を忘れて学生の頃の気分に戻り、和気あいあいの中で6時半からの2時間が過ぎ

ぎ、名残惜しみながら会を閉じました。荻原先生も、今和次郎に関する研究とコレクションの整理・展覧会の開催等で多忙を極め、以前と変わらずに元気でご活躍している様子を垣間見ることができ、OB一同安心しておりました。また、機会を設けてOB会を開催したいと思っております。今回、ご参加出来なかつたOBの方には、次回、お会いすることを楽しみにしております。

望陀  
宣夫

荻原研究室OB会幹事  
‘65年卒



荻原正三名誉教授

# 工学院大學建築學科 OB研究室OB会開催

荻原研究室OB会事務局  
〒160-0017

東京都新宿区左門町13-2 望陀ビル内  
電話番号／03-3226-1819

平成17年4月2日、農村計画学会賞（論文）を「都市農村計画の構築に向けた土地利用コントロールに関する一連の実証的研究」の題目で受賞いたしました。これも一重に、工学院大学、同建築学科のお陰であると考えております。厚くお礼申し上げます。

業績内容については、荻原正三工学院大学名誉教授による推薦文が簡潔明瞭でありますので、それを抜粋引用させていただいて以下の内容紹介と致したいと思います。

計画制度や土地利用の実態を踏まえると、都市計画の側から見ても農村地域整備の側から見ても都市と農村を一体に取り扱う計画いわば都市農村計画の必要性が増していると言える。今まででは都市農村計画制度の実現困難性からその必要性は認知されているにも関わらず、都市農村計画について正面切った研究は少なかったように思われる。

今般、学会賞として推薦する対象である岩田氏の都市農村計画の概念形成にかかる一連の研究では、敢えて「都市農村計画」の必要性を明言し、その計画概念、過去の理論、「都市農村計画」を前提とした計画・事業を検証することによって、今後の「都市農村計画」の議論の展開のために貴重な資料を提示している。

学会賞（論文）として推薦する業績の中心は『都市農村計画の概念』（農林統計協会2004.08）である。本書でまとめられた研究が学会賞（論文）に値する価値のある業績と認められる理由は次のとおりである。

①日本の都市計画制度、農振計画制度の実情から発生している地域問題の概括を踏まえて、「都市農村計画の概念」を提示し主張したことである。「都市農村計画」を「包括的土地区画整理事業」と「地区別土地区画整理事業」の2つの土地区画整理事業によって構成されるものとして構想しており、これらの計画は地域条件に応じた裁量の幅の大きなものとして捉えているのが特徴である。

②「都市農村計画」にかかわる過去の計画理論を紹介し、日本において「都市農村計画」が実現しなかった理由背景を探ることから「都市農村計画」の今後の可能性を論じている。日本の近代化過程では、産業政策、都市政策、人口政策等の都市集中が図られ、その集中のメリットによって工業を中心とした近代化が迅速に効率よく推進された。すなわち、そのことが正しく「都市農村計画」の実現の最大障害要因だったことを論じ、今後の「都市農村計画」の可能性に期待を示している。

③「都市農村計画」を前提とした先駆的な計画事業及び整備事業の事例を収集し、それらについて「都市農村計画の概念」の觀点から検証して「都市農村計画」との乖離や差異を指摘し改善方向を検討した。

④地方都市の中心市街地の活性化についての研究を基礎として、中心市街地の側から「都市農村計画」の必要性を明らかにした。地方都市の中心市街地の活性化は都市近郊や農村集落からの支援や協力がなくては実現できないことを津市の事例から明らかにし、「都市農村計画」は一見農村とは無関係なような中心市街地側いわば都市側からも要請されている切実な課題であること

を指摘している。

教授 岩田俊二

三重短期大学生活学科

# 農林計画学会賞受賞



工学院大学校友会鳥取県支部長 尾崎明雄さんが秋の叙勲で「旭日小綬章」を受賞されました。今後の益々のご活躍を祈念申し上げます。(NICHE編集部)

### 懐かしき一昔を思いつつ

昭和27年3月鳥取東高校を卒業すると同時に、東京に兄が居たので就職は何とかなるだろうと思い上京した。勿論田舎で就職の見込みがなかったからである。

当時、兄の上司にお願いをして鹿島建設に採用が内定した。矢先に盲腸炎となり、最悪の腹膜炎を併発、3ヶ月位の加療で退院するも就職は駄目となった。その後の職も定まらず、暫く兄のすねかじりで元気を回復させていた。幸いにして今度は清水建設へ臨時ながら採用して頂くことになった。早速現場配属され、日給140円、食事するには役所発行の食券が必要であった。一食50~80円位の節約した食事で我慢しなければならなかった。苦しさというより働けるありがたさと、感謝の念で一杯であった。

1年が経ちかけると高校卒が気掛かりとなり、夜間大学への夢が沸いて来たが、よく考えてみれば進学への学力、財力共にゼロ。で



# 叙尾鳥校 勲崎取友会 明県 雄支部 長

尾崎  
明雄

も諦め切れず小生の頭脳でも入る大学は無いものかと探す。上司に工手学校の先輩あり、推薦されたのが工学院大学夜間部。当時、大学には建築学科が無く、短期大学夜間部建築学科を受験合格。月謝は2千円位であったが、この学資をどのようにして稼ぎ出すかの壁にぶち当る。上司いわく心配しなくて良い名案がある。君の日頃の勤務は真面目そのものであり、そのファイトを買ってくれるから朝食付の寝倉は現場事務所を与える、と勿体無い入学祝を頂いた。午後4時半頃には仕事を切り上げさせてもらい夜学へ、そして、10時過ぎには現場事務所へ戻っては夜間作業に従事、ある

時は午前2時3時、作業が終わるまで勤めさせてもらった。

このようにありがたい日々の2年間が続き、卒業の年度、大学に待望の建築学科が創設された。が短大卒で即3年に上げてくれても、そうた易く間屋は卸してくれる訳はない。1年間月謝を払い通学せよとのこと、大半の同僚はそのまま続けていた。小生は短大卒で一旦切をつけ、1年間の休養で体力と財を貯める事にした。

1年後受験し3年へ編入、再び2年間同僚と学業を共にする喜びを与えてもらった。このようにして高校を卒業後、6年間清水建設の先輩の方々には、暖かい心の支えでご指導ご支

援を頂き座礁する事無く、貴重にして得がたい現業と学業を貫く事が出来ました。今日あるは、基礎づくりを支えて下さった清水建設の先輩の方々の恩恵であり、一生涯脳裏から離れること無く、心より感謝の念で懐かしき一昔を思いつつ、今後も建築活動を通じて社会福祉の向上につとめて参りたいと思う今日この頃であります。

連絡先  
尾崎明雄

〒682-0804 / 倉吉市東昭和町187  
E-mail / osaki@hal.ne.jp  
<mailto:osaki@hal.ne.jp>  
Tel / 0858-23-1531  
Fax / 0858-23-1532

「ナニワ研究室OB会」は約40年前に発足しておりましたが停滞していた時期もあり、平成元年に東京および周辺に在住のOBが会則案をまとめ、改めてOB会を発足総会が開催され再スタートをきりました。新宿新校舎が完成した年、大きな声では言えませんが私が5年生だったことです。多くの先輩にいろいろ教えてもらながらOB会の準備に携わり、総会終了後に先輩たちに「ご苦労さん」と声をかけてもらった事を今でも覚えています。

会則には「総会を毎年5月の第

3土曜日に開催する」と定め、毎年欠かさず開催しております。また総会とは別に年数回の幹事会、新年会、ゴルフコンペなども開催しております。難波先生の人柄もあってOB会は家族的な雰囲気でとても楽しい時間を過ごす事が出来ます。現在私は静岡県に住んでいるため、OB会の準備に携わる事がなかなか出来ず、参加させてもらうばかりで幹事会の皆さんには申訳ない気持ちでいっぱいです。

「ナニワ研究室OB会」がOBの皆さんの力で、今後ますます発展する事を期待しております。



小林  
克宏

# ○難波研究室 OB会開催

難波研究室

(株)村上開明堂 建材技術部 施工管理課 勤務  
卒業年1990年3月 難波研究室 静岡県立藤枝東高校出身  
住所 / 静岡県藤枝市時ヶ谷1574  
電話 / 054-643-7369メール / koba@tokai.or.jp

# 「新潟県中越地震」災害調査報告会



新宿キャンパス・アーバンテックホール



平成16年12月19日、工学院大学新宿キャンパスアーバンテックホールにて、工学院大学総合研究所EEC研究成果中間報告会「新潟県中越地震」災害調査報告会が開催。耐震、構造、免振関係の専門家をまじえ専門用語が飛び交い、工学院大学から宮澤健二、久田嘉幸、後藤治、村上政浩の各先生が出席、小野里憲一先生が司会者として参加されました。EEC研究発表会は18、19の二日間で、2日目が「新潟県中越地震」災害調査報告会でした。

発表後に会場から地震力や地震のメカニズム、建物被害、免振建物の事例や地殻の変動について質議がだされ意見交換が行なわれました。同時に18～19日の二日間は、4階4教室と3階フロアにて防災関連の展示(耐振・免振・補強・書籍など)も開催されました。

**宮澤健二先生発表、「木造住宅の被害事例と分析:各地域の被害状況」**

宮澤先生は、新潟県十日町出身です。5回現地調査をされました

。今回の地震は震度6を越える回数が多く一ヶ月に余震が12,000回もありました。川口町では震度7の強震、2515ガルでした。このため川口町の建物被害は38%と大変大きく、山間地では斜面や道路崩壊が激しかった。長岡市内では液状化の激しい地域が、昔池で40年くらい前に埋め立てられたところでした。地割れして穴が空いたままになっていました。詳細調査で、工法や築年数別の被害率を、また柱断面や筋かい断面が大きいことなどを示された。

雪国特有の混構造3階建て木造住宅の成立過程と被害例の紹介は、雪国出身の先生らしい説得力ある説明で、大スクリーンに多くの被害写真を示しながら報告されました(宮澤研究室ホームページ参照)。

## 演題と発表者

この他「中越地震のメカニズム」東大名誉教授・溝上恵、「中越地震での地盤災害」中央大学教授・國生剛治、「伝統木造建築物の被害」新潟県文化財保護審議会委員・山崎完一、「土

木構造物被害と免震建物」本学機械科卒業生の川口澄夫、「地震動と建物被害」建築学科教授・久田嘉章、「住民・ボランティアの対応と情報共有」同助教授・村上正浩の各先生方の発表も行われました。

## 宮澤健二先生スピーチ

今回の研究会「新潟県中越地震」というテーマはホットでタイムリーなニュースです。いろいろな分野の方に報告して戴きました。宮澤教授が総括を次のように締めくくりました。『何故災害が繰り返されるのか、人間の命を越える大きなスパンで災害は起こります。新潟地方は豪雪地帯ですので、雪が降っていた時に起こっていたら、被害が2～3倍にも膨れ上がります。しかし建築基準法は、冬期の積雪のことについて一切触れていません。阪神淡路大震災のこと、過去の教訓が生きておらず、人間の経験は、過去から何も学んでいません。地震の教訓が、次の世代に繋がらないといけません。科学や工学の目的は、地球を征服することではありません。



宮澤健二教授

人間は地球の恵みで生きています。自然と共に上手に永く生活する為の知恵は何なのか、それが工学や、科学を学ぶ人達の目標です。人間は自然の前でもっと謙虚であるべきです。自然と人間がどうやって共存していくのかが大切です。耐震技術を上手く使う事が我々の役目です。これは本学の「地震防災・環境研究センター」の目標もあります。』

参加者は約200名。東大、東工大、前橋工科大などの各大学の研究者。一般からは住宅メーカー、建築構造研究所、設計事務所、三菱地所、サンワシャッター、ゼネコン関係者など幅広い方が参加し、新聞社は「月刊木材」が出席しました。

(取材/NICHE編集部)



主催／工学院大学建築学科  
後援／大手町・丸ノ内・有楽町地区再開発計画推進協議会  
会期:2005年6月13日(月)～18日(土)  
会場／丸ビル7階(東京都千代田区丸ノ内2-4-1)  
コーディネーター／山本理顕教授  
担当／大野二郎、奥村理江、土岐晃司、西森陸雄

千代田区の中心部を計画敷地として選定し、大学の授業で都市居住の課題を設定。2004年10月6日に出題、10週目の12月25日に最終提出。その間、エスキスチェック、敷地調査、街並ルールの考え方、各グループの設計内容のプレゼンテーションなど中間チェックも行い、11週目の12月22日には最終プレゼンテーションが行われました。今回2005年6月に設定敷地内の丸ビル内で展示会を開催し、6月13日に公開プレゼンテーションも行われました。

(NICHE編集部)

#### 課題主旨

都市における住宅の在り方は、従来の「nLDK型」の核家族用住いではなく、一つの「都市施設」としてとらえ直す。都市には核家族だけでなく、単身者や高齢者など、もっと多様な生活像がある。さらに住むための場所だけでなく、働くための場所にもなっている。それらを出来るだけ具体的に想定しながら、都市における住宅の在り方を考えてゆく。

計画地は、千代田区大手町・

丸ノ内・有楽町地区。中間人口約100万人に対し、夜間人口がたった37人しかいない、昼夜間の人口差が最も大きい地区である。この地区に1000ユニットの都市居住のための施設を考えて欲しい。既にある建物のコンバージョンでも良いし、一つ又は複数の街区を計画し直しても良い。このとき、都市居住を補完するサービス施設を合わせて考えてください。そして、用途・機能に極端に隔たりのある地区全体は機能混在型の都市に変換する計画としてください。昼夜間を問わずアクティブのある街並を計画して下さい。

#### 経緯

建築学科建築学コースでは、山本理顕教授をコーディネータとして4人の非常勤講師と約60人の学生がこの課題に取り組んだ。3



～5人を1チームとしたグループ設計であり、コミュニケーション能力の問われる難易度の高い課題であった。日程は全11週、うち4回の講評会をおこなっておりプレゼンテーション能力も重視した。その成果を課題敷地内で展示する。

(資料抜粋／都市居住、KOU:ARC 2005年3月25日)

#### 展示作品

全体で10作品が展示された。タイトルは次の通りです。① 倒層、② New Tokyo off Broadway、③ Facade Jack、④ individual family、⑤ 都市リビング、⑥ Ant Hill、⑦ 31meter city、⑧ Net Workを形成する、⑨ PANESEA、⑩ Life on Live。

# 都市居住課題作品展 丸ビル7階会場

工学院大学建築学科建築学コース2004年度3年後期課題作品展  
工学院大学建築学科  
教授 山本理顕





伊藤潤一ユニットの展示パネル、ユニットごとにオリジナルのTシャツを制作

伊藤潤一、村松伸（東京大）、  
原口佐知子（ユネスコ）樺野靖司（コロンビア大）

## 伊藤潤一ユニットも参加

平成17年6月27日～30日までトルコ・イスタンブルにおいて、村松伸氏（東京大学）を中心とするmAAN（アジア近代建築ネットワーク）による「mAAN 5th International Conference」と、7月1日～6日まで、「UIA（国際建築家協会）World Congress」が行われ、双方において、昨年8月に2週間上海で行われた国際ワークショップ「工場遺産再生訓練」の成果展示会が開催されあわせて800名以上の来場者を向かえた。このワークショップは上海黄江地区の工場群をデザインセンターとして再生する計画を、中国、台湾、シンガポール、トルコ、イタリア、ブラジル、日本からは東京大学の学生を中心とした60名以上の大学院生が、9つの建築家ユニットに分かれて提案を行い、

中国メディアからも高い評価を得て雑誌などに特集が組まれた。ユニットマスターには、日本から黒石いずみ、宮本佳明、西沢立衛、中谷礼仁、ジョージ国広、伊藤潤一、シンガポールからBobby Wong、Tsuto Sakamoto、香港からGary Yeung、中国から松原弘典という次世代の若手建築家を中心に召集された。工学院大学都市建築デザイン学科OBの伊藤潤一ユニットは、空間の領域性とスケール、風景の再構築をテーマに提案を行った。



ワークショップの敷地となった工場群の様子

伊藤潤一  
工学院大学都市建築デザイン学科卒業

# イスタンブルにて mAAN国際 ワークショップ 「上海工業再生訓練」 展覧会開催

伊藤潤一／建築家、愛知産業大学講師  
伊藤潤一建築都市設計事務所代表  
〒201-0005 東京都狛江市岩戸南3-1-17-201  
TEL&FAX／03-3488-5226  
E-mail／<mailto:jun\_i@zd5so-net.ne.jp>  
東京大学生産技術研究所村松研究室  
〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1  
TEL／03-5452-6442  
mAAN（アジア近代建築ネットワーク） 国際運営委員  
上海国際ワークショップHP／<http://www.maanworkshop.org/>



展示会場となった名門イスタンブル工科大学



学生のエスキースの様子



修了時には修了書も授与された。(ITO UNIT)

構造計算書偽造問題に関連し、TV朝日より姉歯氏が設計した建物の模型振動実験を依頼された。宮澤・小野里研究室と有志の学生が中心となり、総勢40人で、2mを超える大きさの11階建てマンション模型（15分の1スケール）を2棟作ることになった。

平成17年12月12日から製作を開始し、振動実験は12月25日、26日ということで、製作期間2週間という大変切迫した仕事であった。

作業を効率良く行うために、研究室で担当を決めて作業を進めていった。しかしながら、実験日が迫る日ごとに、新宿校舎では型枠となるスタイルの切り出し、鉄筋の折り曲げを徹夜で行い、また八王子校舎では型枠組み、配筋、コンクリート打設、養生、型枠脱形と1日2交代での徹夜作業の日々が

続き、さらに寒さに耐えての作業でもあった。この壮絶な作業により、10日間で模型を完成させ、2日間でその模型を振動台に乗せ振動実験を行い、無事全作業を終え12月30日放送されました。

この作業で私たちは、RC造建物の配筋を学び、短期間で完成まで仕上げる過酷さと共同作業に伴うコミュニケーションの大切さを肌で体感した。

（建築学科3年 浅見祐一／石崎祐司）

工学院大学  
建築学科  
宮澤・小野里研究室

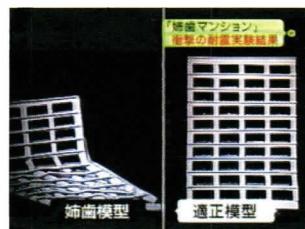
# 「構造計算書偽造問題」で「振動実験放送」



模型にコメントする宮澤教授



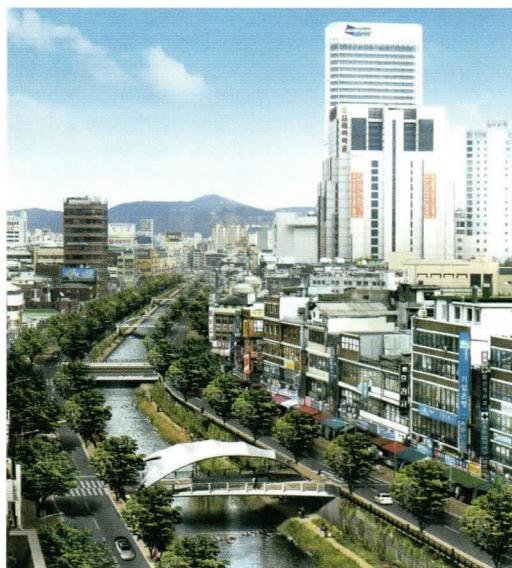
実験の解説



振動実験映像

工学院大学アーバンテックホールの会場は300人で満席、コーディネーターとして倉田直道工学院大学教授が参加され、韓国と日本の関係者が深夜まで意見交換。先ず「チョンゲチョン・プロジェクトの歴史的・文化的背景について」陣内秀信法政大学教授、続いて「チョンゲチョン・プロジェクトの背景・進捗状況・将来の展望について」Mr.Myung Chul Tchoe（韓国建築家）、「国際デザインコンペについて」Mr.Sungjung Chough（韓国建築家）の説明がありました。チョンゲチョン（清溪川）は、韓国の高度経済成長時代の70年代に暗渠となり高速道路を建設。ソウル市では水辺を再生し新しい都市再生のシンボルとしてのプロジェクトを推進。韓国内のみならず海外に対しても強力な広報活動を実施しています。その一環として国際デザインコンペが実施されました。

その後の情報では、「ソウル都心、せせらぎ復活、高速道路撤去し、川掘り起こす」の朝日新聞記事。2005年10月1日に開通式が行われ、暗渠になってよどんでいた川が憩いの場としてよみがえりました。（NICHE編集部）



# 韓国・水辺をとりもどす 都市環境づくり

ソウル、チョンゲチョン（清溪川）再生プロジェクト

主催／社団法人日本建築家協会JIA、FIKA  
(韓国建築家協会、韓国登録建築家協会、韓国建築学会共同体)

2005年3月3日午後6時～9時／  
工学院大学アーバンテック・ホール

宮澤研究室ではテレビ朝日からの依頼により、1981年以前に建てられた既存木質住宅の耐震性能を検証すべく、既存木質住宅の移築及び世界初の倒壊までの振動実験を信州大学五十田研究室の協力のもと、(財)原子力発電技術機構多度津工学試験所で行いました。供試体は大阪府に実在する築25年2階建て軸組構法住宅(建築面積42m<sup>2</sup>)を対象とし、構造仕様は瓦葺き屋根の筋かい耐力壁で外壁はモルタル仕上げ、内壁は石膏ボードでした。日本建築防災協会・新精密診断1に基づいた診断結果では加振方向の1階で0.76、2階で0.52となり、「大地震では倒壊する可能性がある」という判定となりました。移築は建物を細部まで解体して試験所で再構築し、強

度を再現したモルタルで新たに仕上げました。実験は震度7相当にした兵庫県南部地震を用いました。1回目加振では、倒壊は免れたものの1層最大変形は約270mmで、内部石膏ボード剥落や、筋かい接合部破壊が生じ、全壊状態でした。その後、倒壊まで加振し、4回目加振で1階が層崩壊し倒壊に至りました。実験風景は、6月17日のテレビ朝日報道ステーションで放映され1981年以前の木質住宅の耐震性能に警鐘を鳴らし、耐震補強の必要性を唱えました。

工学院大学 宮澤研究室  
修士2年 服部大介  
E-mail:dm04053@ccs.kogakuin.ac.jp  
工学院大学宮澤研究室  
電話03-3340-3470

服部  
大介

工学院大学建築学科宮澤研究室

# 「既存木質住宅加振研究室実験」



実験の解説



ケイジョウ×サイヘン。

【景情】世の中や自然のありさま  
【形状】かたち・ありさま  
【再編】編成しなおすこと  
【再変】再び変化すること

長い年月を経て培われた環境を損なうことなく、かたちを変えながら現代のライフスタイルに適した集合住体を提案する。

計画地は、さいたま市郊外に位置する県営の低層団地。そこは近代合理主義のもとに建設された、全ての住戸に均質な条件を与える画一的プランの団地である。しかしプランとは裏腹に人々の生活は驚くほど豊かである。建物や敷地から溢れ出した生活空間は、団地の中で共有の景色や場面を生み出している。

このような団地の多くが、老朽化に伴い再開発の対象となって

いる。これらの開発行為は、依然として土地を一度まっさらな状態へ戻してから、より階数の高くなり合理的な建物を建設するというものである。この団地も例外ではなく、14階建ての高層マンションが計画され、近隣住民との軋轢を生み出している。こういった事例は多くの地域で問題となっており、郊外における中規模再開発のモデル提案が必要とされている。

既存建物そのものに価値があるとしてリノベーションする例も多く見られるが、この計画地においては、建物よりもりふれた日常そのものや、人々の共有する景色に価値があるのではないかと考える。本計画においては、「スケールの再構築」「場の継承」という、部分と全体からのアプローチ、および建築の段階的移行というプロセスから、現在の環境を次世代へ継ぐことを目的としている。

西岡  
大輔

工学院大学工学部第二部建築学科

# 最卒業優秀設計作品 2004年度



加藤隆弘議長の司会、三好薰書記、田野邊幸裕会長の説明で議事が進行されました。第39期(2004年度)事業結果報告845万円、第40期(2005年度)の事業計画(案)ならびに一般会計予算(案)786万円が全員の挙手で承認されました。

著書「繁華街の近代 都市・東京の消費空間」に対して、平成16年度日本都市計画学会賞「石川賞」を授賞された初田亨教授と、農村計画学会賞受賞を受賞された三重短期大学岩田俊二教授の紹介があり、お二人から挨拶がありました。

南迫哲也名誉教授がコーディネーターで、F.L.ライトの建築ツアーの企画が説明になりました。また北澤興一さんから、「樋口清先生の座談会」を開催して欲しい

旨の企画案が出され、NICHE編集部で実施検討する事になりました。今年もなごやかな内に議事が進行されました。

(NICHE編集部)

2005年5月29日(日)  
10時30分～11時35分  
工学院大学新宿校舎11階  
第5会議室



田野邊幸裕会長の説明

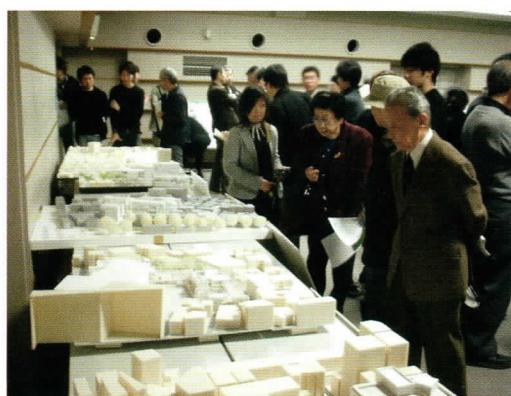


会場風景と谷口宗彦副会長の報告

建築都市デザイン学科の学生約30人が、授業の一環として平成17年4月から倉田直道教授、谷口宗彦教授、山口浩司講師、神尾武文講師らの指導を受け、JR阿佐ヶ谷駅と東京メトロ南阿佐ヶ谷駅を結ぶ中杉通りを中心に焦点をあてて、商店主にインタビューしたり現状を分析して杉並区「阿佐ヶ谷の賑わい」をテーマにまちづくり策を提案しました。

会場の3階講堂には、スタディされた模型とパネルが所狭く展示され、パワーポイントでスクリーン一杯に諸提案が次々とスムーズに説明。地下鉄駅のホームからダイレクトに広場に導かれる大胆な提案などに、多くのお年寄りから質問があり興味の深いことがわかります。提案の中には若さ溢れる内容も多く、杉並区まちづくり推進課の担当者は「行政の立場だとしても法律など現実的な制

約がかかるが、自由な発想ではじめて気がつくこともある」と感心していました。(NICHE編集部)



「阿佐ヶ谷の賑わいを  
デザインする」  
阿佐ヶ谷調査団

東京都杉並区立産業商業会館  
3階講堂  
2005年11月16日  
(水曜日)午後1～5時

# 「日本の流れ」近代建築の

工学院大学建築学科教授

初田亨  
コーディネーター



主催:工学院大学後援会東京支部

東京視察研修会

日時:2005年9月17日(土曜日)

8:45~18:00

午前8時45分、工学院大学新宿キャンパス集合。快晴で最高気温は28度、はとバス1台を貸切り45名参加。午前9時に工学院大学前を出発。バスの中では先ず自己紹介から始まりました。東京駅周辺の銀座レンガ街を歩いて回り浅草から両国の江戸東京博物館までぐるりと都内をひと回りして新宿東口解散が午後6時。約9時間に渡る丸一日の視察です。

今日のコーディネーターは先程、著書「繁華街の近代 都市・東



東京駅前

京の消費空間」に対して、平成16年度日本都市計画学会賞「石川賞」を授賞した近代建築史、都市史が専門の初田亨教授です。直接懇切丁寧な説明があり、ガイド役として国内を探しても初田先生以上の適任者は見当たりません。配付されたパンフレットには、「日本の近代建築の流れ」と題し

た銀座レンガ街から浅草、江戸東京博物館への視察コースの主要な流れがまとめてあります。①お雇い外国人がつくった建築、②江戸の技術を受け継ぐ幕末・明治初期の棟梁・職人の活躍、③日本人建築家の誕生と明治期の洋風建築、④新しい建築をつくり始めた大正期、⑤大きく展開した昭和戦前期の日本の近代建築、などが今日のテーマです。

大変盛り沢山な視察内容で、江戸から明治への東京の移り変わりを視察します。短時間に歩いて回るこんなに充実した日本近代建築史を見るのは、タイムスリップしたような貴重な体験です。それにもかかわらず息抜きも所々で用意しています。湯島の岩崎邸日本間では畳に座って茶席を味わいました。浅草の雷門から浅草寺、五重塔通りを経由して浅



湯島の岩崎邸

草ビューホテルの28階スカイラウンチブッフェからは、世界各国の料理とデザート30種類のバイキングコースが用意しています。はとバスのコースにもこんなにレベルの高い感動満載コースはないと思います。

食後のコーヒーを味わいながら、まだ夏の雰囲気が残る浅草の町並を遠くまでパノラマに見下ろしていると、非日常の不思議な体験になります。綺麗な青空の広がる空を、ゆっくり味わうことは最



近珍しいです。

帰りのバスの中で皆さんの感想。「90分授業を久しぶりに受講しました」、「専門家の先生の話を聞くと、何時も車で通り過ぎている所が違って見えました。岩崎邸もはじめて伺い感動することができました。」「今日は素晴らしい研修会になりました。」「建築は



歴史、文化全てにかかわる分野であるものですから、見て歩くのが大好きです。知識の蓄積にもなりますので大変ありがとうございました。」、後援会の皆様方が非常に熱心に準備されて研修会を企画され、交流されている様子が伺えました。

(取材/NICHE編集部)



# 「建築を学ぶための PERFECTガイド——2006 に大きく紹介

国内の建築関係全国310校456学科の中から「話題の学校、ユニークな学校を訪ねて」の中の3校に、工学院大学工学部/第1部建築学科、建築都市デザイン学科、/第2部建築学科が「現場で活躍する建築のプロが、建築の『実際』を教授」のタイトルで4頁にわたり大きく紹介されました。

発行/建築資料研究社  
平成17年7月31日発行  
(NICHE編集部)



左: 建築セミナーに出席する学生たち  
右: 建築模型製作室で模型を作成する学生たち  
下: 大学の建物と構造物

**現場で活躍する建築のプロが、建築の「実際」を教授**

第一回は「活躍している建築家による実際的な建築講義」  
学生たちは、日々の生活で見つけられる建築をテーマに、計画の現状を説明する  
道具から高齢者まで

**建築を学ぶための  
PERFECTガイド  
2006**

大学・短大・大学校・専門学校

発行/建築資料研究社  
平成17年7月31日発行  
(NICHE編集部)

**工学院大学 工学部**

111 建築学科【建築学コース 球根建築コース】  
112 建築都市デザイン学科  
113 建築学科

**現場で活躍する建築のプロが、建築の「実際」を教授**

第一回は「活躍している建築家による実際的な建築講義」  
学生たちは、日々の生活で見つけられる建築をテーマに、計画の現状を説明する  
道具から高齢者まで

**建築を学ぶための  
PERFECTガイド  
2006**

大学・短大・大学校・専門学校

発行/建築資料研究社  
平成17年7月31日発行  
(NICHE編集部)

**建設以来、実践的で  
経験豊富な教員陣**

建設全般に亘る実践的知識をもつた教員陣が、実習や実験を通じて、実践的教育を行っている。建設実習では、建設現場で実習を行うだけでなく、実習場所を建設現場に選定するなど、実習の実践的性を重視している。また、実習場所には、建設会社や建設機械の運転手など、実業界で活躍する人材が多数登場する。建設実習では、建設現場での実習だけでなく、実習場所を建設現場に選定するなど、実習の実践的性を重視している。また、実習場所には、建設会社や建設機械の運転手など、実業界で活躍する人材が多数登場する。

**建設実習コース**

建設実習コースは、建設会社や建設機械の運転手など、実業界で活躍する人材が多数登場する。建設実習では、建設現場での実習だけでなく、実習場所を建設現場に選定するなど、実習の実践的性を重視している。また、実習場所には、建設会社や建設機械の運転手など、実業界で活躍する人材が多数登場する。

**工学院大学 工学部**

111 建築学科【建築学コース 球根建築コース】  
112 建築都市デザイン学科  
113 建築学科

**建設以来、実践的で  
経験豊富な教員陣**

建設全般に亘る実践的知識をもつた教員陣が、実習や実験を通じて、実践的教育を行っている。建設実習では、建設現場で実習を行うだけでなく、実習場所を建設現場に選定するなど、実習の実践的性を重視している。また、実習場所には、建設会社や建設機械の運転手など、実業界で活躍する人材が多数登場する。建設実習では、建設現場での実習だけでなく、実習場所を建設現場に選定するなど、実習の実践的性を重視している。また、実習場所には、建設会社や建設機械の運転手など、実業界で活躍する人材が多数登場する。

# 大大第 会仮 装開催

主催／工学院大学建築系学科同窓会  
会場／新宿キャンパス、1階アトリウム  
2004年12月4日(土曜日)  
午後5時開幕～7時過ぎ閉幕



準優勝 谷口研究室



## 会場風景

今年が初めてのイベント企画です。午後5時受付に長駄の列、1階アトリウム一杯に工学院大学吹奏楽団（総勢20名）による軽快なジャズのリズム。5時過ぎ田野邊幸裕同窓会会长「学生とどうやったら交流がはかれるか考えました。同窓生とお会いして絆を深めて戴きたい」と開会宣言。三浦学長「こんなに面白い企画ありがとう」。長嶋校友会会长の乾杯の音頭によりスタート。ステージ中央に巨大なカボチャのスクリーン、黄色い顔に発光ダイオードの赤いまばたきが点滅始めました（村上研究室作成）

## 大仮装コンテスト 10研究室初参加

出し物は10研究室が参加。素人っぽさがむき出しの演出で下手というか上手いというか、仮装だけで振り付けまで手が回らない演出は、その場で指示しています。見ている方は苦笑の連続。チームがそれぞれ協力し持ち時間の1分をなんとかこなし、拍手の音量で順位決定。優勝は赤木研究

室。赤木先生のおばけの「Q太郎」、愉快な演出と若者の躍動感が伴って拍手盛大。第2位、谷口研究室、テレビCMをコピー、サンタクロースの一群が「クリスマス・プレゼント」。谷口先生の愛犬・チワワの「築太」君も大パネルで出演ほのぼの企画。第3位、初田研究室、ストッキングを被つて裸足の一群が乱舞、最後は人間ピラミッド、人数も30人近く参加して圧巻。この他、大変面白い企画がめじろ押しでした。



## 全国の地酒大会も開催

全国の「校友会各支部」の皆様方から多数の地酒が送られ見事に勢ぞろい。「全国の支部の皆さん!!美味しいサポート!本当に有り難う」。

## 10支部から名酒19種類。

- ①広島支部／上船章吾様  
超群、小鹿、
- ②山口支部／木本様、  
防長鶴
- ③鳥取支部／尾崎明雄様  
元帥
- ④大分支部／本田信之様  
西の関、いいちこ
- ⑤石川支部／野口嘉興様  
手取川辛口、天狗舞
- ⑥静岡支部／山崎弘資様  
安部街道、海舟の山廃、  
中正鬼殺し
- ⑦新潟支部／谷口宏様  
菊水、
- ⑧秋田支部／佐々木修様  
飛良泉、雪の茅舎、
- ⑨青森支部 工藤知彦様  
玉垂、鄙龜（ひなかめ）、田亞、
- ⑩宮城支部／  
一の蔵、澤の泉、等々です。



## 卒業生の更なる 参加をお願いします。

イベント準備の段階から、企画や調整に裏方で動いたスタッフの皆様お疲れ様でした。参加された多くの在校生の皆さんも、きっと楽しい思い出として印象づけられたと思います。この企画が工学院大学の楽しいイベントとしてこれから大きく成長していくことを願っています。午後7時過ぎお開き、後片付けもあれよあれよ片付いていきました。参加者は約320名。卒業生の更なる参加をお願いしたいと思います。

(取材/NICHE編集部)

# 建築・不動産・土木ならCI。この経験と実績が、あなたのキャリアアップを確実にします。

< 建築・不動産・土木業界に特化した人財紹介会社 >

○望まれるキャリア

建築・不動産

建築士  
施工管理技士  
インテリアコーディネーター  
建築設備士  
電気工事各資格  
宅地建物取引主任者  
不動産鑑定士  
等々

○望まれるキャリア

土木

技術士  
施工管理技士  
地質調査技士  
補償業務管理士  
等々

## 求職者の登録受付中！

〔求職者の登録、企業へのご紹介等、一切の費用は無料です〕

(求人の受付も隨時行っております)

# CI

株式会社 クリエイト・インターナショナル

(人材紹介業 厚生労働大臣許可 13-ユ-080172)

(人材派遣業 厚生労働大臣許可 般 13-300556)

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-23-6 協立四谷ビル 2F

<http://www.create-int.co.jp>

ご相談はお気軽に…

TEL.03-3358-0234 FAX.03-3358-0230

フリーダイヤル 0120-75-0234

E-mail [info@create-int.co.jp](mailto:info@create-int.co.jp)

受付時間：月～金／9:00～20:00 土／10:00～18:00 休日：日・祝日・年末年始

1

### 「景観法を活かす」 どこでもできる 景観まちづくり

「景観まちづくり研究会編著  
窪田亜矢 学芸出版社  
Tel／075-343-0811  
206ページ、定価2,940円（税込）  
2004年12月発売、B5版



景観法の制定は、私たちの生活環境における豊かな質への関心が高まることの顕れといえよう。こうしたツールを具体的にどのように使いこなせるのか、ケーススタディによって検討、紹介している。

窪田亜矢（工学院大学建築都市デザイン学科助教授）

3

### 「いい家」は ローコストで建てる

鹿島出版  
閑谷真一／監修 永岡書店  
Tel／03-3992-5155（代）  
160ページ、定価本体1,200円  
2004年9月10日発行、B5版



節があって、多少の割れを良しとすれば、国産の木材は安く使えます。コストを抑えても素材にこだわりつつ、安全で豊かな空間をつくるためのノウハウ、自然素材によるセルフビルドの方法も紹介しています。

閑谷真一（工学院大学建築学科兼任講師）

4

### 「地震・災害にも負けない 『強い家』の建て方と メンテナンス」

閑谷真一／監修／（株）ユーワーク  
永岡書店  
Tel／03-3992-5155（代）  
192ページ、定価本体1,200円  
2005年6月10日発行、B5版



100年持つ家づくりのために、土地選びから、地盤、基礎、構造について、特に地盤については詳細に説明。風雨から家を守り、長持ちさせるためのメンテナンスやリフォーム、木材等の材料選びについて解説しています。

閑谷真一（工学院大学建築学科兼任講師）

2

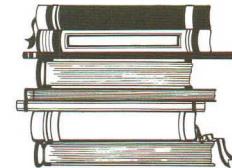
### 「模倣と創造の空間史」 新訂版

初田亨 著  
彰国者  
Tel／03-3359-3231  
272ページ、定価2,520円（税込）  
2005年4月20日発行



日本の近・現代建築がつくられてきた過程を明らかにするもので、西洋建築を受容した日本、西洋建築の変遷、近代への挑戦、日本の近代建築運動、モダニズム建築、日本におけるモダニズム建築の定着そして懐疑へ、からなる。

初田亨（工学院大学建築学科教授）



## 新刊書紹介

同窓生や建築系学科の教員など関係者が執筆しました新刊書をご紹介致します。

5

### 「図解辞典 建築のしくみ」

著書/建築図解辞典編集委員会編／  
委員長 吉田倬郎／委員 遠藤和義  
他共著 彰国社  
Tel／03-3359-3231  
356ページ、定価3,800円（税別）  
2001年2月10日発行、本A5版



157のキーワードを見開き2頁で図解しています。構造、各部構法、設備・性能・機能、エクステリア・インテリア、生産の各分野について、図解に相応しいキーワードを厳選し、気鋭の執筆者に執筆していただきました。お陰様でご好評をいただき版を重ねているのは嬉しい限りです。

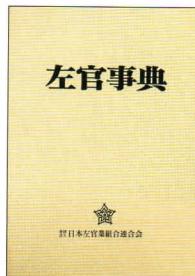
吉田倬郎（工学院大学建築学科教授）

遠藤和義（工学院大学建築学科教授）

6

## 「左官事典」

鈴木光 編著者  
(1974年建築学科難波研究室卒業  
・2000年工学院大学修士課程  
建築学専攻修了)  
社団法人  
日本左官業組合連合会 発行  
Tel／03-3269-0560  
809ページ、定価5,000円(税込)  
2004年5月15日発行、A5版



編著者である鈴木光氏は、左官材料施工等の第一人者本学名誉教授、難波蓮太郎先生の弟子である。今回難波先生他の指導監修も得て、永く出版を望まれていた、左官に関わる全ての知識をまとめた事典が発刊された。しかも、歴史的・伝統的手法から最近の新素材に至るまで、左官に関わる材料、工法、道具、現場用語等を掘り起こしその解説にもつとめている。設計・施工の技術向上はもとより、建築用教材として建築の基礎的な用語も取り入れており、技能士・施工管理士試験等でも大いに活用が期待される。

7

## 「西洋館炎上」

類洲環著  
新風舎  
Tel／03-3746-4648  
109ページ、  
定価:本体1100円+税  
2005年1月5日発行、B6判  
(単行本)



和洋折衷ここに極まれり! — 日本とイギリスの大工による西洋館の競演。その建設を阻止しようとする倒幕の志士。3人の若者の「時代」への想いとは……。「ホテル・ポストモダン」「隣のトト」を併録。

類洲環 (工学院大学建築学科1968年卒、掘越研)

8

## 「木質構造」

宮澤健二著/北海道大学大学院農学研究科教授・平井卓郎、京都大学木質科学研究所教授・小松公平氏との共著  
東洋書店  
Tel／03-3269-2961  
236ページ、  
定価2,625円(税込み)  
2004年3月25日発行、A5版



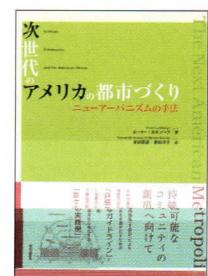
環境や資源問題から益々木構造は重要となり、複合材料や新構法の導入と構造設計の高度化により、専門の知識が必要になった。本書は、法体系、荷重、材料特性、木質系特有の構造計画、接合部や面材系の設計法と耐久・防耐火設計を述べている。

宮澤健二(工学院大学建築学科教授)

10

## 「次世代のアメリカの都市づくり」ニュー・アーバニズムの手法

ピーター・カルソープ著、倉田直道・倉田洋子訳  
学芸出版社  
Tel／075-343-0811  
200ページ、定価3,360円(税込)  
2004年6月10日発行、B5変型版



過度な車依存がもたらした米国の都市問題を分析するとともに、公共交通指向開発(TOD)など持続可能なコミュニティの創出を目指す次世代のまちづくり手法としてのニュー・アーバニズムの理念と詳細なガイドラインを示す。

倉田直道(工学院大学建築都市デザイン学科助教授)

9

## 「住まいの礼節」

中山繁信著  
学芸出版社  
Tel／075-343-0811  
207ページ、定価1,800円(税別)  
2005年3月30日発行、A5版



建築家が語る一步控えた住まいづくりの哲学、イラストによる実践的なアドバイスも満載。ひとり人が自分の住まいだけでなく少しづつ周囲へ関心をもつようになれば、私達も安全で美しい住環境を手に入れることができるはずである。そうなることを真に願って、この著書をしたためたつもりである。

中山繁信(工学院大学建築学科特別専任教授)

# 「日本デザイン論」 をめぐつて

戦

争中の丹下(健三)さんは、特研生(大学院特別研究生)だった。昭和13年(1938)に東大を卒業後、一度社会人になられて大学に戻り、新設の特研生になられたわけである。

スフまじりの厚手の黒色の服に、これまた黒色のゲートルをまかれズックの靴。丹下さんはそういう服装で歩いておられた。ゲートルなど巻いて変と思われるかもしれないけれど、そういう姿でないと街の中を歩くことができず、それに従っていない男がいると、警防団のおじさんが通せんぼするからである。

内田(祥文)さんは東大講師で、丹下さんはよく内田研究室に訪ねてこられていた。二人は親友で同じくらいの年令にみえた。

そして私は、理想都市の史的研究なる学士論文を書いていた。このテーマは、内田先生が出されていたもののひとつで、私はそれを選んだから内田研究室にいたわけである。研究といって

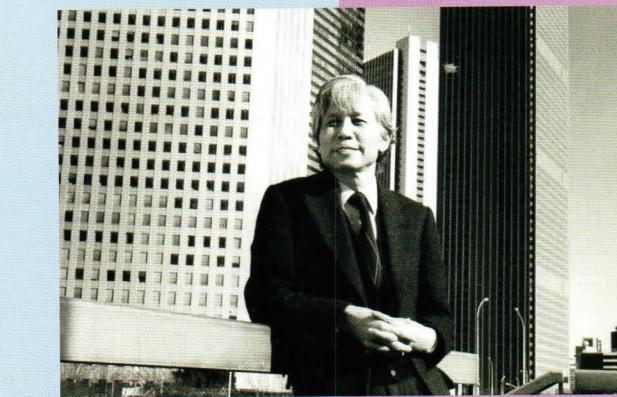
も、その実態は、内田先生のお父さん・祥三さん(当時総長)が、スイスで購入されたドイツ語の単行本の和訳であった。こうして私は戦争中の丹下さんと内田さんとを、存じあいでいるのである。といって私は、別に卒業後に設計に携わろうとしていたわけではない。同級生だってみんなそうで、卒業後に自由な建築家を志した者は、一人もいない。

多分昭和19年の秋だったと思う。丹下さんはこうおっしゃった。

「この世には、都市的なものと農村的なものがある。蒋介石は都市的で、毛沢東は農村的な存在である。(当時蒋介石は重慶に、毛沢東は延安にいた)日本は蒋介石を相手にするのではなく、毛沢東を相手にすべきだ」

私が丹下さんから聞いた二元論というか対立概念で物を捉える見方を聞いたのは、これが最初である。

二度目は、日比谷の角地に日



工学院大学学長時代

活ホテルが竣工した直後のことである。丹下さんは、外務省から「日本建築の伝統」なる映画の製作を依託された。映像化するのは長島さんという方で、なんでも前から丹下さんとの知り合いとうかがっていた。

「伊藤君 てつだえよ」という丹下さんの言葉で、私と長島さんは日活ホテルのロビーで、丹下さんを待っていた。そして丹下さんは外からおいでになるかと思っていたら、二階から廻り階段を下りて来られた。もはや戦後の事であるから、丹下さんも著名な建築家であり背広姿である。そして丹下さんは伝統的建築をこう見るとおっしゃった。

「日本には水平的なものと垂直的なものがある。水平的なものはカツラ(桂離宮)で、垂直的なものは五重塔である」

私はそういう対立概念だけで、映画のシナリオを創るのはむつかしいを感じていたから、「だからどうなの?」と質問したかった。実をいうとこの映画は、インフレが激化して実現されることなく終わった。

丹下さんが自らの論文の中で、誌上で展開するのは「繩文的なものと弥生的なもの」が最初で、これはその後のことである。

丹下さんは自らの設計を正当化する対立概念だから、それはそれでいい。でも私が日本の建築を支えてきた思想を説明しよう



1942年結核に感染した頃

とするときには限界がある。つまりそれで分かってもらうというのは、日本人一般にもまた西欧人にたいしても、説明したことにはならない。

こういう時にヒントになったのは、留学生たちの質問である。例えばこういうものである。

「反った屋根にみられるような曲線はヨーロッパにも、中国、東南アジア、そして日本もある。それぞれの曲線は、お互いに性格が違うように見える。どうしてか?」

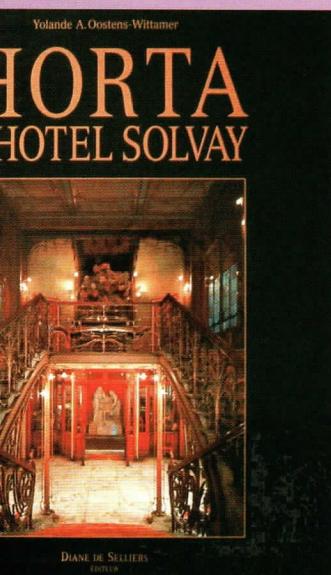
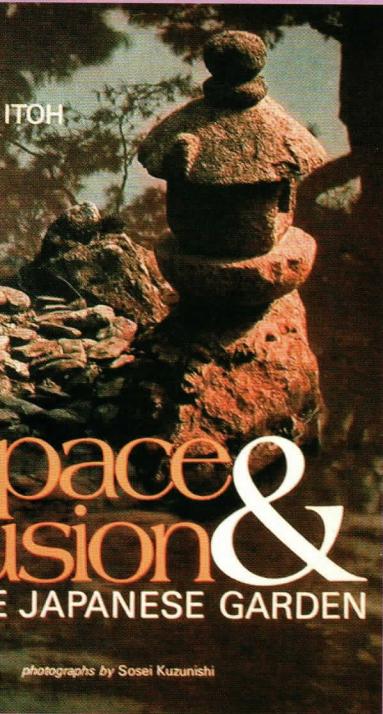
私が日本建築にみられる曲線を考え始めたのは、この時からである。そして私なりの考えのヒントになったのは、棟梁の技法と用語である。ひとつは「撓尺(たわみじゃく)」で、具体的には厚さがさまざまのうすくて長い板である。そのまま使えば直線で、力を

# 伊藤忠爾 いとう ちゅうじる



著書に「中世住居史」東京大学出版会、  
「日本の民家」(共著) A.D.A.EDITA Tokyo 民家 平凡社、  
「民家は生きていた」美術出版社、「城とその町」淡交社、「城とその町」淡交社、「日本都市史」西洋都市史 建築学大系 彰国社、  
「建築の美」(共著) 日本書店、「世界の美」西洋都市史 建築学大系 彰国社、  
「Nature and thought in Japanese Design」WODECO  
「日本の庭園」講談社インターナショナル、「The Gardens of Japan」(英語版も刊行)、  
「重源」新潮社など。  
1960年度日本建築学会賞受賞。

「城」読売新聞社、「民家は生きていた」美術出版社、「城とその町」淡交社、「日本都市史」西洋都市史 建築学大系 彰国社、  
「建築の美」(共著) A.D.A.EDITA Tokyo 民家 平凡社、  
「世界の美」西洋都市史 建築学大系 彰国社、  
「Nature and thought in Japanese Design」WODECO  
「日本の庭園」講談社インターナショナル、「The Gardens of Japan」(英語版も刊行)、  
「重源」新潮社など。  
1960年度日本建築学会賞受賞。



加えると曲線になる。他のひとつは「垂み」で墨壺の水糸である。力を加えて引っ張れば直線で、重力にまかせれば曲線である。棟梁は、こうして気に入った線を考えたというのである。

これは、ひとつの道具の対立する直線と曲線を考えていたことになる。当時の私達は直線はT定規や三角定規で、曲線はコンパスで考えるのが普通であった。これは西欧的建築教育の自然のなりゆきであった。ここでは

直線と曲線は対立するものであり、それを表現する道具も違うことになる。

私はこういう説明の仕方で理解してもらえるかどうか、当時在日していた留学生たちを通して確かめてみた。そして昭和35年(1960)世界デザイン会議(WODECO)の事務局長・浅田孝さんから、外国人参加者に配付する冊子の作成を頼まれた。3月4日のことで5月11日に始まる会議に間に合わせて欲しいというものであった。私が本文と構成・造本編集は瀬底恒さん、そしてレイアウトは細谷巖さんである：“Nature and Thought in Japanese Design”がそれである。このとき私なりの日本デザイン観はいちおう固まっていたようと思う。そして私はこの冊子で、U.S.Aの大学から招聘をうけそれを受けてしまうことになる。

昭和41年(1966)私は帰国していく鹿島出版会から“日本デザイン論”が出版され、曲線の話は冒頭の一部となり、和文字になったのは、これが最初である。

私は職人用語に触発されて、

概念をまとめる場合が多かったように思う。例えば平成4年(1992)ベルギーのY.Oostensさんが“Horta L.Hotel Solvay”なる大部な豪華本を送ってきて下さった。なんでも両親が戦後すぐソルベー邸を買得し、今は子供達で管理していて“私はルーベン大学在学中からソルベー邸を研究し、こうしてまとめた”といふのである。これは私家版で一般に売られていない。

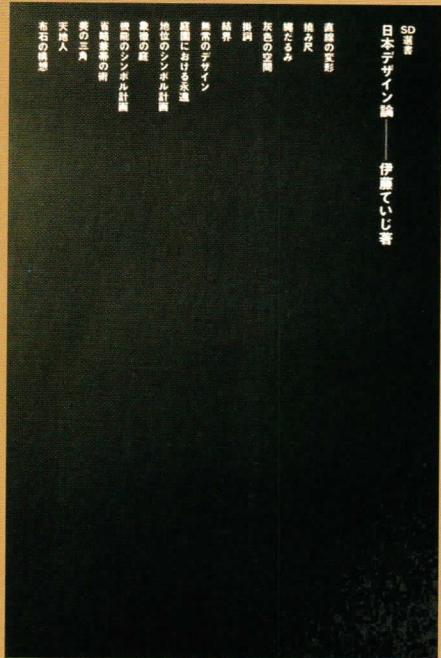
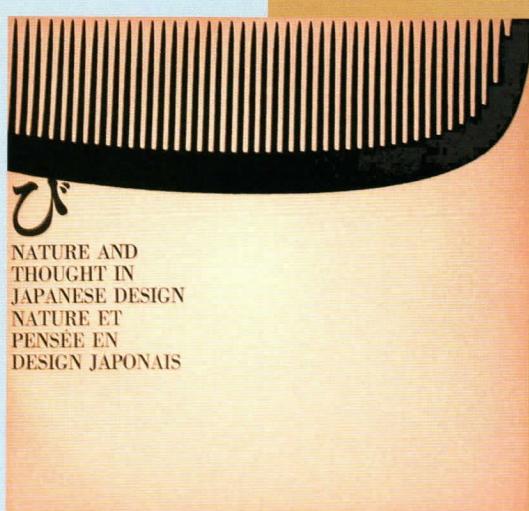
彼女の手紙によると、この研究の手がかりを与えてくれたのは、あなたの著書“Space & Illusion”(1973)の中の“catching alive”という概念であるというのである。

実をいうとこの用語は、京の庭

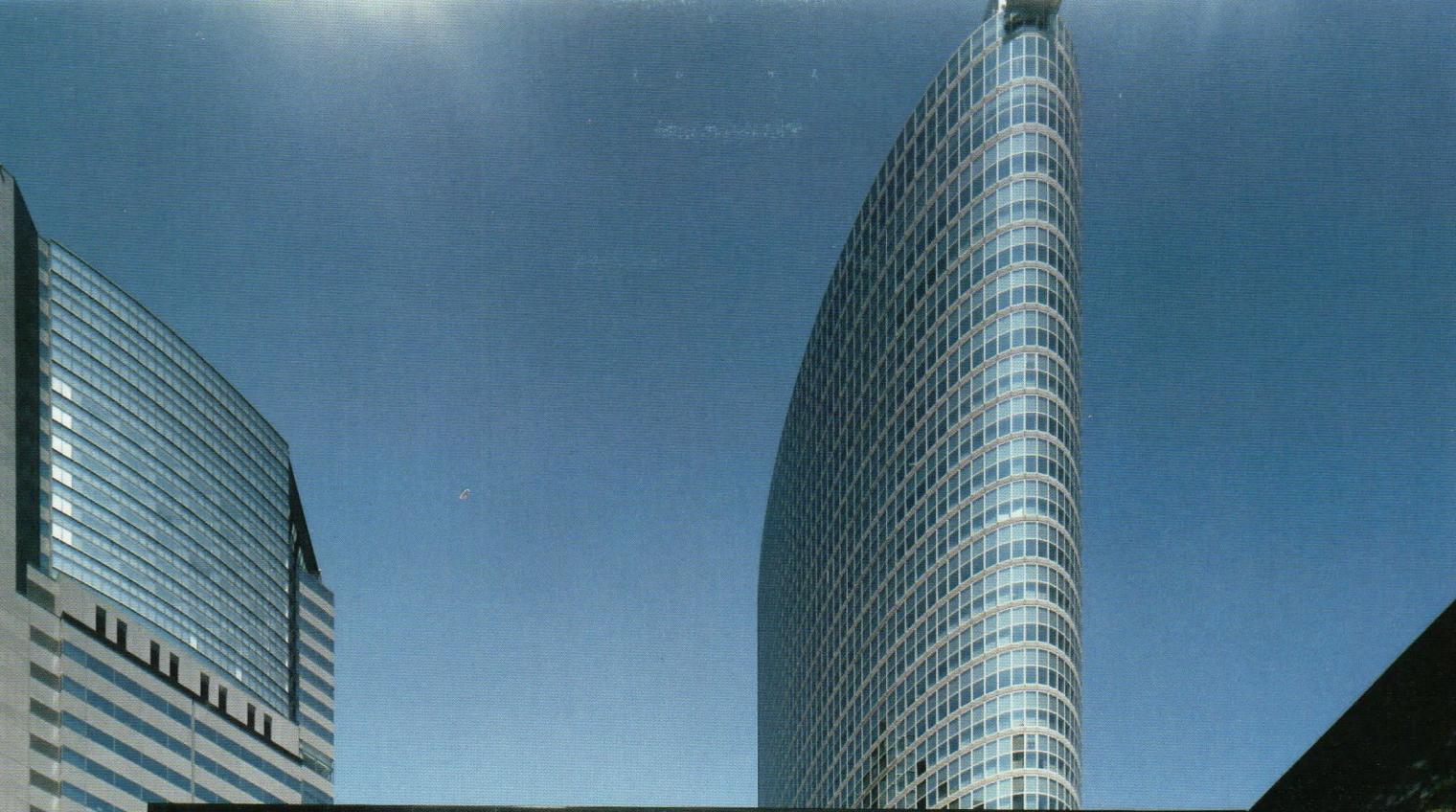
師・奥田政友さんが教えて下さった庭師用語の“生けどり”的訳であり借景のことである。生けどりの具体的な手法は省略するが、重要なのは遠景を庭にとりこむというのではなく、その間に取り込む装置が必要だということである。ということは、二点一対ではなく、三点一対で考えられるということである。

ちなみにOostenさんの手紙によると、Hortaが生けどりしようとしていたのはnatureだったというのである。なお彼女の両親は、ソルベー邸の建物だけでなく、食器、テーブルなどの調度や彫刻などの美術品とともに購入されたようである。それは彼女の著書から窺うことができる。ブリュッセルの昔の地図をひろげてみたら、旧市街地にソルベー男爵の名前があった。ソルベー邸はそこにあるのかもしれない。

思えば日本のデザインについて考え出してもう50年になるわけである。丹下さん、内田さんにお会いしてからなら60年になるわけだ。そしてそのころすでに私は、デッド・ボールを受けていた。肺結核だったわけで私は人生にスピンをかけなければ、価値ある存在になりそうにない立場におかれていた。そしてスピン・ボールのひとつが、日本デザイン論であつたような気がしている。



SD選書 日本デザイン論 伊藤ていじ著



# みちもり広場

成田 治  
(品川セントラルガーデン)

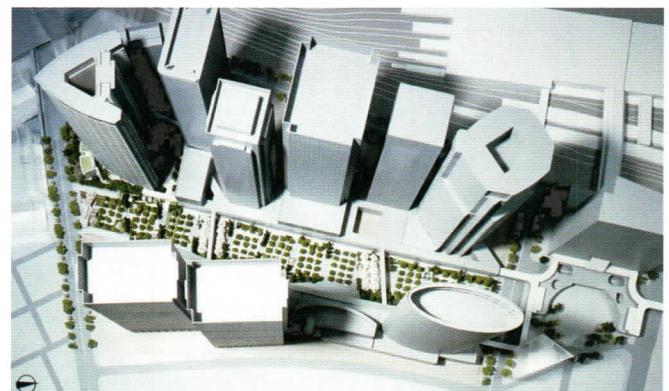
品川駅東口は、明治初期以降に埋め立てられた地域である。計画地東側には南北に走る旧海岸通沿いを中心に中小の事務所・倉庫等が混在しており、計画地と旧海岸通に挟まれ食肉市場が存在し、その北側には狭隘道路が網の目に走る小規模な飲食店、木造住宅が密集している。都市公園等周辺に緑化施設は見受けられず、また個々の宅地の緑も決して豊かとは言い難い状況であった。

このような状況の中で品川セントラルガーデンは、品川東口再開発地域内の各就業者、来訪者並びに周辺住居者等の利用に供されることを目的として計画された。幅45m・長さ約400m・敷地面積約18,000m<sup>2</sup>の大規模な都市公園としてのオープンスペースである。この大きな空間は、全体が一つとなり構成することを最大の開発目的としているが、土地の所有形態としては、都市計画上2号施設として位置づけられた2つの公園（ひとつは港区と品川区に跨る）と、所有権が各々独立した7事業区画からなる提供空地（大部分は公共空地）や各区画の壁面後退部分から構成されている。また公園を除く民有地は、地域冷暖房施設や地下車路など都市インフラを内包している。これら給排気の換気塔は、休憩施設などの機能を併せもつ7つのフォリーとして品川セントラルガーデン内にリズム良く配置し、空間のアクセントとして華やぎさを与える装置となっている。

品川セントラルガーデンはこれら周辺の状況及び超高層が林立する環境に負けない水平の空間を作り出すため、「みちもり広場」をコンセプトとして計画した。このみちもり広場は、「均質性」の空間

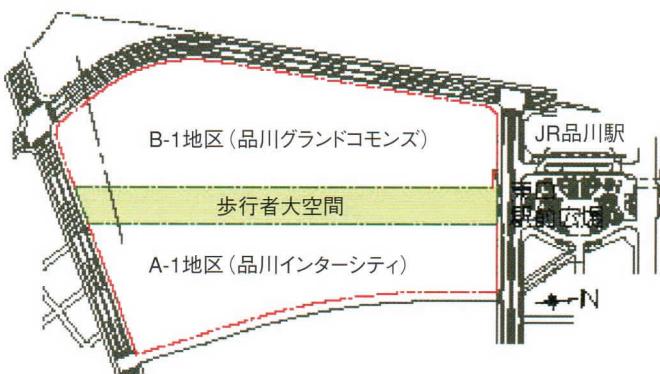
を創り出す『もり』と、「変容性」の楽しさを演出する『みち』で構成する。

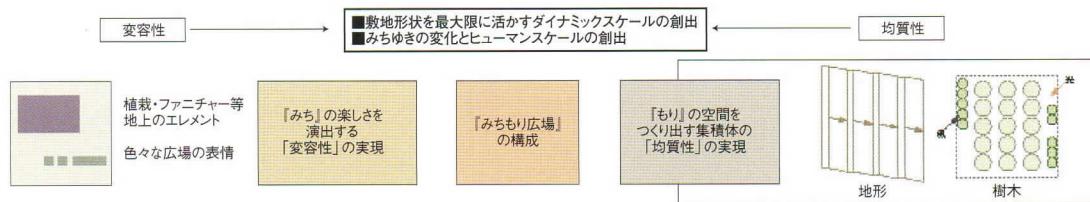
ひとつは広場型ではなく「みち」型をつくる。浅草仲見世通りや原宿表参道に代表されるように、日本人に心地よい身体距離をもたらす。もうひとつは「もり」型であること。社寺の境内や鎮守の杜のような空間である。かつて日本には公園が整備される以前より豊かな公の杜があった。明るく乾いた広場ではなく、少し暗く、時には鬱蒼とした湿度をたたえた木陰である。



「みち」の具現化には、ユニットと呼ぶ28m×28mの正方形に設定した小広場を13箇所少しづつ回転させながら連続配置している。また地形と高層棟の地下1階との間にできるひずみには植栽帯をつくり、高層棟の足下のハードな空間から小広場を切り離し、公共空間におけるゆるいプライバシーを人々に提供する役割を担わせる。

「もり」の具現化には、落葉樹であるカツラを主要樹木としている。全体を単一種で構成、また5本で1組となり南北方向に等ピッチに並べられることにより、全長400mという長さを強調する緑のボリュームを作り上げている。カツラは季節の変容を映し出す装置として植樹を行っているが、冬カツラが葉を落とすと、「みちもり」空間に姿を現すのは防風植栽として植えられているシラカシの姿である。シラカシの植栽帯は、「くさび」という形で地面から400mm程度立ち上がった台座のようなデザインとし、空間の分節化に大きな役割を果たしている。また、セントラルガーデンと両側のインターチェンジやグランドコモンズを結ぶ階段やスロープなどの動線も、くさびの立ち上がりの中に組み込んでいる。敷地全体を通して、都会的でニュートラルな色調で構成されている空間に、くさびの赤い安山岩で彩りを与えている。





セントラルガーデンは、南北は道路レベルにすりつき内部に向かって若干登りそこから両サイドの建築のB1Fレベルにすりつくよう緩やかな勾配を持つ全体として弓形に窪んだ地形となっている。1F～B1Fへと立体的に繋がることで、人々の動きが視覚化され、より賑わいのある都市公園が創り出されている。

インターチェンジとグランドコモンズのスカイウェイをつなぐ南北2本のブリッジは、ユニットの「ふれ」に角度をあわせて設置されており、この変化が400mという長いセントラルガーデン全体にリズムをつくりだし、多彩な表情を創り出している。

これらの要素で成立しているセントラルガーデンは、心地よいスケール感を人々に与えながら、全体としては統一の取れた都市スケール、デザインを創り出している。

## 品川セントラルガーデンを構成する6つの要素

### 1. フォリー・デザイン

#### 『道行きのリズム』と『ストーリー』

歩行者大空間はダイナミックさとヒューマンさを一体的に取り入れた空間であり、フォリーは、この大空間に道行きの『リズム』と『ストーリー』を創り出す。

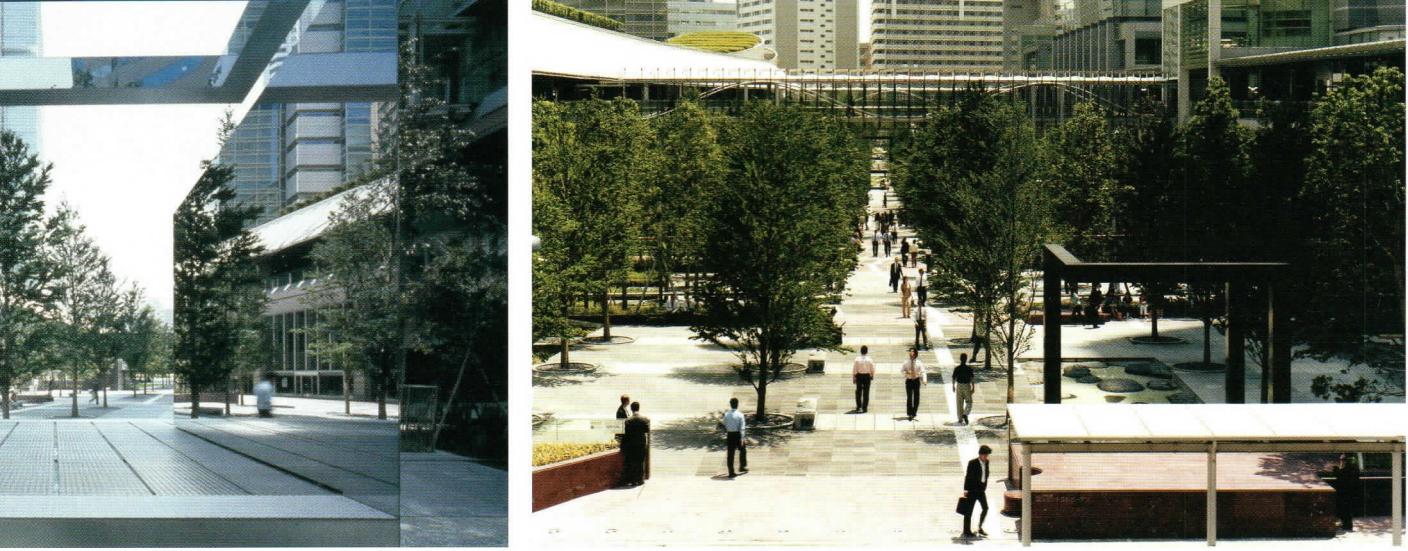
#### ●リズム

・7つのフォリーは、一辺が5mの同じフレームによる組み立てのバージョンによって構成される。同じ素材、同じ大きさ、同じ色のフレーム（モジュール）を用いることによって、フォリー全体に統一感、連続感（リズム）を持たせる。

#### ●スケール

・歩行者大空間の重要な要素である樹木との関係や、ヒューマンスケールの観点から、ベストのスケールとして導き出されたフォリーフレーム—5m角を目安とした大きさとする。人への威圧感を無くし、歩行者大空間との一体感を生む。

フォリー	1	2	3	4	5	6	7
サンプリング	水	石	光	風	土	草	木(桜)
歴史的イメージ	品川海岸	高輪の大木戸	二十六夜侍	浜の潮風	品川台場	目黒川(立会川)海岸	御殿山の桜
諸機能	地区車路給排気 B-1地区連結ブリッジ	DHC換気	DHC換気	地区車路給排気 B-1地区連結ブリッジ			
プログラム	実際の潮の干満に連動して水位が増減していく。その時々で現れる地形によって腰掛けたり、水遊びができる。満潮時には、最頂部を越えて水が一気に流れ出す。	フレーム内に、石が組み込まれている。石は、年月が経つほど風合を増していく。またB-1地区(品川グランドコモンズ)への連絡ブリッジを併せ持つ。	内側の壁面に鏡面パネルを使用し、フォリーを水面の上に浮遊させる。太陽に反射してきらきらと光り、夜は自ら発光する光のフォリーとなる。	フレーム内に納められた羽根が風の力を受け回転する。また、持ち上げられたフォリーは物見代となり、風を感じながら景色を眺めることができる。	フォリー内部には、鳥や昆虫が生息するビオトープ環境をつくる。フレームには穴を開けて鳥達の巣箱を用意する。都市生活の中で忘れていた何かを思い出す。	フォリー内には品川の歴史ある桜の古木が植えられ、周りに配置される桜とともに、花見の季節には賑わいを創り出す。	
デザインイメージ							



### ●ストーリー

・7つのフォリーにはそれぞれ違った自然のテーマが与えられており、体験を通して記憶やイメージを喚起させる。またフレームは、それぞれの場所やテーマに合わせて少しづつ違った構成になっている。

### ●機能

・7つのフォリーはそれぞれ多目的に構成されており、様々な施設機能が組み込まれている。また夜間には、照明によって7つのフォリーが浮かび上がる。

### ●構造:鉄筋コンクリート造一部鉄骨造

### ●仕上:SUSプレート、大理石貼、銅板貼他

### 2.ユニットデザイン

#### 『ユニット』

歩行者大空間のダイナミックさやヒューマンなスケールは、28m×28mの13の『ユニット』の連続と交互に差異のあるデザインや角度のずれによって表現している。また、カツラが列植されるツリーバーとユニットの回転を視覚化するパターンをつくることで、空間の流れの変化を演出している。

### 3.水景デザイン

#### 『水音』

水面そのものより『水音』による演出をデザインコンセプトとし、小さな噴水・糸滝落水などを設けた。様々な水音により空間の水平的、垂直的広がりをもたらせるため、流れと落水による演出を行っている。

#### ●水景1(フォリー1) ●品川海岸・水の満ち引き

#### ●水景2(フォリー3) ●光と水・水盤と落水

#### ●水景3 ●憩いの場・水のテーブル

#### ●水景4 ●水音・滝

### 4.照明デザイン

#### 『にぎわいの光』 ⇄ 『やすらぎの光』

歩行者大空間の『みちもり広場』は業務・商業・住宅の共有空間である。業務・商業区画にとっては『にぎわいの光』を、住宅区画にとっては心休まる光『やすらぎの光』をコンセプトに、北側から南側へと変化のある照明計画を行っている。

#### ●『にぎわいの光』

・敷地北側の空間は、A-1地区・B-1地区ともに歩行者大空間に面して商業施設が配置されることから、動きのある賑わいを演出する光をつくっている。

#### ●『やすらぎの光』

・敷地南側のB-1地区には住宅区画があることにより、心休まる光の空間を確保し、陽があたる日中とは違う光をつくっている。

#### ●水平面照度

・通行上の安全な床面の明るさを確保している。

#### ●鉛直面照度

・人の顔などを認識でき安全率を考慮した明るさとしている。

### 5.植栽デザイン

#### 『もり』

歩行者大空間では、『もり』を空間体験として実現するための手法として、単種純林による密度の高い配植計画を行っている。高さ約10mある高木は、カツラ・シラカシ・ソメイヨシノの3種をメインとして、歩行者大空間の中に規則正しく配置している。

#### ●高木

・カツラ／四季の変化をあらわす高木として、ユニット内に5本で1組となるツリーバーを3列配置

・シラカシ／防風植栽として、各ユニット間に配置される防風植栽台座の中に、ある一定密度で配置

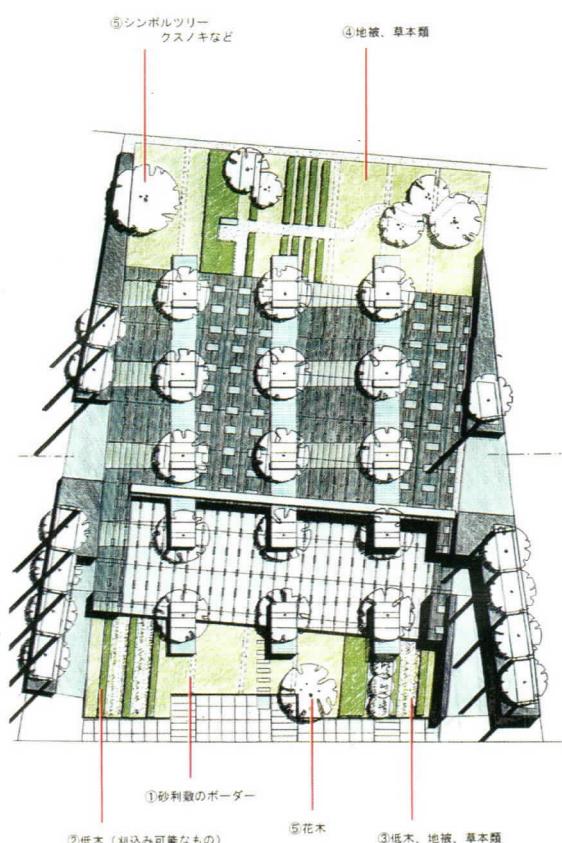
・ソメイヨシノ／明るさをもたらせる植栽として、ブリッジのあるユニット及びフォリー7のツリーバーに配置

#### ●中木

・季節を彩るシンボルツリーとして、ユニット内ツリーバーと対照的に、両建物側にランダムに配置している。

#### ●低木

・ユニットごとに特徴のある低木のストライプをつくり、ユニット単位では、植栽部分が庭園的になるよう配置している。





## 6. ブリッジデザイン

### 『フレーム』

A-1地区・B-1地区を結ぶ南北のブリッジは、統一感と連続性を持つ7つのフォリーと呼応し、共通のデザインイメージである『フレーム』により構成される。南北のブリッジは対をなし、構造体である120φのロッド材は南北で対称の構成をなす。

#### ●構造:鉄骨造(一部ステンレス鋼材使用)

・ブリッジは4本の鉄骨で構成される組柱、2組で自立し、両地区スカイウェイからはExp.Jにより切り離されている。また、2本のブリッジはアーチ構造、テンション構造で対をなすよう計画している。

・床および屋根の構造体に加え、120φのロッド材、及びそのパイプに接続されるステンレスプレート(SUS-PL 22×200ダブル)も構造体として活用し、限りなく「うすく」・「軽く」見せることが可能としている。

・設置場所等からメンテナンスフリーの材料、ディテールで構成している。

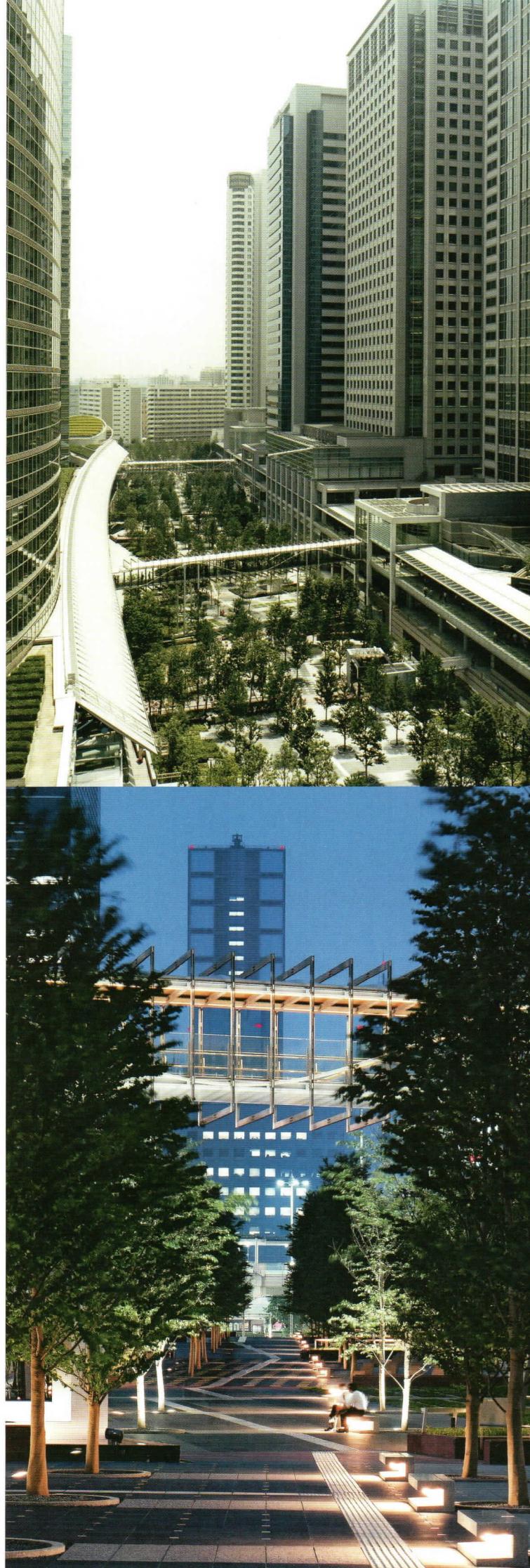
#### ●床

・床は両地区スカイウェイの仕様から切り離し、歩行者大空間のコンセプト『みちもり』に対応した自然素材「木」を使用している。

#### ●屋根

・ブリッジの屋根は、「やわらかさ」及び「透過性」を確保する為に、軒天を含め膜構造としている。





1) 作品名:品川セントラルガーデン SHINAGAWA CENTRAL GARDEN

2) 在地:東京都港区港南二丁目10番の一部及び品川区北品川一丁目121番の一部他  
2-10 Kounan, Minato-ku, Tokyo and 1-121 Kitashinagawa, Shinagawa-ku, Tokyo

3) 主な設計者:成田 治 NARITA Osamu \*1

高橋 宏 TAKAHASHI Hiroshi \*1

安達 和男 ADACHI Kazuo \*2

荒金 透 ARAGANE Toru \*2

三谷 徹 MITANI Toru \*3

戸田 知佐 TODA Chisa \*3

4) 同所属 \*1 松田平田設計

\*2 日本設計

\*3 オンサイト計画設計事務所

5) 建築概要:主な用途:都市公園 Main use:urban-park

・敷地面積:約18,180m<sup>2</sup>(施工床面積) Site area: 18,180m<sup>2</sup>

・建築面積: 518m<sup>2</sup>Building area: 518m<sup>2</sup>

・延床面積: 0m<sup>2</sup>Total floor area: 0m<sup>2</sup>



### 成田 治

生年月日／昭和36年7月23日生秋田県秋田市立高校出身

現住所／東京都国分寺市内藤2-19-11

TEL / 042-571-6250

E-mail / xd97uw@bma.biglobe.ne.jp

学歴／1986年 3月 工学院大学大学院建築学専攻修士課程終了

### 職歴

1986年 4月 ④松田平田坂本設計事務所(現④松田平田設計)へ入社

現在に至る

TEL 03-3403-6161

E-mail / osamu\_narita@mhs.co.jp

### 主な業務経歴

日本ユニシス東京ベイ開発センター新築工事

第一生命情報開発センター新築工事

福昌寺本堂檀信徒会館

秋田公立美術工芸短期大学(仮称)新築工事

日新火海上保険株式会社本社ビル新築工事

品川IV-Tower

品川セントラルガーデン

三菱商事下丸子プロジェクト等

### 賞歴

秋田公立美術工芸短期大学

1997年 建築学会東北支部第17回東北建築賞(作品賞) グッドデザイン賞

1998年 BCS賞

1999年 日本建築学会作品選集選定

2002年 第11回BELCA賞

日新火海上保険株式会社本社ビル

2003年 JIA環境建築賞 優秀賞

品川セントラルガーデン

2004年 第29回日本建築士事務所協会 建築作品表彰 奨励賞

グッドデザイン賞

日本建築学会作品選集選定



## 北川 啓一（株式会社日建設計）

Keiichi Kitagawa

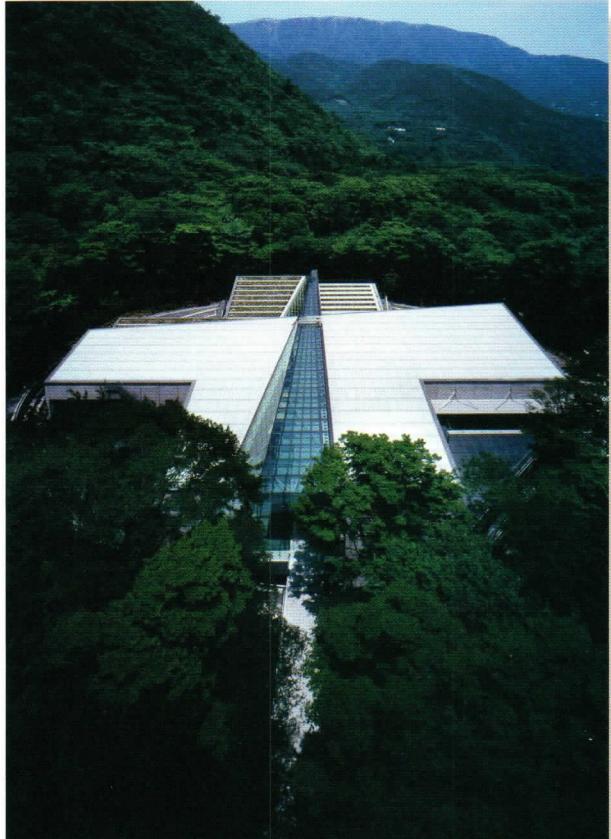
### ■新たな設計作法との出会い

大学時代山下司先生の下、けっして優秀な生徒とは申せませんでしたが、大学院を含め約6年間にわたり建築設計を学ばせていただきました。その後時代の追い風にのりバブル終盤の頃1989年日建設計に入社することとなりました。不動産投資が過熱し大量の設計業務を取り扱う当時としては猫の手も借りたいほどの状況であり、入社研修もそこに十分な設計作法の教育を受ける間もなく、バブル入社社員はOJTによる設計活動を始動することになりました。

私が最初に担当させていただいたのは、外資系企業による3万m<sup>2</sup>の医薬研究所でした。今では外資系の進出は珍しくはありませんが。その頃の医薬業界は世界的再編時期にあり、アジア圏を含めた企業統廃合が著しく横行する時代でした。そういった背景の中、アジアマーケットにおける研究開発拠点として日本は大きな位置付けがなされ、世界的な医薬品トップブランドである米メルク社が51%の株を保有する萬有製薬「つくば研究所」の設計が進められることになりました。当時の設計の状況といいますと、メルク

社の技術者や各種専門家が毎週代わる代わる来日し、日本の法体系と照合しながら設計内容や水準を定めながら設計がすすめられました。毎日続く打合せの後、クライアント達はアフターファイブに銀座や六本木で騒いでいる頃、私達現地スタッフは討議資料の作成のために翌朝まで徹夜する日々が約1年近くつづいたことを思い出します。この研究施設はハザードレベルP4クラスを保有するバイオラボとしては、規模・性能とも国内最大クラスであり、通常1年を要する設計期間を約6ヶ月でまとめてあげるという荒業で臨むことになりました。今にして思い返すと強行軍ではありましたが、アングロサクソンの思考方法や設計プロセス管理の効用から驚くべき設計期間の短縮が実現できたのだと今にして思い返されます。これが私のマネジメントとの最初の出会いでした。

以後、この体験は私の設計活動において大いに反芻され、日本の建築生産に最も必要な技術であると確信することになりました。



ポーラ美術館



萬有製薬つくば研究所

言葉にCM(コンストラクションマネジメント)PM(プロジェクトマネジメント)の領域拡大が図られる中、私はこの時流にのってCM

部門に参加することとなりました。CM業務の実績としてドイツ大使館はその中で印象的でした。当該プロジェクトでは工事の分離発注や昨

今社会問題となっている解体工事の調査計画など通常設計行為では経験できない業務を経験することができました。当時弊社にクライアントから求められたのは、①工事費のオープンブック、②公正な入札による商取引の実施が大きな命題となっていました。これはドイツ本国よりも駐在ドイツ大使館側の強い要望でもありました。その背景には、追加増減費用の請求や精算が過去の実施例において曖昧であったため、明確な処理遂行を

実施したいという事情がありました。お国柄、実直で勤勉なドイツの国民性は私達日本人に通じる部分が多いのですが。事業関係者に対し建築生産プロセスを論理的かつ明確に伝達する中で、モノ決めに関する厳格な理由や費用対効果を詳細に説明しつづけるエネルギーは並々ならない点があったことを記憶しています。

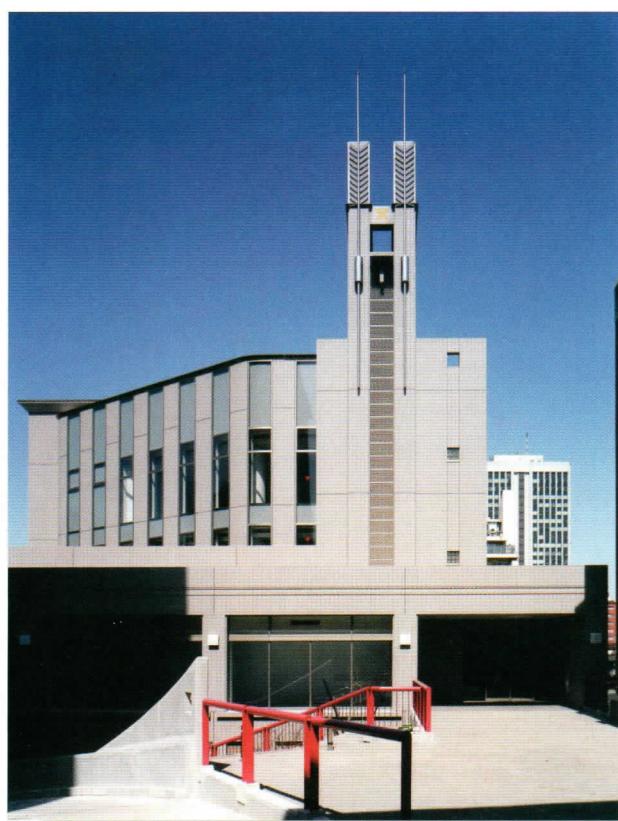
一昨年の1月にこのCM部門はNCM(日建コンストラクションマネジメント)としてグループ子会社となり、所

員数も50名近い世帯に拡大されました。私はこの流れとは別にPM(プロジェクトマネジメント)チームを経て業務開発室に所属し施工分野からより川上となるデベロッパーや投資家に対する不動産コンサルや建築コンサルの業務に従事しています。

業からの業務依頼においても、設備投資抑制に伴うコストダウンとこれに反する高機能・高性能施設の施設要求に対し、これら複合的にソリューションを図る職能としてマネジメントの重要性が社内外ともに強く認識されたように思います。

不動産市況においては、下降傾向にあった不動産投資も国が誘導する不動産流動化促進策によりJリートを始めとする新たなビジネス拡大が始まり、ワンオーナーによる建築設計行為から不特定多数の投資家により進められる特異な設計活動へと変化してまいりました。弊社が携わる代表事例としては「ミッドタウンプロジェクト」が上げられます。これは25haを超える大規模開発でありながらも、会計上のオフバランスを目的としたspc(特定目的会社)が事業主体となる、従来経験したことのない組織が組成されこの巨大プロジェクトが進められています。私が昨年まで所属したプロジェクトマネジメント室は当該プロジェクトの土地取得から都市計画手続き、複数の国内外建築家の間の設計調整など従来の設計領域からいえば周辺業務を包括的にマネジメントする業務をすすめています。

その他の事例として、私が



慶應大学三田北新館

### ■バブル崩壊による 建築業界の質的变化

バブル終演時期に入社し約4年が経たころ、加速する不動産投資もいよいよその熱が冷めて建築業界全般に設備投資も抑えられる傾向が顕著にみられるようになりました。つまり日本あげての祝宴のつけを払う厳しい時代に突入したわけです。1998年頃ともなると不動産投資による不良債権量は膨大なものであると、金融再生が声高に呼ばれるようになりました。金融の健全化対策に伴い不良債権処理が徐々に進められる中、建築生産に与える影響もじわじわと業界全体に侵食していくように感じます。

その中で顕著な事例としては金融系を筆頭とする外資系企業の日本進出によってFMやCMなど新たな業務領域のオファーが相次いで求められるようになります。また一方では、邦人企



担当させていただいている「豊洲2・3丁目地区再開発事業(51ha)」では、現在8件の超高層を含む大規模事業の内、6件がこの不動産流動化事業としてプロジェクトが進められています。ここでは都市開発事業検討コンサル、再開発等促進区による都市計画策定業務、土木事業を含む各種複合事業間調整業務及び単体事業コンサル、デザインガイドライン策定業務、将来計画の企画提案業務など民間地権者・事業者に対して建築設計以外の複合的なコンサルを十数年来進めており、その中で私は2001年都市計画決定以降の建築計画を主体とした事業者間調整など主務として約4年近くこの地でコンサルティングに携わることとなりました。

これらの経験を踏まえ私なりにバブルによる変化とは何であるか整理してみますと。

- ・不良化した不動産の流動化の促進
- ・低金利借り入れによる不動産投資機会の増大
- ・外資介入や邦人企業の設備投資抑止とともに建設事業の費用対効果の追及
- ・バブル崩壊と聞くと建築生産機会の減少を直感的な印象を受けますが、結果として局所的かつ極大な規模で再開発がすすめられ不

動産バブルが実現することとなりました。汐留、品川、六本木ヒルズなどはその好例でしょう。しかし供給過剰を揶揄してか、オフィスの2003年問題、住宅の2005年問題が懸念されました。建築業界全般を揺るがす大きな社会問題に発展していないのが現状です。

少子化問題や団塊の世代の大量リタイアなどオフィス・住宅の需要減少が叫ばれる中、建築生産に関わる我々に対してこれら社会問題が何れの変化をもたらすものか注意したいところであります。

### ■流動化事業による建築生産の変化

私はデベロッパーに対する企画検討業務、都市計画手続きなど表舞台に立つコンサル以外に、外資系ファンドに対して物件売買を前提とした不動産コンサルを実施しています。前頁で記述いたしましたように1998年頃を境に国策として銀行が抱える不良債権処理の推進がすすめられる中、長期信用銀行の買収で有名となったリップルウッドを筆頭に外資系ファンドの介入によって、不動産の流動化は大いに促進されることとなります。Jリートなど不動産の流動化において彼らの働きによ

よって拡大路線を歩みつづける訳です。

従来、外資系ファンドは不良債権による不動産売買において20~40%という驚くべき高収益を得ておりましたが、昨今、デベロッパーをはじめとする邦人企業の参入によりこの競争がより激化し、不動産調達価格の高騰により(余談ですが昨年からの都内土地高騰現象はこの影響によるものだともいわれています)、収益性が著しく鈍化しているとも聞きます。外資系ファンドはこれら邦人コンペティターとの競合を避け独自に土地取得や開発途中の物件を購入するなど、従来考えられなかったビジネスシーンへ侵食しつつあります。具体的には都市再開発を含む開発型ファンドの組成が昨年より徐々にではありますが散見されるようになりました。従来彼らは物件を購入し転売するプレイヤーでしたが、このところデベロッパーに近い事業に手を伸ばしはじめています。我々にとって彼らは新たなビジネスパートナーであり今後の動向が気になるところです。個人的なことですが、現在再開発型案件が2件、開発途中の超高層ビル購入支援など現在携わっておりますが、最終的に彼らがこれら事業機会を手にすると、更に新たなビジネス



ミッドタウンプロジェクト

シーンが展開することを現在、期待しているところで

### ■建築生産の将来像

「衣食住」なしには生きていません。しかしヨーロッパの都心居住のようにストック型社会に日本は将来徐々に変遷していくものと思われます。その理由は費用対効果を期待する上で少ない投資で安定した利益確保ができるという点においてリニューアルによる事業整備は有利だからです。当然環境影響負荷の軽減からもこの方向は今後進むものと思われます。

湾岸部での大型超高層住宅開発は恐らくこの数年でブームを終え、従来開発された社会ストックの健全化や改善が進んでいくものと思われます。新築案件がなくなると申しませんが、恐らく新築数よりも改修の生産機会が飛躍的に増大していくものと思われます。こういった背景のもと業界はどう変化していくか。予想は

## 今変築化生と産の

難しいですが、単に設計行為に留まる職能領域に限定された活動の場は少なくなると考えられます。前述の建築生産におけるクライアントの変化や不動産の金融商品化など我々を取り巻く生産背景が大きく異なることから生じる影響は少なからず大きいものと考えられます。

では具体的にそれは何であるかですが。例えば今後は老朽化した昭和30~40年代に建設されたマンションの大規模建替が多くなるものと考えられます。しかし一方で入居者の高齢化によって資金面の問題により具現化しないケースも多くなるに違

いません。これは大きな社会問題になるものと思われます。全てを解消する方策ではありませんが、金融的手法や都市計画的手法を用いながら事業成立性を高める工夫が今後多くなるような気がいたします。このような建築生産現場においては複数の職能領域の専門家が協業する必要がでてまいりますし、我々建築生産に関わる一員であっても他領域への感心や基礎知識など持ち合わせていないといけない時代になるのではと考えています。

将来、求められる建築生産に関わる技能者や経験者像とは①一つの専門領

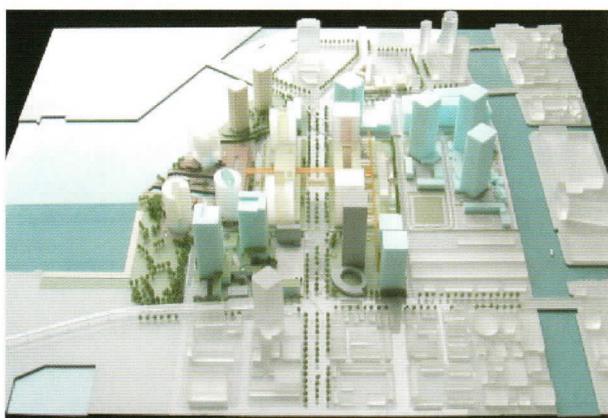
域に特化する者、②他の領域に広く人的ネットワークを形成する者の2極化が図られると思います。これが実現するためには教育環境の整備や我々自身がこの変化に十分対応しない限りには具現化することはないでしょう。しかしながらこのバブル後十数年を経てみて、建築生産の川上においては商業コンサルが不動産投資ファンドを実施し、地方の小規模不動産会社が金融商品に絡ませた事業を東京で拡大している現状をみると、我々の変化の帳口はすぐそこまでやってきているように感じます。



**北川啓一(42)**  
株式会社 日建設計 業務開発室次長  
住所:東京都千代田区飯田橋2-18-3  
電話:03-5226-3030  
PHS:090-8800-1048  
e-mail:kitagawa@nikken.co.jp  
自宅住所:  
神奈川県横浜市青葉区柿の木台13-4-211  
電話:045-973-8096  
携帯:090-2155-6250

**【略歴】**  
1963年兵庫に生まれる  
1987年工学院大学建築学科卒業  
1989年工学院大学修士課程修了(山下研究室)  
1989年日建設計入社

**【設計】**  
●萬有製薬つくば研究所(BCS受賞)  
●日本たばこ基礎研究所  
●慶應義塾大学三田北新館  
●ボーラ箱根美術館  
●郡山駅前広場  
<マネジメント他>  
●ドイツ大使館  
●豊洲2・3丁目地区再開発事業  
●IHI、芝浦工業大学豊洲キャンパス、  
三井不動産商業施設、都市機構住宅整備  
など事業推進コンサルなど  
●某外資系不動産コンサル(日黒雅叙園ほか)  
●東京ガス 豊洲埠頭再開発事業検討支援業務  
●住友不動産高田馬場  
共同住宅整備都市計画手続き  
<資格ほか>  
●一级建築士  
●CM協会会員



豊洲2・3丁目地区再開発事業



PS:ご覧いただきました方で  
ご意見または情報交換など  
ご希望される方がいらっしゃ  
いましたら。お気兼ねなくお  
声がけくださいませ。よろしく  
お願ひいたします。

照明デザイナーの仕事

# 「光の料理人」

LIGHTDESIGN INC. 代表 国際照明デザイナー協会会員

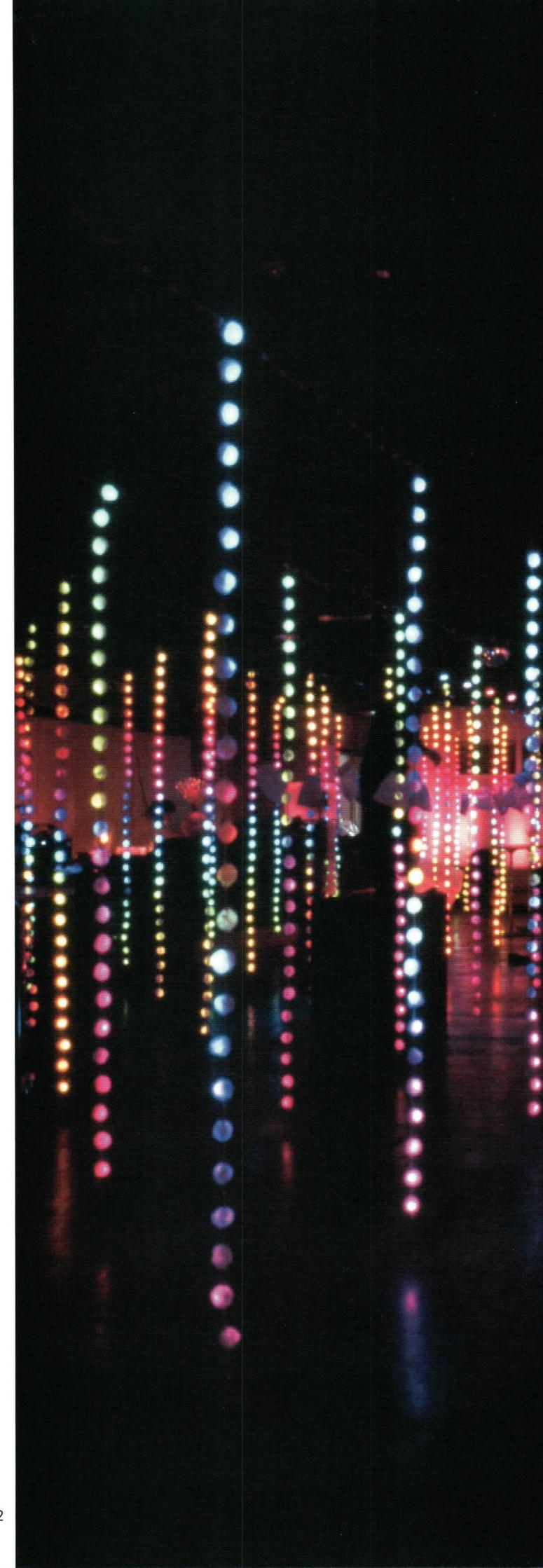
東海林 弘靖 SHOJI HIROYASU, IALD

## 照明デザイナーの職能

「照明デザインといふ仕事を、照明器具の形をデザインすることではありません！」ふむ、いきなりの書き出して恐縮ですが、そうなのです。照明器具のデザイナー、例えばイタリアのフロス社の照明器具をデザインしているのは、フィリップ・スタルクやミケーレ・デルッキ、ジャスパー・モリソンといったプロダクト・デザイナーやインテリア・デザイナー達です。また、デンマークのルイス・ポールセン社のAJランプ(アーティチョークと呼ばれる松ぼっくりのようなペンダント照明)をデザインしたのは、建築家のアルネ・ヤコブセンというように、照明器具は椅子やテーブルと同じ光を発する「家具」としてデザインされています。では、照明デザインとは何をする仕事なのでしょうか？私たちにとって照明器具は、光を発する為の道具であると捉えています。そして、そこから発せられた光そのものをデザインす

るのが仕事ということになります。たとえば、美術館という空間を想像してください。ここには、たくさんの絵画や彫刻が納められています。この美術作品を展示しても光がなければ何も見えませんね。そこで光を与えることになるのですが、美術品のなかには光に弱いものが少なくありません。そこで、どのような質の光、どの角度から、あるいは何ルックスで照らせば良いのか？といふことが問題になってきます。それから、快適に美術作品を鑑賞するには…などなど、これらの照明に対する期待に応えるのが私たちの仕事です。照明デザインは、今から50年ほど前にアメリカで発生したと言われています。ルイス・カーンの設計によるキンベル美術館は、リチャード・ケリーといふ照明デザイナーがデザインしました。「空間を光でデザインする」とか「光の空間演出」というのが私たち照明デザイナーの仕事なのです。

さて、「空間の照明設計をす





まつもと市民芸術館 外観



まつもと市民芸術館 インテリア

る仕事」といっても具体的にはいったい何をしているのでしょうか？照度計算はするのですか？はい、きちんと計算しますよ。では、照明器具はデザインしないのですか？うーん、時には照明器具もデザインしますよ。でもそれはカッコイイ照明器具ではなくて空間のなかにとけ込んで存在感のないような見えない照明器具です。何だか、わかったような解らないような気分になってしまいかねませんか？

実際の仕事をご覧いただきたいのですが、そもそもいかないので、最近は「美味しい光の料理を作るような仕事です」などと説明しています。空間の居心地の良さは、真っ暗じやこまるけれど、明るければ良いというわけではないでしょう。お腹がすいた時には何

でもいいから沢山食べたいと思いますが、毎日の食料がしっかりと確保されていれば、美味しいものを食べてみたいと願いますよね。料理人は、そういう人間の基本的な要求を満たす大切な仕事になっています。

#### 美しく感動的な光の景色から…

照明デザインを始めて10年間くらいは、美しく感動的な光をデザインすることばかり考えていました。もちろん今でも美しい景色であったにこしたことはありませんが、単に美しいだけでは物足りなく感じてしまいます。対象となるのは空間ですから、人がその場所を訪れた時に感じるもの、また再訪問したくなる魅力や居心地の良さを生み出すこと、建築空間とし

# 「光の料理人」

てのさらなる価値を生み出すことがより大切だと考えるようになってきました。最近の仕事としては、伊東豊雄さん設計の「まつもと市民芸術館」や「トップズ表参道」などがあります。これらは、設計の初期段階から参加を求められ、未だ建築デザインがフィックスされないうちに光のデザインを進めています。模型をのぞき

進む場合もありますが、全く新しい概念の建築が登場した「せんだいメディアテーク」の場合にはかなり産みの苦しみを味わったと思い返します。照明のアイディアは沢山あるのに、どれもしっくりと来ない。そんな時には照明デザインといふ立場を離れてユーザーの目で建築を眺めて見たり別の場所で考えたりすると視



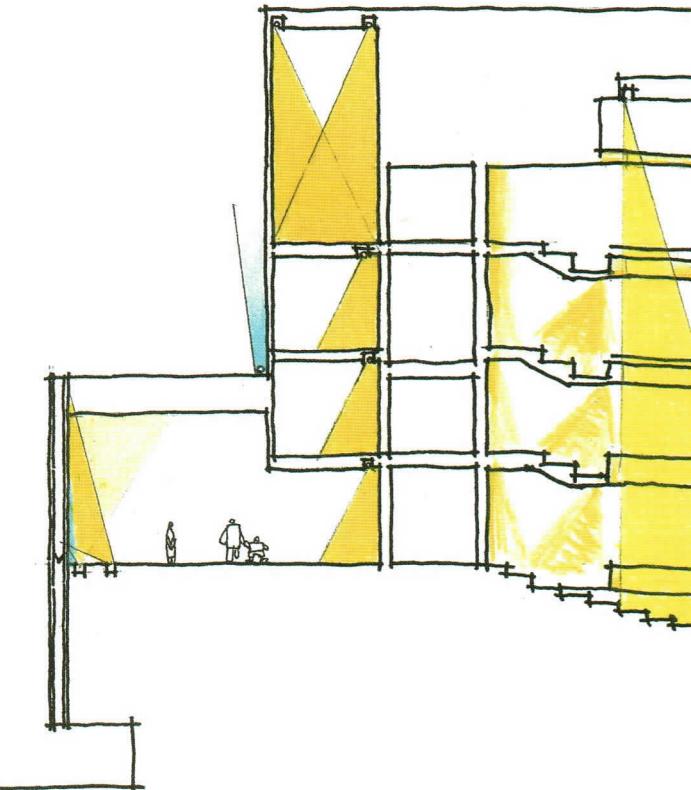
せんだいメディアテーク

ながら「この壁の素材と仕上げはどうなりますか?ここに光があるとこの空間を訪れた人は安心しますよね…」といったコミュニケーションから「じゃ基本照明はどうやってりますか?」「この壁際のスリットからとればいいと思います」「そのほうが天井には何もなくいいですね…」などの会話を重ねることで光も建築と一緒に組上げられていくという仕事の進め方です。数多くのプロジェクトを通してコラボレーションした成果もあってスムーズに仕事が

界が開けてくることが多いようです。そして、いつしか一緒に建築を設計している気持ちになるのです。私は、照明デザインといふ仕事は、建築設計そのものではないかと考えています。

## 光のデザインは、 時間のデザイン

ところで、光による感動は秒単位の出来事にあります。たとえば雲の隙間からさーっと陽が差してきたというシーンや朝がしだいに白んでいく様などです。また同じ空間で



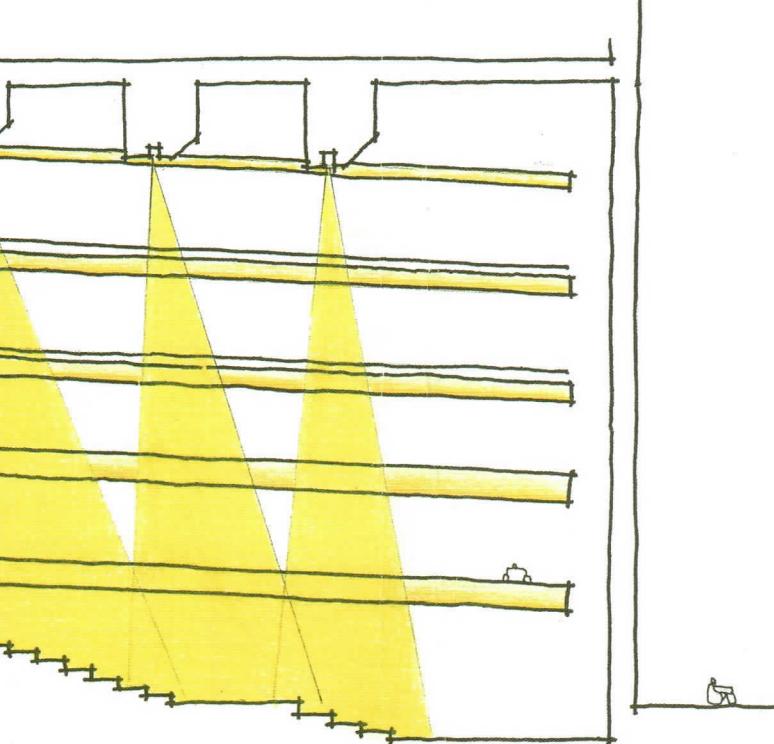
照明デザインのスケッチ

この光を入れ替えること、人間の心理を考えてどのような光をどのように変化させるのか…といった関心が今日の照明デザインの大きなテーマになっています。

最近、私はこのテーマを追求するために実験的な光のパフォーマンスに挑戦しています。その一つはアメリカのカラーキネティクス社の発光ダイオードを用いた照明装置を空間に詰め込んだ「食うカラキネ展」(2004年2月東京六本木)や薄い紙状の発光体であるELシートをまるで渡り鳥が飛んでいるかのように設置した「フライングELイン太郎吉蔵」(2005年2月北海道滝川)などがあります。い



トップ表参道



ずれも既存の空間のなかに光のインスタレーションを施してそれらの光を音楽とともに変化させるという技法(LJ:ライティング・ジョッキー)を取り入れています。一見建築照明とどのようにつながるのか?と疑問をもたれるかもしれません、このような実験を

とおして光が空間にどのように作用し人間がどう感じるのかをとらえようとしているのです。

### 20年前の工学院大学

さて、私は1984年に工学院大学の大学院を修了したのですが、照明デザインを始

フライングELイン太郎吉蔵



めた原点がその頃にあります。当時は、建築学科の伊藤ていじ研究室に所属していて群馬県の温泉建築調査や山形県の蔵座敷調査、岡山県の倉敷調査などいずれも先輩から受け継いだ研究テーマに参加していました。指導教授である伊藤ていじ先生とともに各地へ出向いてフィールドサーベイをするなかで先生から様々なお話を伺っていました。そのなかで繰り返しおしゃっていたのは、学校を卒立ってからどのようにプロフェッショナルとして世の中を渡っていくのかという指南であつたように思います。具体的な人物の事例をあげて、この有名な建築家は若い時にはこうだったとか喧嘩をする(論争)時には絶対に勝つ方法論があつてそれは、これこれがとか、「一に清掃、二に挨拶、三四がなくて五に学問」(これは研究室に貼ってあった)といった教示などでした。そういうお話を聞くにつれ「そうかそうすればいいんだ」という吹っ切れた思いが湧いてきました。そんな時に大学のすぐ側に「新宿NSビル」が竣工します。そして間もなく建築雑誌『SD』に「建築照明」という特集がくまれたのでした。それは、日本で初めてテクニカル・ライティングといふ技法を使って建築に必要な光をデザインしたというものでした。この建築照明といふ言葉が気になっていろいろと調べて行くうちについに照明の道にはまつて

いったということになります。新しいジャンル、これから仕事を賭けてみよう。伊藤ていじ教授の教えを実践するには渡りに舟とはこのことかと直感したのでした。「何事でも新しいことをやりたいのなら10年間は辛抱しなければならん」という言葉に送り出され、気がつけば今年で22年が過ぎてしまいました。

この新しいデザインのジャンルに、建築学科を卒業した若く意欲的な人々がどんどん入ってくれることを多々期待しています。

1982年3月工学院大学建築学科卒業  
1984年3月工学院大学大学院建築学専攻修士課程修了  
福島県立福島高校卒業

(略歴)  
1958年福島県生まれ。TLヤマギワ研究所、LPAを経て2000年LIGHTDESIGN INC.を設立。代表取締役。  
建築照明を専門とし、住宅照明から商業施設、オフィス、病院、ランドスケープなど幅広い空間の光をデザインしている。  
(有)ライトデザイン  
東京都中央区銀座1-9-8-613  
電話03-5250-8812 Fax 03-5250-8802  
ホームページ www.lightdesign.jp  
E-mail shoji@lightdesign.jp



光の料理人

# 樋口清先生を 囲んで

特別企画

NICHE  
鼎談

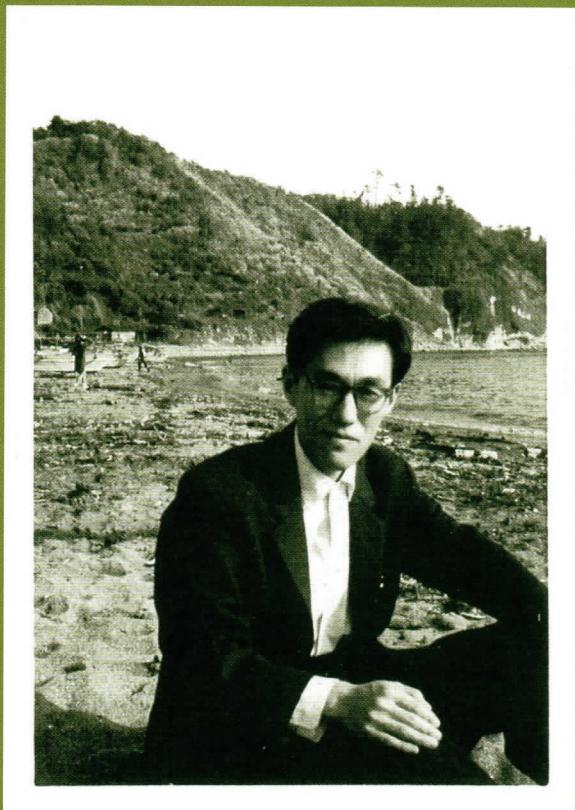


樋口清先生は、1956～61「昭和31～36」年に、工学院大学教授として在職されました。ル・コルビュジエの「伽藍が白かつたとき」、「ユルバニズム」、「建築へ」をはじめ、フランク・ロイド・ライト「自伝」など、多数翻訳や執筆をされています。近代建築史を専門として、建築界に対しては教育者、評論家、翻訳家として貢献されました。この度、同窓生の司会により、NICHE編集部で取材させて戴きました。

平成17年8月4日午後2時～4時  
工学院大学新宿キャampus28階  
校友会談話室  
司会／南迫哲也、神崎健、北澤興  
記録／NICHE編集部



後藤石井  
武藤さち  
小川さん  
城越さん  
山下さん  
佐々木  
正不さん  
下元さん  
前田さん  
大庭さん  
樋口さん  
後藤さん  
小川さん  
元野さん  
二見さん  
前田さん  
石井さん  
大庭さん  
樋口さん  
花田さん



遠藤新さんの事務所で  
教会堂の実施図面

戦後、鹿島建設の設計部に入った時、天野太郎さんがいて、ウォーリンガーの「抽象と感情移入」のことなどで話が弾み、二人とも山歩きや音楽が好きでした。当時の鹿島建設は土木が主体の会社で建築は目立ちませんでした。

遠藤新さんの所で、教会の設計の図面書きを求めていることを知り、事務所ビルや工場の設計より面白かろうと、天野さんを誘って出かけ日白ヶ丘教会の実施図面を手伝いました。

図面を書いていると、遠藤新さんが待ち構えていて謔を口づさみながらやってくる。「うまいこと考えた」と、図面を変更し続けました。しかし、会社では「樋口君は、何故図面を変更するのだ。慈善事業で図面を書いているのではないよ」としかられました。天野さんは、東久留米の自由学園の男子部の設計を残ってしまいました。

遠藤さんは、学校や住宅の修復がある時は、私達を連れて行き、どのように考え、どのように作ったか説明してくれ、頗るもない実物教育でした。話し出すと話の切りがない程話し好きでしたが、下元先生の話によると、遠藤さんは東北生まれでものも言えない位とてもシャイな人でした。英語だと伸び々話せたのかシャイなところがなくなり、アメリカから帰ってきたら積極的に話すようになったということです。

天野さんは、遠藤さんは「先生」と呼んでいました。私は形をまねることができなかったのですが、天野さんは形から入ることができました。天野さんの自邸で畳の部屋と板床とに段差を付けたのは遠藤さんの羽仁邸（自由学園の創立者）に習って椅子座タタミ座の目の高さを揃えたのです。

遠藤新さんは、ライトについて殆ど話しませんでしたが、私達はライトの建築の背景を知ろうと、フレーベルの「自伝」や、ラスキーの「

アメリカ、デモクラシー」などを読んで、話し合いました。遠藤さんが亡くなつて（昭和25年）しばらくして、天野さんは、ライトに「あなたの建築は自然に基づいています」と手紙に書いたといいました。しかし、それがライトの所に勉強に行きたいと言う願いの手紙であったことに、私は気がつきませんでした。

私は馬鹿で、ライトに教えてもらおうなどと夢にも思っていませんでした。天野さんのライトへの想いと理解がそれ程深かったと言えましょう。

#### 新生時代の工学院大学へ

天野さんは、建築の設計や研究に専念するには学校の方が良いと思ったのでしょうか。母校の早稲田に相談に行って、工学院大学に来ることになりました。もうひとり早稲田から来る予定の人が武蔵工大に行ったことを聞いて、「代わりに私はどうか」と冗談に言ったことが運良く通つて私も工学院に来ることができました。1955年頃、工学院大学が新制大学に発足した時代で、下元、掘越先生や、建築学科幹事に正木先生、構造の十代田先生がおりました。

二人ともできたばかりの自由な工学院大学に来て張り切っていました。天野さんは、建築熱心、教育熱心の魅力ある人で、建築理論を具体的に面白く説明して学生に人気がありました。その辺は、師の遠藤新やライトと氣質的に共通するかも知れません。

当時、建築界では抽象的な空間論が盛んでしたが、天野さんはウォーリンガーの理論を身につけて具体的であり、当時流行のアメリカ式の国際様式の全面ガラス張りには人間疎外であると批判的でした。

台所から食堂迄の人間の動き

を、池辺陽さんが動線の短縮によって論じたのに対して、天野さんが調理台と食堂を直角に配置して、人間の動きと空間の変化の美しさをスキーのクリスチャニアに例えて論じたことなど、天野さんの具体的な発想の一例です。後に天野さんは優れた空間論（建築の基礎概念—内部空間の哲学）を「建築文化」に書いています。

天野先生の提案で317号教室を学生の溜まり場として開放してもらい、建築の雑誌などを置きましたが、学生会議などで他大学の学生も訪れ、外に開かれた学生の交流の場になりました。

#### 武藤章先生、南迫哲也先生、 北澤興一さん

武藤章さんは東大の学生のころ、天野さんの甥の家庭教師をしていました。卒論にライトを選んだところ、「ライトは古い」と言われ、同級生にからかわれたそうです。卒業とともに天野さんの助手として工学院に来ましたが、文学青年でもあり、天野さんのいい論争相手、遊び相手（スキーや山歩き）でした。武藤さんはライトの研究のためアメリカに行くものと思われていましたが、アートのところへ行くことになりました。フィンランドのアートの所では、「いいベンシルワーカー（線が美しい）」といわれたそうです。武藤さんはアートの建築をよく理解した設計をし、八王子の図書館を建てています。「アート」の本を書きました。

南迫哲也さんは、工学院大学出身の先生が必要と、天野さんと私が意見を出して、学校に残ってもらいました。私の部屋にいたこともあります。私は指導者や教育者としては無能で、むしろいろいろ助けてもらいましたよ。先ずライトの「テスタメント」の講読ゼミでは、最後は学外者三人となりま



### 司会者紹介

南迫哲也 第2回生 昭和34年卒(後列右)  
工学院大学名誉教授  
神崎健 第2回生 昭和34年卒(後列左)  
田中建築設計事務所  
北澤興一 第4回生 昭和36年卒(後列中央)  
レーモンド事務所から独立、  
(株)北澤建築設計事務所  
樋口好枝(前列右)

たが、南迫さんは絶えず勇気づけてくれ、また建築の学生を中心 に男声合唱団を始めた時も、美しいバスとして支えてくれました。

何十年もして、北欧建築デザイン協会が中心人物の武藤章さんを失って涙をかけた時も、南迫さんに助けてもらい今になっています。

北澤さんは、学生のころ既に住宅の設計施工をできる程の人で、ペーチカの造り方を教えてもらい、蔵王の山小屋でうまくできました。

北澤さんたち何人かの学生と天野さん、武藤さんと私は、夏休みに北海道の根釧原野に開拓民の建物の調査を行ったことがあります。私達の関係は、師弟とか先生とかといったものではなく、むしろ同学の友といったものでした。

### フランス語との出会い

私がフランス語を習ったのは、旧制高校の時、第二外国語としてドイツ語がありました。最初の講義の倫理の時間に、パスカルは言った。「人間は葦(あし)のように弱いが、神のことも考えることができる」という言葉を聞き、早速本屋でパスカルの「瞑想録」を買って読みました。幾何学的な精神と繊細な精神というように、物

事を対称的に考える考え方にはカルチャーショックでした。そして、二・二・六事件(昭和11)の時、ドイツ語と哲学の勝田先生が「デカルトに帰れ(理性的、批判的である)」と学生新聞に書かれたのを読み、また上田敏訳のフランスの象徴詩が好きで、フランス語の原文で読みたいと思いました。

東京工大の建築に在学中、アテネ・フランスの夜学に通って高等科を卒業、東大の仏文に入った時、日米戦争が始まってフランス留学の望みを絶されました。その頃日本は、ドイツと日独防共協定を結んでいて、フランスに興味を持っているだけで非国民と言われた時代です。岸田国男の「落ち葉日記」にフランス語の通訳の話を読んで、海軍省の嘱託となつて1943~45年、仏領印度支那(ベトナム)に行きました。そんなことから、戦後、ル・コルビュジエの本を訳す機会を得ました。

### 北欧の建築が好き

北欧に关心を持ったのは、まず、中学地理の時間に、氷河に削られて湖の多いフィンランド、フィヨルド(峡湾)の深いノルウェイの地形を聞いてそれらの風景に憧れ、大学に入って、大判の外国雑誌で、アールトのバイミオの療養所のプランと林の中の姿の美

しさに感心し、シベリウスのヴァイオリン協奏曲の情感の深さに感動しました。

そして、戦後は、鹿島建設で吉田鉄郎さんに会って、ストックホルムの市庁舎やアスブルンド、北欧の人の青空や光への憧れについて話を聞いたからです。50才を過ぎてフィンランド語と、スウェーデン語を習って雑誌の記事を訳しましたが、北欧に行こうとしなかったのは、本当にバカでした。

北欧の建築が好きですね。アールトの教会堂の方が、ライトよりも好きです。アスブルンドの住宅も、ライトのように実験していないのが好きです。しかし、住むとすれば自分の設計した家の方がいい、ごく当たり前の設計です。天野さんが「樋口の設計は、スナップが効いていない」。変化するものがいるというんです。変わったことをしたくないのです。自然であることが好きでした。(完)

### 樋口 清(ひぐちきよし)

1918(大正7)年東京で生まれる。  
小学校卒業まで越後で育つ。  
東京工業大学建築学科卒業  
東京大学文学部仏文化科卒  
1943-45(昭和20)年海軍省嘱託として仏領インドシナで仮語通訳  
1947-56(昭和31)年鹿島建設設計部  
1956-61(昭和36)年工学院大学建築学科教授  
1962-79(昭和54)年東京大学教養学部教授  
1979-99(平成11)年東京理科大学建築学科、非常勤講師  
北欧建築デザイン協会元会長  
主な設計作品:山形県蔵王保養所「ぶな小舎」、国民休暇村協会「蒜山山荘」、「網張山荘」、「乗鞍山荘」、慶應義塾中等部「戸隠山荘」  
翻訳ル・コルビュジエ「伽藍が白かったとき」、全上「ユーラニスム」、全上「建築へ」、ルイス・マンフォード「機械の神話」、スチュワート・レーデ「アスブルンドの建築」、ランク・ロイド・ライト「自伝」  
著書:「ライト・アールトへの旅」

### 遠藤 新(えんどうあらた)

1891(明治24)年福島県相馬郡福田村で出生  
1915(大正4)年東京帝国大学工学部建築学科卒業  
1917-22(大正6-11)年旧帝国ホテル建設のため来日したランク・ロイド・ライトに師事、ホテルの仕事に専念する間、ライトのスキッチより芦屋の山邑邸、自白の自由学園「明道館」を完成。  
1922(大正11)年ライトの帰国後、独立して遠藤新建築創作所を設立。  
1944-46(昭和19-21)年満州(今日の中国東北地方)に渡り、満州製鉄などの建築顧問。  
1949(昭和24)年文部省建築審議会委員として文部省モデルスクールの改築案を提出。  
1950(昭和25)年自由ヶ丘教会(東京都豊島区下落合現存)設計  
1951(昭和26)年62才逝去  
主な作品:自由学園、横浜女子商業学校、番町協会、目白が丘協会、帝大キリスト教青年会館、甲子園ホテル、戸倉温泉ホテル、梁瀬自動車ビル、中銀クラブ(満州)、羽似邸、遠藤新作品集(遠藤新生誕百年事業委員会編)

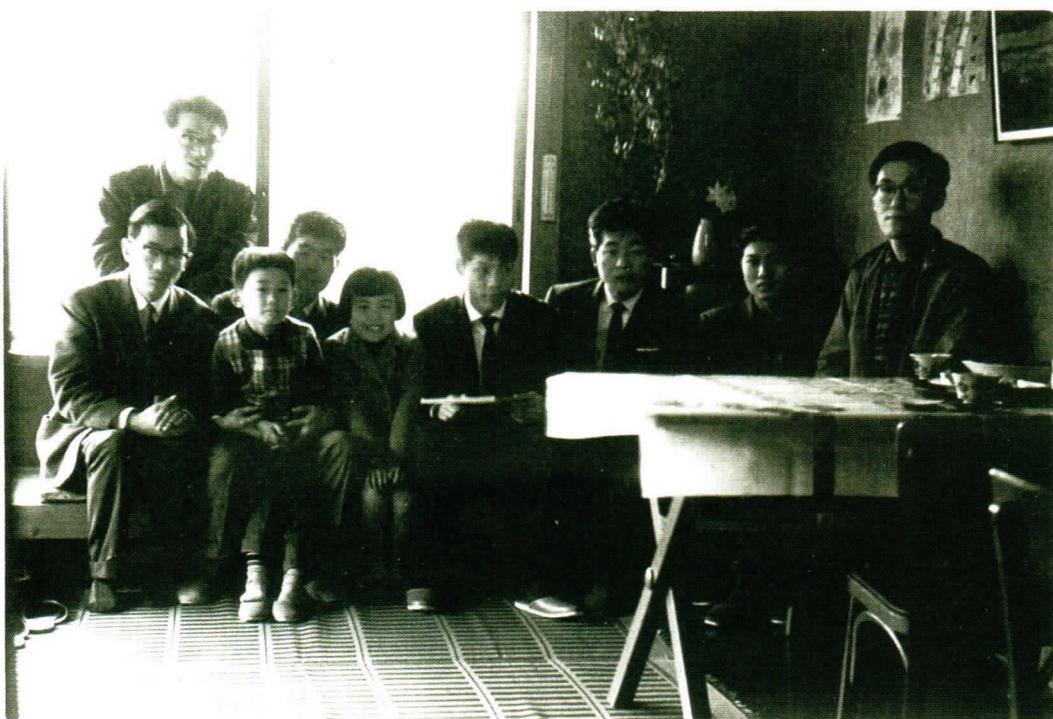
### 天野 太郎(あまのたろう)

1918(大正7)年広島県呉市に生まれる。  
1945(昭和20)年終戦除隊、早稲田大学理工学部建築学科卒業  
1945-56(昭31)年鹿島建設設計部  
1949-51年(昭26)年遠藤新建築創作所  
1952-53年ランク・ロイド・ライトの研究生としてタリアセに遊学  
1953(昭28)年米国視察の後、帰国  
1955-62年(昭37)年工学院大学建築学科助教授  
1959(昭34)年天野太郎研究室を設立。天野・吉原設計事務所に改称  
1961(昭46)年トルコ・アンカラ中近東工科大学に客員教授  
1962-73(昭48)年東京芸術大学美術学部建築科・名譽教授  
1990(平成2)年11月15日 逝去  
代表作:新花屋敷ゴルフクラブハウス、武蔵嵐山カントリークラブ、東京芸術大学絵画科教室棟、同図書館棟、館山国民休暇村宿舎。  
有機的建築の発想-天野太郎の建築(吉原正編)

離島在  
 前列右  
 山下さん  
 元野さん  
 楠木正木  
 皮膚さん  
 (小崎)  
 武藤さん  
 小竹さん



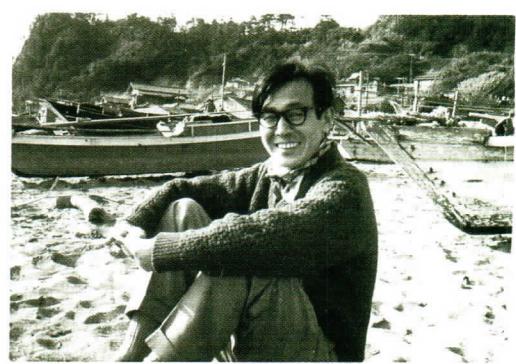
私の家で訪れた  
 老練の学生たち



天野さん



天野さん  
 当時で最も  
 はがけの私  
 です。



# フランク・ロイド・ライト

## 建築の 編成と 構造

南迫哲也

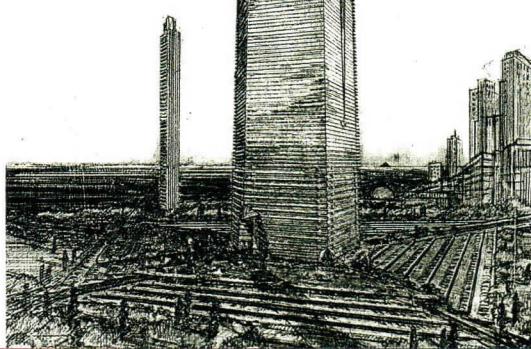
工学院大学名誉教授



昭和35年  
工学院大学建築学科  
卒業アルバムより

世界の建築家と工学院大学③

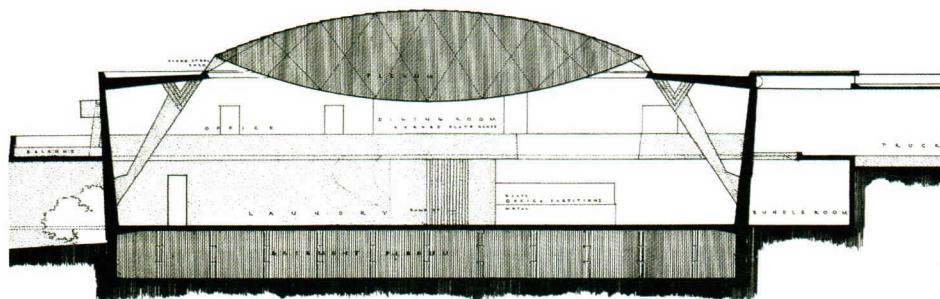
THE FORMATION AND STRUCTURE OF FRANK LLOYD WRIGHT ARCHITECTURE



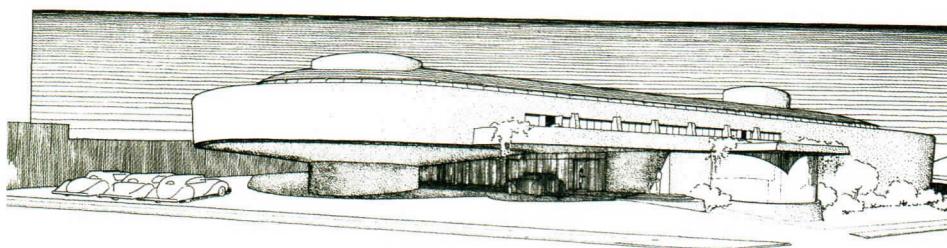
マイル・ハイ・イリノイ塔 透視図

**はじめに** 他の建築家の作品にはあまり見ることの出来ないライトの建築における構造の意味をその編成形態(FORMATION)から読み解くと言う作業はなかなか面白いと思うのは私だけであろうか。少なくとも、ライトの建築の作り方の本質に深くかかわる状況をよく示す事柄でありライト自身も本の中で度々書いてはいるが書ききれていないと思われる内容について観察調査の結果、考察を加えてその幾つかのサワリを記してみましょう。

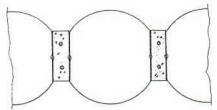
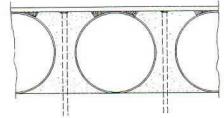
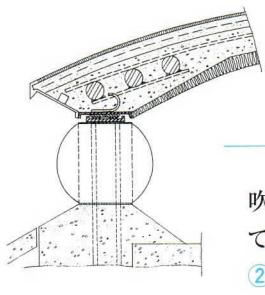
①空気構造(エーデルマン洗濯工場)1948年計画案ではあるが、実際に出来たら大変面白い建築が出来たと思われる。当時ドイツから飛行船ツエッペリン号というのが世界中を周回していた。水素ガスを充満させた風船飛行機で水素に引火して大爆発事故を起こして中止になったが、ライトはこの洗濯工場でその原理を生かして、圧搾空気を吹き込んで屋根構造にした面白いと言うよりも、経済的に大スパンを持たせる構造で、大阪万博のアメリカ館でもその後この空気構造が使われ、今では日本でも多くの野球場のドームに採用されている構造ではあるが、しかし、図に見られる様に、(室内空気ではなく)屋根空間にのみ空気を充満させているところが大違いの発想であろう。これは、私が洗濯屋さんの設計をしたときに気が付いたのであるが、アイロンプレスを掛けた時に発生する湯気が天井面に当たって結露するのが、クリーニング店の大きな問題なのであった。この建物の天井面には大きく下に張り出した曲面が見事に湯気を自然に吐きだす形態を取っているではないか。しかも、地下にある機械室から圧縮した暖気を送り込めば(これは私の想像であるが)天井面を暖めてあれば、完全に湯気は外部に自然に排除されるようにしたのではないかと思われる。広々とした作業空間で、思いっきり湯気を



エーデルマ洗濯工場 断面図



エーデルマ洗濯工場 外観透視図



A図

吹き飛ばしながらの作業は労働の潔い仕事っぷりをかきたてる様な思いをさせる空間を実現しているのではなかろうか?

**②ポールベアリング支持によるシェル構造**(ギリシャ聖公教会)1956年作の円形の教会は日本の蛇の目傘のようなディテールを持った建物であるが内部に入って観ると大きな円形の天井面はまるでローマの坊さんたちがかぶっているキャップの様な屋根がガラスのポールに支えられて、空中に浮いている様な不思議な感じがする。その構造について少なくともRCのシェル構造でこのような支持方法をとった建物は世界にも例がない。

そこで現地の聖職者に建設当時の話を聞き、また設計当時のことをタリアセンの人々にも聞いた。それをスケッチしてみると、(A図)のようなことが判った。つまり、基壇であるコンクリートの上に溝形鋼を大きな円形に曲げてアンカーし、その中にいっぱいにポール・ベアリングを敷き詰めて、その上に溝形鋼をかぶせてある。そこから直角にたち上げられたI形鋼の間にガラス球がはめ込まれ、その上部にコンクリート・シェルが打接されているというのである。

その結果、コンクリートシェルそのものが温度変化によって膨張収縮する変形に対して、十分に対応出来るような支持方法が可能になったのだという。世界のシェル建築の多くがこのような気候の温度変化に対応出来ずにひび割れなどが原因で壊さざるをえない状況になったり、シドニーのオペラ・ハウスのように、分厚い組積造になってシェル本来の軽やかな薄味を失う形になるか…、のいずれかの運命をたどったといえよう。

**③キャンティ・レバーと吊り構造**(1マイル高さの超高層建築)1956年計画案)イリノイ州に計画された高さ1マイル(1,609メートル)のこの塔は計画案で終わったが、これがもしできていたらどう

であろうか?おそらく、あの風当たりの強いミシガン湖畔でビル風の吹き下ろしに大変な風害問題を起こしていたのではないかと思われるが、しかし、これらの図を見ると、次の2点が、はてな?と思わせる。一つは建物全体が頂上に向かって傾斜している点である。普通の他の超高層ビルは、みな外壁が垂直面であるので、風が上部から地上に吹き下ろしてくるビル風になり大変な被害をもたらしているのに対して、この建物は風は上に向かって吹き上げことになるのではないか?と言うことになり高層ビルの一つの解決策を示唆しているのではないかと思われる。そして更に次は確かに吹き下ろしてくる風はバルコニーのフトコロで乱され吸収されてしまう構造ではないかと思うのだがどうであろうか?ライトの建築で必ず使われている手法として持ち出し構造がある。跳ねだしていることによって、内部空間が外部に対して開放的な状況を保つのに大変有効な手段であり、日本の慈光院の縁先空間の様な開けっ広げの外部への借景状況を作り出すことが容易になる。この大規模な建物でコアの構造体からはねだしあるは持つスパンではない。そこで建物全体は上部のコアに近い部分から吊り下げられた鋼索(Suspension Rodsと図中に書かれている)によって、スラブの先端に近い(バルコニーの内側)部分をつり上げ、床版の二重スラブを持たせている。



ギリシャ聖公教会 外観



ギリシャ聖公教会

# フランク・ロイド・ライト

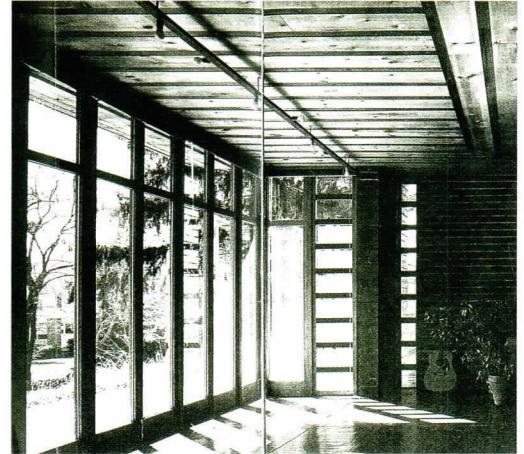
この無数の鋼索は同時に地下の駐車場に立ち上げられた壁面にアンカーされて、まるで蜘蛛の糸のように、逆に建物全体の転倒を防ぐ役割をも担っているのだ。部分が単に部分の役割を果たしている様な現代の多くの建物とは異なり、部分が全体の為に大きな役割を果たしている、ライトはこれを有機的と言っている。

④下地壁の原理を構造体にしたユソニアン住宅(1929年頃、大恐慌時工夫米国民用住宅)皆さんは日本壁の下地壁をご存知ですか?今でも琵琶湖周辺で見たことがあるが、木舞下地と言う構法で、東京ではもう30年も前に「木舞屋さんはもういないよ」と言われて、ガックリ来たことがあったが、あのしの竹と青竹を割いた物とを藁紐や藤藁などで結び付け、通し貫に釘留めとした状態を左官壁で両面から塗り込めて一体化、乾燥することによってシッカリとした薄い壁が出来上がる。あの工程の実に魔術の様な不思議な感じを今でも思い出すことが出来るのだ…。ライトがユソニアン住宅でいかに安価に施主自身の施工で自分の住宅を建設出来るかを考えた工法は木舞壁の原理であった。合板を立て、その両面に板を横に当てて目地に合わせた押し緑を両面からビス留めるというやり方だ。これは両面から下地に塗り込める日本壁と同じ様に実にシッカリとした壁面が出来上るるのであった。それだけでは軽いので強風に吹き飛ばされてしまうので、要所要所にレンガや石積みの壁や暖炉を置いて重しとして全体を支えるという方法であった。そこに出来る建物は壁の軽重の対応関係によって、内外に思わぬリズム感を与え、生活に一種の弾みをさえ醸し出してくれるのであった。材料が互いに働き合って生活空間に思わぬ場の変容を作り出すこの手法は、やがてライト空間の重要な手法となっていくのであった。

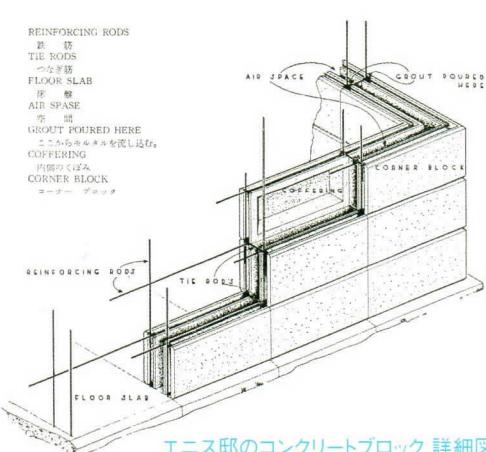
⑤エニス邸のコンクリート・ブロック(版)構造1923年作 もう一つの熟練労働者を使わなくとも簡単に構造体を作り出す方法にコンクリー・ブロック造のユソニアン・オーオマチックという方法が考えられた。壁の内部から見ると、どうしてこんな簡単な方法で、80年以上もの間、建て続けているのかが不思議に思えてくる。ブロックというよりも、薄いコンクリートの版の周辺を僅かにリブをつけ目地が入る分だけの厚みをつけ、モルタルと鉄筋が僅かに挿入され固定化するだけの仕掛けなのである。内外両面の版の間には空間があり、防水と断熱の役割を果たしている。

それにつけても、部分のパーツの寸法と全体規模構成との関係を可能にする、その読み取る能力は一体どの様にしてきたえ上げたのであろうか…!ライト作品の前期の生活空間が平面的なダイナミズムを構成していくのに比較すると、後期の社会の変動に伴う生活の変化にともなって、新しい材料に応じた構造方式が意識や心理を読み込んだ相呼応する場として、一体に考えられていったことは、世界の多くの建築評論家や歴史家が未だ意識さえもされていない新しい次元の芸術がライトによって誕生していたことを私たちは深く考えなければならないと思う。

2005年5月30日22時追伸:ライトやレイモンド、天野太郎先生や遠藤築さんなどが残されたものを散逸されない様に一か所に集め、多くのライトの建築思想を愛する人々が利用出来る様な場所を今造ろうと考えている。「ライト建築アーカイブズ日本」諸先輩のご協力を願う。



ユソニアン住宅 内観



エニス邸のコンクリートブロック 詳細図



# NPO 日本「ライト建築アーカイブス」創立



フランク・ロイド・ライトの初来日から100周年にあたる平成17年、ライトと有機的建築に係る資料の蒐集・保管・活用を目的とする「ライト建築アーカイブス」が、日本特定非営利活動法人(NPO)として創立されます。これを記念して、平成17年9月24日(土)「ライト建築アーカイブス日本キックオフ・イベント」が豊島区目白の自由学園「明日館」にて開催されました。

台風が近づくにも関わらず、多数・多様の方々が集まり、とても素晴らしい楽しい一日でした。この活動はこれからが本番です。多くの皆様の賛同を集め、記念資料館の実現に向けて大きな一步を歩き出しました。

## NPO「ライト建築アーカイブス日本」の概要

この法人は、フランク・ロイド・ライトと有機的建築に係る資料

### 代表役員

代表理事／森晃一

副代表理事／井上祐一・

南迫哲也

主催／ライト建築アーカイブス日本 設立準備委員会

後援：豊島区、米国大使館、フランク・ロイド・ライト財団

日本建築家協会、UIFA JAPON、AIA Japan、武庫川学院、自由学園明日館、ユナイテッド航空、コクヨ、日本コカ・コーラ、淀川製鋼所、帝国ホテル(順不同)



の蒐集・保管・活用に関する事業を行い、文化の振興を図る活動に寄与することを目的にしています。フランク・ロイド・ライトと有機的建築に係る広報事業、国際交流事業、調査・研究・教育事業を計画しています。「ライト建築アーカイブス日本」は、米国フランク・ロイド・ライト財団から、正式に承認を受けた名称です。

取材／高橋昭彦  
(南迫研究室昭和55年卒)

### ライト建築アーカイブス日本

森晃一

東京都新宿区北新宿1-4-9-201

TEL-FAX／3-5875-5110

waaaj@apost.plala.or.jp



副代表理事事を務められている  
「ライト建築アーカイブズ日本(WAAJ)」の  
会員募集が、  
いよいよ始まりました！

熱く語り合おう！



# 「ライト建築アーカイブズ日本」 会員募集のお願い。知らせ、

## ライト建築アーカイブズ日本 (WAAJ)

「WRIGHTIAN ARCHITECTURAL  
ARCHIVES JAPAN」-(略称 WAAJ)

このWAAJの大きな事業の一つに、資料館の建設があります。そして、この事業の実現には、大変多くの会員の参加を必要とします。南迫先生も御自身の集大成として、日夜忙しく取り組んでおられます。南迫研究室の卒業生として、一人でも多くの方が御参加下さいますようお願い申し上げます！

下記にWAAJ事務局からの御案内を転載させていただきました。

お問い合わせは、直接WAAJ事務局又は、私宛にお願いします。

高橋昭彦

(南迫研究室s.55卒OB会 代表幹事)

高橋昭彦(南迫研S55卒)

<s55-takahashi@sekoken.com>  
皆様のご入会を、こころからお待ちしております。また、このメールを、会員となつていただけそうなお知合いの方にご転送いただければ幸いです。

## フランク・ロイド・ライトと日本の伝統を守り伝えましょう [WAAJ 代表理事／森晃一]

ライト建築アーカイブズ日本は、2年間の検討を踏まえて、NPOとして創立し、活動が始まりました。今月から、ぜひ会員になっていただきたい皆様に、入会のお声をかけさせていただいております。フランク・ロイド・ライトから学んだ方、ライトと働いた方やその方々とかかわりを持っている方々、建築ファン、建築史研究家、オーナー、学生などの皆様には、正会員、準会員、学生会員としてぜひ入会いただけます。さまざまな活動にご参加いただけますようお願い申し上げます。もちろん、フランク・ロイド・ライトに関するセミナー、勉強会、建築見学会の企画も進んでいます。4月を初回に、毎月の開催を予定しています。詳細は、2月にお知らせいたします。もちろん、これらのイベントには、会員割引

で参加いただけるほか、自由学園明日館様、帝国ホテル様、ヨドコウ迎賓館様からの特典があります。また、正会員向けには、特別プログラムも企画しています。

オーナー、建築家、ライトファン、建築ファン、研究者など、いろいろな方々に、参加、活躍いただける場を作るためにも、会員として、活発なご意見をください。ライト建築アーカイブズ日本日頃の活動にボランティアを希望される方々の参加も、どんどんお待ちしています。

会員募集のパンフレットは、自由学園明日館の入り口などにも、常設していただいております。明日館にお立ち寄りの際には、ぜひお持ち帰りください。

## ライト建築アーカイブズ日本的目的

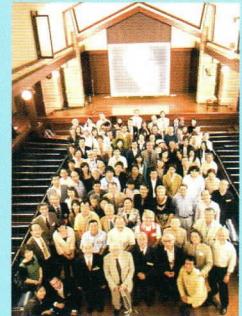
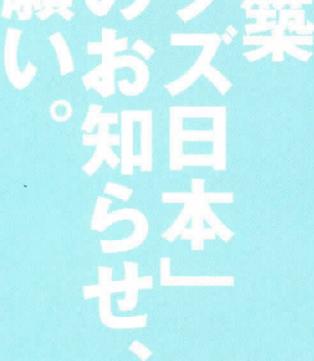
フランク・ロイド・ライトの有機的建築と思想を守り伝えるため、ライトの初来日から100周年記念の2005年、NPO法人ライト建築アーカイブズが設立されました。日本は米国以外で唯一、フランク・ロイド・ライトが住み、仕事をした国です。しかし、ライトに出会った人々の記憶も、歴史的資料も消え去ろうとしています。

私たちは、世界中からライトを愛する人々や研究者が集まり、新しい発見をし、相互に理解を深められるアーカイブズの創設を目指しています。ここでの活動が日本建築の伝統を守るとともに、自然に学び、自然を尊重する社会の構築に貢献すると信じています。

## ライト建築アーカイブズ日本活動

ライト建築アーカイブズ日本は、フランク・ロイド・ライトの建築活動を総合的に考察し、よりよい社会のあり方を思索することを根幹においています。

- ◆保存：資料、インタビュー、建築物など
- ◆研究：セミナー、研究会、見学会など
- ◆交流：イベント、展覧会、国際会議など
- ◆広報：ニュースレター発行や書籍出版など



### ④名誉会員：理事会で決定された個人。

◆年会費（入会金は不要です）◆

①正会員：1口 10,000円

②準会員：1口 2,500円

③学生会員：1口 1,500円

④名誉会員：不要

年会費は、毎年の入会日当日からの1か年会費をいたします。入会期間は入会手続き完了日の翌月1日から1年間となります。1口を超える入会金は、寄付金とさせていただきます。

### 年会費の振込先

◆郵便振替

口座記号番号:00150-7-630854

加入者名：特定非営利活動法人ライト建築アーカイブズ日本（略号：トクヒ）ライトケンチクアーカイブズニッポン

お願い：振込の際に、郵便振込用紙に、お名前・ご住所・お電話番号・会員種類

◆（Eメールアドレス）をご記入ください。

◆銀行口座 銀行支店：三井住友銀行目黒支店

口座番号 普通預金 6900556

略号：トクヒ ライトケンチクアーカイブズニッポン

お願い：銀行口座への振込みの方は、お名前・ご住所・お電話番号・会員種類・（Eメールアドレス）をファックスまたは郵送などで別途、ご連絡ください。

### ライト建築アーカイブズ日本（WAAJ）の連絡先◆

特定非営利活動法人

ライト建築アーカイブズ日本

東京都新宿区北新宿1-4-9-201

〒169-0074

電話/ファックス:03-5875-5110

Eメール: waaj@apost.plala.or.jp

『ライト建築アーカイブズ日本』は、米国フランク・ロイド・ライト財団から、正式に承認を受けた名称です。

工学院大学  
建築系学科卒業の  
海外留学・第一号



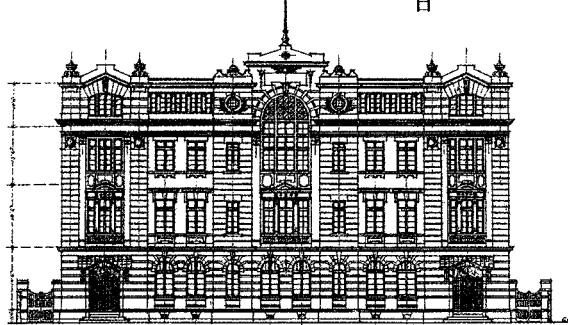
輝かしき先輩たち⑦

# 福井房一

第一条・乙六甲ノ注文ニ隨ヒ在漢口帝国領事館、  
領事館事務所及擁壁等ノ設計圖面並ニ  
仕様書ノ作成及工事ノ監督ラナス  
第二条・甲ハ右報酬トシテ乙ニ對シ設計見積金額ノ  
百分ノ五即漢口銀四千參百五拾五兩  
參錢四分を支払ワ可シ 明治四十二年九月壹日

「在漢口總領事館新築一件」という  
外務省外交史料館に  
保管されている文書の一部である。

この契約書に登場する“乙”なる人物、  
即ち「在漢口帝国領事館」の設計者・福井房一で、  
工学院大学建築系学科の  
輝かしき先輩の一人であった。



## クーパーユニオンを首席で 卒業する

福井房一は1869年(明治2年)  
1月31日、福岡県京都郡稗田村  
に生まれた。現在の行橋市である。福岡県の東北部に位置し、  
周防灘に面する半農半漁の町  
である。

房一の生まれた明治2年は、  
東京に遷都されたというもの(3月)、土方歳三が戦死したり(5月)、榎本武揚が投降したり(同月)、大村益次郎が襲撃されたり(9月)、まだまだ“チャンバラ”的時代であった。そんな折に福岡の片田舎で生まれ育った房一にとって、時代の、そして風土の原風景とはどんなに映っていたのだろうか。

1890年(明治23年)2月に、房一は工手学校造家学科を卒業する。第2回生である。同級生は22人いた。——ここから房一の国際人としての波乱万丈の物語が幕をあける。まず、卒業した翌年の1891年に、渡米する。ニュー

ヨークのジョージ・ビー・ポース事務所に勤務する傍ら、セントラル・イブニング・ハイスクールに学ぶ。

江戸時代が終焉して2年しか経っていない時代に、海外で働き勉強するなんて仇や疎かにはできないと思うが、房一が海外情報をどこで得たのか、伝手があったのか、英語は喋れたのか??全く判らない。ジョージ・ビー・ポース事務所についてもセントラル・イブニング・ハイスクールについても、詳細は霧の中である。

一体、建築家の海外渡航は何時頃からあったのだろうか。前号にも出てきた“明治建築界の3巨匠”である辰野金吾、片山東熊、妻木頼黄がさすがに早く、辰野が1879年(明治12年)にイギリス・ロンドンへ、片山が1882(明治15年)年に欧州各国へ、妻木が1875年(明治8年)にアメリカに勉学ないし視察のために行っている。しかし、これよりまだ早い建築家がいた。松ヶ崎万長である。1871年(明治4年)にドイツのベル

リンに渡っている。

でも、みんな費用は“公費”である。明治建築界の期待の星だから、上げ膳・据え膳の大名旅行に近かったのではないか。房一は“自費”で、誰の世話にもなっていない……と、思う。わが工学院大学建築系学科卒業の海外留学・第一号であることは間違いない。

1893年(明治26年)に、クーパーユニオンに入学する。クーパーユニオンは、ピーター・クーパーが1859年に創立した無料芸術大学で、110年を経た現在も開校している。インターネットをいじっていたら「クーパーユニオンは授業料がタダだから競争率が激しいし、アメリカの住所を持っていないと出願できないから、日本人の留学生なんて聞いたことがない」というのが訳知り顔で載っていて、「バカを言ってはいけません、福井房一を忘れちゃいけないよ」と言いたくなつた。

1898年(明治31年)に建築製

図科を卒業する。何と、首席である。同時に工学科も卒業し、クーパーメダルおよびバチエラー・オブ・サイエンスの学位を受ける。いやいや、凄い先輩がいたものです。

房一が何の目的を持ってアメリカに渡ったのか定かではないが、アメリカに腰を据えるつもりは端からなかったようだ。クーパーユニオンを卒業すると、7年間のニューヨーク生活に別れを告げる。そして、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、スイス、ギリシャを巡り、1900年(明治33年)に帰朝する。アメリカでは、どんなものを食べて、どんな生活をしていたのだろう。また2年間のヨーロッパの旅行では、各国の街や建築を見て、何を想つたのだろう。筆者にはとても興味があるのだが、往時の房一の心に迫る手立ては一切ない。

帰国して房一を待っていたのは、海軍技師であった。すぐに呉および佐世保鎮守府經理部建

築課に勤務する。両地に、それ  
ぞれ何年、勤務したのか。

●転居:正員 福井房一君、佐  
世保鎮守府經理部建築課

(『建築雑誌』第242号／1907年2月25日)

●消息:正員 福井房一君は去  
月13日依頼本官を免ぜられたり

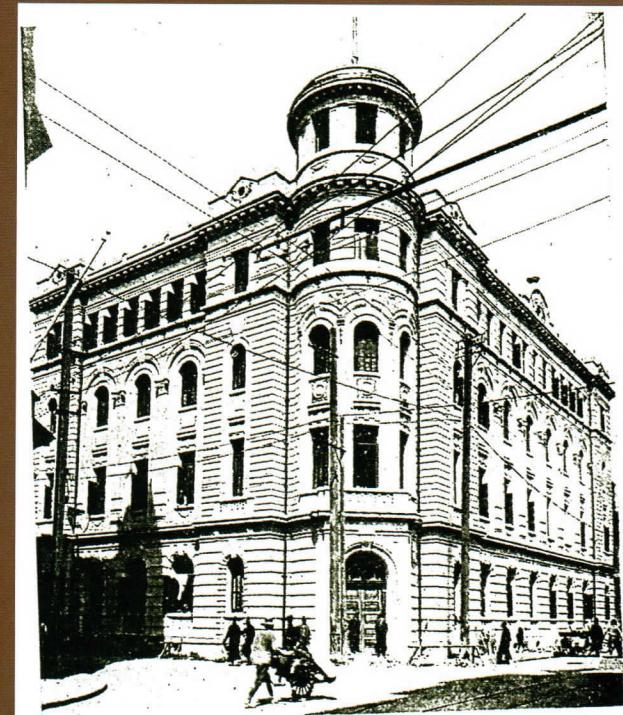
(『建築雑誌』第244号／1907年4月25日)

という記述を発見した。つまり、  
佐世保には2ヶ月ほどしかいなか  
ったことになる。すぐ辞めたとも  
言える。何か、あったのだろうか。  
それはともかく、房一の海軍省時  
代を俯瞰してみると、彼は佐世保  
鎮守府で起きた、ある建築歴史  
上で特記すべき出来事に立会つ  
ていない。それは、次のものだ。

●我が国最初の鉄筋コンクリー  
ト構造物として、明治37年、真島  
健三郎博士によって、佐世保船  
渠にポンプ室と機関室とがつくら  
れた。(『鉄筋コンクリート学教程』／坂静  
雄／1948年)

“真島健三郎博士”とは、後に「  
柔構造論」を唱え、“わが国鉄筋  
コンクリート構造のパイオニア”と  
謳われる建築家だが、この日本で  
最初の鉄筋コンクリートの建造物  
を生み出したときは、佐世保鎮守  
府建築課に勤める海軍技師であ  
った。房一は、エボック誕生の現  
場は見なかたけれども、真島と  
2ヶ月、机を並べていたことになる  
。二人に、会話はあったのだろう  
か。ちなみに、真島は1873年(明  
治6年)の生まれだから、房一の  
ほうが4歳上になる。

ほとんど呉鎮守府にいたわけ



三菱合資会社上海支店

だが、呉にも建築歴史上の貴重  
な建築があり、それは今も残って  
いる。「呉鎮守府司令長官官舎  
(現・呉市入船山記念館)」は、  
1906年(明治39年)の竣工で「  
設計:桜井小太郎」と判明して  
いる。「呉鎮守府庁舎(現・海上  
自衛隊呉地方総監部庁舎)」はそ  
の翌年、つまり房一が佐世保に  
移った年の竣工だ。房一は、どち  
らにも関わっていなかったのだろうか。

呉鎮守府時代の1902年(明  
治35年)に、アメリカと英南国に  
出張している。また、1904年(明  
治37年)には、クーパーユニオン  
校則に基き、同校学務委員の規  
定により、シビルエンジニアの  
学位を受けている。何やら優雅  
な身分だが、「房一は、工学校  
の出身で最初の高等官ではな  
いでしょうか」と教示して下さっ  
たのは、文化財調査官の堀勇良  
さんである。

### 「台湾總督府庁舎設計競技」 に第一次入選する

房一は、1907年(明治40年)

に海軍省を退き、清國・漢口に自  
らの建築事務所を興す。この時  
代、世界の列国は中国各地に租  
界を持っていて、漢口にはイギリ  
ス、フランス、ドイツ、ロシアが開設  
していた。

筆者の余り好きではない歌手  
のさだまさしに「フレディもしくは  
三教街」というナンバーがあり、  
そのサブタイトルは“ロシア租界  
にて”である。

●♪フレディあなたと出会ったの  
はハンカオ漢口、揚子江沿いの  
バンドで、あなたは人力車を止め  
た、フレディ二人で初めて行った  
レストラン、三教街を抜けて、フラン  
ス租界へとランデブー……。

余り好きでもないのにCDを買  
ってきて聴いているのだが、いく  
ら待っても日本租界が出てこな  
い(だから、余り好きではないの  
だ!)。もちろん、漢口に日本租界  
はあった。1898年(明治31年)に  
開設され、1907年に拡張されて  
いる。1907年は、房一が渡った  
年だ。房一という人は、どうもこう  
いう時代の流れを読むのに敏な

建築家だったような気がする。

在漢中は、居留地民団技師を  
嘱託し、租界内の洋館を数多く  
手掛け、また湖北省議局などを  
設計している。

1911年(明治44年)に日本に  
帰ってくるのだが、1908年(明治  
41年)に、ある貴重な足跡を残し  
ている。「台湾總督府庁舎設計  
競技」に第一次入選しているの  
だ。この「台湾總督府」は、日本  
で最初の設計競技、即ちコンペ  
ティションであった。第一次入選  
者は7名いた。第二次に進むが、  
これには残念ながら当選しなか  
った。もっとも、優勝者もいなく、乙  
賞として長野宇平治案が選ば  
れ、それを台湾總督府の技師で  
あった森山松之助が大幅に修  
正して実施された。何か曰くあり  
げだが、“わが国で最初のコン  
ペ”による建物は1919年(大正8  
年)に竣工し、今も彼の地に建つ  
ている。

房一の代表作は当然、中国を  
大地にしている。

まず冒頭に記した「漢口日本  
総領事館」。所在地は、清國湖  
北省漢口大日本帝国專管居留  
地河街及山崎街角。建坪:212  
呎坪833、うち本館:3階建・195呎  
坪783、附屬:2階建・17呎坪05。  
竣工は1910年(明治43年)であ  
る。房一の名を止める代表作が  
「上海日本人俱楽部」である。

●上海には、外国人居留民の社  
交の場、いわばコミュニティー・セ  
ンターとして各国ごのクラブがあ  
ったことは有名である。上海で最  
初に建てられたシャンハイ・クラブ

(1862年)は、イギリス人、特に大班の社交とビジネスの中心となつた。同クラブは1911年に再建され、バンドにたっている建物のなかでも最も美しいものの一つであった。ついで、ドイツ人は1904年に広壮なクラブ・コンディアをつくった。ここには広い舞踏場やボウリング場があり、ときどき公式の集会も開催された。ドイツ人は2~3の有力な商館を経営しており、個人的にはアングロ・サクソン人と非常に親しいが、社会的には近づこうとしなかった。日本人も、虹口の文路上に上海日本人倶楽部を設けた(1914年)。アメリカ人はイギリス人と非常に密接に協力しており、アメリカ人の大班はシャンハイ・クラブのメンバーであったが、彼らも1920年代にはアメリカ・クラブを設立した。フランス人は8割近くはフランス租界に生活して、彼らはそこからあまり出ようとしなかつた。フランス・クラブ(現、花園飯店)は、フランス租界の高級住宅街につくられた(1926年)。こうしたクラブの成立状況は、各国居留民の人口や勢力の推移を、また外国人居留民が「モザイク都市」を形成していくことを反映しているといえよう。

(『上海史』／編:高橋考助・古厩忠夫／東方書店／1995年)

上海における各国の租界の様子を伝える文章だが、上海日本人俱楽部のくだり件が1行にも満たないのは、というわけだ。さては資料がないのかと、例によってインターネットに頼ったら、素敵な紹介に出会いました。

◆日本人倶楽部のビルは、外觀は洋風だが中は和風を設えており、上海という國際都市で日本と世界との繋がりが寓意されたものだった。だが日本人が交流を深める上で、親睦を深める相手

は大和民族に他ならず、明治維新の基本的国策をも象徴していた。これらの状況は上海の日本人社会は世界における「内部封鎖」を克明に描写していたといえる。

この俱楽部の入会金は10元で、会費は3.5元。会員数は1926年には約370人にまで増えた。俱楽部ビル内は合計約500人を収容でき、食堂・宴会場・大小の会議室・演劇場や宿泊施設などもあった。1階がビリヤード場とバー、2階に食堂と宴会場。3階に演劇場と和室、4階が宿泊施設で、会員の紹介がなければビル内の施設は使用できないルールだった。使用料金は劇場50元／日、応接間は昼5元、夜7元、小応接間は昼3元夜5元／日だが、食事無しだと3元。月極の宿泊料は120～150元／月で、洋食・和食が自由に選べた。

演芸場では上海一流的演目が催され、夏になると会員のために納涼映画パーティも行なわれていた。現存する写真から、しばしばここで正月の新年会を催し、大きな紅白の幕が施された舞台の上で、日本の伝統芸である唄や踊り、琴などを演奏して故郷を偲ぶ日本人居留民の姿がうかがえた。(『上海にいた日本人』第16回)

“陰の系譜”にめげずに、  
みんな頑張っていこうぜ!

“現存する写真”ではなく、“現存する建物”はないのか。どんな些細な情報でもいいからと、身を粉にして奔走したつもりである。地元の市立と都立、そして日本建築学会の図書館に何回となく通った。インターネットも、襲来するウイルスとフリーズにもめげずに、探しに探した。外務省外交史料館などという敷居の高い国

家機関にも恐る恐る行った。中國大使館文化部にFaxも送った。例によって、福岡県行橋市の“福井さん”18人に電話をかけまくった。あ……あと頼るとすれば、本屋ぐらいしかない。で、灼熱の陽炎が揺れるなか、自転車を飛ばして地元の大型書店に行きました。まさに、お天道様は見ていたのでしょう、良い本に出会いました。でも、本屋じゃコピーを頼むわけにもいかないので、買うよりない。3,000円+税…ボランティアとは、お金のかかるものです。

◆帝大出身者による赤門俱楽部などいくつかの邦人親睦団体が合併して1908年に設立。1914年に4階建の会館を新築。バー、演芸場、宿泊施設などを備え、邦人社会の主要な集会、社交の場所となる。1919年には新公園（現・魯迅公園）北に八千坪の付属園を開き、園遊会などを催す。近年は時計工場となっていたが、吳淞路拡幅工事に伴い1994年末に取り壊された。塘沽路309号。

(『上海歴史ガイドブック』／編著:木之内誠  
／大修館書店／1999年)

残念、「上海日本人俱楽部」は、9年前に取り壊されていた。こんな記述にも、眼が止まつた。

1905年に上海に居住する外国人は総数は12,328人、そのうち日本人は4,331人を占め、ポルトガル人を越えた。その数は1914年の第一次大戦の勃発によってさらに増えた。大戦は、日本にとっては好機到来であり、紡績業を中心として日本資本が上海に躍進し、日本資本の工場が目立って多くなっていった。それに伴い上海に居住する日本人は1915年には11,457人となり、イギリス人を抜いて在留外国人数で第一位となつた。

(『上海史』／編:高橋考助+古厩忠夫／東

方書店／1995年)

1915年は、「上海日本人俱楽部」の竣工した年である。そんな在留日本人にとって「待ってました」といふような記念碑的な建築が、もうないのはやはり返す返すも残念である。

では、房一の作品で、現存しているものはないのか。ありました。「三菱合資会社上海支店」(現・三菱公司)である。広東路86号に建っている。1914年の竣工だから「上海日本人俱楽部」と同時進行のプロジェクトであった。

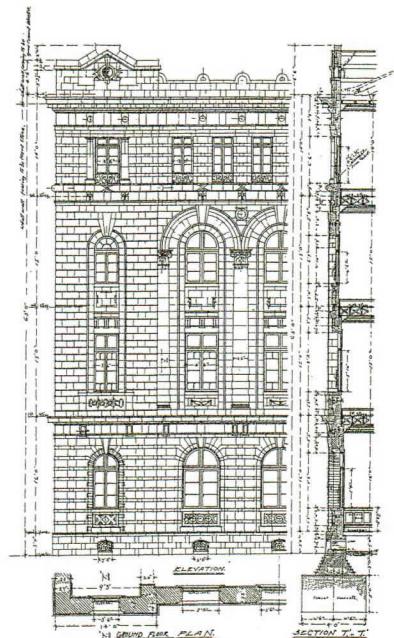
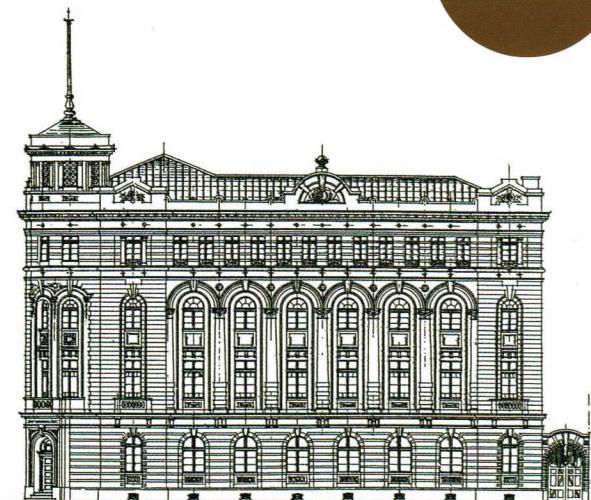
◆建物ノ平面形状ハ凹字形、  
石材煉瓦混用、角丸円塔四階  
建煉瓦造ニシテ広東路側(幅  
員百十呎九吋)四川路側(同七  
十二呎九吋)街路昇降口ハ公  
衆用ニ当テ広東路通用路ヨリ  
昇降口ハ社員用トス各街路ヨリ  
ノ通路ハ建物ニ沿ヒ中坪ニ至  
ル、附属舍ハ本館ニ接続セル坪  
瓦造三階建ナリ  
之ガ一般計画ハ土地ノ慣習状  
況ヲ考量シ虚飾ヲ廢シ專ラ防火  
堅牢実用利便ヲ計リタルモノニ  
シテ其ノ様式ハ近世復興式ニ  
則ルモノトス(『建築雑誌』第354号/日  
本建築学会/1916年)

とは、房一自身がしたためた「三菱合資会社上海支店」の設計メモである。

「上海日本人倶楽部」も「三菱合資会社上海支店」も堂々たる様式建築だが、これが同じ設計者の手によるものかと疑うほど表現手法が異なっている。本人に実力もあり器用でもあったのだろうが、ここが22歳で単身アメリカに渡り7年間のニューヨーク生活の後、2年間をかけてヨーロッパの主要国を巡り、設計の主舞台は中国という国際人 工学院大学建築系学科卒業の海外留学・第一号の所以であろう。



上海日本人  
俱楽部



◆◇◆

◆帝国大学出身の学士様の講議が聞けるということが評判となり、工手学校の卒業生は製図が上手いという世評を生んだ。それが工手学校を現在の工学院大学まで発展させた。しかし、上からの中級・下級建築技術者養成の方策には、教師・生徒がいかに努力したにせよ限界のあつたことは確認しておきたく思う。

(日本近代建築:陰の系譜／山口廣／『日本近代建築史再考:虚構の崩壊』／新建築  
1974年10月臨時増刊)

わが工学院大学を“陰の系譜”と位置付けて、その言い種もあんまりじゃありませんか、山口さ

ん……といいたいが、21世紀を迎え、実力の社会といわれながらも、今も中央官庁には“キャリア”が存在しているのだから、技術者というよりは職人の養成を目指していた工手学校の第2回卒業の房一の苦難は如何ばかりだったろう。

そういえば、今まで本欄で紹介してきた先輩たちは、この逆境の世界にござって飛び込んでいる。①川本鑑之進(第1回生／日本銀行建築部)、②久保田小三郎(第3回生／日本銀行建築部)、④小林福太郎(第7回生／内務省)、⑤熊沢榮太郎(第17回生／東京帝国大学工科大学～海軍省)、⑥小林正紹(第39回

生／大蔵省)……。③矢部又吉(第16回生)にても卒業後は妻木頼黄に師事しているから中央官庁みたいなものだ。しかし、彼らは全て当時の工手学校の教授からのスカウトだった。だが、再びしかし、スカウトされたからといって、安穩とはていられなかったろう。同僚のほとんどは東京帝国大学出身だ。本人に、自信と信念がなかったら、ツブされてしまう。

房一には、恩師の手が差し伸べられたわけではないと思う。彼を取り巻いている“初”をもう一度、確認していただきたい。工学院大学建築系学科卒業の海外留学・第一号、同じく高等官第

一号、わが国最初の設計コンペに第一次入選、「上海日本人俱楽部」竣工と同時に上海の日本人居留民人口が第一位……それが今から90年も前の時代だったのを考えると……何、他人より早く生まれているのだから、それだけ“初”に近いんじやないかというのには僻み根性で、やはり凄いことである。こんな風雲児の先輩がいたことに誇りを持って、後輩たちは頑張って、母校を“陽の系譜”にしようではありませんか。

福井房一は、1937年(昭和12年)1月25日に逝去する。享年68歳であった。

(レポート:類洲 環)

## アカデミーで 木造教育・研究に活躍中

### 小原 勝彦

1996年3月 工学院大学建築学科建築学コース卒業(宮澤研究室)  
1998年3月 工学院大学大学院修士課程・建築学専攻修了(宮澤研究室)  
2001年3月 工学院大学大学院博士後期課程・建築学専攻修了(宮澤研究室)  
工学院大学より課程博士(工学)を取得、学位論文  
「木質構造のエネルギー吸収性状に着目した耐震性能評価に関する研究」  
(指導教授:宮澤健二先生)  
2001年4月 岐阜県立森林文化アカデミー 木造建築スタジオ 助手  
2004年4月 岐阜県立森林文化アカデミー 木造建築スタジオ 講師、現在に至る  
卒業年度:1996年3月(宮澤研究室) 出身校:埼玉県立松山高校出身

岐阜県立森林文化アカデミーは建築学会賞・技術部門(2002年)の受賞などで建築業界の方々には、建物を御存知の方が多いと思います。しかし、どんな学校だろうと思う方が多いのではないかでしょうか。そこで、本アカデミーの概要を知って頂きたいので、教育内容を最初に述べようと思います。

本アカデミーは、岐阜県立の専修学校に位置づけられます。岐阜県の林業を活性化させるために次世代を担う者たちを教育する、今年で開学5年目の学校です。山や森を育てるところから、木材を消費するところまで幅広く教育しています。教育システムとして、短期技術研修部門、生涯学習部門、専修教育部門の3つの部門があります。

短期技術研修部門は、実務をしている、いわゆるプロの方々に定期的に最新の技術などを研修しています。

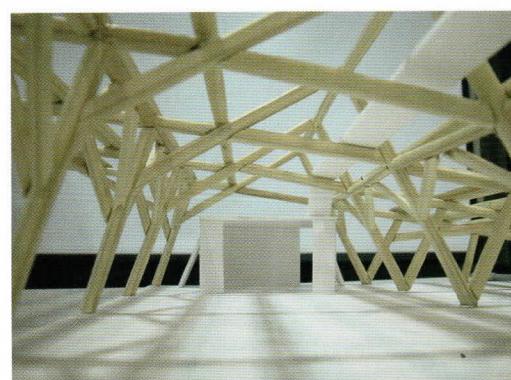
生涯学習部門は、一般の方々、御年配の方々やこどもたちなどを対象に、自然、環境、木工、木造建築など、森林と森林文化にかかる多様な講義や実習を開催しています。

専修教育部門は、いわゆる学校教育

部分で、学生総数約80名、教員16名の小さな学校ですので、個人指導的に教育を実施しています。森林と人との関わりから生まれてこれまで培われてきた森林文化について再認識し、地域的な諸問題から地球環境問題まで貢献しながら森林を多面的に活用し、新たな森林文化の創造に寄与できる人材を育成しています。エンジニア科(高校卒業で入学可能な2年制)とクリエーター科(4年制の大学卒業で入学可能な2年制)の2科があります。この後は専修学習部門について述べたいと思います。

カリキュラムの内容は実践重視に構成していて、授業(講義・実習)と並んで「プロジェクト」というものがあります。このプロジェクトとは「地域への教育的効果のある実践」をテーマに実施しているものです。私の所属している「木造建築スタジオ」(いわゆる研究室の名称です)では、現場を知った設計者を育成することを人材目標に掲げていて、大別すると以下のようないいくつかのプロジェクトがあります。  
自力建設プロジェクト…学生が入学した直後に、自ら設計・施工をするプロジェクトです。まず各学生の作品を学内コ

ンペ(6月初旬)を実施して、教職員および学生全員の投票により選出された最優秀作品を1年間で自力で施工していきます。基本的に構内に建設していくまでの間で、これまでに4棟が建設されています、皆さんのがこの冊子を読まれている頃には5棟目の上棟が完了していることかと思います。小さいながらも土工事、基礎工事、木工事(墨付け、刻み、仕上げ)、屋根工事、設備工事、左官工事、建具工事、外構工事、家具製作など、木造建築の殆ど全ての工事の工程を体験することができます。





木造建築設計プロジェクト…地域の住まい手、工務店や設計者と共に、実際の新築物件を設計するプロジェクトです。住まい手との打ち合わせから始まり、設計、設計監理などを地域の方々の協力のもとで実施していきます。現在、設計者はファシリティナーとしての能力も必要な時代となってきていますので、ワークショップを通じた住民参加型の設計なども場合によっては実施しています。

既存木造住宅改修プロジェクト…リフォームを実施するプロジェクトです。住まい手の要望調査、事前調査、詳細調査(新築物件とほぼ同じ設計図書…平、立、断、伏、軸、展開など…を揃えます)を通じてリフォームを実施します。もちろん、耐震診断・耐震補強等も実施します。

構造性能評価プロジェクト…上記プロジェクトでの物件などの建物全体の振動性状を把握するために常時微動測定や地盤の性状を把握するためにスウェーデン式サウンディング試験なども実施しています。また、耐力壁実験、仕口継手実験などを実験棟にて実施しています。構造システムのマニュアル製作や構造ツールの製作なども実施しています。

設計・改修プロジェクトに各学生は、卒業するまでに最低でも1件は担当となります。学生によっては数件担当になることもあります。実際の設計を実施する過程で、意匠設計はもちろん、構造設計、設備設計などもプロジェクトの進捗状況に合わせて授業で実施します。コスト管理、材料管理なども体験します。

開学からの4年間でプロジェクトの内容別件数は、新築19件、増改築13件、仕様書・マニュアル作成など3件、提案型設計9件、その他多数実施しています。構造実験プロジェクトは耐力壁実験を中心に40件232体実施しています。

これまでプロジェクトはフィールドも広く、国内では岐阜県内を始め、愛知県、三重県、静岡県、北海道、宮城県、新潟県、東京都、京都府、大阪府、兵庫県、岡山県など、海外ではオーストラリア、カナダなどで実施してきました。

木質構造プロジェクト(新築)では、こどもたちの環境教育活動拠点として樹状ログ・トラス架構を提案しましたし、間口9m×桁行75.6mの市場や、400m<sup>2</sup>程度の公民館、スパン3m程度の木橋、事務所などの構造設計を実施していま

す。住宅の設計が最も数が多いのですが、製材による半剛接合架構の2階建・3階建住宅や、免震2階建住宅などの構造設計も実施しています。改修では民家や町家の改修や洋館の改修等も実施しています。

また、職業能力開発校・木匠塾(中津川)、ものづくり大学、日本建築専門学校、滋賀県立大学、大阪市立大学、神戸芸術工科大学、神戸松蔭女子短期大学、早稲田大学、京都建築専門学校、ニュー・サウス・ウェールズ大学(UNSW、オーストラリア)その他などの大学や学校などと協働する授業、プロ

フィンランド・ラハティー)に2編、WCEE2004(カナダ・バンクーバー)に3編、AESE2005(名古屋)に2編、CONMAT2005(カナダ・バンクーバー)に4編、などでも報告しております。また、新聞や雑誌などにも数多く取り上げて戴いています。

特殊な教育システムであるアカデミーの創立から携わり、教育・実務・研究を通じて、私は多くの人々と出会いました。地域で一生懸命に木造建築のことを考えている方も多いことを実感できました。学生は実務経験があります(1級建築士の資格を既取得の学生もいま



ジェクトや交流などの実施も増えてきています。

実践力のある設計者育成を目指しているスタジオ学生の卒業後の進路は、地域の建築関係の設計事務所、構造設計事務所、工務店などに就職して即戦力として期待されています。そして、卒業生17名中6名(2005年度で開学5年目、卒業生は3期生まで排出)、約1/3の学生が設計事務所やNPOなどを個人及び協同で起業しています。

これまで述べてきました教育・研究活動を日本建築学会大会論文(2003年2編、2004年3編、2005年4編)や大会展示(2003年「東海支部展示アルバー・アールト展」マイリア邸階段原寸大模型1点、2005年「特色ある建築教育の取り組みに関する展示」1点)などでも報告しておりますし、国際会議WCTE2004(

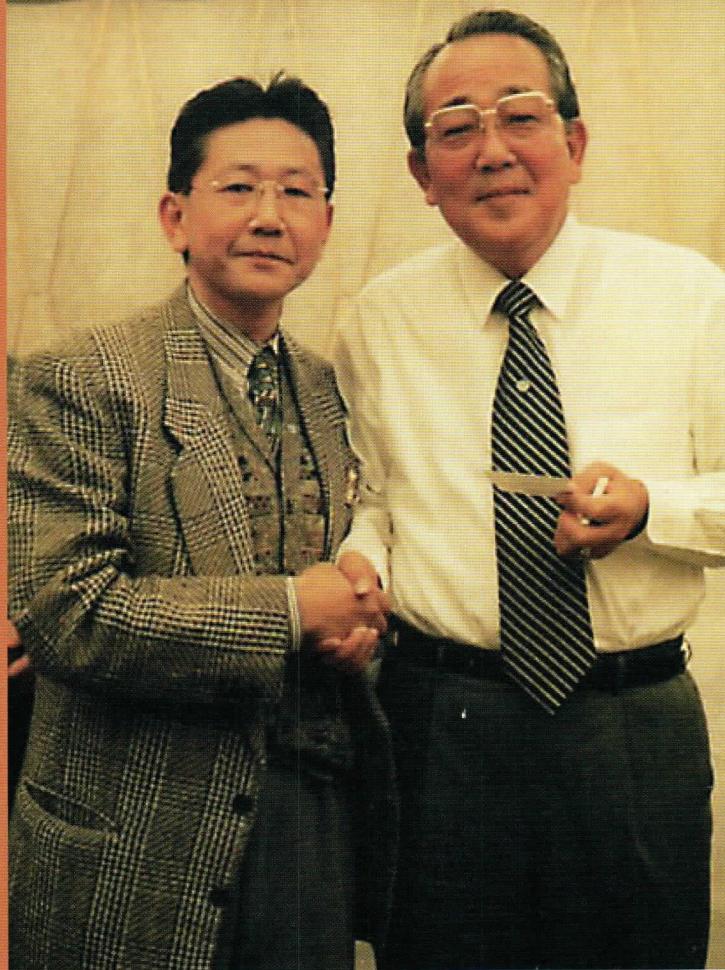
す)ので、それぞれ建築に対する問題意識が非常に高いことが特徴です。スタジオには意匠・構造・環境・材料などを専門に学んでいる学生が常に一緒にいますので、建築に関するいろいろな総合的な問題点について夜遅くまで語り合ったり、入学する以前の実務の話なども聞くことができたりします。学生同様私自身も有益な充実した時間を過ごしています。また、本当に好きなことを昼夜問わず勉強している学生たちと身近に接していると、私自身も更に精進していくなければならないと常に考えさせられます。

「不夜城」と言われている木造建築スタジオの窓の外が白み始める頃、多くの学生たちが眠い目を擦りながら頑張る姿を頼もしく感じます。(5月吉日未明記す)



## ファッションの世界で、 10年サイクルの人生

# 谷口陽堂



盛和塾塾長・稻盛和夫さん(京セラ会長)と谷口陽堂(左)氏

1946年洋裁学校の長男として佐賀に生まれる。1969年工学院大学工学部建築学科を卒業。卒業設計で、本当に運よく銅賞受賞。其の勢いで同年4月、工学院大学大学院へ進み、都市計画を本格的に学ぶ。勢いだけでは、やはり無理だった、級友谷口宗彦(現・建築都市デザイン学科教授)さんと自分の力量の差に気づき、違う道がないかと探し、DNAに従って、服を作成してみる、大学院時代に日本デザイナークラブのコンテストでNDC賞(1席)を2回連続受賞する。その後、NDC全国スーパーコンテストで杉野芳子賞を受賞、その為に昼間は大学院、夜間は洋裁学校(特別入学許可)に行く生活であった。1970年に三宅一生氏からNYを見てみませんかとアドバイスをもらう、NYでのファッションビジネスを観て初めて男がする仕事と自覚した。帰国して、大学院を休学して、洋裁を本格的に勉強した。72年全国洋裁コンテストで総理大臣賞を受賞する。当時の首相は、時の人『田中角栄氏』でした。73年、学校からは、カネボウへ入社しないとのアドバイスがあったのを断り、東レ株式会社へ入社した。今にして思えば、良い判断でした。これから

、10年の人生のスパンの始まりでした。同年6月に東レ100%の子会社インターモードの設立に携わり、SASKIAの主任デザイナーとして、同年8月ホテルオークラでデビューショーをする、貴重な体験をしました。その後、サスキアの仕事と、平行してアメリカのデザイナー、オスカー・デラレンタのライセンスの仕事を三越と共に携わる、さらにNYデザイナー、ジェフリー・ビーン氏のライセンスビジネスの仕事を高島屋と共に携わった。この2ブランドのライセンスビジネスを通じて、NYブランドのMD(マーチャンダイジング)を体感し実践することが出来た。その中でビーン氏の巧みな素材構築のやり方を観て、『素材の魔術師』と命名。私があるのは、彼の『素材使い』指導のお蔭であり、私の服創りの恩師でもある。そして1981年東レインターモードの商品企画統括ディレクターとなる。其の経緯で、朝日新聞東京本社、家庭欄に82年3月から83年5月まで、執筆を担当して、自分の作品サスキアを紹介する。その記事が、(株)ワールドの畠崎社長(当時)の目にとまり、10年勤めた現在の東レデュプロモードから(株)ワールドに1983年3月に移籍した。ここから結果、10年サイクル

のスタートです。1985年には、(株)ワールドで、アッパー(高級)コンテンポラリーゾーンの空白を埋めるべく、カンタソワ(フランスの古語で凛としてという意味)ブランドを提案し、カンタソワ企画室設立し、企画室長になる。翌86年、(株)ワールドの事業部制度導入で、カンタソワは、事業部に昇格して、事業部長になる。その後、戦略本部スタッフ、リニア部(Lサイズブランド)では、ディレクターの役職で、企画、販促と広範囲に仕事を与えられた。本社勤務は、94年3月迄の11年間でした。94年4月(株)ワールドVTCCの筏社長の要請で、(株)ワールドVTCCへ出向する。95年1月17日阪神大震災を神戸で罹災して、長年苦楽を



1995年1月22日佐賀新聞  
阪神大震災記事、勇介(長男)氏と

共にした(株)ワールドを退職する。同年4月(株)ワールドVTCCとの業務委託事業で、ミーアストラーダ(イタリア語で、私の道)というブランドを立ち上げた。95年5月代官山に(株)グローバルスコープの代表取締役社長になり、同年7月に代官山にヘッドオフィスを構える。年2回、パリで開催される生地の展示会パリ・プリミエールビジョンで、素材を仕入れて、コレクションを作成して、全国47都道府県の有力専門店へ提案するようになる。その後、04年春夏コレクションから05年春夏コレクションの1年間、(株)ワールドが販売を担当してもらう。10年単位の変化がここでも起きた。05秋冬コレクションから(株)ワールドで新しいブランド『AJUDA』を立ち上げた。(株)ワールドと交渉して、添付写真のようにAJUDAとMIA STRADAのダブルネームでスタートした。併せて、今注目の市場、中国ワールドの新ブランド(添付流通新聞)Cordier Crystalを05秋冬からスタートする。この中国の仕事は、10年単位の2015年のGOALへ向かう、心構えが出来ました。

た。3度目の正直の10年目が、いよいよスタートです。10年単位で、がむしゃらに行きる、人生を精一杯立ち向かうことが、私のライフワークになってます。



2005年9月中国全土で展開された  
Cordier Crystalの紹介の前記事

## 谷口 陽堂 (たにぐち きよたか)

- 1969年 3月 工学院大学建築学科卒業
- 1969年 4月 工学院大学大学院入学
- 1969年 10月 NDC賞受賞
- 1970年 3月 NDC賞連続受賞
- 1970年 9月 学校法人杉野学園夜間部入学
- 1970年 10月 西日本新聞社賞受賞
- 1971年 4月 学校法人杉野学園職業科偏入学
- 1972年 3月 同校卒業
- 1972年 4月 学校法人杉野学園デザイナー科入学
- 1972年 8月 金賞受賞
- 1972年 10月 総理大臣賞受賞
- 1973年 3月 同校卒業
- 1973年 4月 東レ株式会社入社
- 1973年 8月 オリジナルブランド・サスティニアデビュー
- 1981年 4月 商品企画ディレクター[室長就任]
- 1983年 3月 株式会社インターモードを退社
- 1983年 4月 株式会社ワールド入社
- 1987年 4月 カンタソワ事業部[事業部長]
- 1995年 1月 阪神大震災で罹災する
- 1995年 3月 株式会社ワールドを退社
- 1995年 3月 独立 株式会社グローバルスコープ
- 1997年 2月 有限会社ジーエスピーを設立
- 1999年 3月 神南に移転

(株)グローバルスコープ代表取締役  
150-0041 東京都新宿区神南1-13-8-407  
電話03-5458-4155 Fax 03-5458-3455  
E-Mail:kiyotaka@globalscope-club.com  
佐賀高校(現在、佐賀西高)出身



当社オリジナルブランド:MIA STRADA(イタリア語、私の道)の展示会

# 岩藤一樹

## バイオマス・

### ニッポン

### 総合戦略

同窓生  
からの  
便  
り



**全体をとりまとめるコーディネーターの役割を担っています。**

過日、工学院大学にお邪魔し、バイオマスのポスターを拝見しました。工学院大学は、建築デザインに力を注ぐ大学と思っていましたが、建築学科にも幅広く地域社会の在り様を研究されている諸先生や、学生がいることを再認識しました。卒業後の進路選択の一助と思い弊社の業務の一部をご紹介します。

弊社の職員の卒業学部は、約6割が建築学科の卒業生です。弊社の業務は、都市計画やまちづくり等、設計条件等を決める川上部分の業務を中心としておりますが、近年時代の推移に伴い、ニート対策や学生のキャリア・アップ、地域の雇用・産業創出等、労働・産業分野の業務にシフトする傾向にあります。大学時代の仲間に、不動産の潜在評価の人材として投資会社(REIT)に再就職する人もおり、建築学科を卒業しても職場は建築設計や建築現場ばかりではなく、幅広い職域での活躍が期待されています。工学院大学の建築系学科が学部になるとの話も聞いており、校風である優れた建築デザインや構造等の人材育成も大事にしつつ、経済学や社会学等、設計以前の学問が学べる学部になることを期待しております。

#### (バイマスの動向)

平成17年2月16日、地球温暖化防止京都議定書の批准が発効し、日本は2008~2012年までに、二酸化炭素の排出量を1990年レベルから6%の削減が義務付けられていますが、逆に二酸化炭素は90年レベルから7%程度増加し、削減義務6%を加える13%の引き下げ義務となっていることは周知の通りです。

平成14年に閣議決定したバイオマス・ニッポン総合戦略では、バイオマス資源の活用により地球温暖化防止と循環型社会の構築、新たな戦略的産業の育成、農業・林業・漁業の活性化を目的に、2010年を目指して、全国で「炭素量換算で廃棄物系バイオマスの80%以上、未利用バイオマスの25%以上の利活用」の目標を掲げています。

年間産業廃棄物量約4億t(平成13年度)の19.0%を占める建築廃材(約7,615万t)を削減するには、これから設計は、建物の寿命やリサイクル等に配慮したデザインや廃棄する部材量が少なくなる工法が求められます。

#### (バイオマスの種類)

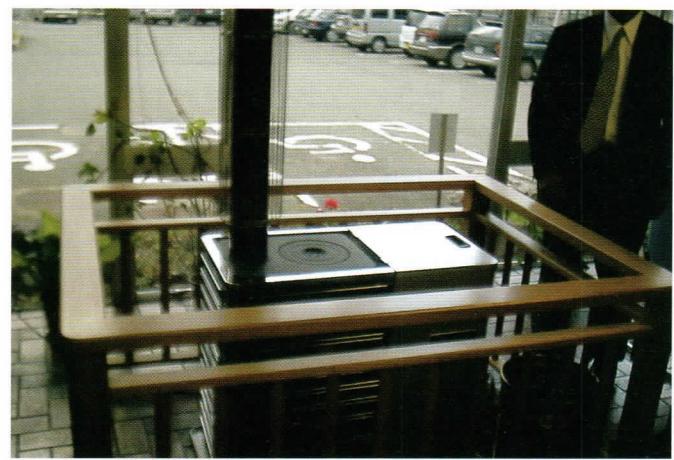
バイオマス資源には、栽培作物資源と未利用資源があります。ヨーロッパやカリフォリニア、ブラジルでは、軽油代替え燃料としてナタネ、ヒマワリを栽培しています。余談ですが、1892年にディーゼルエンジンを発明したルドルフディーゼルは、落花生油を燃料としていました。なお、日本では、廃食油等を精製したBDF100%を車の燃料とする場合には軽油取引税の対象外ですが、少しでも軽油と混ぜてBDFを用いると課税対象となります。アメリカやヨーロッパでは、BDFと軽油を混合して用いる場合には、BDF量の比率に応じて軽油の課税率を漸減し、BDFの利用促進を図っています。

#### (地域循環型社会の 枠組みと課題)

バイオマスを活用し、地域循環型社会を実現するためには、バイオマス資源・生産、収集、変換、利用の4つのチャネル(機能)が有機的につながり、全体として経済性が担保される循環システム



家畜ふん尿メタン発酵装置(岩手県葛巻町)



木質ペレットストーブ(岩手県葛巻町)

の構築が前提となります。廃食油からのBDFや生ゴミ・家畜ふん尿からの発電・たい肥化による循環型地域社会を実現するためには、解決すべき次のような課題があります。

#### 資源の回収・収集

地域内に薄く広く賦存する廃資源を回収するためには、児童・生徒や一般世帯、酪農家、学校、事業所、食品工場等からの廃資源の収集協力が前提になります。

住民の環境問題に対する理解・参加が重要であり、一般住民への啓発活動を進める必要があります。総合的な学習等での「こどもエコクラブ」を結成し、子ども達の活動を通して保護者への啓発活動も施策の一つです。また、廃食油を回収する際に用いたビンやペットボトルは、リサイクルができず、その処理が課題となっています。さらに、たい肥・発電に不向きなタマゴの殻や貝殻と生ゴミとの分別が必要であり、各家庭での徹底的な分別を行うことも前提になります。

#### 資源の変換・利用

BDFや家畜ふん尿による発電技術は概ね完成しています。廃食油からのBDF精製装置の価格は、以前に比べ安価になり、現在は1日100ℓ精製装置

が600万円程度で購入できます。回収費を除くBDF1ℓ当たり生産コストは約80円程度になり、市販の軽油価格より若干安価です。家畜ふん尿からの発電・たい肥化するプラント建設費は、搾乳牛300頭程度のプラントで1億3千万円程度となります。発覚過程で、次のような対策を講じる必要があります。

BDF精製過程で発生するグリセリンの処理に経費が掛かりますが、たい肥としての利用が可能です。

現在、ふん尿による発電過程で生産されるたい肥生産量は、過剰となっています。このため、安全な食料を生産するエコファーマー農業を拡大し、たい肥使用量の拡大に努める必要があります。

余剰電気を電力会社に売る単価は4円／kwh程度で、電力会社から買う単価は25円／kwh程度と大きな開きがあります。また、敷地を越えて通電する場合には、電力事業者としての経済産業大臣の許可が必要です。このため、発電プラントと同一敷地内で生産された電気を使用する必要があります。この他、事業化に際しては、様々な資格取得を必要とします。生産された野菜やたい肥を遠隔地で消費するためには、運送のために燃料を消費することになり、結果として二酸化炭素を増やすことになります。地域循環型社会を達成するためには、地産地消等、流通構造を変革する必要があります。

#### 様々な人々・団体等との連携とコーディネーターとしての役割

バイオマスの利活用による地域循環型社会を進めていくためには、児童・生徒、学校、一般家庭、農家・酪農家、林家、飲食店、総菜屋さん、特養、ホテル、食品工場、シルバー人材センター、特産品開発



廃食油からBDFを精製する装置  
(福島県須賀川市)

グループ、行政等、地域の様々な人・団体との連携が必要です。この他、化学、物理、農学を専攻する先生やプラントメーカー、JA、商社等との協力も必要です。様々な人々・団体との連携を図りながら事業化を進めていくことになりますが、学生時代にトレーニングを積んだものづくり性向から、全体をとりまとめるコーディネーターの役割を担っています。



廃食油回収で集められた種類複雑な容器

#### profile

いわふじ かずき

## 岩藤 一樹

工学院大学大学院修士課程修了  
1972(昭和47)年3月(荻原研究室)、

#### 略歴(現在)

- ・昭和54年8月:株式会社アール・ピー・アイ設立、現在に至る(代表取締役)
- ・厚生労働省「地域雇用創造支援事業アドバイザー」
- ・栃木県誇れるまちづくりアドバイザー
- ・静岡県ふじの国づくりドウタンク、静岡県「未来づくりネットワーク」顧問
- ・(財)地域活性化センター「まちづくりアドバイザー」
- ・千葉県自治専門校非常勤講師
- ・経済産業省/健康サービス産業機構 評議委員会 委員長

住所:株式会社アール・ピー・アイ  
郵便番号112-0002 東京都文京区小石川2-2-12  
電話番号03-5689-2271  
メールアドレス:iwafuji@rpi.co.jp

# 小清水早起

## レツツ防災

しぶとく

地道に

**時と共に薄れていってしまう「防災」**

### ( はじめに )

まずははじめに、私が現在所属している事務所の紹介をしたいと思います。名称は「環境・災害対策研究所」というNPO法人の研究所です。設立2年の少人数の事務所ですが、防災や危機管理に関する様々な仕事に携わってきた専門家の集まりです。主な仕事は、官公庁や地方自治体、企業等の防災関係の調査・研究業務と訓練支援業務で、時々講演会やワークショップ等の実施支援も行います。防災の仕事に携わり始めてからまだ1年ですが、これまでの仕事を振り返りつつ、私なりに感じたこと、考えることを書いてみたいと思います。

### (新潟県中越地震現地調査)

2004年10月23日、新潟県の中越地方で、マグニチュード6.8、最大震度7の地震が発生し、大きな被害をもたらしました。その約1週間後、私たちは被害の状況を確かめるため、現地調査に向かいました。

現地で見たものは、私にショックを与えるました。道路には亀裂があり、隆起・陥没し、路肩が崩れたりマンホールが突出していたり。悪路続きで車酔いしてしまいました。電柱は傾き、お墓やブロック塀は倒壊し、建物も軒並み崩れ、歩いていても平衡感覚を失いそうでした。

土砂崩れ等であちこちが通行止めで、建物には崩壊の危険度を示す応急危険度診断の札が貼られ、余震の心配もある中、住民の方は物を運び出したり片付けをしたりしていました。そんな中、調査とはいえ写真を撮ることに抵抗を感じていたのですが、「調査ですか?ご苦労様です。」と声をかけていただいたり、逆に励まされてしまいました。

地震発生から1週間で、避難所生活も定着化し、ライフラインの復旧工事や家屋の解体工事も始まり、ゴミが集積所に入りきらない程出されておりと、復旧に向けての応急対策の最中といった状況でしたが、住民の方々は私が想像していたよりも、たくましく感じられました。先行きの不安と戦いながらも、冷静に居られる強さのようなものを感じると同時に、防

同窓生  
からの  
便  
り



災(災いを未然に防ぐ、被害を最小限にとどめる、二次的被害を防ぐ)の重要性を改めて感じました。

### (北区荒川水害避難訓練)

2004年10月、荒川治水資料館主催のワークショップ「水害避難体験!~地図と足で避難経路を確かめよう~」の開催支援を行いました。洪水を想定し、指定した避難所までの避難経路を参加者自身が話し合って決め、実際に歩いて検証する、といった内容です。

災害時の避難所は行政が定めており、居住地域ごとにどこに避難するかが決められていますが、全ての住民に都合よく、避難しやすい場所にあるわけではなく、水害の場合は「高いところ」に避難するということもあります。特に年寄りや体の不自由な方にとっては一口に「避難」といっても簡単ではありません。指定の避難所まで行くことが困難であれば、別の避難に適した場所を知っておく必要があります。

ワークショップの参加者は、地域住民の



1階部分が完全に潰れ、倒壊している家屋。応急危険度判定の「危険」という赤い札が貼られている。

方がほとんどで、年配の方が多く、地域の過去の水害や地形などに詳しく、真剣に取り組む姿が印象的でした。

歩いて検証している途中に、側の建物の持ち主である参加者の方が、「ここに避難してもいいですよ」と申し出たり、「何十年も住んでるけど、この辺は一度も水がついたことが無いのよ」と教えてくれたり、「実際は雨も降ってるだろうし、荷物も重いわよね」「別の経路も今度歩いてみなくちゃね」等と、地域住民ならではの真剣な態度や着眼点に驚かされ、とても勉強になりました。

## ( お わ り に )

以上のように、僭越ながら私にとって印象深かった2件について、書かせていただきました。2004年は、私にとって「災害」「防災」というものを、強く意識し始めた年であり、その年を表す漢字1文字が「災」



自衛隊のテントに住民が避難している。

であったほど、災害の多い年でもありました。2005年に入ってからも、各地で地震が多く発生しています。

防災対策ができているかは、目に見えにくく、実際に災害が起こるとあらわになりますが、注目を集めますが、時と共に薄れていってしまいます。ですが、被害に遭った方の心からは、薄れることはないでしょう。いつどこで起るかわからない、明日自分の身に降りかかるかもしれない反面、生きている間には起こらないかもしれない危機的状況に対して、真剣に考え、対策を講じることは、忙しい現代社会においては、なおざりにされるのが自然なのかもしれません。ですが、それでは同じことを繰り返すばかりで、あまりに情けないと思うのです。

自然の猛威を完全に封じ込め災害をなくすことは不可能ですが、生じる被害を最小限に留めることができ、人間の知恵の見せ所です。私たちにできることは、過去の災害に学び、辛抱強く対策を講じ続けることだと思います。「防災」というと専門的で馴染みがない印象ですが、研究者や役人等の専門家だけが対策を考え講じれば良いというものではありません。一人一人の心がけがあってこそ、対策が生きてくるというものです。

人々の危機意識の弱さに始まり、自治体の体制整備、国による法的整備等、防



仮設住宅の建設現場

災・危機管理に関わる課題は多くあります。それらは環境、経済、教育等、様々な分野との関わりを持ち、一筋縄には解決しないものばかりです。だからこそ、まずは身近なところを、「防災」という観点から見つめなおしてみてはいかがでしょうか。小さな行動の積み重ねが、いつか大きな成果を生むと思うのです。

### ● profile

こしみず さき

## 小清水 早起

略歴

卒業年度 2004年 東研究室  
神奈川県立横須賀高等学校 出身高校

連絡先

NPO法人 環境・災害対策研究所  
〒106-0032 港区六本木7-12-2  
<http://www.iedm.ecnet.jp>

# 新田国男

## 循環型

### 社会構築に

### 向かって

## 同窓生 からの 便り



### 廃棄物から副産物へ

遠藤先生ご指導のもと1998年に建築学科卒業後、東京でゼネコンの現場監督を6年程経験し、徳島で解体工事業を営む実家へ帰るタイミングで、先生に挨拶に伺いました。その際、「新田の会社見に行くから」と声をかけていただきました。昨年、実際に会社を見て頂いたあと、先生からNICHEに君の原稿を掲載したいとのお話。卒業論文以降、文章に触れていないため、不慣れではありますが、寄稿させていただきました。

#### (机上から現実へ)

建築現場の監督として4年程経過した頃、秋葉原で鉄骨造9階建ての商業ビル建設を任せられました。いわゆるベンシルビル(間口7m×奥行き15m×高さ3.2m)ですが、中央通りと蔵前通りの交差点にあり、東京メトロ銀座線末広町出入り口にも面するため、前面歩道の歩行者は100人／時以上という悪条件のなかでの施工となりました。

小さな現場ではありましたが、自分の描いた計画が実際に現場に反映される

喜びは何ものにも替え難いものがありました。建築現場の面白さを実感し、このまま現場でやっていきたいとも思いましたが、最終的に実家の解体業の経営に専念することにしました。

建築工事では、図面が先行し、図面を基にすべての話が進められます。一方、解体工事の場合は、図面は殆ど用意されることはなく、共通仕様書も普及していません。解体工事のみをやっている人には、それが当たり前で図面がないのは解体工事のみであることすらわかつてないかもしれません。

解体しながら、現行の建築基準法と当時の基準等との違いを確かめつつ、そもそも安定している構造体を解体するという特殊かつ危険な作業の計画は、自分の感性を研ぎ澄ましていかなければならぬ非常に面白い職業と感じています。

また、解体工事と切っても切れない関係にあるのがリサイクル分野です。社会的に解体工事業に対する認識もまだまだですが、リサイクル分野はまだ20年程度の歴史しかなく、現在の社会的ニ

ズの高まりの割には、専門の高等教育機関もない分野です。リサイクルの共通仕様書はもとより、初心者の参考となる資料等も当時はあまりありませんでした。私の勉強は、産業廃棄物の種類に始まり、「発酵」と「腐る」の違い、「汚泥」と「汚染土」の違い等を理解していました。その上で、廃棄物の適正処理のルート造りには予想以上の努力が必要となりました。

住宅解体から発生する廃棄物を例とすれば、一般的なスタイルは、い草(織維くず)と断熱材としてのスタイル(廃プラ)、それを結束している糸で構成されています。さらに、今後、排出される廃棄物には、廃床に古紙やお茶の葉を圧縮したもの等も出てくるため、それぞれに分別し、リサイクルすることは相当な手間との戦いとなります。これについては、当面、焼却処分しかないだろうと諦めかけていました。しかし、参加したある講習会で、廃棄物をサーマル燃料として利用し、残渣の灰を焼成してセメント材料に100%リサイクル可能な施設のあることを知りました。その講習会には100人前後出

席していたと思いますが、多くの方が工場まで約150kmの輸送等を考え、夢物語と考えていたようでした。その時、私は、これはいけるかもしれない、いや、むしろやってみるべきだと思い、約1年間の事前打合せの結果、廃棄の工場への搬入ルートを確立することができました。現在、弊社で発生する廃棄に関しては100%リサイクルシステムが完成しています。

### ( 新たな挑戦 )

地方で住宅解体工事をやっておりまして、庭木類の処分がどうしても発生します。樹木の処理は、破碎しても結局は焼却せざるを得ず、その焼却灰は最終処分場行きとなります。どうしたものかと考えているとき、斬新な発想でリサイクルに取り組まれているある企業の社長に出会いました。

それは全く目から鱗で、近隣の畜産農家と共同するものです。現在、牛舎は掃除のしやすさから床は土間コンクリー

トとなっています。一方、牛にとって堅くて滑りやすい床はストレスの原因で、肉質が落ちるとも言われています。牧草は主に中国からの輸入品のため、むやみに下草には使えません。社長は農業のこうした事情にも精通し、破碎した樹木のチップを畜産農家に提供して下草の代用とします。牛糞とミックスされて回収したチップは発酵によって良質な堆肥となります。

ただし、これを大鋸屑でやつてもうまく発酵しません。木材中心部のくずは菌が少なすぎて発酵促進剤(菌)を別に購入して散布しなければなりません。樹木を破碎したチップは木の表面に付着している菌と大気中の菌によってうまく発酵します。また50~80℃の高温となるため、臭いもほとんど発生しません。針葉樹より広葉樹の方が臭いをより抑える気がします。高温によって雑草等の發芽も抑制され、堆肥として畑に撒くことができます。結果、CO<sub>2</sub>発生の抑制になります。



若松通商本社ビル

これまで解体・リサイクル分野に関わった経験から、これから環境問題を考えると、大きく分けて教育・推進対策・強制の3つの方策があると思います。教育とは、幼少時からの教育、さらに様々なキャンペーンやCM等によって知識・意識の向上を図ることです。推進対策とは、環境型企業への税制面配慮や環境銀行の設立、技術援助指導等となります。強制とは、当然のことですが、不適正排出事業者や不適正処理業者への命令・罰金措置、さらに低レベル排出事業者、廃棄物処理企業への指導・勧告となります。ポジティブには、教育と推進対策を重点的にしていくことが、今後の循環型社会構築のために必要であると考えます。

環境保護・リサイクルにはお金が掛かり、どんなに良い建築物、技術、理論も実社会ではコストが見合わないと、駆逐されます。人は損になることは決してしません。大学の講義で学んだ建築経済の考え方を今までに再確認しているところです。

京都議定書の発効により、CO<sub>2</sub>発生量の削減を求められています。私は10年後を見据えて、現在主流のサーマルリサイクルより進んだ、解体・リサイクルシステムを社会に提案できるよう、小規模ではありますが研究グループをつくり、小さな解体工事から地球環境問題に貢献する会社作りをしていきたいと考えています。

#### ● profile

### にた くにお 新田 国男

#### 略歴

卒業年度 1998年 遠藤研究室  
徳島県立城南高等学校 出身高校

1998年 工学院大学 工学部 建築学科 卒業  
1998年 株式会社 ユーディケー 入社  
2003年 株式会社 徳島機械センター 入社

#### 連絡先

徳島市新浜町2丁目3-29  
088-662-2057

# 久保 豊

## 倍半分の 世界

同窓生  
からの  
便



**50の手習い、幾つに成っても勉強。**

### (起業の経緯)

私の所属する基礎業界ではよく「倍半分」という言葉を使います。基礎の支持耐力等の評価値は実際の値の半分でも倍の値でも正解で、それだけ不確定要素が多いという意味です。私はこの言葉が好きです。若い頃はファジーなニュアンスで捉え、細かい事に拘らず、大局的に物事を捉える意味で考えておりました。今では基礎の精度の高い調査がなければ、倍半分の過ちを犯す恐れがあるという戒めで考えております。

私は、1974年に2部を、1976年に大学院修士課程を修了しました。正木三省先生が授業で「建築構造設計は一生食い外れる事はないぞ」と仰っていたのを聞き、卒論・修論は望月洵研究室に在籍しました。学部の頃は大阪万博・田中角栄総理大臣の日本列島改造論で、建築は花形産業でした。おのずと夢を持てた時代でした。しかし、修士を卒業する頃は2回のオイルショックでガソリン代は2倍に跳ね上がり、銀座のネオンも消え、バブル崩壊の時と同じ不景気でした。

当然、就職先もなく、困惑していた矢先、先輩の口利きで、東洋基礎工業株式会社(現 東洋テクノ株式会社)に入社する事が出来、基礎の仕事に就く機会を得ました。入社早々、本四連絡橋公団の大口径リバース杭の施工試験、鉛直・水平・振動載荷試験を経験させて頂きました。構造実験は好きでしたので、杭の載荷試験は私に合った仕事でした。その後、杭の載荷試験を専門にした地盤調査事務所に転職しましたが、1988年にその会社は倒産してしまいました。必要に迫られ、後輩の皆川君と一緒に、会社を起こし今に至ります。倒産時の客先からの応援や、望月洵先生をはじめとして構造系の先生の指導を受けた事もあり、順調に前の会社の仕事を継承出来、徐々にですが仕事の幅を広げ発展させる事が出来ました。

### (会社の業務紹介)

私たちの会社の業務は、大きく分けて2つの部門から成り立っています。ひとつは、土木・建築工事全般においての

計測業務です。もうひとつは、建設関係のコンサルティング業務です。

計測業務のうち主要なものは、杭の載荷試験です。杭の載荷試験を専門的に行っている業者は全国でも数少なく、官公庁研究機関、大手ゼネコン、杭製造業者等の依頼で、各種の実験工事を行ってきました。また、建設現場において施工された杭の支持力確認を目的とした、確認試験も数多く実施しています。概に、杭の載荷試験といつても、載荷荷重の大小、載荷荷重の向き(鉛直方向・水平方向・押込み・引抜き・交番など)、載荷時間の違い(静的載荷・動的載荷)、などの組み合わせにより様々な試験方法が考えられます。載荷荷重は近年、杭の高性能化に伴い大きくなる傾向にあります。私たちの会社の実績で最大の押込み試験荷重は60MNで、これは国内で最大級と自負しています(写-1)。

また、2002年に地盤工学会から「杭の鉛直載荷試験方法・同解説」が改訂され、初めて動的な載荷試験が規準化されました。動的載荷試験は、静的な押

込み試験と比較すると、工期の短縮・工事費用の削減などで有効であり規準化後、動的試験の実施件数が増えています。動的な載荷試験には「急速載荷試験」「衝撃載荷試験」の2種類が制定されています。私たちはこの2つの試験方法も、いち早くとりいれ実績を積んでいます。急速載荷試験の実績では、試験荷重は20MNで、おもり500kNを高さ4mから落下させる試験で、今のところ国内で最大級のものです(写-2)。従来の静的載荷試験に比べ半額の費用と反力杭が不要であること、静的載荷試験と同等のデータが得られるメリットがあります。また、水平方向の急速載荷試験の装置も開発し、実験を行っています。

最近の建設業界の傾向として、既存杭の再利用を計画することが、以前に比べて多くなりました。これは、既存の建物を撤去して、その後新たに建物を建築する場合、工事費用を抑えるために既存の基礎杭を再利用しようという計画です。この計画が実施可能か否かを調査するには、既設杭の載荷試験は不可欠です。その他に、杭の非破壊試験を中心とした既設杭の物性調査、周辺

地盤調査、なども行います(写-3)。

建設関係のコンサルティング業務では建築設計、耐震診断・調査などのほか、杭基礎に関する、新工法の開発・実験・評定審査資料のまとめ業務等を行っています。杭基礎の工法が公的機関の評定審査を通過するためには、工法マニュアルの作成・載荷試験の実施・支持力機構の解明・報告などを行ないます。最近の傾向では、杭の大口径化、支持力の増大化を目的とした工法の新たな開発が増えている一方、軽量建築向きの小口径杭の開発も増えてきています。住宅品質確保促進法(品確法)の制定により、住宅性能表示の一環で、小口径杭の耐力性能を正確に表示できる載荷試験を含めた安価なシステムを開発しております(写-4)。興味ある方は以下のホームページを見て頂ければ幸いです。(http://www.systemkeisoku.com>)

世界では、今後特に明確な性能表示が求められます。そのためには、今まで培った載荷試験を中心とした技術を更に研鑽して、より合理的な試験法や、杭・地盤施工管理法の確立等のより安価で正確にデータを提供できるシステム開発を進めて行きたいと考えております。また3年前に、今までの経験・実績をまとめる意味で、秋田県立大学の博士後期課程に通っております。今年が3回生で、只今、博士論文の作成中です。「50の手習い」、「幾つに成っても勉強」と思い、自分自身に鞭を打っているところです。今後とも、今まで育ててくれた世の中に役に立てる仕事を行ないたいと考えているのと同時に、若い人材の育成に力を注いでいきたいと思っております。

## ( 今 後 の 展 望 )

品確法の制定により、世の中の機運は性能表示の責任が求められております。特に「倍半分」で通じる杭・基礎の



写真-1



写真-3



写真-2



写真-4

● profile

## 久保 豊

### 略歴

東京都聖パウロ学園卒  
1974年3月 工学院大学建築科2部  
(望月 淳研) 卒  
1976年3月 工学院大学大学院修士課程  
建築科コース 修了  
2003年4月 秋田県立大学  
大学院後期博士課程入学  
現在3回生  
1976年4月 東洋基礎工業?(現東洋テクノ?)  
1977年4月 駿河台基礎工業株式会社  
1988年3月 システム計測株式会社  
代表取締役  
技術士(建設部門)・一級建築士

### 連絡先

〒130-0026  
東京都墨田区両国1-13-1  
Tel／03-3635-8556  
Fax／03-3635-8573  
E-mail／main@systemkeisoku.com  
<mailto:main@systemkeisoku.com>

# A round the W orld



## 宮原 かおり

豊かで奥が深いイギリスの  
ランドスケープ



英国の地図 スウィンドンとペンリーの所在地

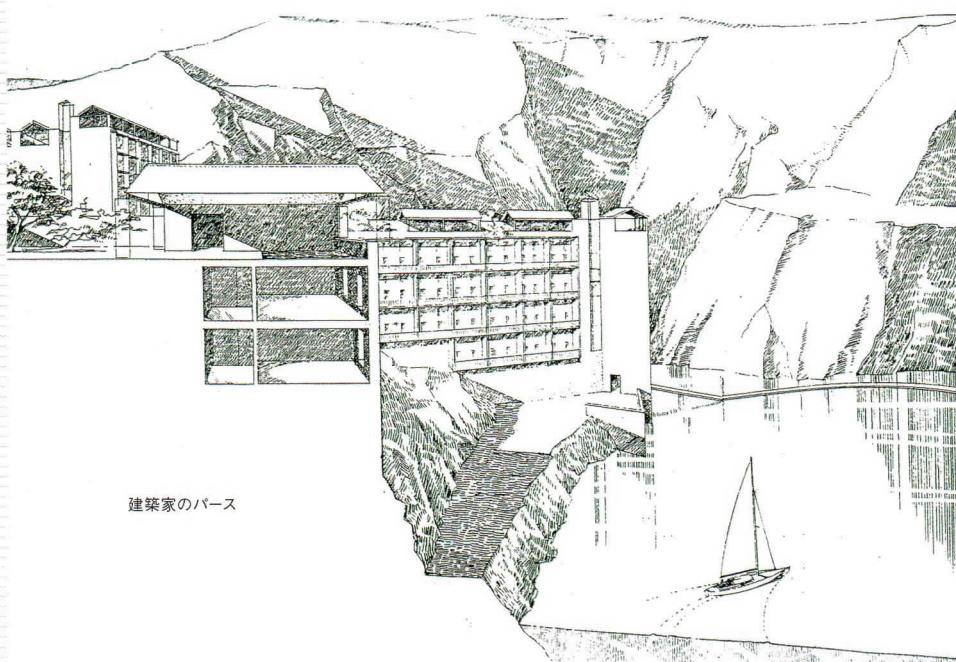
### はじめに

今回、同窓会誌NICHEの「around the world」のコーナーに海外での仕事の体験談を書いてほしい、と依頼を受けたときは果たしてまだ発展途上の私などに何が書けるだろうかと、疑問に思いました。卒業して早10年、まだまだ駆け出しの気持ちで日々働いているのが

現状ですので、私に諸先輩方のような大役が果たせるのか心配ですが、私の拙い経験が後輩の皆さんにとって、少しでもお役に立てるならという思いからペンを取りました。そしてこの原稿を読んで、少しでも多くの皆さんにランドスケープに興味を持っていただけたら光栄です。

### ランドスケープとの出会い

そもそもランドスケープ・アーキテクチュアという言葉と出会ったのは、工学院大学三学年の時でした。当時日本の新鋭ランドスケープ・アーキテクトとして活躍されていた三谷徹氏が、特別講義の中で、ランドスケープとランド・アートを紹介してくれました。その時の感動を言葉にするのは難しいのですが、何故だか分からぬけどワクワクし、「こんな楽しい世界があったのか。建築よりもランドスケープの方が面白そう。」



建築家のバース

という、実に単純なものでした。初めてランドスケープ・デザインという分野を知ったこの時の感動が、現在歩んでいる道の第一歩を踏み出すきっかけとなりました。

幸運にも学生時代に三谷氏の働くランドスケープ事務所でアルバイトをする機会があり、その貴重な経験から卒業後はランドスケープ事務所で働くことを決心しました。しかし、時代は既にバブルが弾けた後の就職氷河期と呼ばれる時代に突入しており、なかなか思うように就職先は決まりませんでした。最終的には都市計画とランドスケープを手がける事務所に就職が決まり、その後三年間この事務所で働きました。建設業界同様の長時間労働と、就職二年後からは一級建築士の資格試験の勉強も開始してかなり辛い思いもしましたが、この時培った忍耐力とスキルが今日英国で働くにあたって、とても役に立っています。その後、本格的にランドスケープを学びたい気持ちが高

まり、英国留学を決意しました。留学費用を貯める目的で派遣社員として大手の建設会社で二年間働き、2000年10月、晴れて英国留学を果たすことが出来ました。

ると同時に仕事もステップアップしてきたことで、卒業後は英国で正規の職に就く自信もつき、採用の面接試験にも落ち着いて臨むことができました。その結果、念願のラ

む工業地帯の開発に携わるようになったのは、1937年ジエフリー・ジェリコー（1900-1996）ランドスケープ・アーキテクト。1929年に創立した英國造園家協会の創立メンバーの一人でその後10年間会長を務めた。著書は多数あるが日本語訳されたものでは彰国社から『図説・景観の世界』が出版されている)が手がけた「ホーブ採石場の50年間復興計画」が始まりです。このホーブ採石場の50年間復興計画が終わりを迎えた1987年、当社の代表であるデビッド・ジャービスがジェリコーの意思を受け継ぎ、1987年以降50年間の復興計画を手がけました。現在では、採石場の開発、工業地帯の建設物などの開発許可を得る場合、ランドスケープ・アーキテクトの計画無しには許可が下りないといつても過言ではありませんし、英國ランドスケープ会社の多くがこれらの仕事に携わっています。しかし、私自身日本のランドスケープ会社において採石場に関わる仕事に携わることはませんでしたし、同級生達の仕事を考えても採石場に関わるランドスケープの仕事は日本においては比較的珍しい分野の仕事であると思います。日本では珍しい採石場のランドスケープ・デザインについて、以下に紹介したいと思います。

### 採石場にまつわる仕事

採石場とランドスケープ・デザインの関わりは実に多様です。現在携わっている四つのプロジェクトも、それぞれ異なる段階や側面を持つ

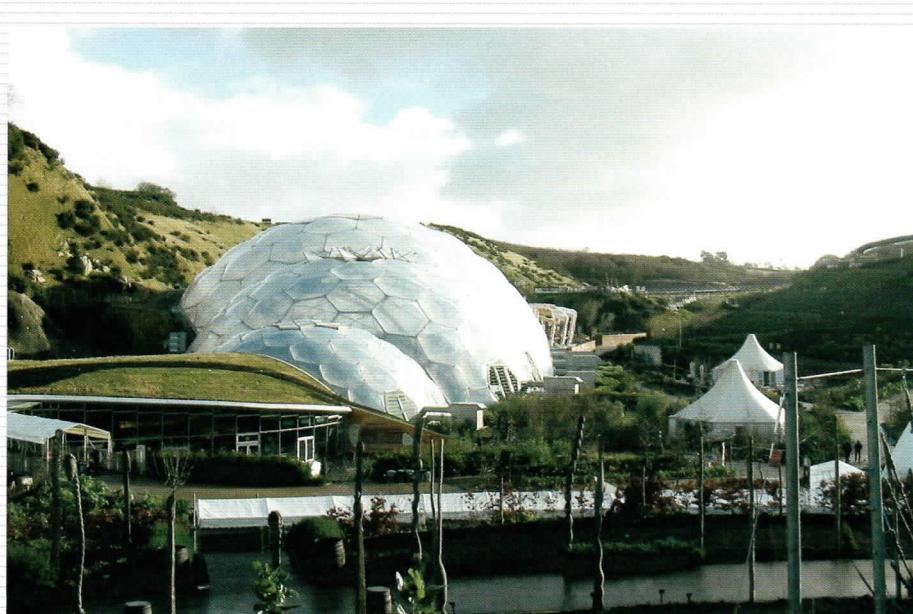


イギリスのセント・マイケルズ・マウント

語学力の不足を補うために、最初は語学を学び、その後グリニッジ大学の修士課程に入学しました。幸運なことにグリニッジ大学に入学する前の夏休みの期間に、知人の紹介でロンドンにあるランドスケープ会社でボランティアとして働く機会を得ることができました。二年目の夏休みには、求人広告を頼りに仕事を探し、他のランドスケープ会社で有給のアルバイトをすることができました。このように、除々に英国の生活に慣

ンドスケープ会社への就職が決まりました。

現在はロンドンから約129Km西にあるス温ドンという街でランドスケープ・アーキテクトとして働いています。現在勤務するDavid Jarvis Associatesで、私が担当しているプロジェクトは五つあります。そのうち四つのプロジェクトが、我が社の主要なプロジェクトである採石場に関わる仕事です。そもそも、英国でランドスケープ・アーキテクトが採石場を含



Eden Project



Eden Project Main Map 2004

仕事と捉えることができます。これらのプロジェクトの様々なプロセスを通して日々多くのことを学ぶことができ、飽きることがありません。

プロジェクトの一つ目は、これから採石するに当たって、ボーリングデータや土地の状況などを調査している段階です。このプロジェクトからは、初期段階において採石場の候補地から採石場所をどのように確定していくかを学ぶことができます。

次のプロジェクトは採石場として長い歴史を持つ物件で、これから新たに採石場を拡大する為の許可申請を提出する段階です。これは、採石場の拡大によって生じる視覚的变化をZVI(ゾーン・ヴィジュアル・インパクト)分析やフォトモンタージュなどを使って解析します。

三つ目のプロジェクトは一般の人々への教育を目的としたCD-ROM作成のための3Dの擬似採石場を作成する仕事をです。このCD-ROMを用いると、3D空間を人々がマウスを操作しながら様々なリンクページに移動することができます。採石後の跡地はどのような利用が可能か、採石場は自然環境にどのような影響をもたらすか、という

内容について採石場の空間を疑似体験しながら勉強できるのです。

最後のプロジェクトは、コーンウォールの採石場跡地のマリーナ開発に関する仕事です。建築とも関係の深いこのプロジェクトについての概観と、現場での心温まるエビソードを次に述べたいと思います。

#### ペンリー採石場プロジェクト

ペンリー採石場は英国の南西コーンウォールの更に最先端の街ペンザンス(Penzance)の南側3kmの辺りに位置します。マリーナ開発業者であるMarina Development Ltd.が旧硬岩採石場であるこの土地を購入したことに始まり、マリーナ、ホテル、商業施設、住宅地区などの混合開発がこのプロジェクトの目的です。開発に向けて新たに採石が必要な点と、マリーナ、新設道路、橋などの技術者が必要な点から、地質学専門チーム、マリーナ開発業者、建築家、そして私たちランドスケープ・アーキテクトと様々な専門家が介入しています。

我が社は、建築家がプロジェクトに加わる前段階に、建物のレイアウトを含む全体

計画を担当し、住民説明に参加しました。現在はその基本計画から発展して、建築家が独自の視点で建築設計を担当し、我が社は外構設計を担当しています。施主、建築家、地質学の専門家、私たちランドスケープ・アーキテクトの間で、全体計画が合意した昨年末、この開発計画のランドスケープ・ビジュアル・インパクト・アセスメント(環境アセスメントの一部)と現地調査の為にコーンウォールを訪れました。

ランドスケープ・ビジュアル・インパクト・アセスメント上大切なことは、最初に土地の情報を得ることです。ペンリー採石場のある界隈は港町で観光が盛んな土地だと聞いていましたが、クリスマス前



住民説明時の全体計画図。全ての住宅から海及び、マリーナが展望できるよう考えながら、テラスの高さを決めていきました。



するエリアが各地域計画の中にあります。今回の調査でもこれらのエリアから現場がどのように見えるのか、という点がアセスメントの際に特に重要でした。現場の採石場が海岸線に沿った位置にあり、海岸線に沿って遊歩道、AONBに指定されたエリアがあることから、ビジュアル・インパクト・アセスメントにおける多くの視覚的重要ポイントは海岸線になりました。26カ所の視覚的重要ポイントとなる場所にそれぞれ出向き、写真を撮り、その海岸線からみえる風景の一部として現場がどのように見えるか、そして開発を加えることによってどのようにその風景が変化するのかを考えながら、アセスメントを行いました。

このアセスメントを通して、建築物がどのように土地の景観に影響を与えるか、またよりよい景観を作る為に我々は何ができるのか、という点を改めて考えさせられました。英国は美しい田園風景や町並みで有名ですが、これらは美しい風景を大事にする人々によってコントロールされた風景です。コントロールすることは、開発を止めることでは

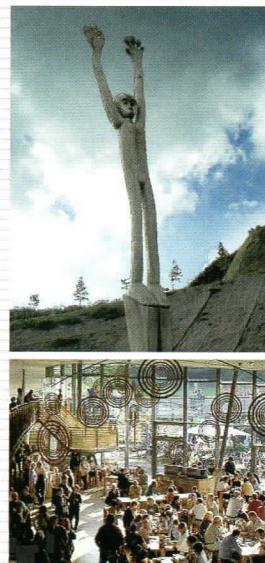
なく、開発が景観に影響を与えない、または開発が景観によりよい影響を与えることを意味します。英国の採石場は採石後、大抵の場合表土を戻し、自然に帰化します。これは消極的な方法ですが、最近では「エデン・プロジェクト」など、採石後積極的にその土地の形状を利用する開発も目立ってきています。開発を風景の一部として考え再度デザインを見直す方法は、英國に限らず日本の風景を守る為にも利用可能な大切な視点であり、ぜひ積極的に取り入れていきたい方法であると思います。

5日間のコーン ウォール滞在中、寒い中で近郊の海岸線に立ち写真を撮ってはメモを取ることをくりかえし、最終日にはかなり疲労もたまっていました。帰路の途中、同行した地質学者のジェフリー・ウォルトン教授が「家に新鮮な魚を買って帰らなくっちゃ。」と言い出し、私も普段スウインドンでは買えない新鮮な殻付ホタテを便乗して買うことに決めました。地元の魚屋さんが「ホタテはあいにくまだ掃除していないんだよ。」（英国人は肝やひもを取り除

いて貝柱だけを食べます）と言うので、「日本人は全部食べるから、掃除してないままで下さい。」と伝えると、大きな殻付帆立貝を12個発砲スチローの箱に氷と共に詰め、「君はよほど魚が好きなんだね。メリークリスマス！」と渡してくれました。代金を払おうとしたら、魚屋のおじさんはにっこり笑って、「これは私からのクリスマスプレゼントだよ。」と言いました。それは、大きな帆立貝と共に最高の心温まるクリスマスプレゼントに感じました。このような地元の人との出会いを通して、彼らのためにもさらに良い仕事をしなくては、と気が引きしまると同時に、元気も出てきました。

#### 風景の一部としての建築 という視点

実は英國においても兎角ランドスケープというと、庭師と同様に考える人がいます。けれども建築の世界と同様にランドスケープの世界も幅広く、豊かで奥が深いものです。今回はその中からランドスケープのごく一部の仕事



Eden Project

を紹介したに過ぎません。ヨーロッパでは、先に挙げたコーンウォールのエデン・プロジェクトのほかにも、ドイツのThe Duisburg-Nord Landscape Parkや、ロンドンのThames Barrier Parkなど魅力的な新しいランドスケープ・デザインを見ることが出来ます。ヨーロッパへの旅行の機会には、ぜひこれらの新しいデザインを見学することをお勧めします。また同時に、街中や田舎の何気ない風景をランドスケープ・デザインの視点を持って眺めて頂きたいと思います。そこから何かを感じ取ることができます。なぜその風景は美しいのか。なぜこの風景は醜いと感じるのか。建築をデザインする際にも、「風景の一部としての建築」という視点で周囲を観察する視点を身につけると、自ずとデザインも変わっていくのではないかでしょうか。



**宮原かおり**  
1995 工学院大学 建築都市デザイン学科卒業(沢岡研究室)  
1995-1998 ジオ・デザイン  
1998-2000 三井建設株式会社(現・三井住友建設)  
2003 University of Greenwich Master Landscape Architecture修了  
2003-現在 David Jarvis Associates Ltd.一級建築士・MLA連絡先  
David Jarvis Associates:  
1 Tennyson Street Swindon, Wiltshire UK SN15DT  
E-Mail:  
<kaorimiyahara@hotmail.com>  
Tel/+44 (0) 1793 612 173  
Fax/+44 (0) 1793 613 625

A round the  
W orld



マ・ホンイエン

# 馬 洪 岩

中国における商品住宅の最新動向

敷地面積18.5ha 延床面積35万m<sup>2</sup>



## 「土地使用権転譲条例」 の施行

中国では1990年に政令「土地使用権転譲条例」が施行され、中国の不動産業界にとって歴史的な発展期を迎えた。以来現在までの15年間、住宅関連の投資額はほぼ毎年20%以上の増加率を示し、GDPにおける不動産シェアは7.8%を占め、いまや中国を代表するトップ産業となりました。

中国では建国後1950年代に土地が公有化されて以来、個人の住宅所有は認められていません。都市部では、国家・企業などの建設・所有する公有住宅が多数建設され、きわめて安い賃料で社宅として従業員に貸与されています。しかしこの制度では、財源不足などから人口増加に見合う新規住宅の建設および老朽化対応の建て替え・修繕などが遅れがちとなり、都市部における

住宅不足や住環境の悪化が深刻な社会問題にまで発展しました。このような問題に対処するため、中国政府は1980年代後半から公有住宅の払い下げモデルプロジェクトを実施しており、賃貸住宅の改革などを進めましたが、十分な成果があがらず、さらに改革を進めていています。1994年には、「都市住宅制度改革のさらなる推進に関する決定」を公布し、一連の住宅改革計画策定を決定しました。さらに、2000年1月からは「住宅商品化・貨幣化」の完全実施が行われています。

## 新しい住宅市場の成立

- それによって
  - ①住宅供給機能を国家および企業から切り離し、住宅を個人が対価で購入できる商品として修正。
  - ②商品化された住宅が取引される住宅市場を育成。
  - ③個人が購入するための資

金供給システムを形成。

そして、1990年から第1次住宅消費ブームを迎えた。商品住宅販売面積は1991年の2,745万m<sup>2</sup>から2000年の16,570万m<sup>2</sup>と大幅に増加(年増加率22.1%)しました。特に商品住宅販売の個人購入は2000年の段階で87%にも達しました。

#### 住宅民間需要拡大の要因

住宅に対する強い民間需要は、次のような点が原因と思われます。

①古い分配住宅の持ち主から発生する新規商品住宅の買い替え需要。

②改革開放後の市場経済環境の中で形成した都市部新興中産階級から発生する「マイホーム」購入の住宅需要。

③外国からの直接投資の増加による海外投資家や、外資系企業の駐在員用住宅。

④低金利と低迷する株価(中国の株式市場)の状況から、蓄積された一部資金の投機あるいは投資的行為としての住宅需要の拡大

#### 高すぎる住宅価格

しかし、全国的な住宅ブームの中にいろいろな問題も現れました、住宅不足と高空室率の問題はその一つです。2004年全国商品住宅の空室面積総量が1.23億m<sup>2</sup>(2005年も1億m<sup>2</sup>以上と予想する)、空室率(空室面積/竣工面積)が29%に達しまし

た。一方都市圏人口の60%は面積が10m<sup>2</sup>/人以下の住宅に住んでいます。その中の10%は住宅困窮状況です。その原因は住宅の価格

が全体的に高すぎます。一般的に住宅の合理的な価格は世帯収入の3~6倍ですが、中国(特に大都市圏)では10倍以上に達します。北京、上海市中心地域は更に高価格です。そして一部の地域に不動産バブルが既に現れています。この問題に政府は迅速に対応し、2004年から中央政府は調整政策を実施、2005年前半には更に一層厳しい措置を取った結果、急騰していた住宅価格は上海地域を中心とした値下がり始めました。

#### 長期化する住宅需要と、中低額価格の住宅供給が課題

長期的に見ると、中国において住宅の需要量はまだ大きいと思われます。都市化率で見れば先進国の平均75%以上と比較して、中国はまだ36%と遙かに少ないので現状です。今後人口の都市化率が進行すれば、2010年に

45%、2050年に70%に達すると予想されます。つまり年間1~1.2%というペースで増え続けます、これを2050年までの年間住宅の需要量に換算すれば、13(億人)×70%(農村人口)×1.2%(年間都市化率)×35(平均住宅面積m<sup>2</sup>/人)≈4.3億m<sup>2</sup>/年とな

ります。この試算の中には、人口増加の要素が入っていないません。2025年頃には中国の人口は16億人のピークに達する見通しです。

今後は、いままで蓄積された消費パワーが一段落すると予想され、不動産業界にとって中低所得層の中低価格住宅供給が重要な課題になると考えられます。土地供給政策や税制度の面で、ハイエンド物件よりも一般労働者

向けの中低価格物件の開発を刺激するような政策が大いに期待されています。

**馬 洪岩(マ・ホンイエン)**

Email:

mahongyan99@msn.com

1986年中国の武漢城市建设学院 都市計画学科卒業、中国山東省建築設計研究院などで建築設計に従事。2000年来日、2001~2002年工学院大学谷口研究室で研究生として在籍、2005年千葉大学大学院修士課程修了。現在、清水建設国際設計部勤務。



フ棟標準層戸型平面図

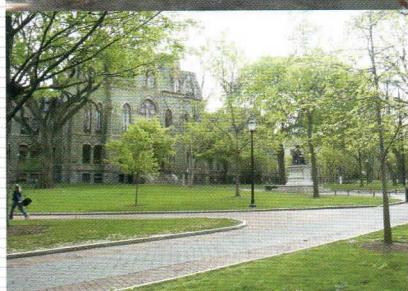
# A round the W orld



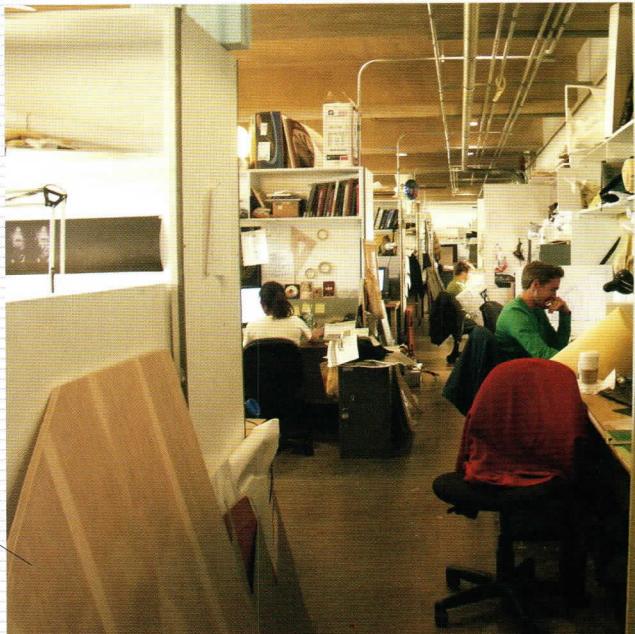
## 渡辺 美緒

社会人入学のチャンスから、  
ペンシルベニア大学で、  
一喜一憂奮闘中です。

ベネズエラでの集合写真



大学のメインキャンパス



スタジオ風景

私は、2003年に工学院大学建築学部2部を卒業し、現在、米国のペンシルベニア大学のデザイン学部で、ランドスケープ学科と建築学科のそれぞれの修士課程で学んでいます。現在、2年目が終了し、卒業するまで残り1年を予定しています。

今日は、私がペンシルベニア大学でどういう体験をしているか、それぞれの学科での経験を、NICHE読者の皆様方にご報告したいと思います。

### Landscape Architecture

この学科のDeanでありこの学科の教育方針を決定している、James Cornerが必ずいことは、How to read the siteです。それは、その土地の特徴を読み、魅力を最大限引き出し、いかに地域を良好にtransformさせるか、です。そのシナリオをphasingなどで理論的に展開できれば、高く評価してくれます。

たとえば私が取ったあるスタジオでは二つとも、高速道路により都市が分断された、寂れた工場地帯、がサブでした。しかし、一つは地元フィラデルフィアの工場地帯、もう一つは南米ベネズエラの工場地帯です。当然、多くのインプットすべき要素がからんでくるので、結論はまったく違うものになります。

同じランドスケープでも別の性質のプロジェクトも経験しなくてはなりません。広大な自然保護の森林を自然の特徴を活かしたまま手を加える(Disturbance Studio)、という課題では、植生や河川や土壤の生態系を踏まえてどう変えることができるのか、それが社会にどういう価値があるのかなど、です。

ランドスケープでは、たくさんの要素を踏まえて必然的なプログラムを導き出し、それを踏まえてデザインするというプロセスが見えてきて、ランドの面白さが少しづつ分か

ってきました。また、アーバンデザインも大きなスケールから、ヒューマンスケールまでスケールを切り替えて考えることの大切さも見えてきました。ランドスケープを勉強すると、このスケール感にいつも悩まされます。まず、1:4,000ぐらいからデザインを始めます。そして、1:2,000、1:1,000、1:200、最終的には1:50ぐらいまで何度もスケールを変えてデザインしていくのですが、たとえば、1:1,000で見えるものと、1:200で見えるものは、まったく異なるため、それぞれのスケールでのデザインのバランスをとるのが大変です。

## Architecture

Dual degreeの私は1年目にランドスケープに専念していたため、これまで、建築のスタジオはまだ1つしか取っていません。昨年の建築のスタジオでは、フラクタル手法を課題にした、ニューヨークのハドソン川をサイトにしたスタジオを取りました。同時に、セシルベルモントとサンフォードクィンターがこのテーマの理論的な授業をいくつか教えていたため、このハドソン川スタジオを取ることで彼らの授業で教えていることを実地で経験できたので、私はフラクタルを課題にした理論と技術の両方を学べて幸運でした。

フラクタル理論は、ランドスケープのデザインにも使えます。このスタジオは、アルゴリズムを利用して、フラクタルを

生成し、構造物をデザインします。たとえば、タービュランス（流体の乱流）の幾何学的パターンを導き出して、それを建物の構造の制約に合わせて使うという具合。ランドフォームに興味のある私は、Stochastic Fractal（統計モデルによるフラクタル生成）を利用して、2層分のランドフォームのEdgeを決定し、デザインしました。このEdgeの決定は、川の形態や、星の配置と同じく、フラクタルなパターンに依っています。

## コンピューターについて

一昨年前まで、ランドも建築も一年生のみはプレゼンテーションはすべて手書き、模型も手作りが基本でしたが、昨年からは一年生もコンピュータを使用してよいことになったそうです。最初からRhino、3dsMax、Mayaで、デザインを構築していくわけです。一年目はランドスケープ学科で、ペンと鉛筆と木炭で両腕を動かしていた私は、手書きの微妙さ、自由さが好

きでした。でも建築学科に移った途端、コンピューターを用いて3Dの画面上でデザインを構築させられるので、コンピューターで自分らしいものを表現することに慣れるのに時間がかかりました。どんなに面白いデザインを提案しても、それを表現する技術がないと、まったくつまらないものに見えてしまいますから、コンピューターによる技術の更新は怠れません。

講評会では、国内外からJury（クリティクス）を呼んで批評してもらうのですが、うまくヒットすると絶賛されますが、一方で、批判するときは本当に手厳しいです。私が見ているところ、彼らの個人的好みによるところも大きいような気がします。Juryの評価は発表者の口頭説明の論理



デザイン学科の校舎

展開の良し悪しでも、評価が大きく分かれてしまいます。私の場合、反論材料があるでも、英語での反論がついでいはず、一度あまりの悔しさに大泣きてしまいました。その逆に、全員のJuryが非常に好意的に話を展開してくれて、たいした説明をしてなくても高い評価を受けたこともあります。毎日、天に昇ったり、どん底に叩き落されたり、一喜一憂しています。

工学院の諸先生方には大変よい指導を受け、工学院に来て本当によかったです。特に山本理顕先生、東正則先生、藤木隆明先生、物理の岡村浩先生には、社会人入学で建築の経験のなかった私に様々なご指導やチャンスを与えてください、本当に感謝しています。

**渡辺美緒**  
2003年3月 工学院大学建築学部2部  
(山本研究室)卒業  
2003年9月  
University of Pennsylvania  
Graduate School of Design  
Master of Landscape  
Architecture /  
Master of Architecture 在学中  
住所  
2101 Chestnut Street #207  
Philadelphia, PA, 19103  
USA  
mwatanabe757@hotmail.com



デザイン学科の図書館

## シカゴ

3月下旬だったが、凍てつくような寒さとミシガン湖から吹きつける強風の洗礼を受け、ここが北国だということを思い知らされる。シカゴは北緯41度50分で北海道の函館とほぼ同じ位置になる。函館で生まれ育った私にとって寒さはそれほど苦ではないと思っていたが、超高層街によって凝縮されたビル風が予想以上の体感温度となっていた。ダウンタウンは、建物の隣棟間隔が狭いため、超高層が圧倒的な迫力をもって見える街並みである。

シカゴは1871年の大火によって市街地のほとんどを失っており、その後、シカゴ派を代表するバーナムやサリヴァンによって、近代的な高層のオフィスビルが次々と建設されている。バーナムによるリライアンス・ビルは、一時取り外されていたコーニスが復活しており、元の美しい姿を見ることができた。サリヴァンによるオーディトリアム・ビルのファサードの粗石積みの基壇部は、リッカルディ宮のように上層にいくにつれて凹凸が弱くフラットなものとなり、ピッティ宮のような簡素さと力強さを持っていた。これは現在、劇場以外は大学の施設となっており、現役の威風を保っている。

街区をこえて超高層が2棟並ぶミースのシカゴ・フェデラル・センターは、北側に大きな広場が配置されている。足元はピロティになっており、室内はガラスに覆われているため、街路や広場に対してはこのピロティが縁側空間のような中間領域になっているこの空間が、街路いっぱいに壁を押し付けているビルの圧迫感を軽減している。シカゴにあるビルの多くがこの形式を採用しており、車道まで建物を建て、ピロティ空間が歩道を兼用している例も少なくない。

シカゴ派の建築は、ファサードの美しさによって街路空間を演出していたが、ミ



ース以降の超高層は足元をピロティで開放することにより、街路空間の広がりを演出していたと考えられる。コルビュジエによって、場所性に依らない国際様式の条件として定義されたピロティが、アメリカでは超高層ビルの足元空間に広がりと豊かさを与えるための手法として扱われていた。

#### タリアセン

F.L.ライトが創作活動の拠点としていたタリアセンは、シカゴよりさらに北西に位置し、北緯約43度と札幌や旭川とほぼ同位置にある。この時期はまだ雪も残っており、ライトが北國の人間だったということを実感させられる。タリアセンとはウェールズ語で「輝ける額」の意味であり、丘の頂上を庭(輝ける額)とし、そこを取り囲むようにコの字型に配置されている。建築物は、斜面に建てられているため、周辺からは全体のボリュームを認識できるが、庭の中からの視界には、地を這うような軒と大きな屋根が大部分を占めており、入口がぽっかりと口を開けている。他にもいくつかの建築群が谷を越えた丘や斜面に建てられており、敷地の広大さに驚かされる。それぞれの建築が地所に馴染み、無限に広がる敷地から土地の起伏を利用して生活の領域を囲い込む特徴的な構えを持っている。

#### ボストン

ボストンはアメリカ最古の街であり、独立運動発祥の地として知られている。現在、ボストンではアメリカで最大の公共事業である「Big Dig」が進行中である。これは1950年代以降に、ダウンタウンとウォーターフロントを分断していた高架の高速道路を地中に埋設し、地上部を公園化することで繋げ、都市の活性化を計る計画である。総工事費は



1.リライアンス・ビル  
2.オーディトリアム・ビル  
3.タリアセン(屋根の上から)

現在146億ドル(1兆6000億)であり、当初予算の26億ドル(2800億)から6倍に膨れ上がっている。工事は1991年に着工し、工事完成予定が2004年であった。しかし、現時点では高速道路の埋設は終了しているが、地上部の整備がされていない状態であるため、工期通りに竣工する見込みは無い。市民側は、州議会から予算が割り当てられており、独自に都市計画家を雇い、計画の変更を議会に働きかけることができるような体制となっている。しかし、これが計画を長引かせる原因ともなっており、地上部の工事が始まるのは2006年以降と言われている。ボストン在住の友人から、現在車でこの付近を移動すると、頻繁に道路の出入り口や道路そのものが変更になっているのでとても不便だという話を聞いた。

アメリカ人のボストンに対する意識は、日本人が京都を思う以上であり、これを現在同じような問題として話題になっている日本橋に重ねて考えると先行きは暗い。

ボストンは古い町並みが多く残っており、高層ビルが少なく長閑な街である。コルビュジエやアルト、サーリネンなどの近代建築の作品があるMIT大学やハーバード大学などもあり、見所も多かった。

#### ニューヨーク

マンハッタンは街区が直交グリッドによって割り付けられており、対角線状のブロードウェイによって変化を作り出している。ブロードウェイにより特徴付けられた街区は、タイムズ・スクエアや、フラットアイアン・ビルなどの建築物を産み出している。街区が強い枠組を構築しているため、個々の建築の中に納められたアトリウムや、ペイリー・パークのように街区に挿入されたポケットパー

- 4.ペイリー・パーク
- 5.タイムズ・スクエア
- 6.グッケンハイム美術館
- 7.食事を楽しむ
- 8.フラット・アイアンビル

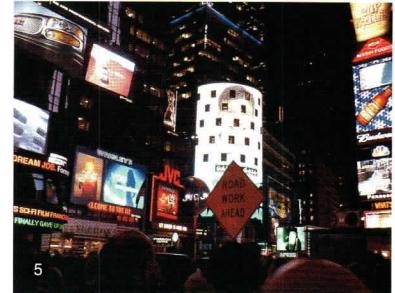
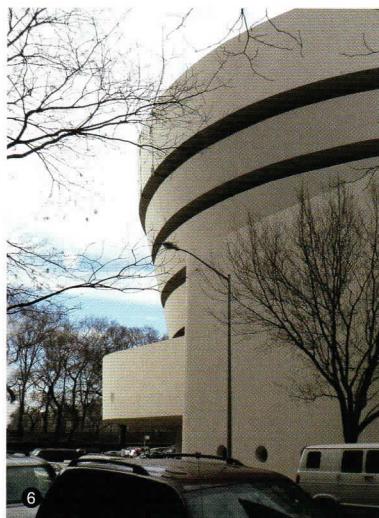
クを有効に活用することで都市空間の豊かさを演出している。ライトが、グッケンハイム美術館の渦巻状の円錐部分を、歩道上部に庇を提供するという意味で張り出させていたが、役人に認められず、最上部だけが垂直に立ち上がっているという話しにもその枠組の強制力を見ることがある。

マンハッタンの超高層ビルは、1916年のゾーニング法によってヴォリューム制限がされている。そのゾーニング法に基づく理論的外形の多くをヒュー・フェリスが作り、そのヴォリュームに建築家がデザインを施していく手順となっていた。敷地の範囲で上方に一定の高さまで立ち上がり、それからステップ・バックしていくため、街路を歩いているときには、超高層ビルの存在に気づかないほどであった。セットバック無しで狭い道路に面して立ち上がるシカゴとはこの点で異なる。

タイムズ・スクエアは建築物全体が交差点に対して注意を向けさせるように、看板やネオン、ガラス張りのショーウィンドウが立ち並び、都市空間が高度に内部化された場所であった。ブロードウェイ・ミュージカルの公演前後のこの場所における活気は、東京では体験できない程の迫力があった。

### おわりに

アメリカの3都市を通して感じたことは、例えばパリのように美しい街並みではあるが、市中の場所の個性が薄いものとは異なり、日本のようにそれぞれの場所の個性を断片的にもっているということである。郊外はヨーロッパのような田園風景とは異なり、殺風景なものであるが、それとは対比的に市内は活気溢れる豊かなものであった。街路空間に対する建築物や街区の繋がりも、それぞれの街によって多様であり有意義な観察ができた。海外渡航金の援助をいただくことができ、充実した旅行ができたことをみなさまに感謝します。ありがとうございます。

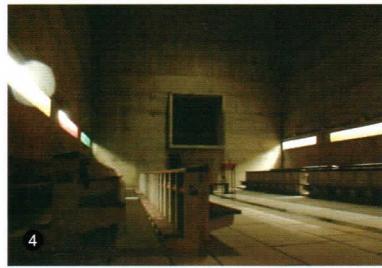


以前から漠然とヨーロッパの建築物を見て回りたいと思っていた。始めはガウディを見にスペインに行きたいというものだった。だが、資金を貯め、準備をしているうちにそれはヨーロッパ5カ国に渡る建築物巡りの旅の計画へと変わっていた。あの建築物も見てみたい、そんな思いから広がった計画。最終的には66日に及ぶ旅になった。

#### アントニオ・ガウディ

あの建築物が街の中で違和感なく溶け込んでいる。それがこの日本で東京という街を見て育った私にとっては信じられないことだった。以前から漠然と思っていたスペインに行ってみたいという気持ちはそんなところから生まれたものでもあった。もちろん当然のようにガウディの建築物自体を見てみたいというものもあった。そんな思いでバルセロナの地に立った。まず、目にしたガウディの建築物。それはサグラダ・ファミリアだった。その出会いは突然にやってきた。他の建築物を目指して歩いているときだった。ふと横を見るとそれはあつた。あまりに突然のことだったので思わず笑みがこぼれた。グエル公園から見るとよくわかるがサグラダ・ファミリアはバルセロナの街のスケールの中では圧倒的に大きい(ジャン・ヌーベルのアグワス・デ・バルセロナ本社ビルと2つだけ突出している)。その大きさと共にグリッドで区画され、幅広い道路の通っているバルセロナの街を意識させられた瞬間だった。

あの造形に違和感を持たない街があるのかとある種のそうあって欲しいという期待を込めて訪れた街・バルセロナは、ガウディは、私の期待を裏切らなかった。カサ・ミラやカサ・バトリョ、それらは決して街から浮いているという印象を私に与えはしなかった。実際に見



1.バルセロナのサグラダ・ファミリア教会  
2.ロンシャンの教会  
3.ラ・トゥーレットの修道院  
4.同修道院

るまでは信じられなかったもの。それがすんなり認められた。それだけでもバルセロナに来てよかったと思えた。

#### 66日間の旅

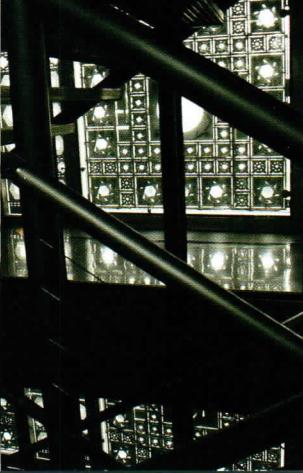
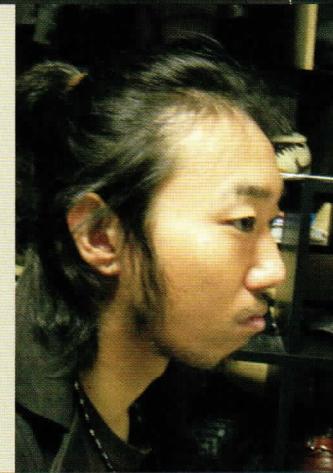
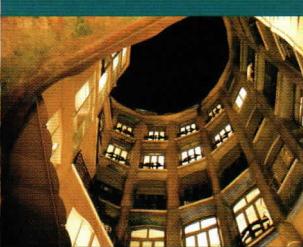
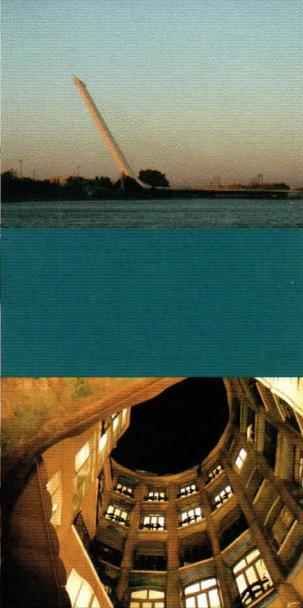
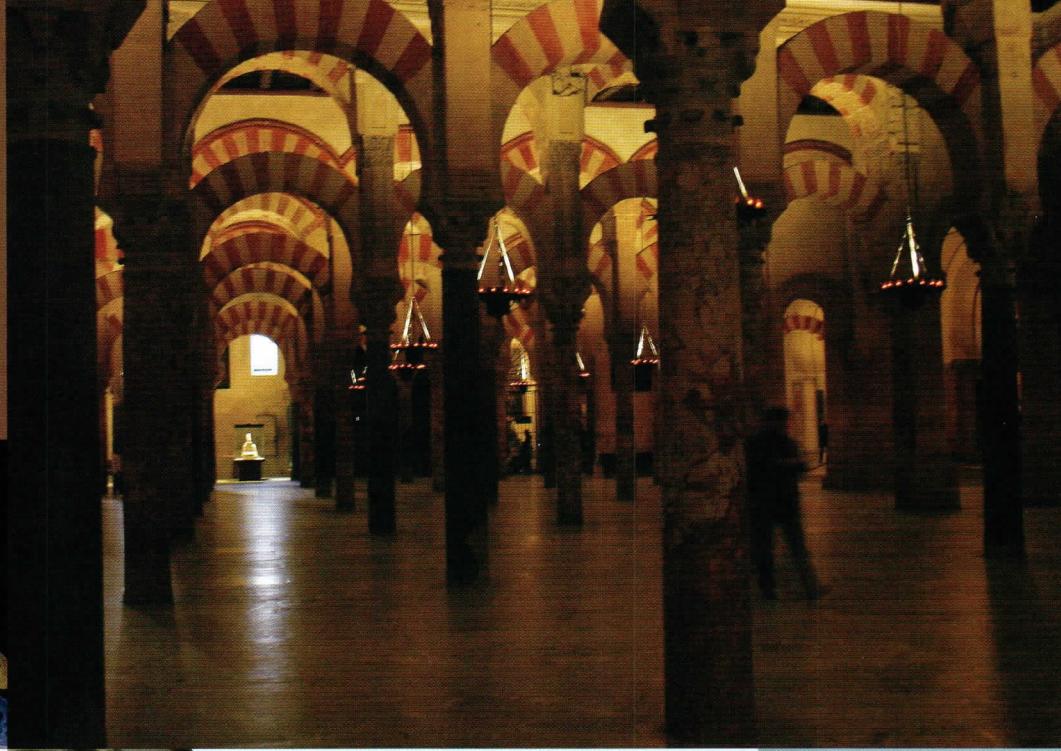
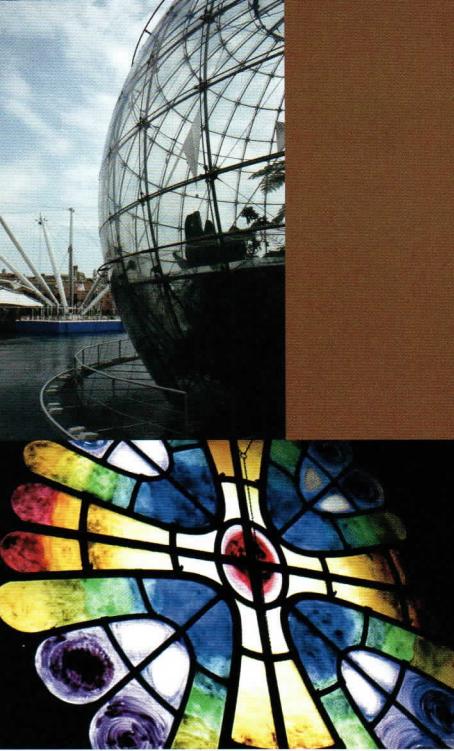
フランス・ドイツ・スイス・イタリア。—それぞれの国・街で様々な建築物を見て体験し、感じたことは数多くあった。だが、それを1つ1つ挙げることはできないし、そうすべきでもないと思う。でも、それでもこの人については触れておきたい。

#### ル・コルビュジエ

巨匠と呼ばれ、誰もが知っているその人について今さら私がとやかく言う必要はないと思うが、やはりこの人の空間を体験することは建築を学ぶ上で絶対に貴重な体験だと感じた。ロンシャンの教会、サヴォワ邸、マルセイユのユニテetc? コルビュジエの建物を何個か見て来たが、その中で一番自分の印象に残っている空間—この旅を通じた中でも最も印象的な空間—

#### ラ・トゥーレットの修道院

よく言われることが図面を見ただけでは伝わらない“何か”—それは確かにそこにあった。修道院に付属する礼拝堂。その入り口の厚い木の扉を開け、中に入った。運良く中には誰もいない。静けさの中、扉の閉まる音だけが聞こえる。その後訪れた完全な静寂。それは今までに感じたことのない雰囲気、体験したことのない空間だった。少し怖いぐらい。それが礼拝堂に入った直後の自分の感じた素直な感想だった。圧倒的。それは私が求めていた体験だった。今回の旅において私の求めたもの。それは感動のできる空間だった。1つでもいい、その体験を求めて旅立った。このラ・トゥーレットで感じたもの、それは感動ではなかったが、それを凌

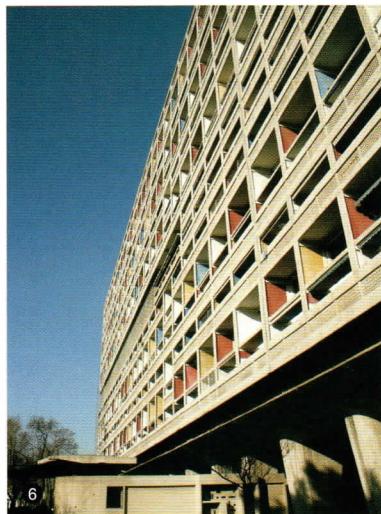




驚したものだったと私は思っている。図面では伝わらないもの・伝えられないもの。それはたぶん自分独自のもの。人によって感じ方は違うだろう。でもそれでも人とその感覚を共有できるもの。そう感じられるものだった。違うけど共有できる。その感覚が貴重な体験になると思った。その感覚自体について言葉でこれ以上語っても無意味だ。だから私がまだあの空間を体験していない人に言える唯一のこと。「行ってみて下さい」あなたの感覚が何らかの答えを、反応をしてくれると私は確信しています。

今回の旅は私にとって始めての海外でした。初の海外がこんな大それた計画になってしまって不安になる気持ちもありましたが、行ってみればなんとかなるだろうと思い行動に移しました。この旅では盗難に遭ったりなど何度かトラブルに遭ったりもしましたが、それも今では自分を強くするいい経験になったと思います。ただ、海外でのトラブルは旅慣れていないものにとってはかなりの心労になるので、ガイドブックや外務省の海外安全ホームページなどで犯罪の方法や傾向、対策などを知っておくといいかもしれません。ローマではガイドブックに書いてある通りの手口で近寄って来るスリがいましたが、知っていたのでスリだと分かり走って逃げることができました。

2ヶ月間、自分の建築に対する思い・考え方、そんな根本的なところから自分を見つめ直し、建築物を見て、空間を体験する。建築を学ぶ上で、必要な経験だったと振り返って思うことができる旅だった。その反面、今までの自分の無知とやってきたことの厚みのなさに恥ずかしさとも情けなさとも言えない様な気持ちを抱くこともあった。できればもっと早い時期にこの旅をしていればとは思うものの、後悔をしても始まらない。この準備として調べたことで身につけた知識、



向こうで学んだこと。今までの自分の甘さを痛感したが、これまでとは違うスタンスで、もっとストイックに建築に向かう姿勢を旅の中で自分の中に見つけることもできた。この旅を無駄にしない為にも、日本に帰ってきたこれからもその姿を失わずにいたい。

略歴  
出身高校／埼玉県立朝霞高等学校  
大学／工学院大学工学部建築学科第2部  
2002年入学 2006年卒業予定  
研究室／初田研究室  
住所／埼玉県志木市本町6-23-52-103

- 5.ビルバオグッ
- 6.マルセイユ
- 7.リヨン・サト
- 8.ローマ・パンティオン
- 9.フランクフルト



(この海外視察には、工学院大学建築系学科学生・大学院生海外渡航奨励金が支援されています。)

# 「千変万化な中国」—— 柚 俊文

## はじめに

2005年3月20日から4月2日まで、中国の上海・蘇州・杭州・北京の都市を訪れました。今回、中国を訪れた理由として2つあります。1つ目に、今、保全が積極的になされている古くから残されている水郷鎮の見学、2つ目に、激変していく中国の今を、この肌で体験してくることでした。自分の体験と、本から得た知識をふまえレポートを書きたいと思います。

## 交通

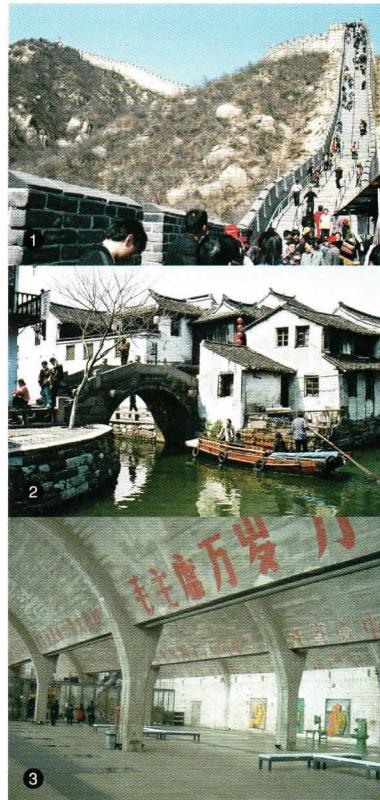
まず中国に着いて驚かされたことは交通についてです。もちろん日本とは違い車は右側通行、その上自転車までもが忠実に右側通行になっていました。しかし、その中国でも近代化の波により、車社会へと変化している段階で、各都市で車・自転車・歩行者の割合は、都市によって様々でした。急激に車が増えたため、道路はその交通量をさばききれず、朝・夕のラッシュ時間は、車が動きませんでした。

中国は昔から水運で栄えた国でもあり、北京から蘇州・上海まで船で物資を運搬していた歴史があります。今もその水運は活用されており、川には物資を積んだ船がたくさん停泊しています。私も蘇州から杭州を船で14時間かけて移動しました。川には船専用の標識もあり、水運が盛んな事がわかります。今は乗客を乗せる便はこの路線しかありませんが、今後は北京・上海を結ぶものも就航予定だそうです。このことからも、中国が川を大切な交通網としてとらえていることがわかりました。

## 都市について

### 上海

上海は今、中国で1番急速に変化している都市です。街には30階建てのマンションの横に2階建ての古家がある場



1.万里の長城(北京)  
2.水郷鎮・周莊  
3.大山子798芸術区 毛沢東工場(北京)  
4.バンドから浦東地区を見る(上海)  
5.建外SOHO(北京)

所がたくさんあり、異様な景観が広がっています。あちらこちらに取り壊しの跡が見られます。今までここに住んでいた人はどこへ移住したのか、とても興味深いことでした。今後、上海には地元民が住めなくなるのではないかでしょうか。

蘇州河を挟み、対岸がとても遠く感じたのを覚えています。東と西では違う国のように、浦東地区は高層建築、バンド地区はヨーロッパの町並み、さらに北に行けば昔の疎開地が残っていて、まるで色々なものが混ざり合った東京のようでした。そのためか、上海を歩いている時にあまり違和感がありませんでした。

今後上海がどう変わらのか、日本のような光景が広がるのか、2010年の万博の時にもう一度行き、この目で見てみたいと思いました。

## 北京

北京は上海ほどの建築ラッシュはなく、落ち着いている印象を受けました。街には故宮などの古い建物や胡同のような古い街並みも残っています。胡同の一部は外壁が塗り直され、観光地化されおり、昔の面影はなくなっていましたが、昔のまま残っているところの通りの入口部分には市がたち、庶民の生活が今でも感じられました。

古くからの建造物は忠実に南北軸に沿って建てられていて、公園の木までもがきれいに東西南北の軸に沿って植えられていました。風水都市北京を感じた時もありました。

北京には、他にも興味深いことがたくさんあり、もっと北京について知りたいと思いました。

## 水郷都市

### 周莊と蘇州

今回、周莊と蘇州の2つの水郷都市を見てきました。どちらもどのように保全



6.グランドハイアット(上海)  
7.柳 俊文さん  
8.北京の故宮

していくか色々と議論されています。日本では見ることができない場所で、とても感動しました。

周莊についてですが、観光地化が著しく、周莊水郷村として入場料が取られます。そのため、村の中に住む人はみな商業に携わっていて、若い子からお年寄りまでみんな一生懸命にモノを売ろうとしています。その光景が痛々しく、ここを観光地化してしまったことを残念に思いました。

古くから残る家は、運河に正面を向けて建てられています。すべての建物が川に対して開かれるように、一軒一軒の間口は狭く、縦に長い造りとなっています。長いものは100mにもなります。そのため、家の中にいくつもの中庭が造られ、各部屋に日光がそぞろ造りとなっています。また、家の主人と使用人との動線を分けるため、側廊が造られ、そこを人が行き来していたようです。その通路が家を迷路化していて、とてもおもしろかったです。

昔から水運を使い生活していたこともあり、橋の裏側には陸上からでは決して見ることができない、船に乗らなくてはわからない装飾が施されていました。橋を造った人の技術の高さがうかがえました。

蘇州の水郷は周莊のように観光地化されておらず、今も昔の面影を残すものになっています。ただ、川は非常に汚く、とても臭いです。マルコポーロが「東洋のヴェネチア」と言葉を残しただけあり、

一帯は運河が入り組んだ作りになっていて、方向感覚を失い、迷ってしまいました。観光地化されていないぶん、よそ者の出入りに抵抗があるのか、あまりいい顔はされませんでした。

どちらの水郷鎮にもいえることは、各家が運河に面したつくりをしていて、家から直接運河に降りる階段があり、それを今も使い生活している家があることです。そこで洗濯をしたり、おまるを洗ったりと、そこには昔の生活が残っていました。次回来るときは中国語を使えるようになって、現地の人の話を聞きながら、じっくりと調査してみたいと思いました。

#### リノベーション＝芸術区の形成

上海・北京の2つの都市で共通に見られたモノが、リノベーションによる芸術区の形成でした。そこには最新の美術作品があり、どれもすばらしいモノばかりでした。

上海では蘇州河沿いの工場跡に芸術家が集まり、各々建築をリノベーションし、ギャラリーにしたり、アトリエにして使用していました。そこは芸大のような雰囲気でした。人に完成した作品だけを見せるのではなく、つくる行程も見せる、そこが日本にはない新しいコトだと思います。

北京でも上海同様、毛沢東の時代の工場跡に芸術家・出版社が集まり、大山子798芸術区を形成していました。上海より大規模なもので、新潟の越後妻有ア

ートリエンナーレのようなイベントを開催していました。さらにすごいのが、芸術区に関わらず、今も普通に稼働している工場があることです。そのため敷地内を歩いていると、お昼休みに工場で働いている人が蹴マリをやっているところに遭遇することもありました。

日本でもリノベーションが盛んに行われています。学校がギャラリーになりました。しかし中国のリノベーションにはすごいモノを感じます。今、スクランブルアンドビルトが激しく行われている世の中に対して、芸術家なりの反抗を見ている気がします。

#### まとめ

この時期に中国を見ることができて本当によかったです。上海での高層建築、蘇州での水郷鎮、北京での古き建築…どれも印象深いものでした。また、ほとんどの移動を徒歩でおこない、総移動距離は100kmを超えると思います。歩くことで都市を隅々まで見ることができます。改めてフィールドワークの大切を学びました。

当初、タイ・カンボジアで渡航の予定をたてていましたが、スマトラ沖地震による渡航先変更を認めてくださった先生方、奨学金をくださった学校・同窓会の皆様には大変感謝しています。これから建築・都市の勉強にこの経験をいかしたいと思います。これからも、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願ひします。

(この海外視察には、工学院大学建築系学科学生・大学院生海外渡航奨励金が支援されています。)





クーサンコスキの施設/プールでリハビリ中の高齢者と指導者



ヘルシンキの施設/  
ろうかの棚には昔のおもちゃや  
化粧品などが飾られている



# 「フィンランドの高齢者福祉を学ぶ」

西野亜希子

建築学科環境コース4年  
卒業2006年3月宮城研究室  
東京都立町田高校出身

## はじめに

現在北欧諸国では、「施設ケア」から「住宅ケア」への転換が進んでいます。の中でもフィンランドは高齢化率が約16%と北欧諸国や日本に比べると低いですが、これから急速に高齢化が進むといわれています。また住宅の質は高いといわれていますが、バリアフリーが整備されていないことや、他のヨーロッパ諸国に比べ住スペースが狭いことなどが日本とよく似ています。そこで、フィンランドの高齢者福祉施設を見学することで、日本の高齢者福祉について考えたいと思い渡航を決意しました。ここでは、フィンランドの高齢者福祉についてと見学してきた施設を紹介したいと思います。

## フィンランドの高齢者福祉について

フィンランドの人口は約520万人で、約33万km<sup>2</sup>と日本と同じくらいの国土面積を持ちます。公用語はフィンランド語・スウェーデン語になります。フィンランドでは、日本のような高齢者を対象とする法律は存在せず、高齢者は市民全体を対象とした法律で守られています。フィンランドの消費税率は最高で22%になり、所得の約半分が国・地方の税で持っていかれます。持っていかれる税は多いですが小学校から大学までの教育費は無料、医療費も年間1500円ほどで処方される薬は無料になっています。フィンランドでは子供が親の介護をする義務はありません。自治体にその義務があります。自治体数は約440あります。各自治体は在宅サービスや施設サービスを整備し提供していきます。具体的なサービス方法は、すべて自治体に委ねられています。フィンランドの高齢者福祉を支えるものとしてスロットマシン協会があります。この協会は国の管轄化におかれスロットマシンなどのカ

ジノゲームを運営しています。そしてその利益をすべて医療・福祉に関わる民間事業に分配しているのです。

現在の高齢者の住まい方は、在宅・サービスハウス・グループホーム・老人ホーム・シニアハウジングなどが挙げられます。在宅の高齢者の割合は、85歳以上では75%、75~84歳では93%にも上ります。

## 施設紹介

私は、今回8ヵ所の高齢者福祉施設を見学しました。その中で印象に残った2ヶ所の施設を紹介したいと思います。

### ヘルシンキ市が運営する老人ホーム

ヘルシンキ市は人口約56万人とフィンランドで最大の都市になります。この老人ホームでは、認知症のユニットケア・デイケアセンター・サービスセンターがあります。認知症のユニットケアには約100名の高齢者の方が生活しています。

施設の特徴は、体調を整えるプログラムに力をいれていることです。体調といつても身体的なことだけでなく、社交性・精神性なども含まれています。一つ目はリハビリテーションで、1人1人個別のプログラムがあり、筋力トレーニングやシニアエクササイズを行っています。またリハビリ室は地域の人も無料で使えるようになっています。二つ目は、Shangrilaと呼ばれるオランダのプログラムで、感覚を取り戻させること・自分の色探しをすることで、とくに認知症の高齢者の方に使われます。真っ白い部屋に一人で入り、昔のことを思い出してきたら光で色を足していく仕組みになっています。

デイケアセンターには、在宅の高齢者の方が通っています。一日16人ほどが通い、全部で約40人の高齢者が利

用しています。時間は8:30~14:00でその間に歌・図工・筋力トレーニングなどを行います。

### クーサンコスキ市のサービスセンター

クーサンコスキ市は製紙業の街で人口は約2万人です。この施設は、はじめはサービスセンターだけしかなく、後からサービスハウス・グループホーム・デイセンターを増築しました。

サービスハウスに住んでいる高齢者の方は60名おり、お気に入りの家具を持ち込み、自分らしい部屋のしつらえはどれも素敵なものばかりでした。

デイセンターでは、一日約50名が利用しており、一つのアクティビティを20名ほどで行っています。時間は10:00~14:00で、毎日必ず運動を行っています。サウナ・歌・ピクニック・話し合いなどのアクティビティは毎日行う内容が異なっていて、曜日ごとに決まっています。曜日ごとなら高齢者の方が理解しやすいという配慮からです。

## おわりに

ここでは施設の概要しかお話しすることができませんでしたが、施設見学は本当に楽しく勉強することができました。デイサービスで千羽鶴を渡したときの高齢者の方々のうれしそうな顔や、自分の家族写真を私に一生懸命説明してくれる姿は、言葉は通じなくても心が和むひと時でした。

そして、テラスで太陽の方向に体を向けて座っている高齢者の方々の姿から、フィンランドのゆとりのある生活を感じることができました。

8日間という短い期間でしたが、フィンランドの高齢者福祉に接することができ、施設に対して日本とは違う考え方を学びました。この経験を今後に活かしていきたいと思います。

# 「都市と農業の共存へ向けて2004 in台湾」—— 山中正樹 増田英朗

## はじめに

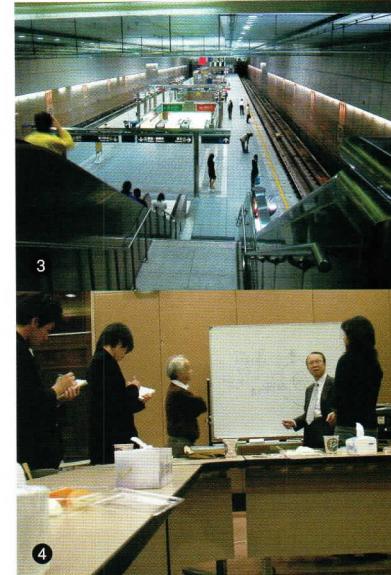
都市への人口・産業の集中は都市の過密化を促し、脆弱な都市基盤の上での劣悪な環境を形成する結果となり、都市は環境面からも防災面からも危機的状況に陥っている。このような現状において、私たちは都市の環境・防災の側面について、都市内及び周辺に残存する希少な自然環境である「農業」が重要な役割を果たすものとして、その重要性を研究してきた。

そして今回、財団法人交流協会の若手研究者交流事業に採用され、東教授をグループ長として、2004年11月18日から24日までの7日間、私たちは幸運にも台湾を訪れることができた。台湾の都市計画と農業の関係及び市民のレジャー施設としての市民農園の実態調査を行い、そして、台湾南部の国立屏東科技大学において、大学院生と「都市の未来：農業」をテーマとした討論を交わした。



台湾における都市農業と  
市民農園の実態

台湾の都市計画制度では、国土全体を「都市地区」とそれ以外の「非都市地区」に区分しており、都市地区的区域は5年ごとに見直され、18種類の用途地域が定められている。台湾では都市地区的農地は生産面の機能が評価されず、農業地区は都市拡張の過程で転用されてゆく、過渡的に存在する発展予備地として認識されている。これに対し、日本では都市農地を市街地に残された貴重な緑地空間を提供するなど、生産機能以外の多様な機能が注目を集めるようになってきており、都市計画に生産緑地として位置づけられるようになってきている。



また日本では、市民農園が都市に残る自然空間として社会的意義があることが確立され、農地の多面的な機能を発揮している。台湾においても、農作業体験以外にも家族や近隣利用者とのふれあいを楽しみ、農業以外の娯楽も持ち、農園での滞在を楽しんでおり、都市にとって貴重な施設となっている。

このように、台湾における都市農地は、法的には保全するものとして整備されていないが、市民のレジャー施設として多様な展開をみせていた。

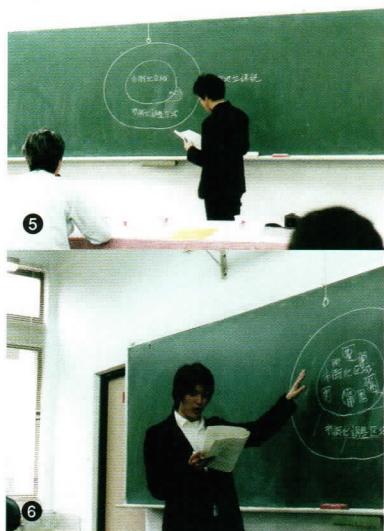
## 國立屏東科技大学での討論会

國立屏東科技大学にて、お互い2名ずつの研究発表の後、「都市の未来：農業」をテーマとした討論会を行った。そして、日本と台湾では都市農業に対する評価・位置づけの違いがみられたが、それは、都市農業を取り巻く都市計画制度や都市化の過程が異なることに依拠していると考えられる。しかし、台湾において、都市住民の市民農園



- 1.都市周辺に広がる緑地帯。
- 2.ますます発展の途を辿る台北市。
- 3.台北市を走るMRT(地下鉄と高架レールバス)のプラットホーム。
- 4.中國地政研究所で台湾の都市計画制度をヒアリング。
- 5.國立屏東科技大学での発表(山中)。
- 6.國立屏東科技大学での発表(増田)。
- 7.討論を終えて、國立屏東科技大学大学院生との交流。
- 8.市民農園。熱心な利用者により、きれいに手入れされている。

への需要は、日本と同様に非常に高くなっていることがわかった。また、都市農地が発展予備地として宅地への転用が進み、都市が益々過密化が進む一方で、都市住民には土に触れたいという欲求が高まっていることがわかった。日本では、都市農業を良好な都市環境の創出する空間として各計画に位置づけ始めている。しかし、台湾では、都市農業は計画に位置づけられるとは言い難い現状にあるが、これからは都市と農業を相互に補完するものとして位置づけ、都市と農業の共生空間の創出に向けて、都市住民とともに



都市に存在する農業を都市環境に資するという点で、さらに議論を深めることが重要であると思われる。

#### 新しい都市のすがたへ

本事業を通じて、都市農地は公園とは違う緑地として農業体験ができ、今までにない魅力的な都市空間をつくるために、都市農地を残していくことがこれからからの「都市のすがた」になるのではないかと、都市農地保全の必要性を主張したい。疲弊した都市を救済し、

また持続的に発展していくためにも、農地をはじめとした環境資源を保全し、これからの中の都市づくりの一視点としていくべきではないであろうか。

最後に、日本と台湾の比較は、これからの中の東アジアの都市の将来を展望する上で重要な研究であり、学生同士の交流は将来に向け大変意義があるものと思われた。このような機会を提供していただいた財団法人交流協会に心より感謝申し上げたい。また、國立屏東科技大学の蔡龍銘教授と同大学院生に感謝申し上げたい。



増田英朗(左)  
1980年10月30日生まれ  
静岡県 檜原高校出身  
2005年3月修了(東研究室)  
本間至/プライムユナイテッド勤務

山中正樹(右)  
1980年4月2日生まれ  
山梨県 甲府昭和高校出身  
2005年3月修了(東研究室)  
株ソングマックスシステム建築事務所勤務



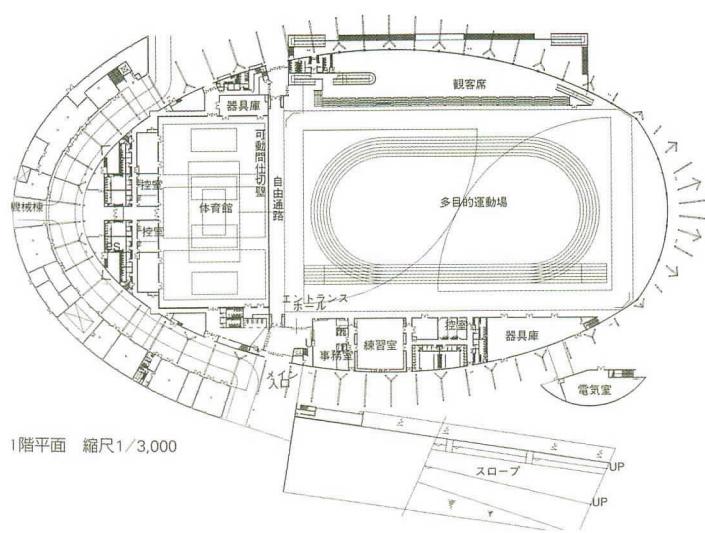
# 古山六男

彩の国くまがやドーム

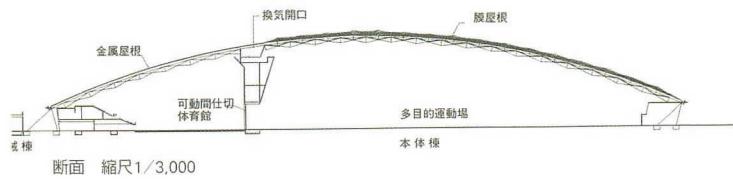
熊谷駅の北側に出ると目の前に大きなラグビー場のオブジェが現れる、熊谷市はラグビーを愛しスポーツの盛んな街である、「くまがやドーム」は市内のスポーツ文化公園の中に「彩の国まごころ国体」を期にスポーツを主体にした屋内の多目的活用施設として建設された、設計者選定プロポーザルで、私たちはラグビー場のモチーフにゆるやかなカーブで田園風景のランドスケープに融合する形態と多目的運動場と体育館の隣接で一体活用を可能とする提案が、今は故人となられた内井昭蔵氏を委員長とする審査委員会で好評を得た、長径250mを超える楕円形の大屋根はわが国のドーム建築の中でも最大級の規模を誇る、この架構で構造体が支配的になりがちなドーム建築において、明快な構造表現でスポーツ施設にふさわしい明るく軽快な内部空間を得ることができた、これは構造家梅沢良三氏の先端的な発想と協力で実現できたものである、アプローチ部分に土が盛られ、芝生の緑が色濃くなるとこのドームは、ランドスケープと調和したグラフィカルなシルエットで浮かび上がる、金属と膜で構成された楕円形状の大屋根は、それを見る方向により様々な表情を見せてくれる、その巨大さ故に威圧的になりがちなドーム建築ではあるが、平坦な熊谷の風景に溶け込み美しいランドマークとなる、私が「くまがやドーム」に深く関わったのはプロポーザルから基本設計までであったが、我々の事務所や梅沢建築構造研究所のスタッフが、私の計画意図を理解し、新しい技術や工法に苦労を重ね完成のはこびとなった、この建築が2005年建築学会「作品選集」に選ばれ、また梅沢氏が「JSCA賞」得ることができたことを共に喜び、深く感謝したい。



楕円形のドームは、膜金属屋根共に適用するシンプルなフレーム構成をテーマに進め、  
全体座屈を制御するダイアゴナルスティや、  
在來のHTボルトや溶接によらず人力によるネジ接合など、  
プロポーザル段階からの梅沢氏と新しい架構技術を駆使した検討作業は  
私にとって最も興味深いものであった。



1階平面 縮尺1/3,000



断面 縮尺1/3,000

# 古山六男

彩の国くまがやドーム



## 発注者／埼玉県

所在地／埼玉県熊谷市上川上300

設計／石本建築事務所・梅沢建築構造研究所

施工／錢高・鉄建・植木・田中・柏木特定建設工事共同企業体

敷地面積／550.000m<sup>2</sup>建築面積／30.324m<sup>2</sup>述床面積／32.803m<sup>2</sup>

構造／鉄骨造 鉄筋コンクリート造 一部PC造

ドーム部／単層格子シェル構造

工期／2001年1月～2003年3月

## ●古山六男

1968年／卒業・山下研究室第1期生(工学院大学高等学校)

石本建築事務所勤務

1985年／工学院大学建築学科非常勤講師

1994年／石本建築事務所 取締役、執行役員を経て

現在 プロジェクト開発担当 理事

## ●主な作品

松山市正岡子規記念館・栃木県こども科学館

八戸市庁舎・茂原市庁舎・須賀川アリーナ

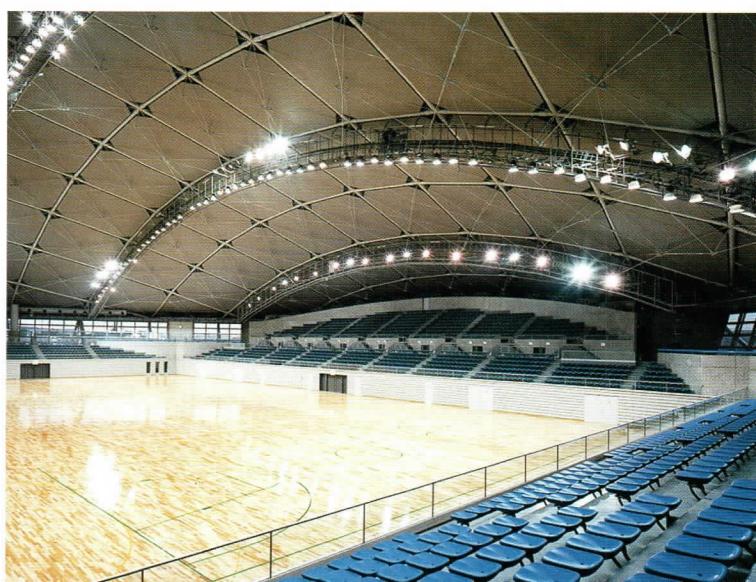
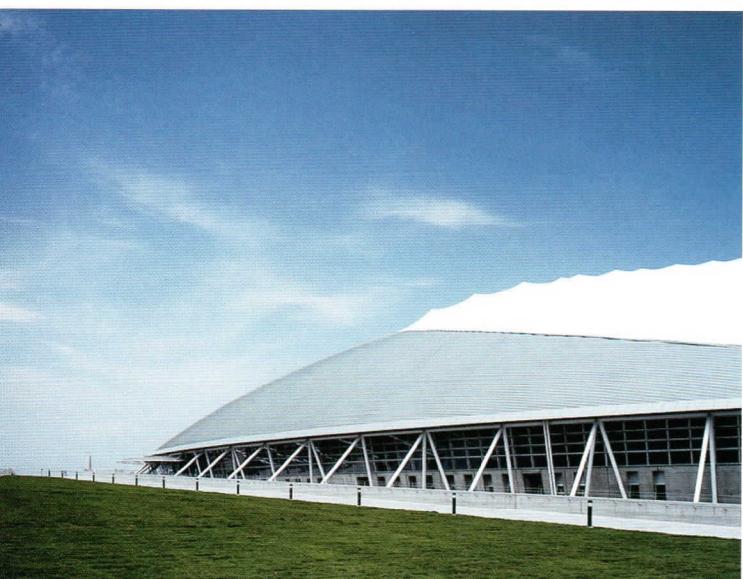
鎌倉芸術館・富士市文化会館・他多数

●連絡先・会社／株式会社石本建築事務所

東京都千代田区九段南4-6-12

TEL 3221-8926・FAX3237-7495

mail/mutuo-f@jcom.home..ne.jp





# 岡野芳徳

下館工業高校

今回計画の下館工業高校は、茨城県によるプロポーザル方式によって行われた。ものである。計画にあたって、敷地北側にある正門から学校に入ると、真正面に改築対象となる「管理・普通教室棟」があり。この建物は、建築後約40年を経ており、規模はRC3階建てで、東西に長く、教室が南側に1列に並び、北側に長大な廊下がある従来型の校舎であった。今回の計画において、どのような建築がふさわしいのか考え、以下に掲げる3つのテーマを設定した。

- 1.新校舎を、ひとつの建物単体で考えるのではなく、学校全体の中にどう位置付けるかという視点で考える。
- 2.新しい学校建築として魅力ある施設とすること。特に正面となる北側ファサードについて新しいイメージを創ることを目指す。
- 3.動線計画の上で、生徒たちの移動を積極的にとらえる。

#### 【配置計画】

今回の計画は、校舎を単体で考えるのではなく、学校全体の中で本校舎をどう位置付けるを中心と考えた。それは現在の校舎配置のみならず、将来構想も見越した計画であることである。具体的には、次の改築を想定して、分散している体育館と格技場の将来計画まで踏み込んだ考えを提案した。

配置計画においては以下のポイントに重点を置いた。

- ◆他の校舎棟との効率的な動線計画を行う。
- ◆北側ファサードに、正面性と従来の校舎にない新しいイメージを持たせる。
- ◆正門からの軸線を生かし、既存空間も含めて緑豊かで潤いのある空間とする。





今回の計画は、敷地の有効利用の観点から、現在とほぼ同じ位置に建てることで、既存校舎とのつながりをスムーズに行い、平面的・立体的に変化に富み、現校舎の持つ単調で無味乾燥なイメージを払拭することが狙いであった。さらに、校舎単体で考へるのではなく、近い将来、改築されるであろう体育館と格技場の配置を想定することにより、校舎全体のデザイン的統一性を図ることを提案した。この配置計画によって、動線がさらに明快で効率的になり、外來者も含めて誰にもわかりやすくなる。また、グラントとのつながりが機能的になり、景観的にも優れた学校となり、地域のランドマーク的存在となることが期待できる。

### 【変化に富んだ空間構成】

#### ◆分節化すること

単調さをやわらげ、空間に変化を生む。接点部分で南北方向に光や風が通り、従来型校舎の欠点であった、昇降口や廊下の窮屈さ、暗さが解消する。

#### ◆立体的空间構成とすること

建物を前後3つのブロックに分けて構成。

◇南側のブロックは、管理関係の諸室や普通教室から構成される。職員室は2階に配置して教職員の移動をしやすくした。

◇北側のブロックには、製図室・生徒ホールを配置する。北側のファサードデザインに変化と正面性を持たせることができる。

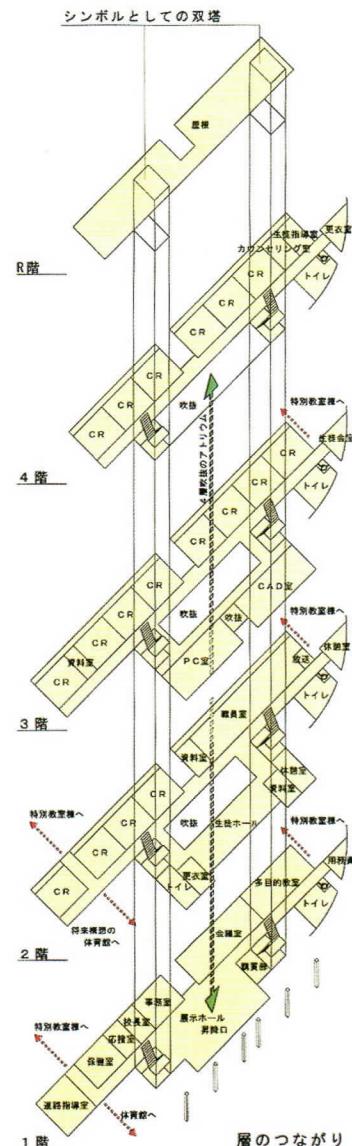
◇中央のブロックは、4層吹抜けのアトリウムで、光あふれる明るい空間である。生徒ホールを中心に、平面的・立体的にサーキュレーションが生じ学校全体に求心性を生む。この空間を、生徒たちのアクティビティを喚起するため場として位置づけた。

#### ◆上下方向への展開

従来の薄暗い階段をもっと明るく使いやすいものとしたいと考え、アトリウムを建物の中心に据え、階段を開放的にして、どこからでもアプローチしやすくどこからも見やすくなることで、上下方向の移動を積極的にできるものと考えた。

### 【豊かな教育環境を目指して】

これまで述べてきたことは、移動するということを積極的にとらえ、意味を与えることである。特に工業高校では特別教室の役割が大きく、教室間・校舎間の頻繁な移動が避けられない。単調な校舎での殺風景な廊下の移動は退屈である。変化に富んだ空間の中で、移動するごとに風景が変化し、複雑にからみあう動線が交錯する。そして生徒同士がお互いに接点を持ち、それが次々につながることで、人間関係に多様性が生まれ、想像力を刺激する。そのような移動を積極的に演出するのが、建築の役割であると考えている。一様で単調だった学校建築が、建築的豊かさを持った空間になることで、彼らの可能性を引き出すような役割を果たして欲しいと願いをこめて計画したものである。



# 岡野芳徳

下館工業高校



## 岡野 芳徳(おかの よしのり)

1941年生まれ

1960年3月 茨城県立水海道第一高等学校 卒業  
 1968年3月 工学院大学建築学科(山下研究室) 卒業  
 1968年4月 株式会社雄建築事務所 入社  
 1974年2月 株式会社岡野建築設計事務所 設立

現在に至る

## 所属団体

日本建築家協会  
 茨城県建築士会  
 茨城県建築士事務所協会

## 賞

1994年 カスミつくばセンタービル 通商産業省 グッドデザイン賞  
 2000年 取手市立白山保育所 第13回茨城建築文化賞 優秀賞  
 2000年 茨城県立土浦第一高等学校体育馆 プロボーザル入選  
 2001年 茨城県立下館工業高等学校 プロボーザル入選  
 2002年 伊奈町立谷井田コミュニティーセンター プロボーザル入選  
 2003年 茨城県立つくば養護学校 プロボーザル入選

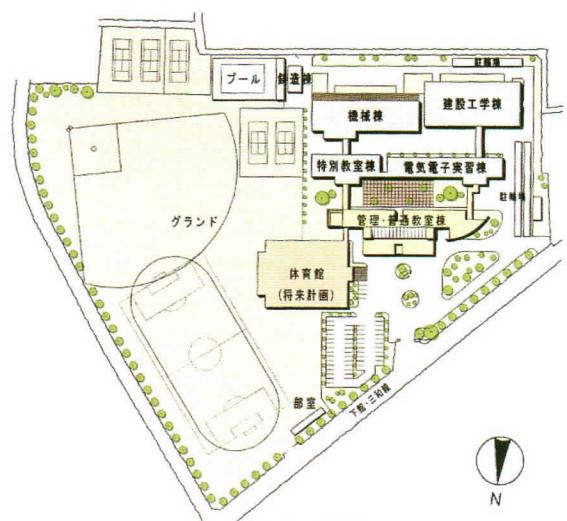
〒305-0023

茨城県つくば市上ノ室2026-1

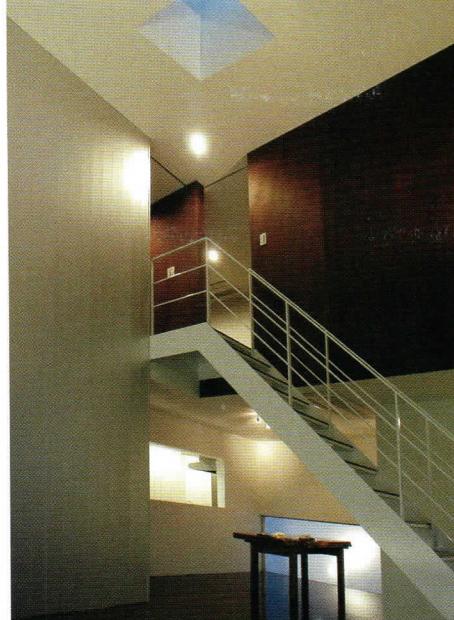
TEL 029-857-2285

FAX 029-857-4551

E-mail:KGF03504@nifty.ne.jp



配置計画図



## 足利の家

この家は、栃木県足利市に建つ個人住宅である。「駐車場から玄関まで濡れずに行けること」、「現代的なイメージを持ちながらも、和の趣を持たせること」を強く望まれた。そこで、建物と駐車場を一体とし、見え隠れするスキマをつくりながら、やわらかく空間を繋げた。ここでは、2種類のスキマがある。1つは、隣り合う用途に応じて、強弱を持ちながら曖昧に繋がっていく空間的なスキマ。もう1つは、空や山、緑、光や陰影を冴え立たせるトリミング効果を持ったスキマ。この2つのスキマの重なりが、内外の奥行き感を強くし、実際以上の広がりや大きさ、しっとりした趣を与える空間となった。



### ●小島光晴

1973年 栃木県足利市生まれ  
1992年 栃木県立足利高等学校卒業  
1996年 工学院大学建築学科建築学コース卒業（望月大介研究室）  
1998年 工学院大学大学院修士課程建築学修了（望月大介研究室）  
2001年 StudioGreenBlue 1級建築士事務所 共同設立  
卒業年度／1996年3月（澤岡清秀研究室）  
大学院／1998年3月（望月大介研究室）  
出身／栃木県 栃木県立足利高校出身

### ●小林 瓦

1973年 栃木県足利市生まれ  
1992年 栃木県立足野高等学校卒業  
1996年 工学院大学建築学科建築学コース卒業（澤岡清秀研究室）  
2001年 StudioGreenBlue 1級建築士事務所 共同設立  
卒業年度／1996年3月（澤岡清秀研究室）  
出身／栃木県 栃木県立足野高校出身

### ●賞歴

2001-03 足利市制80周年事業風車デザインコンペ（佳作）  
2002-04 足利建築設計事務所協会「快適住宅フェア」  
住宅設計コンペ（優秀賞）  
2002-05 群馬県邑楽町役場庁舎等設計者選定住民参加型設計  
提案競技（審査委員長 / 原広司）（入賞）  
2002-07 SI-LINK インフィルアイデアコンペ#01（優秀賞）  
2004-10 「04 ぐんまの家」設計・建設コンクール（入賞）  
2004-11 平成16年度「足利市建築文化賞」  
(足利市建築文化奨励賞)

### ●勤務先

StudioGreenBlue 1級建築士事務所  
〒370-0604 群馬県邑楽郡邑楽町石打1580-8 2F  
TEL・FAX／0276-89-1112  
<http://wing.zero.ad.jp/Studio-Green-Blue/>

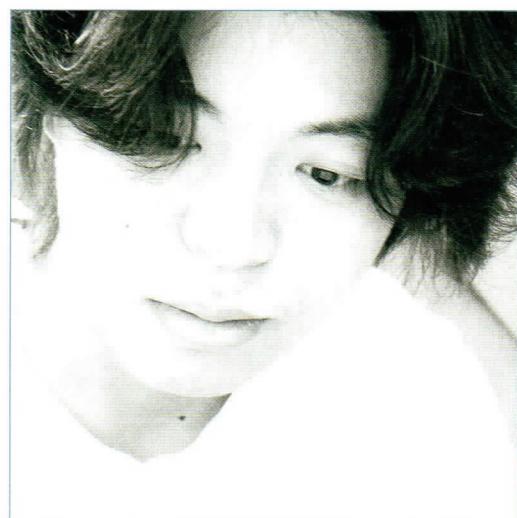


Kojima Mituharu

Studio Green Blue

# 「小島光晴」×「小林瓦」

足利の家・太田の家・熊谷の家



Kobayashi Wataru

## 太田の家

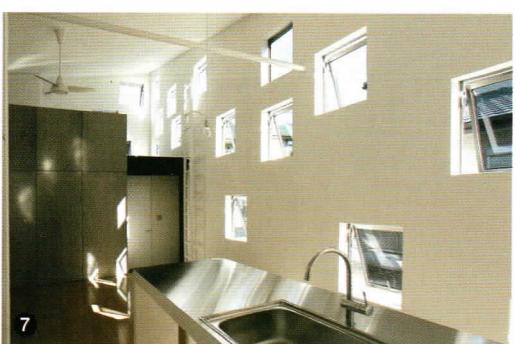
この家は、群馬県太田市に建つ2世帯住宅である。2世帯にとって、程良い距離を保つため、フロアによる世帯分けとした。仲の良い若夫婦は、一体的な空間を2階に希望した。そこで、素材の異なる2つのL字型の壁で、四角いフロアを構成し、それを単純に4つの用途に分けた「田の字型プラン」とした。各用途は、等しく接する交点（田の字の中心）のみで、建具無しに繋がっている。各用途を区切る壁は、隣接する用途との関係から、異なる透過度や素材を与えていた。この単純操作は、生活の中で、感じ方や広がりを複雑に変化させ、さらに他人との距離や関係、動きが絡み合っていくことで、随時、変化していく空間となった。



- ①和室から玄関をのぞむ。
- ②キッチンからリビングをのぞむ。
- ③交点からリビングと主寝室をのぞむ。
- ④交点からキッチンをのぞむ。
- ⑤交点から洗面をのぞむ。

## 熊谷の家

この家は、埼玉県熊谷市に建つ個人住宅である。敷地は密集した住宅街の中にあり、心地良い景色は望めない。その中で、明るく風通しがよい住宅が要求された。本来望まれないような景色を、断片化した情報とすることで「住宅密集地」の景色を変化させ、光と風とその景色を取り入れる。この住宅は、街に対して開くわけでもなく、閉じるわけでもない。街の景色に囲まれるでもなく、壁に囲まれるわけでもない。不確かな風景を持った建築とした。



7



8

- ⑥熊谷邸 昼間の外観風景
- ⑦熊谷邸 内部風景
- ⑧熊谷邸 夜の風景

# 矢澤清夫

## 祝言寺山門・永代供養堂

しゅげん

祝言寺は、浅草松が谷にある曹洞宗の由緒ある禅寺である。大学（武藤研究室）を卒業し、内井昭蔵建築設計事務所に在籍すること32年。入所が同じ黒澤秀行氏（波多江研究室）と同事務所を五年余り前に退職し、テック建築設計事務所を設立しての記念すべき最初の作品である。当時、内井昭蔵建築設計事務所では、三本柱の一つとして宗教建築が位置づけられており18年程前にこの祝言寺本堂・客殿の設計監理を担当した縁での仕事であった。

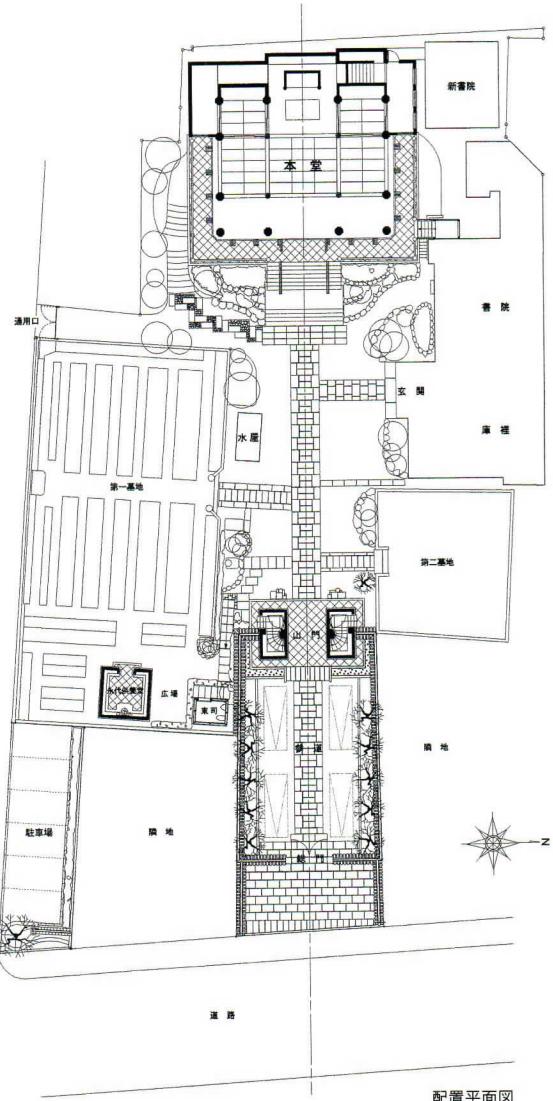
総門から本堂に続く参道は概ね50m程有り、この地域においては伽藍の構成要素として得難い財産となっている。既存の参道は本

堂の縦軸に対し3°程振れており、途中まで幅員5mと来訪者の車の出入りや駐車に難があった。参道の拡幅整備は土地絡みであり、本堂・客殿の計画においては将来構想として夢物語であった。奇しくも、先代御住職がお亡くなりになる直前に隣接地の売買の話があり、夢物語が現実のものとなって計画がなされた。

計画は、参道の拡幅を行い本堂との軸を合わせ途中に山門を築くこと。拡張した墓地の一部に供養堂を建立し、さらに壇信徒のための駐車場を確保し境内全体の整備をすることであった。



総本山から山門を経て本堂・客殿に続く参道  
最奥の本堂・客殿は1985年竣工（内井昭蔵建築設計事務所）  
(Photo by Koji Horiuchi)



配置平面図

## [山門]

山門は、境内の伽藍配置を明確にすると共に、来訪者にとって精神的な結界となる。

土地柄、道路に面した総門は夜間閉鎖せざるを得ないが、この山門に門扉はなく常に開放している。既存の参道は、本堂までのほぼ中間点まで約5mの幅員のため、正面の本堂の重層真反り(総反り)寄せ棟屋根の両翼がけられ見えない。それがかえって屋根の勢いを感じさせる。中間点で一気に視界が開け、本堂の全容が現れる。参道を拡幅しても、この雰囲気は何としても残したかった。それに御住職の門に対するこだわりと相まって竜宮門という形が決まった。内外壁とも、当初本山永平寺境内各所に敷かれており、先の本堂・客殿の階段・基壇・回廊等を構成する笏谷石を積むことを考えたが、既に入手困難のため、仏教発祥地であるインドの仏教遺跡に多く見られる煉瓦積みを、今風に表現することを考えた。工業技術が進み、品質管理が向上しすぎた(?)現代において、手作り風の焼き物を焼く為、色巾の押さえの難しい還元焼成タイルをあえて採用した。断面形状が30(見付け)×45(見込み)と奥行きの方が大きいタイルを一段一段積んで竜宮門の微妙な曲面を出した。参道が潜る天井材は、鬼師の製作による大型テラコッタを現場打ち込みとした。



山門樓上の十六羅漢堂



参道がくぐる天井テラコッタの仮組  
現場打込み施工に対する寸法制度と色むらによる配列調整



(Photo by Koji Horiuchi)

山門楼上には、中国産青石による十六羅漢像を奉っている。山門を潜り、両妻側に廻ると楼上への廻り階段があり羅漢堂をお参り氏反対側に降りられる。屋根を二本柱で支え、羅漢像を下から仰ぎ見られるように開放的にしたのは、仁王像や四天王像に替わって邪悪を降魔退散せんがためとの考えからである。伽藍の最奥にある本堂は重層寄せ棟屋根であるが、この山門は規模から単層寄せ棟屋根とした。本堂同様化粧型枠による打放しコンクリートの天井で軒先の微妙な真反りを出させ、そのスラブの上に木組野地板により、照りのある本瓦葺き寄せ棟屋根を造っている。一回り小さい瓦（八九物）を使用し、本堂の屋根と如何に調和させるかに神経を使った。



大棟の鬼瓦

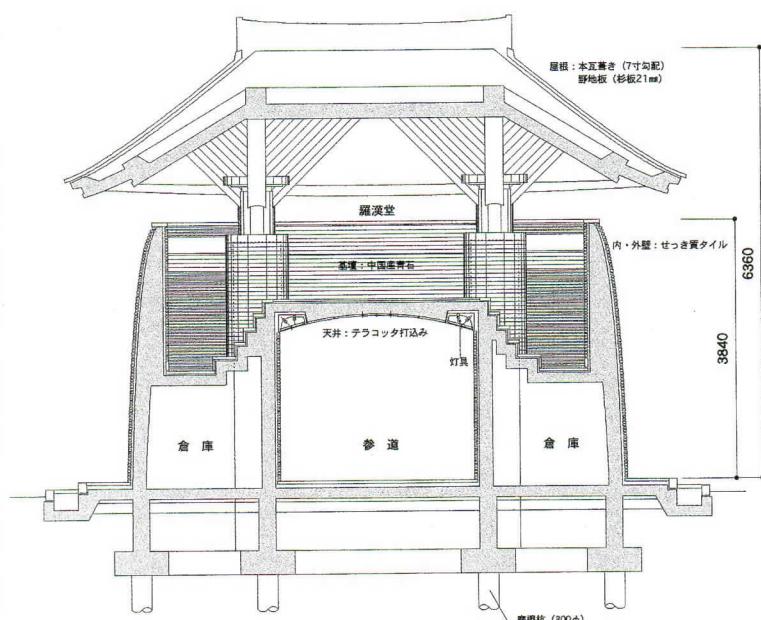
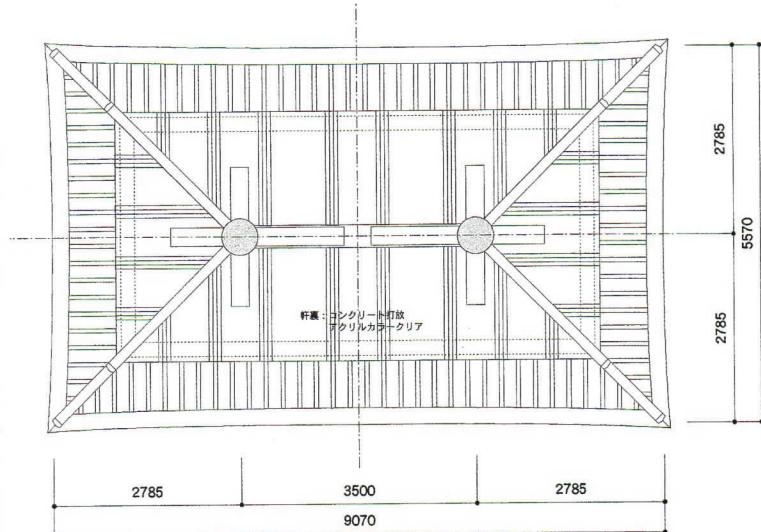
本堂同様非仏教的な鬼面を捨て、インドのアショカ王石柱の獅子像をモチーフにした鬼瓦と同じ鬼師に製作を依頼。この他、隅棟に稚児鬼、二の鬼が配されている。



鬼師による大鬼の製作



山門屋根スラブ型枠  
軒先の微妙な反り(真反り)と、山門楼上の羅漢堂天井型枠



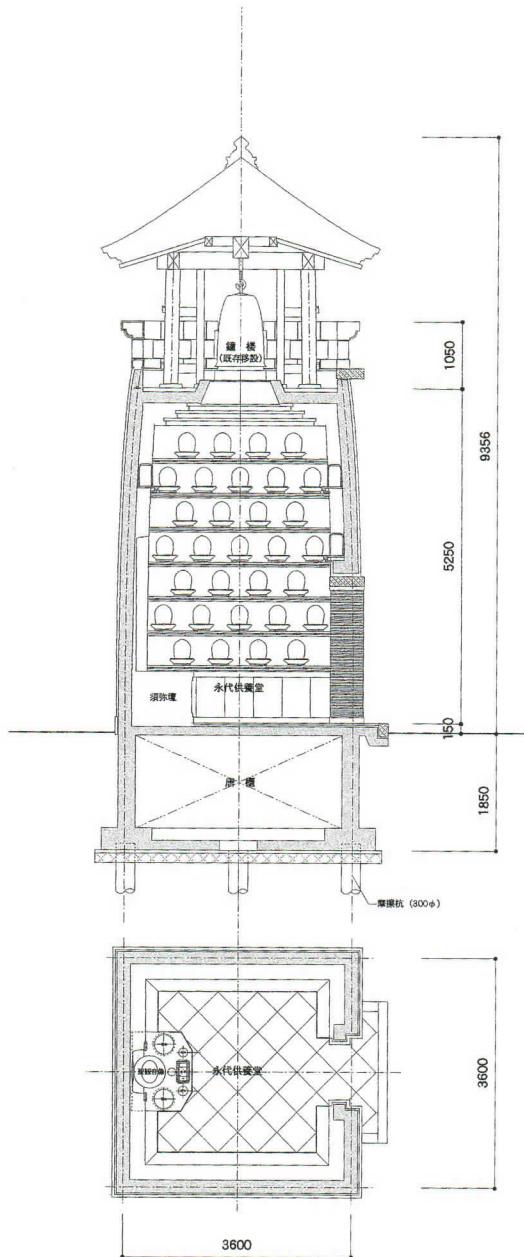
# 矢澤清夫

祝言寺山門・永代供養堂

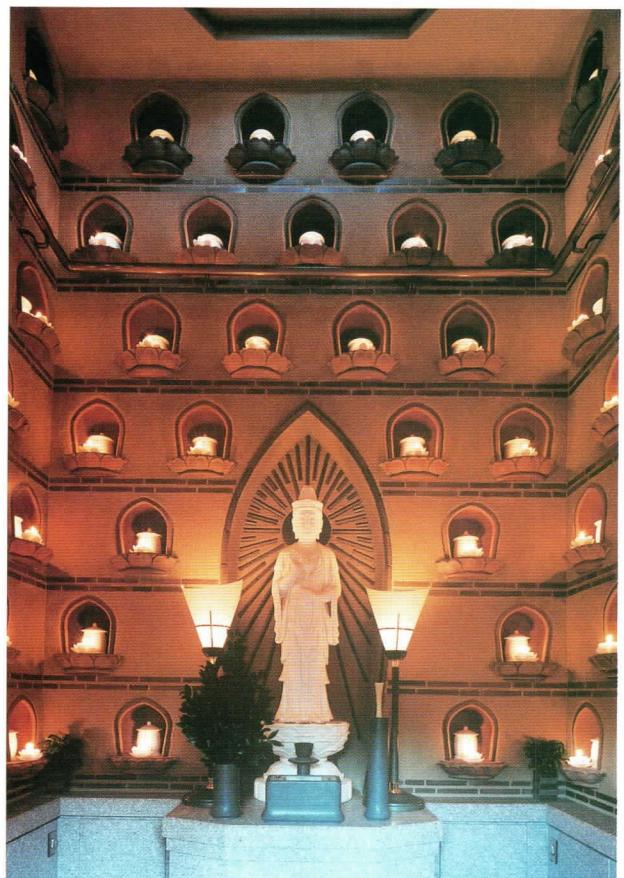
## [永代供養堂]

永代供養堂といつても、無縁の靈骨を埋葬するためのお堂である。多くの無縁の靈骨に加え、少子化が進む現代に於いて、誰もが抱く何れ無縁となる根元的な不安・寂しさに対して救いを提示するものである。戒名さえ判らなくなってしまった無縁のお骨、生きて来られた証はそのお骨だけ。一人一人の人生と無縁という事実を、参拝者の方々に実感してもらいたいとの御住職の希望から、他に例のない骨壺を見せる祀り方を考案した。二間四方とお堂としては、小さいながらも二層分の塔状内壁四方全面に骨壺を一体づつお祀りする祠を設け、その中であたかも仏が坐禅を組むがごとき表現を試みた。設置した祠の数が114と限られている為、一定年月お祀りし最終的にはお堂地下に設けた唐櫃に合葬する。

山門と同じ外壁タイルによる構成と、参道拡張により移設が必要となつた既存(木造)の鐘楼を供養堂の屋上に移設し新旧の一体化をはかった。



テラコッタの組合せによる納骨壇  
骨壺は、聖観世音菩薩像と同じ  
湖南省産の大理石により製作。



(Photo by Koji Horiuchi)

永代供養堂内部(納骨壇)  
中国湖南省産大理石による聖観世音菩薩像を正面に祀る



## ●矢澤 清夫(やざわ きよお)

1963年3月／東京都立目黒高校 卒業  
1968年3月／工学院大学 建築学科 卒業(武藤研究室)  
1968年3月／内井昭蔵建築設計事務所 入所  
2000年12月／内井昭蔵建築設計事務所 退所  
2002年4月／テック建築設計事務所開設 現在に至る

## ●連絡先・会社／

[事務所] 〒174-0052 東京都板橋区蓮沼町53-10-108  
TEL.&FAX. 03-5970-4000  
[自宅] 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町4-13-13  
TEL.&FAX. 0422-21-8920  
(E-mail) yazawa-k@parkcity.ne.jp



平成17年4月から、建築系学科建築学コースに教授として着任しました。担当講座として、学部は、「建築音響、環境工学。」、大学院は、「建築音響特論、環境騒音・振動特論」となっております。

## はじめに

在学中にも、指導教官の下で勉学に取り組んでいた「騒音・振動公害防止技術」に関する研究を、卒業以来、一貫として実施展開をしてきました。就職先は、そのような研究開発業務に携ることのできる機関・企業に積極的にアプローチして、耳学問でない「理論と実践」に裏打ちされた確保たる技術を身につけることに心がけてきました。公害問題、環境問題更に地球環境問題と環境保全に関する守備範囲は拡大してきております。現在も「快適な音響空間の構築」に取り組んでおります。豊かな暮らし、快適な暮らしに影響を与えてきた「騒々しい音、うるさい音、やかましい音、気になる音 更に、無くてもよい音」を無くすことが、「静穏さ、静寂さ、静かさ」を構築する基本であり、そのことを実現するためには、騒音や振動を発生するメカニズムを理解することが必要であり、そのための技術を導入することが重要なのです。

## これまで実施してきた研究開発

在学中は、指導教官に率引されて多くの工場に出向き騒音・振動を実測してきました。多くの産業機械から発生する騒音・振動が、どうして、人間の聴覚や人体にとって影響があるかは明確に理解できないことが続きました、が、継続的に、工場を訪問することにより、多くの関係者が「耳栓」を装着して作業をしている状況を目の当たりにしました。聴覚に関する文献・資料を基に基礎的な知識を吸収してきました。それにも増して、工

場建築の貧弱さの中で作業環境(空気、照明、温熱、通風、騒音、振動、悪臭など)をどのように確保するかが問われていました。建築学的に騒音振動を低減するには、「建築音響」に関する技術を応用して導入することが可能かどうかということから、「残響時間」による評価をすることにより、工場内の「明瞭度」を明らかにする方向へと進んできました。建築音響の講義には、「静穏さ、静寂さ、静かさ」を要求するオーディトリアム、劇場、ホール、映画館あるいは体育館、室内プールが主体になっていましたが、「もの」を生産する工場、構造物を建築したり解体したりする建設作業、道路を走行する自動車、超高速で疾走する新幹線あるいは長距離運搬する航空機などに関する「騒音・振動の影響」や「騒音・振動防止計画」等についての講義はありませんでした。そのため、独自にそれらに関する図書、文献あるいは資料を体系的に読み理解する必要がありました。特に、騒音・振動を計測する計測機器は、精度を要求することから高価であり、外国製が主流であったため、購入に苦慮しておりました。騒音振動関係の法律が整備され始め、並行して計測機器や測定方法の規格化も実施され、各研究機関や大学等での研究開発が盛んになってきました。法律・法規の整備方法、騒音・振動発生メカニズム、その防止技術等に関する研究開発について、体系的な計画方法を学び現実に対応してきました。基本は、「音源」→「伝搬経路」→「受音側」において、騒音・振動をバランス良く低減することです。このための努力が必要となってきます。これまで、実施してきた研究開発を下記に記します。

①金属加工工場等における騒音・振動  
防止・対策の調査研究  
写真:防振処理したプレス機械と防音壁の作業室

- ②石油精製プラントから発生する騒音の長距離伝搬に関する研究
- ③建設作業振動の伝搬防止に関する研究
- ④道路交通振動の伝搬防止に関する研究
- ⑤在来鉄道振動の伝搬防止に関する研究
- ⑥爆破における低周波音の伝搬防止に関する研究
- ⑦住宅の床衝撃音防止及び遮音性能に関する研究
- ⑧ホールにおける室内音響設計に関する研究等
- ⑨公害振動の予測と評価に関する研究
- ⑩道路交通・鉄道振動の予測手法に関する研究
- ⑪低周波音の予測手法に関する研究
- ⑫環境振動による固体伝搬音の予測手法に関する研究
- ⑬防音材料  
(吹付け吸音工法)の技術開発
- ⑭音響・振動計測システムの技術開発
- ⑮環境振動評価手法に関する研究

係部署等に提言・具申していく。

## 4) 環境騒音・環境振動における予防・保全の予測手法に関する研究

一定規模以上の事業に関して、環境アセスメントの実施が法律で義務付けている。本研究は、その環境項目である「騒音・振動」に関する予防・保全の予測手法として、発生源→伝搬経路→受手側を系統的に構築し、防止技術項目を寄与別に提供する。

## 5) 低周波音の影響に関する研究

本研究は、低周波音(1Hzから100Hz前後:非可聴音域と可聴音域)に関して、発生源と受音側の対応を特定し、非可聴音域(1から20Hz)なのか可聴音域(20から100Hz)なのかを明らかにすることで、人体や聴覚への影響を低減できる方策を探る。特に、非健常者や高齢者等に対する「聴覚閾値」を実験的に明らかにする。

## 研究室の研究テーマ

これまで取り組んできた研究を継続すると共に新たな研究にも取り組む方針です。

### 1) 波動論(建築音響学)による基本的な住居空間の構築に関する研究

本研究は、日本家屋の伝統的なモジュールである「3畳間、4.5畳間、6畳間、8畳間、10畳間等」の空間が、音響学的見てどのような音場になっているのか、結果的に、快適な音環境空間となっているのかどうかを波動論から明らかにする。

### 2) 地域環境の静かさ・静寂さに関する研究

本研究は、地域周辺に存在する騒音源を探求しながら、住空間や聴覚へ影響を与える「音の3要素:音の大きさ、音の高さ、音色」を明らかにし、地域環境の「静かさ・静寂さ」の構造に迫ると共に都市計画に対する警鐘を喚起する。

### 3) 環境振動の国際的な性能評価に関する研究

本研究は、我が国の振動規制法に影響を与えてきた国際規格やISOについて、各国の状況・条件を体系的に整理検討し、更に「人体への振動影響」を与えていると指摘されている木造家屋や軽量住宅建築物の振動低減方策を明確にし、具体的な性能評価を闘

塩田 正純 (しおだ・まさづみ)

〒192-0015 東京都八王子市中野町2665-1

TEL&FAX/0426-28-4735

〒163-8677

東京都新宿区西新宿1-24-2

TEL&FAX/03-3340-1468

E-MAIL/dt13102@ns.kogakuin.ac.jp

1942年東京都生れ

(東京都立日本橋高等学校 卒業)

1968年 東京工業大学 工業教員養成所

建築学科卒業(建築音響学/物理環境工学)

1968年 東京工業大学 工学部建築学科研究生

1969年 社団法人産業公害防止協会騒音係長

1971年 石川島播磨重工業株式会社

技術研究所 研究員

1975年 東京工業大学大学院

総合理工学研究科 研究生

1978年 飛島建設株式会社 技術本部技術研究所 主任研究員

1984年 工学博士(東京工業大学)

1987年 芝浦工業大学工学部建築工学科

非常勤講師

1993年 技術士(建設部門/環境部門)

1996年 信州大学地域共同研究センター

客員教授

1997年 環境カウンセラー(環境省)

1999年 日本建築学会環境工学委員会委員/環境振動小委員会委員

2000年 社団法人日本騒音制御工学会 副会長

2003年 飛島建設株式会社 常務執行役員

2005年 工学院大学工学部 建築学科

建築学コース 教授

## 主な著書

地域の音環境計画(共著:技法堂出版)、地域の環境振動(同左)、騒音制御工学ハンドブック(同左)、公害振動の予測手法(単著:井上書院)、爆破による音と振動(共著:山海堂)そのた。

# 工学院大学建築系学科 HOME PAGEの紹介

20

2006年（平成18年）1月現在、  
編集部で確認できたHomePageは、  
建築都市デザイン学科10件、  
建築学科10件がありました。  
それぞれのHomePageのアドレスを  
ご紹介しますので、皆様直接ご覧ください。  
追加のHomePage、およびOBの皆様の関係する  
HomePageで会員相互の参考になりそうなものが、  
ございましたらNICHE編集部までご連絡ください。  
連絡先：miu@tkg.att.ne.jp

● 建築学科

● 建築都市デザイン学科



● 大橋研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Edt72069/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Edt72069/)



● 野辺研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Edt13006/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Edt13006/)



● 谷口研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1022/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1022/)



● 野澤研究室  
[giants.cc.kogakuin.ac.jp/nozawa\\_lab/](http://giants.cc.kogakuin.ac.jp/nozawa_lab/)



● 久田研究室  
[kouzou.cc.kogakuin.ac.jp/](http://kouzou.cc.kogakuin.ac.jp/)



● 初田研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1015/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1015/)



● 中島(裕)研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Edt13052/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Edt13052/)



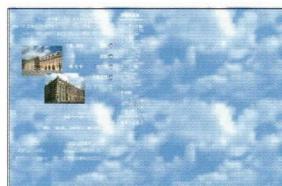
● 澤岡研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1021/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1021/)



● 宮城研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1017/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1017/)



● 小野里研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1026/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1026/)



● 中島(智)研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Edt13029/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Edt13029/)



● 安原研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1016/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1016/)



● 宮澤研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1019/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1019/)



● 山田研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1031/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1031/)



● 藤木研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1034/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1034/)



● 後藤研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwa1023/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwa1023/)



● 窪田研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1029/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1029/)



● 村上研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1028/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1028/)



● 望月研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Edt61124/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Edt61124/)



● 遠藤研究室  
[www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1018/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1018/)

# また逢う日まで……

建築学科助教授

## 木村 幸弘

私が1964年に奉職した当時は今で言う環境系の平岡正夫先生のところに所属し、2003年退職された足立先生も同系列におられた。

その後、平岡先生が亡くなられて波多江先生のもとで設計製図助手として所属しながら、約10年間位建築設計の勉強をさせて頂いた。

写真は1965年のある割烹での建築学科の会の記念撮影である。前列左から3人目が平岡先生、その左隣が横田先生、前列左から6人目が波多江先生、その右隣が亡くなられた武藤先生、因みに、山下先生はイエール大学に留学中でした。

学生運動(東大・安田講堂事件)から遅れて、我らの工学院大学は、1969年八王子校舎封鎖、つづいて新宿校舎と波乱が続いた折、1年から4年までの有志が集まり自主ゼミを開講した。その時のメンバーは菊田君、内野君、石渡君、滝沢君、柏崎君、宮野君、山下君、細川君、小川君らの面々による「築匠ゼミ」と称して数々のコンペ参加して、入賞などして栄誉に与ったのも、この時の大いな思い出になっている。

その後、舟木君、新君、藤木君らが加わりゼミを継続したが、大学の運営が平和りに推移するにつれ自然消滅になってしまった。

私の研究室は平成5年度に

開設されてから平成17年度の13回生にわたって、延べ90名の卒業生を送り出している。短期間とはいえ斯くも大勢の人々と関わったと、改めて考え深いものを覚えます。

加えて、平成3年度は武井君、前田君、山下君と平成4年度は野口君、中野君、多田君らが、経年的に荻原研究室に所属しながら、私が指導した諸君なので、合計96名の卒業生がいることになるだろう。

卒業生諸君との思い出の写真は、残念ながらほとんど残っていないので、少ない中から掲載するが、依怙贔屓している訳ではないことを諸君の寛大な容認を頂きたい。

卒業生諸君のスナップ写真はいずれも軽井沢学寮での卒論ゼミの時の記念写真である。

私自身、これらの写真や卒業生名簿の諸君らの名前を追いかながら、彼は彼女は、と学生時代の諸君らの顔を思い浮かべながら、あの時はこうだったなあ～!、ああだったなあ!と懐かしく思い出されるのは、私の貴重な財産かも知れない…。終わりに、皆さんに感謝します。

(きむら ゆきひろ)



平成16年度軽井沢学寮にて



平成10年度軽井沢学寮にて



1965(昭和40)年 建築学科の会

建築学科教授

## 宮 城 干 城



1995年夏研究室の合宿（院生・卒論生・ゼミ生／女子学生は紅一点）

**本** 学出身者で建築学科の教職を退任するのは2003年度の南迫哲也教授、2005年度の木村幸弘助教授について私が3人目となる。（2004年度には一身上の都合で退職された高信氏がおられる）私は本学に助手として奉職し現在まで約35年間勤めしたことになるが、その間の想い出の多くは苦いものであった。しかし、それも大学の組織人としてのそれであって、研究者、教育者の一人としてみると必ずしも辛いものではなく良き想い出が多い。

私が地域医療施設設計画の研究に足を踏み入れるきっかけとなったのは、大学院時代に当時の日本住宅公団、現在の住宅都市整備機構から、日本病院建築協会（現在の日本医療福祉建築協会）に調査・研究を委託された「住宅団地における医療需要調査」に携わったことにある。この調査は当時同協会長をされていた東大の吉武泰水教授を委員長に4つの大学（工学院大学、千葉大学、明治大学、名古屋大学）が、関東および名古屋の4つの団地の医療施設利用状況および医療需要を調査するものであった。しかも、その委託研究は単年度研究が2年続いたのであった。この時の成果はその後「4団地調査」として、高蔵寺ニュータウンや多摩ニュータウン、つくば研究学園都市などの医療施設設計画に応用されることになる。当時一緒に研究を担当した他大学の院生仲間も、東北や中部の大学の教授になったり日建設計の理事になるなど活躍している。

助手になってからは、私個人の研究テーマとして、重症心身障害児施設の研究をスタートさせることになる。このテーマは当時まだ建築学会等では研究者はゼロに近く、しかし、社会的にはその種の施設が強く求められている時代でもあった。この重症児施設の研究を2～3年つづけた成果を学会の大会や学内の研究報告に発表したところ、当時東京都立府中療育センター（400床の重症心身障害児施設）の基本設計を進めておられた千葉大学の伊藤誠

教授から関連する論文を求められ、お送りしたところ「あの重症児施設に関する論文を是非学会の論文報告集に出しなさい」と云われた。そのことが何を意味するのか當時は全く分かっていないかった。そのころ私の指導教授も未だ学位を持っておられなかったのだ。私は、折角伊藤教授が私の研究を評価して下さっているのに、その好意あるアドバイスに対し何の反応もしなかった。

一方では、卒論生諸君とは研究の他に日本建築学会のコンペに2～3度挑戦した。当時私は未だ助手で、研究室は勿論無く、所属も研究室ではなく「製図助手室」という部屋で、豊田克巳、安原治機、初田亭などの諸先生と共に仕事をしていた。校舎も超高層でなかつたため大学に泊まり込んでの作業では、夜中に腹が空くと3,4階から雨樋を伝って校舎を抜け出し、何か食料を手に入れたりしたものだった。或る年のコンペでは、図面の「折り畳み可」ということだったので、全体のつながりが解るようになると配置平面図で、大きく一枚の紙に描きそれを幾つにも折り畳んで、提出したところ折った回数だけ枚数はカウントされ、5枚の制限を大きくオーバーしてしまった。それでも、これは力作だから審査の先生に見てもらいますと云って預かってくれたが、勿論結果は規定外失格となつた。その悔しさをバネに再び挑戦し、今度は絶対ミスをしないぞ……と頑張り結果は全国で1等1席を獲得した。当時は学会の賞金は1等は賞金30万円とメダル（これは1等だけにある）であったが、その賞金全てを使って一緒にコンペを行った卒論生やゼミ生のほか、夜食の差し入れをしてくれた他研の仲間もつれて信州に2～3泊がかりのスキーに行ったのも良い想い出である。

時期は今となっては定かでないが、この頃南ベトナムに、日本政府は戦後賠償の一環として1,200床の病院を建設し寄贈することになった。その具体的なプロジェクトを日本病院建築協会に委嘱してきた。これは国としては外務省、大蔵省、厚生省、建設省の4省が絡む

ビッグプロジェクトであったが、建築に関しての作業は上記協会会长の吉武泰水（東大）をはじめ、浦良一（明大）、伊藤誠（千葉大）、荻原正三（本学）、医学からのアドバイザーとして守屋博（順天堂）などを中心に、われわれ若手は設計協力ということで参加した。折しも学生運動の盛んな頃であったため、われわれ若い連中は「いまベトナムが南北に分断されているときに、南だけに援助の手を差し伸べようとする国のお先棒を担いでいいのか?」とか「軍事施設の設計とかではなく、病に苦しんでいる人を救うための病院だから良いのではないか!」、「いや、それでも病院で助けてもらった南の兵士は再び戦場に出ていくではないか?……」といった議論を戦わしたもの、青臭いが懐かしい。

その頃、再び住宅団地の医療需要調査が今度は主として、医療施設側調査を中心に行うという委託の研究が日本住宅公団からあり、明治大学の浦良一教授を中心に行うことになる。

一方、学内組織的には助手という立場であり、しかも当時、教授たちには「助手は大学の雑用を処理するためのマンパワー」としての認識しかなく、計画系の助手は多くの設計の授業にアシスタントとして駆り出され、試験監督も20回以上は当たり前であった。そうした中でせめてもの抵抗は、「設計の年間スケジュール」を作る時、非常勤の講師採用していたのが（人事は教授が進めていた）他大学出身者と本学出身者では差別をし、他大学出身者は3年契約、本学出身者は2年契約となっていた。そこで、設計会議の時「僅か2年や3年では最初の1年目は学生のレベルを理解したり、授業の進め方に慣れると精一杯で教育効果が薄い。もっと期間を延ばすべきだ」と発言し、その結果他大学出身5年、本学出身3年となつた。本学出身者を一律に短くする理由が理解できない。能力が無く、従つて弊害を少なくするためなのか?それだったら、出身大学による差別ではなく個々人の能力で判断すべきであろう。そこで、私は教授らに相談することもなく

全員5年間が経過するまではこの措置を無視することにした。設計に関する非常勤講師の数は数十人になつてるので、教授たちは誰が何年経過したかいちいち憶えておられなかった。ことに、設計関係の責任者であった波多江先生は、お人柄が大らかで細かいことに拘らない性格だったので随分救われた。

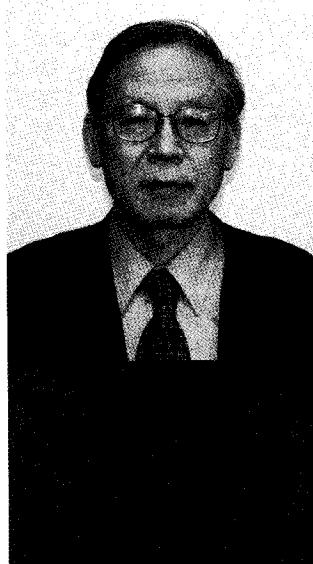
もう一つ、助手時代の出来事として忘れられないのは、ある教室会議の時であった。その日はどうした訳か教授・助教授の出席が悪かった。その時主任教授をしておられた武藤章教授が「出席者人数が足りないので会議を開催出来ないな……」といわれた。

そこで、わたしが「助手がこんなに沢山出席しているから、助手の人数も数えられたらいかがですか?」と言うと、「助手は人数には入らないんだよ」と先生、「それでは助手二人で一人として数えられたらいかがですか?」とわたし。すると先生は例のニヒルな、しかし何処か憎めない顔でニヤリと笑われて「それでもダメだよ」とおっしゃる。そこでわたしは思わず!「それじゃー助手は半人前でもないんですね!」と言わずもがなのことを叫んでしまつた!そして、次の教室会議からは一切出席をボイコットしてしまつた。それから数ヶ月経つて、直属上司の教授に「他の先生たちが『宮城は生意気だ』と言っているぞ」と云われたが気にしなかつた。別に殺されるわけでもないし……。こんなことがあったが、当時学内の偉い先生たちの中では武藤章先生と一番よく一緒に飲みに行つた。そして、飲みながら先生に「そろそろ作品集を出版されないんですか」とプレッシャーをかけたのだ。すると先生は「世に問うて恥ずかしくない作品はそんなに無いものなんだ」と、いかにも武藤章先生らしいお言葉が返ってきた。

本学に奉職してからの35年間の間の想い出は、なかなか尽きないものがある。紙数の関係もあり本稿ではここでうち切らせて頂き、つづきは最終講義で語ることにしたい

（みやぎ たてき）

## 第1部建築学科の近況



宮澤健二

建築学科主任教授

## 建築系学科の様相:学生数、学生への支援体制とコンペ等

建築学科系列も学科やコースの構成を検討し、再編を繰り返してきたが、現在の学科編成と学生数は以下のとおりです。

1年生 全学年

1部	建築学科	建築学コース	115	564(内女子106)
		環境建築コース	60	297(内女子62)
	建築都市デザイン学科		101	486(内女子131)
2部	建築学科	建築コース	69	374(内女子85)

大学院修士 1年生:72名、2年生:61名、博士課程1~3年生:13名

2004、2005年度の第1部A日程入試の競争倍率は建築コース4.3→5.4、環境建築コース3.5→3.8、建築都市デザインコース5.5→5.9、2部の一般入試2.6→1.8倍で、建築業界は若干景気回復を反映してか他科(1部全学平均3.1)より人気がある。また、2005年度入試から奨学金付きの入試制度もはじまった。新入生の学生数としては、建築学科が若干少なかった。2部は一般入学試験での入学者は少なくても、編入や学士入学等が多くなり、3~4年生は多くなる。

一方、教員構成は建築学科専任20+客員教授1+非常勤講師62名、建築都市デザイン学科専任11+客員教授1+非常勤講師32名、事務職員2名である。

18歳人口の減少に対処すべく、色々の試みや検討がある。大学全体としては、単一工学部から、複数学部へ移行する方向で、2006年4月から、情報学部と機械創造工学科が新設される予定である。建築系学科でも、「21世紀プラン・新学部構想」による建築学部構想が検討されたが、残念ながら今年は実を結ばなかった。早期の実現を期待したい。

また近年の学生への支援制度として特筆すべき点は、就職支援、国際化、奨学金制度の充実等がある。学生の就職支援としては就職アドバイザー(OBの方に依頼)制度が、また教育活動の一環としてインターンシップ制度や建築系学科学生・大学院生海外渡航奨励金制度がある。海外渡航制度は建築系学科の35周年事業の一環として設けられ、4年目になるが、毎年6人程度の学生がこの制度を利用している。どちらも卒業生のみなさまには今後も御協力をお願い致したい。

奨学金制度も充実し、近年は学生の経済的理由もさることながら、質の高い学生の確保を目的としたものもある。主なものは、工学院大学学園奨学金、日本育英会の他に、建築系学科学生・大学院生海外渡航奨励金(前述)、大学入試試験成績優秀者特別奨学金、大学成績優秀学生奨学金、産業界や卒業生や教員OBの奨学金等(今年度からは前述のように入学試験によるものも加わった)がある。

今年度は設計コンペの入選・入賞は多数あった。詳細は建築都市デザイン学科の学科だけを参照されたい。

また最近の教育問題として、教育の質の確保がある。学生の授業評価などがあるがなかなか効果が上がらない。学生諸君の目的意識の向上と細かな教育が必要なようだ。しかし、同窓会の支援もあり、一級建築士受験の合格者は多く、2004年度は全国の大学で5位で、良く健闘したといえる。

## 学術フロンティアプロジェクト5年目(最終年度)に入った研究プロジェクト

これは文部科学省の私学助成として2001~2005年の5年間のプロジェクトとして認定され、八王子校舎に「地震防災・環境研究センター」(広澤雅也センター長)を開設し、実験設備や機器を装備し、「地震防災及び環境共生に関する新技術の研究開発」のテーマの下、建築系学科を主体に他学科の教員、学外研究者及び院生の協力も得て行っているもので、2005年度は最終年度なり、センター長も広澤先生から宮澤に交代した。最終研究発表会は3月17日に開催予定である。このプロジェクトにより多くの研究成果が上がったが、若干研究内容を応用面にシフトし、防災まちづくり等を追加し、継続申請の予定である。教育の充実や研究は、特に実験研究はお金と人力が必要で、資金の獲得は専任教員の仕事である。

教員の活躍としては、代表的なものとして下記のものがある。

初田亨教授:(都市計画の進歩、発展に顕著な貢献をした個人や団体に贈呈される賞)都市計画学会・石川賞受賞

中島智章助教授:「ヴェルサイユ宮殿新城館の国王のアパルトマンと太陽神話」-天井画と広間の間取をめぐって-で日本建築学会奨励賞

構造系では、既存木造住宅の移築復元実大振動実験(宮澤)や姫歯一級建築士の構造計算書偽装事件ではコメント(小野里憲一先生)や大がかりな振動実験(宮澤、小野里憲一先生)などで、本学の活動がテレビで紹介された。計画系でも中島智章先生の放送大学への出演などもあった。

## 就職状況と建設業界

今年度前半は建築業界は明るい兆しが見え就職状況も好転し、年度末に近くなつてまだ採用出来ていない企業から追加募集の依頼が何件かあつた。H18年度学生(3年生)の就職活動も例年より1~2ヶ月早まつたように思う。しかし、H17年末の姫歯建築士の構造計算書偽装事件、年明けのホテルの違法改修工事など、建築業界に暗いイメージを持たれるような事件が発生した。姫歯事件では、教員と学生(参加学生は40名以上)の共同作業による大掛かりな振動実験が行われた。構造系の学生には、技術者倫理、構造設計や建築士の制度を学ぶ良い機会ともなった。

## 教員の近況

2004年度をもって、本学建築学会に長く奉職された広澤先生と高信先生が退職された。両先生は本学建築系学科に大きく貢献され、現在也非常勤講師としても協力頂いている。

## 建築都市デザイン学科の近況



倉  
田  
直  
道

建築都市デザイン学科主任教授

### 建築都市デザイン学科の現状

2005年度建築都市デザイン学科の入学定員は70人であるが、2006年1月現在の学生在籍数は、1年生101(28)、2年生79(18)、3年生83(30)、正規4年生113(36)、5年以上の留年生13(1)、合計376(112)となっている。うち()内が女子学生である。また、2005年度入学試験の実質競争率は、サテライト入試が4.2倍、A日程入試5.9倍、B日程入試9.8倍、センター試験入試3.0倍で、例年と同様、入学試験においては他学科と比べて人気のある学科としての地位を維持している。一方就職においては、就職率こそある水準を維持しているが、長引く建設業界の低迷と学生の志向が相俟って、就職状況は良好とは言えない。特に、建築都市デザイン学科では設計を希望する学生が多いのに対して、社会では設計業務が縮小する傾向にあり、特に学部生において希望する職につけないケースが少なくない。少子化に伴う急激な受験者数の減少、建築業界の構造的不況といった社会状況を背景とする受験生の理工系離れなど、受験や就職を取り巻く社会状況の変化を考えると、ある程度の受験生を確保できている今の内に、長期的な展望に立った安定的な受験者数の確保と建築系学科のスタイルを維持することが可能な次の時代に向けての建築教育のあり方を考えなければならない時期に来ていると言える。

現在の建築系学科の教員構成は、専任教員32名(教授21名、助教授8名、講師2名、特別専任教員1名)、客員教授1名、兼任講師90名である。このうち建築都市デザイン学科の専任教員は11名(教授8名、助教授2名、講師1名)で、専門分野別には、建築デザイン3名、都市計画・都市デザイン3名、建築計画1名、建築史・保存修復1名、生産・材料1名、構造1名、環境・設備1名となっている。

### コンペなどにおける学生の活躍

本年度の特筆すべき学生の活動として、大学院生を中心に学外のコンペ等に積極的に参加し、優秀な成績を修めていることがあげられる。その代表的なものとしては、日本建築学会主催・都市建築の発展と制御に関する設計競技「緑地や公共空間を創出する都市建築の原型」佳作(広瀬雄太、西山徹、照沼恒平、齐藤淳、梅澤宏行)、卒業設計日本一決定戦・仙台デザインリーグ2005・日本二(須藤直子)、第12回国際住宅・都市計画連合(IFHP)主催国際学生コンペ「Restructuring an Urban or Rural Space to Enhance Identity」佳作(小林丈史、卯月淳、花沢淳、鈴木庸介、幸村真宏、羽場梨恵子、広瀬雄太)、第40回セントラル硝子国際建築設計競技「まちのランドマーク」優秀賞(大山高志、梅澤宏行、嵯峨彰仁)、優秀賞(山形章、照沼恒平、内藤巧)、第32回日新工業建築設計競技「雨やどりの空間」佳作(森元氣、神谷司)、選外佳作(照沼恒平、山形章、内藤巧)、第3回日程アーキテクチャコンペ「コンバーテッド・エンパイロメント」優秀賞(花沢淳、西山徹、広瀬雄太)、東京電力主催TEPCOインターラッジデザイン選手権「熔解する境界・あいまいな場所—住宅を疑うー」佳作(藤本卓也、新保優樹、八木橋悠)、選外佳作(小林丈史、足立隆介、敦田真義、中野謙一)、日本建築学会関東支部第7回提案競技「美しいまちをつくる、むらをつくる」入賞・市長賞(足立隆介、小林丈史、中野謙一)、入賞・市長賞(卯月淳、幸村真宏、蛇石和寛)、都市再生機構主催・ストリートファニチャー・サイン学生プロポーザル「まちのストリートファニチャー」最優秀賞(庭本卓実、大和篤史)などである。これら多くはグループ作業によるものであり、所属研究室の枠を超えて学生達が協働しているところに特徴がある。

個性の異なる学生同士が協働作業を通して相互に刺激し合うことがこうした成果に繋がっていると言えるだろう。また、4年生の建築都市デザインの設計演習(杉並区阿佐谷地区)や大学院における都市デザインの演習(銀

座)などでは、課題の対象となった地区において学内の設計課題の成果を展示・発表し、地元の人々と意見交換をする機会を得ている。こうした機会は学生にとって刺激となるだけでなく、地元のまちづくりに対する意識啓発にも貢献するといった点から、地元自治体をはじめとする関係者から好意的に受け入れられている。

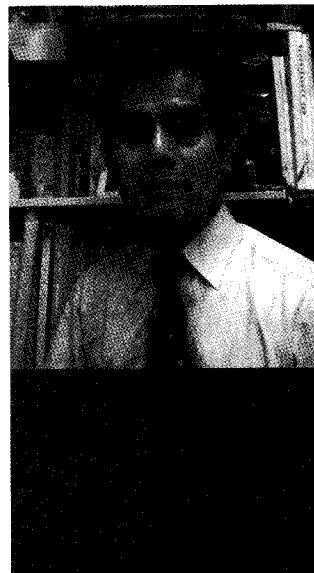
直接学科の活動とは関係しないが、本年度夏8月から9月にかけて本学八王子キャンパスのスチュードントセンターの設

計者選定のためのプロポーザルが行われた。審査は、委員長香山寿夫東京大学名誉教授、富永讓法政大学教授、栗生明千葉大学教授、北山恒横浜国立大学教授の他に学長をはじめとする本学関係者5名が加わり9名の審査委員により公開で行われた。1次審査には、応募規準を満足した42名(審査委員推薦外18名、本学教員3名、本学交友21名)が参加し、選考の結果5名が2次審査に進み、最終的に本学教員である澤岡清秀教授を中心とするチームが設計者に選定された。全ての審査のプロセスが新宿校舎のアトリウムを会場として公開で行われるという新しい試みであったが、本学建築系学科の学生にとっても、提案者達が真剣勝負で臨む設計者選定のプロセスを生で実感できる機会でもあり、教育の機会としても意義のあるものであったと感じている。

### 新学部構想について

本年度は、多くの建築系学科教員にとって、建築系の新学部構想の議論に明け暮れた一年であった。一昨年度建築系学科内に発足した建築系学科将来検討委員会において検討されてきた建築学部構想が、さらに学長を中心とする21世紀プラン作成委員会で詳細な検討が加えられ、2004年7月の教授総会で承認された。その後、建築系学科より提案した構想案をもとに詳細な検討が重ねられたが、1学部1学科で時代のニーズに合わせた柔軟で多様なプログラム(3領域15プログラム)を準備するという建築系学科からの提案は大学及び法人の十分な理解を得られず成案に至らなかった。2005年度になって学長の下に木村副学長を委員長とする建築系学部新設検討ワーキンググループが新設され、新学部複数学科を前提に新たな新学部構想の検討がスタートした。このワーキングには建築系学科より両学科主任とこれまでの学科内で建築系新学部検討ワーキングをまとめてきた遠藤教授と野澤教授が参加した。建築系学部新設検討ワーキンググループでは、建築系学科内のワーキングでの検討を踏まえ、エンジニアリングを中心とする建築学科、デザインを中心とする建築都市デザイン学科に、新に建築や都市に係わる社会的なソフトに焦点を当てたソーシャルデザイン学科(何れの学科名称も仮称)を加えた3学科で構成する新学部構想についての議論を進めてきた。ある程度新学部の概要が見えてきたところで、外部の識者や受験産業関係者からのヒアリングを行い、18年度開設を目指し本年度中に新学部の枠組みを固め、新学部設立の手続きに入ることを目標してきたが、新学部の大義名分あるいは新規性は何か、十分に受験生を集められるか、教育の場所の確保などを巡り、学科、大学、法人との間の合意が得られないまま、最後に新学部2学科案という学長提案がなされたが、これについても合意が得られず、本年度中に成案を得ることが出来ない結果となってしまった。数年に渡る新学部構想の検討に費やした教員の時間とエネルギーは膨大なものになるが、このエネルギーが無駄にならないよう、引き続き、新建築系学部を含む新しい時代に応えた建築系学科の改革を推進する必要があると感じている。

## 第2部の現況



二部主任教授

宮城千城

工学院大学同窓会から今年も昨年同様に、2部の現況について何か書くように依頼された。

去年も書いたようにそう毎年様子が変わるものでもない。2部主任は原則的には1年だけだったのだが、私は「今年もやれ」と云われてしまった。それというのも、かつて順番的には1部主任にさせられそうな時、ある重篤な病気で2ヶ月近く入院した後だったので、それを理由に辞退させて頂いたことがあった。そういう経緯上、もう1年2部主任をやる羽目になった。

もし、2部主任に別の人物がなっていたなら2部の現況についても、切り口を変え、見方も変えた報告が出来るのかも知れないが、昨年と同一人物が書くのであるからどうかその点は多少大目に見て頂きたい。

## 受験者数の傾向

わが国の人口動態は、先の国勢調査で死亡者の数が出生者数を上回ったことが明らかになった。人口の減少傾向ではなく事実となったのである。また、学校教育関係についてみても小、中、高、大とそれぞれの年齢層においても、就学適齢期人口の減少は始まっており、大学全入時代とも言われるようになった。

本学においても受験者数の減少傾向とそれに伴う学力の低下傾向は如何ともしがたいものがある。2部志願者総数の経年変化を2000年～2005年についてみると、541人、450人、590人、702人、616人と一進一退の状態といえる。そのうち建築学科は、194人、162人、174人、240人、214人で、2部の全学生の35.8%、36.0%，

29.5%、34.2%、34.7%と全体の30%～36%を占めている。

今年度の学科別・制度別志願者数(一般入試を除いた、指定校推薦、公募制推薦、社会人特別選抜、2部編入学)をみると、全学科の志願者数合計を100として、機械システムデザイン学科11.6%、化学応用デザイン学科8.4%、電気電子情報工学科16.1%、建築学科63.9%となっていて、建築科の人気が圧倒的に高い。正に、2部は建築学科でもっているようなものである。

## 他大学の2部の現況

こうした状況の中で、4理工大学の中では武蔵工業大学が夜間部を廃止している。また、一方では夜間部を昼夜開講制へと改組するケースが増えているのも事実である。そうした、社会環境の変化の中で、本学の二部(夜間部)が生き残っていくための在り方は如何にあるべきか…?

一つの転換期に来ているといえよう。

三年前に夜間部を廃止し、フレックス制を導入した中央大学商学部事務室課長の羽田一男氏によると、「従来の夜間部の目的は達成した」と云うように、経済的事情で夜間部に通わざるを得ない層は減少し「一部へ入れなかったから二部へ」というネガティブな学生層が増えていることも一因としていいだろう。ネガティブな学生が増えた結果、二部の質が低下し、「高等教育を行えるレベルではない」として、夜間部の改組に着手し、より魅力的な学部・学科作りに向かうのは、とくに私大に共通する動きである。

## 大学院建築学専攻の近況



高  
英  
雄

大学院建築学専攻運営委員 教授

### 大学院としての背景

本学大学院は1964年4月に修士課程、その2年後に博士課程が設置されてから約40年の間に、学内施設の整備、指導教員層の拡充、大学院進学者の増加など建築学専攻の大学院教育は大幅に充実されました。初期には建築学科卒業生のうちの大学院進学者は5%でしたが、17年4月には建築系学科卒業生の21%の64名が大学院に進学しました。現在の建築学専攻の在籍者数は146名で、修士1年72名（社会人3名）、修士2年次61名（同2名）、博士後期課程13名（同8名）で、全体の20%を女子学生が占めています。

修士2年では技術系（構造・生産・設備）17%、計画系（設計・都市・計画・歴史）83%に対し、修士1年では技術系28%、計画系72%であり、計画系が多数である傾向は同じですが、技術系進学者の増加の傾向も顕著です。大学院進学の動機は様々ですが、設計事務所、建設業など採用企業側で即戦力となる修士課程修了者を優先的に採用する方向への採用企業側のニーズの変化の他に、計画系では設計プロジェクトの実践を通じて建築知識の高度化と建築家・設計者としての職能教育、技術系では構造設計、や研究開発や施工管理の職務希望者の専門教育など希望する学生の増加が反映されているように考えられます。

### 大学院教育の環境

大学院生を指導する大学院教員は現在23名に達し、18年度はさらに4名の増加が見込まれており充足されました。その半面、大学院の教育・研究施設は大学院生数に対して改善がなく、不十分な現状が続いています。とくに、建築学専攻のうちでも計画系は新宿校舎の大学院生室、設計室、CAD室などで教育、研究および設計プロジェクトが進められていますが、学生数に対して大学院生室や設計室が極度に不足し、学生諸君に不便を掛けているだけでなく、入学者数を制約せざるを得ないのが実情です。一方、技術系では研究室は新宿校舎、実験室は八王子校舎を持ち、近年整備された地震防災・環境センターなど大型実験施設は高度な建築技術研究に大いに貢献していますがこれら施設

の運用・維持管理には技術職員の配置が急務であります。

### 博士論文、修士論文および作品について

平成16年度は、建築学専攻から計画系2名と技術系3名が課程博士、技術系2名が論文博士として7名が博士（工学）の学位を授与されました。平成17年度は、技術系3名が課程博士としての学位申請中です。なお、博士課程開設以来の建築学専攻の課程博士博士は21名（17年度末授与見込みを含む）で総数の約1/4を占めています。

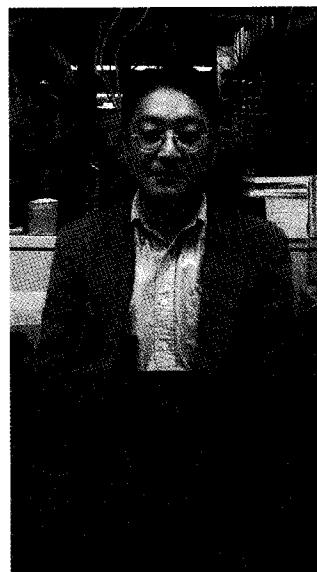
平成16年度の修士修了者69名のうち修士作品が28%、修士論文が72%でしたが、平成17年度は修士作品が30%、修士論文が70%で59名が修士課程を修了見込みです。修士作品は、現在の建築状況を反映してか街作りや保存・再生・コンバージョンに関するものがほとんどでした。修士論文のうち、計画系の論文が68%技術系の論文が32%で、それぞれの研究室の専門に応じて多岐にわたっています。

また、研究成果の対外発表も増え、大学院生の国際学会参加補助金制度を利用して国際会議で論文発表した学生は16年度に続いて17年度も6名に達し、また国際的な設計コンペと国内の著名な設計コンペの入賞も3件ありました。

### 社会人・留学生と大学院

修士在籍者のうち社会人は4%の6名ですが、博士後期課程では在籍13人中社会人が8名、私費留学生が2名在籍しています。社会人学生は学習意欲が高く、専門分野の学習目的が明確で、一般学生にも極めて良い影響を及ぼしています。本学新宿校舎の立地は社会人の大学院教育に適しており社会人大学院生は年々増加していますが、その大半が他大学出身者で、本学出身者は残念ながらまだ少数です。本学の卒業生諸氏にも生涯教育の一環あるいは専門分野の専門性を高めるために、あるいは博士の学位取得のために、社会人特別選抜の制度を活用されることを望みます。

## 2005年大学入試について



後藤治

建築系学科入試委員／教授

現在、建築系学科の入試委員は、久田嘉章先生と私の2名です。2005年の大学入試状況について報告いたします。

大学改革がさけばれるなか、本学でも2006年にはいよいよ新学部(情報学部、グローバルエンジニアリング学部)がスタートします。その流れに乗り遅れないように、建築系学科でも新たな道を模索している状況です。2005年入試においては、そうした改革の手始めとして、第1部入試に新たな試験日程であるS日程、C-I日程が加わりました。両入試の詳細については、昨年度の本誌に久田委員が報告した通りです。

新たな試験日程は加わりましたが、別表の通り、志願者数・受験者の総数は、昨年度とほとんどかわらない結果となりました。とくに、S日程については、他校に先駆けて1月中に入学試験を実施し、上位合格者に奨学金を給付することにしたのですが、対象となる上位合格者の入学者は少なく、期待した成果をおさめることができませんでした。この状況は、建築系以外の他学科においても同様です。このため、2006年入試では、S日程受験に対する奨

学金給付者の数を増やすなど、引き続き入学試験に関する改革を続けていくことになっています。

建築学コース・建築都市デザイン学科と比較して、環境建築コースの志願者数・受験者数が少ない傾向も、昨年度と同様で、これも改善することはできませんでした。教員による高校訪問数をふやすなど、コースの周知をはかる努力をしているのですが、受験生にはあまり理解されていないようです。現在、建築系学科では、委員会を設けて、将来の新しい体制について協議を進めていますが、問題の解決は重要な課題のひとつです。

2部建築学科についても、編入学による入学者は例年通りの応募があった一方、一般受験による受験者の数が減少の傾向にあります。このため、建築系学科の新しい体制については、2部も含めて検討することになっています。

本学建築系学科の優秀な人材確保や建築系学科の新たな体制に向けて、皆様のご協力やご意見をいただければ幸いです。

2004年度・2005年度 1部建築系学科受験者・入学者状況

学科・コース	2003年度			2004年度		
	志願者数	受験者数	入学者数	志願者数	受験者数	入学者数
建築学コース	1,736	1,631	157	1,979	1,884	116
環境建築コース	592	564	64	545	521	61
建築都市デザイン学科	1,143	1,092	79	1,185	1,127	105

※推奨含む数。編入は除く。

2004年度・2005年度 2部建築学科受験者・入学者状況

学科・コース	2003年度			2004年度		
	志願者数	受験者数	入学者数	志願者数	受験者数	入学者数
建築学科	214	203	70	163	157	74

※推奨含む数。編入は除く。

2006年度・建築系学科入試募集人員

入試種別	募集人員	入試種別	募集人員
		第1部	第2部
学士編入学	若干名	編入学	35名
指定校推薦	工学部で92名	指定校推薦	全学で40名
研究論文推薦	若干名	公募制推薦	全学で13名
付属高校推薦	全学で114名	本学専門学校推薦	若干名
大学入試センター試験利用		付属高校推薦	全学で10名
C-I日程	建築27名	社会人特別選抜	全学で10名
1月15、16日実施	デザイン12名		
C-II日程(新設)	建築5名		
1月15、16日実施	デザイン3名		
一般入試		一般入試	40名
S日程(新設)	建築19名	大学入試センター試験利用	11名
1月29日(土)実施	デザイン8名		
A日程	建築78名		
2月6日(日)~8日(火)実施	デザイン36名		
B日程	建築15名		
2月17日(木)実施	デザイン7名		

※第1部の建築の人数は、建築学コース、環境建築コースの合計

# 2004年度 卒業設計・卒業研究・大学院修士論文題目名簿

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
<b>望月研究室</b>		
1部 建築コース	桑原 裕介	Hachioji new entrance . . . spectacle
1部 建築都市学	小島 紀子	Solid Alley
1部 建築都市学	増田 利治	Vitamin 給 of knowledge
1部 建築都市学	山崎 勉	In your homes ~集合住宅の設計~
1部 建築都市学	大山 和真	Place with community
1部 建築都市学	田中 良幸	flow
2部 建築学科	木暮 俊介	PINWHEEL KISARAZU
2部 建築学科	菅原 良介	須永 哲弥
2部 建築学科	多田 誠太	前橋市中心市街地活性化への提案
2部 建築学科	勇田 泰	the space for art
院 建築学専攻	島 翔	多感覚の建築デザインに関する研究
院 建築学専攻	中野 公介	漁港跡地の有効利用に関する研究
院 建築学専攻	堀田 巨	住宅街における道路空間のあり方に関する研究
院 建築学専攻	山屋 直己	都心回帰 ロロセスと問題点~秋葉原におけるオフィスビルのSOHOへの用途転用~
<b>谷口研究室</b>		
1部 建築コース	豊川 智彰	連 LINK
1部 建築都市学	岩本 泰始	月島型集合住宅
1部 建築都市学	大塚 亜理沙	結 組ぐ、広がる、戯れる
1部 建築都市学	北村 岳彦	AN IMAGE WHIRL STAGE
1部 建築都市学	杉本 真奈美	マイエ
1部 建築都市学	流 晴	ゲキジョウ トシ カブキチヨウ
1部 建築都市学	吉田 主作	僕らの暮らすルーム
2部 建築学科	小松 弘明	Ueban Rich Hill
2部 建築学科	千葉 真樹子	HOUSING COMPLEX
院 建築学専攻	浅田 裕平	町並みの「保存・再生・活用」によるまちづくり研究 ~京都西陣地区におけるケーススタディ~
院 建築学専攻	安部 健	歓楽街のまちづくりに関する研究~新宿区歌舞伎町におけるケーススタディ~
院 建築学専攻	小野 あゆみ	高齢者住宅・施設の類似化と日本におけるグループリビングの可能性
院 建築学専攻	藤原 智弥	産業遺産の活用による臨海工業地帯活性化手法の研究
<b>沢岡研究室</b>		
1部 建築都市学	久米田 英子	代謝建築
1部 建築都市学	須藤 直子	都市の原風景
1部 建築都市学	橋 浩史	R e : R I B B O N C I T Y
1部 建築都市学	敦田 真義	new gata in 新潟
1部 建築都市学	内藤 純	Wander-full Activity
1部 建築都市学	中野 謙一	ハルウラワ urawa horse park
1部 建築都市学	平田 夏美	Archiscape
1部 建築都市学	別役 彩	結 ~イマトムカシツナグ~
1部 建築都市学	田 悠人	fusen
1部 建築都市学	津留 邦光	C O M P L E T E L Y N E W H O U S I N G D E V E L O P M E N T
院 建築学専攻	大崎 智	ファサードにおける表現手法に関する研究
院 建築学専攻	岡本 且之	都市の集合居住における空間構成の研究
院 建築学専攻	小林 亜矢子	既存活用による都市賦活創造性に関する研究
院 建築学専攻	齊藤 隆文	クロノスケープ~時間と共に進む建築手法の研究~
院 建築学専攻	谷内 啓太郎	境界操作と建築~既存状態を利用して創出される空間の可能性~
<b>山本研究室</b>		
1部 建築コース	五十嵐 瑞衣	RENTAL FOREST / 椅子式生活の流入による日本住宅の変化
1部 建築コース	福島 千南	Shopping the Renaissance / 家族形態の変化と住まうこと
1部 建築コース	菅野 優子	場所のカタチ / オスマントリオ時代の集合住宅ドム・コムーナにみる一同共、共有して住む*
1部 建築コース	新保 優樹	ZONING / ~ソヴィエト・ロシア時代の集合住宅ドム・コムーナにみる一同共、共有して住む*
1部 建築コース	藤川 達也	芸術が娛樂になる時代が始まる / 東京の国際都市化を目的とした考察~都市と文化の飛躍~
1部 建築コース	藤田 修司	toshi no manimani / 様
1部 建築コース	藤本 卓也	あるけいど / ガラスの普及が建築・都市空間・生活に与えた影響について~ショーウィンドウより~
1部 建築コース	米田 智博	conversion city / 日本の高齢者住宅の行方 ~スウェーデンから~
1部 建築コース	松岡 佑樹	トリシャカインズル / ドイツ 20世紀初頭の集合住宅~田園都市・ジードリンクから~
1部 建築コース	岸田 创志	PARK CITY / アウトバーン政策・国民車フォルクスワーゲンの与えた影響
1部 建築都市学	瀬川 南	Enoshima LIGHT ARTS-Museum / フランスの子どもの育て方と労働と住み方の変化
院 建築学専攻	村上 孝太	千葉市におけるオープンスクールの安全管理方法について地域を開いた小学校の計画
院 建築学専攻	柳 順彦	賃貸集合住宅におけるデザインの記号化
院 建築学専攻	志賀 優	集合住宅のデザイン要素分析による建築界と一般社会との距離
院 建築学専攻	高木 文隆	1920年代ドイツ社会民主主義における住宅政策を通してみた、近代家族規範に関する研究~現近代住居から見たヘーゲル家族論
院 建築学専攻	照内 劾	居住形態価格による新たな居住形態
院 建築学専攻	藤沢 賢一	住宅形式と外部空間の考察~高度容積率に対する住宅形式とそれに伴う外部空間の研究
<b>赤木研究室</b>		
1部 建築コース	新井 邦之	ジャパンションジム / こどもの遊び環境としての公園の構成に関する研究~遊具・休憩施設・植栽の関係性について~
1部 建築コース	乙頬 謙司	わたしたちをつなぎとめるなにか / こどもの遊び環境としての公園の構成に関する研究~遊具・休憩施設・植栽の関係性について~
1部 建築コース	河瀬 友香	meguro riverside point / 初期学習情報の差異が都市環境の経路探索行動に及ぼす影響ガラスの普及が建築・都市空間・生活に与えた影響について~ショーウィンドウより~
1部 建築コース	佐藤 憲一	CRYSTAL SCHOOL / こどもの遊び環境としての公園の構成に関する研究~遊具・休憩施設・植栽の関係性について~
1部 建築コース	杉山 知明	百貨店内における探索行動特性に基づく空間イメージの変容に関する研究
1部 建築コース	田久保 貴士	すきまのすきま 桜木町駅高架下アート回廊計画 / こどもの遊び環境としての公園の構成に関する研究~遊具・休憩施設・植栽の関係性について~
1部 建築コース	總見 陽介	
<b>赤木研究室</b>		
1部 建築コース	森川 豪介	迷宮ネットワーク -ハモニカ横丁改造計画-/ 我国における認知症高齢者の施設環境に関する書誌学的研究 -日本建築学会の既往研究を中心とした研究目的による分類-
1部 建築コース	小山 正子	認知症高齢者のユニットケア環境における個室のしつらいの構成要因に関する研究
1部 建築コース	水柿 可奈子	和ノ風 一川と人の再生 -/ 現代日本の中庭付き一戸建住宅における中庭の役割について
1部 建築コース	森川 豪介	木瀬れ陽 四季の移り変わりを感じることのできる保養所 / 我国における認知症高齢者の施設環境に関する書誌学的研究 -日本建築学会の既往研究を中心とした研究目的による分類-
1部 建築コース	小山 正子	世代をつなぐ丘 / 認知症高齢者のユニットケア環境における共用空間のしつらいに関する研究 -スタッフの環境整備方針が与える影響-
1部 環境コース	柳 彩子	
2部 建築学科	鈴木 裕絵	
2部 建築学科	吉村 道子	
<b>赤木研究室</b>		
1部 建築コース	中島 康一	迷宮ネットワーク -ハモニカ横丁改造計画-/ 我国における認知症高齢者の施設環境に関する書誌学的研究 -日本建築学会の既往研究を中心とした研究目的による分類-
1部 建築コース	長谷川 英	認知症高齢者のユニットケア環境における個室のしつらいの構成要因に関する研究
1部 建築コース	増田 智佳	和ノ風 一川と人の再生 -/ 現代日本の中庭付き一戸建住宅における中庭の役割について
1部 建築コース	水柿 可奈子	木瀬れ陽 四季の移り変わりを感じることのできる保養所 / 我国における認知症高齢者の施設環境に関する書誌学的研究 -日本建築学会の既往研究を中心とした研究目的による分類-
1部 建築コース	羽場 梨恵子	都市の居間 / 銀座の路地に関する研究
1部 建築コース	平田 美羽	New Ginza Mode for strolling / 銀座における街路の景観特性に関する研究
1部 環境コース	小林 文史	都市再生 / 地方都市の中心市街地の再活性化に関する研究
1部 建築都市学	卯月 淳	Urban blank space ReBetween Yokohama & Sakuragicho / 繼続立体交差事業におけるまちとの関係について
1部 建築都市学	大久保 勝	COMPLEX + COMFORTABLE / 都市における水辺空間に関する研究
1部 建築都市学	齊藤 純	port of call / 木造密集市街地におけるまちづくり
1部 建築都市学	佐藤 光太郎	Let's enjoy life on the water. / 都市における水辺空間に関する研究
1部 建築都市学	渡澤 潤平	CROSS CULTURAL CITY / 住まいの歴史とこれからを考える
1部 建築都市学	武岡 卓真	
1部 建築都市学	花沢 淳	"Urban Renovation" for rich public life / 都市情報誌にみる集客型商業エリアの空間と与えるイメージに関する研究
1部 建築都市学	吉原 手也	on the way ... / 歩行者中心都市に関する研究
2部 建築学科	赤羽 久美子	IBAエムシャーバークに関する研究
2部 建築学科	加藤 秀明	夜間景観・都市における照明のあり方に関する研究
2部 建築学科	下館 奈緒子	Toyohashi Transit Town
2部 建築学科	長坂 友樹	
2部 建築学科	猪狩 昭文	ニューアーバニズムの都市づくりに関する研究
2部 建築学科	枝川 涉之	ファッショントンタウとしての東京に関する研究
2部 建築学科	加藤 麻衣子	
2部 建築学科	中川 周	アーバン・ツーリズムにおける景観評価に関する研究
院 建築学専攻	長島 淳	公園空地における光環境の評価に関する研究
院 建築学専攻	三井 敦史	
<b>倉田研究室</b>		
1部 建築コース	羽場 梨恵子	都市の居間 / 銀座の路地に関する研究
1部 建築コース	平田 美羽	New Ginza Mode for strolling / 銀座における街路の景観特性に関する研究
1部 環境コース	小林 文史	都市再生 / 地方都市の中心市街地の再活性化に関する研究
1部 建築都市学	卯月 淳	Urban blank space ReBetween Yokohama & Sakuragicho / 繼続立体交差事業におけるまちとの関係について
1部 建築都市学	大久保 勝	COMPLEX + COMFORTABLE / 都市における水辺空間に関する研究
1部 建築都市学	齊藤 純	port of call / 木造密集市街地におけるまちづくり
1部 建築都市学	佐藤 光太郎	Let's enjoy life on the water. / 都市における水辺空間に関する研究
1部 建築都市学	渡澤 潤平	CROSS CULTURAL CITY / 住まいの歴史とこれからを考える
1部 建築都市学	武岡 卓真	
1部 建築都市学	花沢 淳	"Urban Renovation" for rich public life / 都市情報誌にみる集客型商業エリアの空間と与えるイメージに関する研究
1部 建築都市学	吉原 手也	on the way ... / 歩行者中心都市に関する研究
2部 建築学科	赤羽 久美子	IBAエムシャーバークに関する研究
2部 建築学科	加藤 秀明	夜間景観・都市における照明のあり方に関する研究
2部 建築学科	下館 奈緒子	Toyohashi Transit Town
2部 建築学科	長坂 友樹	
2部 建築学科	猪狩 昭文	ニューアーバニズムの都市づくりに関する研究
2部 建築学科	枝川 涉之	ファッショントンタウとしての東京に関する研究
2部 建築学科	加藤 麻衣子	
2部 建築学科	中川 周	アーバン・ツーリズムにおける景観評価に関する研究
院 建築学専攻	長島 淳	公園空地における光環境の評価に関する研究
院 建築学専攻	三井 敦史	
<b>安原研究室</b>		
1部 建築コース	門脇 直美	アルゴミュ
1部 建築コース	柳原 佳吾	Re-Leaf CULTURE
1部 建築コース	豊島 純一	Stripe turn into Check
1部 建築コース	古畑 春樹	another flow
1部 建築コース	渡辺 清花	space is . . .
1部 建築コース	中井 猛史	YOSHIMURA GRAIN OF TRUTH
1部 環境コース	川崎 大樹	Ueno Sakuragi A · I · R
1部 環境コース	高橋 大輔	CUBE ~Mind canvas cafe~
1部 建築都市学	長田 昌寛	Projected Rectangle
1部 建築都市学	田中 啓子	出逢日とココロコロツナグミチ コドモノコロノユメオボエテ
1部 建築都市学	垂木 昌之	イマカ ?
1部 建築都市学	寺内 寛五	TAMA COMPLEX CENTER
1部 建築都市学	山下 裕介	linked and live together in SHIMOKITAZAWA
1部 建築学科	加藤 友実	HACHIOJI UNDERGROUND STREET
2部 建築学科	工藤 敦志	シーケンスによる路地再生方法の有用性に関する研究
2部 建築学科	豊川 仁喜	静止画CGと組写真とアニメーションCGにおける空間認知の差の研究
2部 建築学科	内木 重行	Musashino Common / 街路空間における緑と看板の与える影響について
2部 建築学科	佐々木 祥太	survey of conversion
2部 建築学科	高橋 進吾	
2部 建築学科	武藤 紀曉	
院 建築学専攻	尾藤 修	街路空間における広告看板と街路樹の影響力と景観改善に関する研究
院 建築学専攻	金森 主計	初期指導学習 WAYFINDING特性に基づく都市環境の把握に関する実験的研究
院 建築学専攻	高橋 悠一	
院 建築学専攻	八田 政佳	日本国内における建築コンバージョンに関する研究 全国事例調査を通して
院 建築学専攻	持田 啓	不整形路地におけるシーケンスを用いた再生計画手法の有用性に関する研究
院 建築学専攻	吉田 見子	認知症高齢者のユニットケア環境における家庭的な雰囲気の構成要素に関する研究
院 建築学専攻	吉田 隆久	保育環境の質的環境評価基準の開発に関する基礎的研究
院 建築学専攻		内部空間から感じ取られる外部空間の影響
<b>野澤研究室</b>		
1部 建築コース	足立 隆介	"リバース・モーゲージ"を用いた密集市街地の協調化による更新についての研究・豊島区南長崎2・3丁目地区を対象として~
1部 建築コース	鹿島 千絵	駅周辺商店の立地特性と外遊び・お散歩環境に関する研究
1部 建築コース	菊池 祐介	屋上緑化の有効性と持続性に関する研究
1部 建築コース	宮野 英里子	~ヒートアイランド緩和策・地域活性化へのきっかけとして~
1部 環境コース	松山 太郎	Green Grid / 密集市街地における環境共生型街区の形成へ向けた考察
2部 建築学科	梅津野 延子	~中野区豊島地域を対象として~
2部 建築学科	鈴木 康介	Conversation with nature / "中小都市河川及びその周辺における熱環境研究"~河川周辺における住宅更新と狹隘道路の実態に関する研究
2部 建築学科	田中 光政	"密集中心市街地の新たな整備手法の可能性に関する研究"
2部 建築学科	八十岡 良美	新宿区大久保における住宅更新と狹隘道路の実態に関する研究
2部 建築学科	野崎 賢士	"密集中心市街地の新たな整備手法の可能性に関する研究"
院 建築学専攻	阿部 茂雄	田舎ノ真也
院 建築学専攻	井ノ上 真也	~東京23区内の重点整備地域を例に~
院 建築学専攻	小笠原 敏光	江東区白河地区における集合住宅急増による都市への影響に関する研究
院 建築学専攻		
院 建築学専攻	TMOにおけるタウンマネージャーのあり方に関する研究	
院 建築学専攻		既成市街地における集合住宅街区の形成手法に関する研究

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
<b>野澤研究室</b>		
院 建築学専攻	西田 聰	大都市圏における持続可能な都市形態に関する研究
院 建築学専攻	山下 雅裕	街路における滞留空間の特性に関する研究
<b>窪田研究室</b>		
1部 建築コース	大森 雅子	
1部 建築コース	斎藤 幹夫	都市とプロスポーツの関係についての研究～飛田給地域を対象として～
1部 建築コース	山保 浩司	Packer' Town
1部 建築都市学	伊藤 泰博	まちづくりにおける風俗環境問題について
1部 建築都市学	ト部賀太郎	鉄道高架下の利用実態についての研究
1部 建築都市学	夏目 朋広	街の魅力になる河川空間のあり方
1部 建築都市学	蛇石 和寛	不動産価値×交通利便性×生活利便性
1部 建築都市学	平賀 順也	都市計画道路内における歴史的町並みの風景保全について～鈴屋町界隈を対象として～
1部 建築都市学	石井 大将	多摩ニュータウンの開発結果の総評と改善案
1部 建築都市学	栗田 健	港北ニュータウンにおけるオープンスペース計画及びその利用実態に関する研究
2部 建築学科	村上 貴美	
2部 建築学科	大川 強太	
2部 建築学科	斎木 篤	
2部 建築学科	前沢 幹生	
2部 建築学科	山部 康介	
2部 建築学科	曾布川俊也	
2部 建築学科	吉野謙太郎	
2部 建築学科	上條 博之	
<b>中島(智)研究室</b>		
1部 建築コース	浅羽 研二	ヨーロッパ各地の中世都市の比較（西洋の中世都市の分類）
1部 建築コース	石田 将敏	建築に描かれた絵画と透視図法
1部 建築コース	木部 聖太郎	世界の石造建築の造形
1部 建築コース	平 翔輝	建築家のデザインによる椅子
1部 建築コース	長木 兼久	パリアフリーに関する考察 北欧と比較して
1部 建築コース	長谷川 理男	Flame For Walking
1部 建築コース	ダニエル・リベスキンドの作品と手法～記憶の表象化～	
1部 建築コース	平沼 賢治	古代建築研究とジョン・ウッド父子の設計手法
1部 建築コース	藤原 美祐	住むについて。
1部 建築コース	松村 仁志	建築の身体性～ウィトルヴィウスから現代まで～
1部 建築コース	堤 华人	第三帝政下における建築活動とその政治的効果
1部 環境コース	イギリス庭園史にみる日本のガーデニングブームについて	
1部 建築都市学	糸山 真貴	花と少女
2部 建築学科	西川 真理子	絵に描かれた建築～ピラネージと新古典主義建築～地方活性化のための「まちの素」を探す～
2部 建築学科	吉田 直弘	～タリア・ボロニャの都市再生計画の事例～「空間の経験～建築およびその空間が、五感に生じさせてきた影響とそれに伴う時間に関しての考察」
<b>木村研究室</b>		
1部 建築コース	高橋 弘樹	駐車場マーケット計画／京都町家における居住形態に関する研究
<b>藤木研究室</b>		
1部 建築コース	小澤 卓真	Water + Architecture for leading various promenades／複数系における配列、パターンの建築の可能性
1部 建築コース	串田 普也	body sense life／生活空間における人の持つ感覚について
1部 建築コース	戸張 友雅	GEOGRAPHICAL PARASITE／建築と環境問題における、土壤の活用法
1部 建築コース	古沢 繁	地球を感じる／万国博にみる建築
1部 建築コース	細野 哲也	purification float/『海岸地帯における開発のこれからの方針性について』～海洋汚染から学ぶ沿岸計画の考察～
1部 環境コース	高橋 千佳	whirlpool／スペース・デザインの方法について
1部 環境コース	中嶋 周作	rainy RAIN + FUNNY／衣服にみる建築との共通性
1部 環境コース	藤井 崇子	Environment→Architecture—Music 環境の音を駆ぐコンサートホール／現代音楽の環境性と表記法との関係からみる、建築の在り方にについて
院 建築学専攻	篠原 明岳	建築形態による風の生成に関する研究
院 建築学専攻	鎌木 洋敬	プラスチック建築の可能性に関する基礎的研究
院 建築学専攻	田村 史紀	バッシュ・デザインによるコンバージョン手法の研究
院 建築学専攻	水野 有子	ダンスマードのアーバンエコロジーに関する研究
院 建築学専攻	山形 紘	～コベンハーゲン、ヴェステラプロ地区の再開発計画を中心に～
院 建築学専攻	山下 正文	自然界的形態模倣による建築形態の研究 高層地域における風環境に関する研究
<b>東研究室</b>		
1部 建築コース	安藤 公介	東京都区部における生産緑地の機能と必要性についての研究
1部 建築コース	加藤 始	都市の自然再生のための学校ビオアーブと地域環境の関係性についての研究
1部 建築コース	藤川 啓子	SHINJUKU ART TOWER
1部 建築コース	多摩地域のエコパークにおける維持管理のあり方に関する研究	
1部 建築コース	小菅 桂吾	未完成の街を／横浜中華街における擬似中華風演出手
1部 建築コース	田中 雄介	“隅田川河岸におけるサウンドスケープに関する研究”
1部 環境コース	中沖 哲夫	～都心に潛在する自然の音の必要性～
1部 環境コース	横須賀 彩	都市の防災とコミュニティの関連性
1部 環境コース	保 清人	トボスをマエケナスする／印象派と日本画芸術家がとらえた都市と農村の美的考察による理想風景
2部 建築学科	高野 泰史	景観法における棚田保全活動の可能性と課題
院 建築学専攻	飯島 賀智	太陽光を利用した建築の設計手法に関する研究
院 建築学専攻	香掛 広輔	都市農地を核とした環境共生集合住宅の計画 エココミュニティ構想の提案
院 建築学専攻	増田 英朗	滞在型市民農園の運営と計画課題
院 建築学専攻	山中 正樹	
<b>初田研究室</b>		
1部 建築コース	秋元 利規	新宿駅東口周辺における道路環境からみた年代別機能分布の変遷
1部 建築コース	黒木 美緒	土地利用と公共的施設からみた三郷の都市形成
1部 建築コース	伊藤 美緒	toppass／三郷市の近代化～農業の変遷
1部 建築コース	黒川 直樹	浅草の六区興行街の形成と変遷
1部 建築コース	佐藤 陽平	生活基盤の整備からみた三郷の都市形成
1部 建築コース	田淵 実	商店街からみた近・現代の浅草
<b>初田研究室</b>		
1部 建築コース	西川 聰	SHINJUKU METAL CHAOS／新宿駅前商店街振興組合・モア街の都市変遷
1部 建築コース	八木 桂	交通機関からみた近・現代の浅草の都市形成
1部 建築コース	吉野 忠子	帝都復興計画からみた江東区・深川の都市変遷
1部 建築コース	淺野 雄太	packing325／道路整備からみた三郷市の都市形成
1部 建築コース	立花 真悟	江東区における親水公園の形成と変遷
1部 建築コース	竹内 耕	商店建築の近代以前の看板・廣告の変遷と1993年の渋谷駅西側
1部 建築コース	西岡 大輔	ケイジョウ×サイン。
2部 建築学科	野崎 貴裕	公園及び緑地の整備からみた三郷市の都市形成
2部 建築学科	松田 孝信	Several leaves
2部 建築学科	渡邉 直樹	設計競技と講演建築の国風意匠
2部 建築学科	多賀谷 孝洋	日本におけるホテル建築の変遷～近代化的記号としてのホテル～
2部 建築学科	堀典子	渋谷駅西側地域における街区構成の変遷
2部 建築学科	碇 直	関東大震災復興時に建設された江東区深川地区の橋梁周辺の現況に関する研究
院 建築学専攻	鈴木 敦文	1935年から2001年までの江東三角地帯における内部河川沿い敷地の用途に関する研究
院 建築学専攻	鶴永 貴之	東京都三郷市における市街地形成の歴史的研究
院 建築学専攻	吉田 和男	～住宅地：都市施設の変遷および既存50年以上の建築物を通して～建築機能の分布からみた1933年から2003年における新宿駅東口周辺の変遷に関する研究
<b>宮城研究室</b>		
1部 建築コース	井口 祐次郎	国立アートステーション～新たな芸術との出会いと融合～／まちづくりの手法についての事例研究
1部 建築コース	小原 雅後	hachioji.net～ハチオウジ ドット ネット／視覚障害者と肢体不自由者にとっての歩行空間のあり方
1部 建築コース	小宮山 正人	wave／
1部 建築コース	徳田 静	認知症高齢者～グループホームの改修型における面積構成とケアの関係性
1部 建築コース	新間 隆宏	nature made／地域図書館児童室における子供たちの利用状況に関する研究
1部 建築コース	藤本 康史	お茶の水・神田川 緑化プロジェクト／「東京都知的障害者グループホーム利用者の生活圈に関する研究～東京都葛飾区におけるケーススタディ～」INFOBAR／
院 建築学専攻	竹川 尚宏	公共図書館における複合化の適合性に関する研究
院 建築学専攻	渡邊 博之	共用空間の利用実態比較からみた既存特別養護老人ホームの生活環境に関する研究
<b>後藤研究室</b>		
1部 建築コース	神田 武藏	岩松修景計画／愛媛県津島町岩松の町並みに関する調査・研究
1部 建築コース	森井 寛朗	屋根改修における古瓦の補修方法に関する研究
1部 環境コース	伊藤 伏	愛媛県津島町岩松地区における伝統的建築物の調査・研究
1部 建築都市学	相澤 美保	向笠園芸製茶工場の調査・研究
1部 建築都市学	武本 ゆき恵	さしもの～と住宅・指接法からみた宇和島城の構造に関する研究
1部 建築都市学	戸田 啓太	～y u i ～／群馬県における養蚕民集落の調査・研究
1部 建築都市学	中村 和也	郡是織錠・群ヶ嶽涌川工場の調査・研究
1部 建築都市学	二宮 正一	環境と景観の共生～教会と環境共生型長屋／福生市の町並み調査
1部 建築都市学	藤田 ふみ	浅酒造業の調査・研究
1部 建築都市学	木下 亜紀	指接法からみた城郭に関する研究
2部 建築学科	梅澤 一成	伝統様式建築のディテールの検証と継承
2部 建築学科	小野 太郎	別荘建築の調査に関する研究
2部 建築学科	川崎 泉子	福生市熊川地区における町並みの調査・研究
院 建築学専攻	稻田 朋美	つくば市の農家における軒年指標の再考
院 建築学専攻	大津 佑子	秋田県の酒造業の調査研究
院 建築学専攻	太島 宏至	郊外型エコ・ユーロジムの提案～福生市を例として～
院 建築学専攻	森山 将行	都市における歴史的建造物の中庭を活かした住居空間としての再生
<b>久田研究室</b>		
1部 建築コース	岡本 典之	東京都を対象とした表層地盤の地盤増幅特性に関する研究（その2）
1部 建築コース	崎田 健史	制振構造物の振動実験及び地盤応答解析
1部 環境コース	大橋 純	東京都を対象とした表層地盤の地盤増幅特性に関する研究（その1）
1部 環境コース	佐藤 紗織	地域住民による早期地震被害情報収集訓練及び防災対応型消火機械訓練に関する研究
1部 環境コース	金田 淳也	東平野における周波数特性を考慮した地盤増幅率に関する研究
1部 環境コース	波瀬 文乃	耐震改修等に係る費用対効果に関する地盤リスクマネジメント
院 建築学専攻	吉田 研史	木造建築群の建築年代別被害予測モデルの構築と破壊力指標の提案
<b>廣澤研究室</b>		
1部 建築コース	今村 美香	新しいRC造建築物の地震被害に見られた柱梁接合部せん断破壊の防止対策（偏心接合部を持つ集合住宅の適切な柱梁断面寸法の検討）
1部 建築コース	岩本 直之	高軸圧を受ける偏心二次壁付短柱の部分スリットによる変形性能改善効果に関する実験的研究
1部 建築コース	佐藤 国史	偏心の大きい準大震片偏心直交梁・床スラブ付RC造柱梁接合部の耐震性能に関する実験的研究
1部 建築コース	前田 公信	X型配筋の主筋を特定定着したRC造十字型柱梁接合部の耐震性能に関する実験的研究
1部 建築コース	山田 義樹	偏心の大きい準大震片偏心直交梁・床スラブ付RC造柱梁接合部の耐震性能に関する実験的研究
1部 環境コース	塚本 英司	高軸圧を受ける偏心二次壁付短柱の部分スリットによる変形性能改善効果に関する実験的研究
2部 建築学科	小野寺 俊	集合住宅耐震改修における構造スリットの検討と影響に関する研究
2部 建築学科	中村 美樹	既存学校舎の耐震診断結果におけるコンクリート強度の影響
2部 建築学科	星 大輔	既存鉄筋コンクリート造集合住宅における第2種構造要素の検討
院 建築学専攻	澤口 純樹	大型形地下における二次壁付柱の耐震性能に関する実験的研究・構造スリット・帯筋比、及び軸力比の影響について～
院 建築学専攻	島崎 建夫	既存RC造建築物の耐震診断における第2種構造要素の検討および構造スリットによる改善方法
院 建築学専攻	下山 哲男	RC造耐震壁の耐震性能に与える動的加力の影響に関する実験的研究
院 建築学専攻	高田 智明	準実大RC造柱梁接合部の耐震性能に影響を及ぼす配筋方法に関する研究
院 建築学専攻	松田 宏之	RC造耐震壁の簡略化弾塑性解析モデルの提案

# 2004年度 卒業設計・卒業研究・大学院修士論文題目名簿

(個人情報の機密保持の為、住所・電話・勤務先のかわりに掲載します。)

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
<b>宮澤研究室</b>		
1部 建築コース	浅野 健一	枠組壁工法住宅の接合部応力算定式における直交壁効果の適正評に関する研究
1部 建築コース	内田 竜市	既存軸組み住宅の耐力性状に関する研究
1部 建築コース	遠藤 卓弥	粘弾性体を用いた合板制振壁に関する研究
1部 建築コース	加藤 敏史	軸組構法住宅の立体弾塑性解析に関する研究
1部 建築コース	熊谷 泰弘	粘弾性体を用いた木質制振構造に関する研究
1部 建築コース	斎藤 肇史	軸組構法筋かい壁の耐力に及ぼす接合部仕様の影響に関する研究
1部 建築コース	斎藤 雅人	寺院建築物の耐震診断・耐震補強に関する研究
院 建築学専攻	田中 啓	鋼板えん板ボルト接合部のせん断耐力に関する研究
院 建築学専攻	津田 千尋	既存木質住宅の耐力・耐震性能と振動特性に関する研究
院 建築学専攻	野中 懇貴	既存木質住宅の耐震診断に関する研究
院 建築学専攻	森 清輝	H型鋼を用いた木質ハイブリット構造に関する研究
<b>近藤研究室</b>		
1部 建築コース	小● 政史	柱に梁が偏心取きたR C造柱梁接合部の耐震性能に関する実験的研究
<b>遠藤研究室</b>		
1部 建築コース	加藤 弘道	工学院大学新宿キャンパスのライフサイクル特性
1部 環境コース	片野祐司	工学院大学新宿キャンパスのライフサイクル特性
1部 環境コース	黒田 達哉	工学院大学新宿キャンパスのライフサイクル特性
1部 環境コース	黄 智満	J-REIT法人による不動産証券化とその経営実態
1部 環境コース	田中 優	建築工事市場単価と積み上げ単価の比較
1部 環境コース	西岡 駿一	J-REIT法人による不動産証券化とその経営実態
1部 環境コース	木部 陽介	静岡県下の自治体における入札結果の分析
1部 環境コース	馬上 威人	大手住宅メーカーの商品系列の推移に関する考察
1部 環境コース	深尾 明典	首都圏マンション市場における販売価格と収益還元価格の比較
2部 建築学科	山下 大介	首都圏におけるワンルームマンション経営の採算性の検討
2部 建築学科	黒川 昌一	東京23区におけるライフサイクルマトリックス法による住宅着戸数の予測
2部 建築学科	斎藤 実充	住宅市場の環境変化に伴う木造住宅業界の構造変革についての考察
2部 建築学科	津久井 章伸	2003~2004年の国内建築材価格上昇のメカニズムに関する研究
院 建築学専攻	小川 公由	
<b>嵩研究室</b>		
1部 建築コース	上田平将吾	高強度コンクリートの諸性質に及ぼすセメントと養生の影響の研究
1部 建築コース	江草 義生	材齢70年を経過した竹筋コンクリート鉄道橋の調査
1部 建築コース	小林 雄尚	高強度コンクリートの諸性質に及ぼすセメントと養生の影響の研究
1部 建築コース	後藤 弘毅	材齢25年を経過した実大試験体の構造体コンクリートの諸性状に関する研究/その2 石灰石碎石を用いた流動化コンクリートの諸性状の再現実験
1部 建築コース	武井 敦	新規骨材コンクリートの諸性質に関する実験的研究
1部 建築コース	中村 正俊	取締低減剤を用いたフライアッシュコンクリートの諸性質の研究
1部 建築コース	原 貴義	取締低減剤を用いたフライアッシュコンクリートの諸性質の研究
1部 建築コース	守屋 健一	フライアッシュによる高性能AE減水剂コンクリートの品質改善に関する研究
1部 建築コース	渡邊 英樹	材齢25年を経過した実大試験体の構造体コンクリートの諸性質に関する研究/その1 構造体コンクリートの強度および耐久性に関する調査
1部 環境コース	河野 修平	研究/その1 構造体コンクリートの強度および耐久性に関する調査
<b>吉田研究室</b>		
1部 建築コース	小川 泰弘	建築の資源循環に関する研究～建築の資源循環と他分野の資源循環の比較～
1部 建築コース	尾田 明紀	建築の資源循環に関する研究～建築の資源循環と他分野の資源循環の比較～
1部 建築コース	柏村 憲祐	建築物のライフサイクルに関する研究～教育施設のストック調査と今後の展望～
1部 建築コース	櫻井 宏子	建築物のライフサイクルに関する研究～教育施設のストック調査と今後の展望～
1部 建築コース	佐藤 浩史	分別解体に対応した建材の在り方に関する調査研究
1部 建築コース	瀬戸口 航	「建築評価」に関する研究
1部 建築コース	横本 正	～コンバージョンされた家屋の固定資産評価方法に関する調査研究～
1部 建築コース	秦 幸生	「建築評価」に関する研究
院 建築学専攻	富田 慶子	～コンバージョンされた家屋の固定資産評価方法に関する調査研究～
<b>宇田川研究室</b>		
1部 建築コース	井上 嘉洋	熱負荷シミュレーション手法の検証
1部 建築コース	相川 徹	
1部 環境コース	金子 真悟	超高層大学校舎のエネルギー消費量
1部 環境コース	鈴木 真仁	太陽熱利用給湯暖房システムの総合評価
1部 環境コース	永岡 裕一	熱負荷シミュレーション手法の検証
1部 環境コース	大林 功	超高層大学校舎のエネルギー消費量
1部 環境コース	益田 慎輔	太陽熱利用給湯暖房システムの総合評価
<b>大橋研究室</b>		
1部 建築コース	塙谷 新伍	積雪地域の建物における環境負荷低減手法に関する研究
1部 建築コース	黒岩 智栄美	事務所建物における空調設備リニューアルに関する研究
1部 建築コース	橋本 達也	事務所建物における空調設備リニューアルに関する研究
1部 建築コース	吉岡 雅之	屋上緑化による環境改善効果に関する研究
1部 建築コース	古谷 大祐	積雪地域の建物における環境負荷低減手法に関する研究
1部 建築コース	二平 修一	事務所建物におけるトイリリニューアルに関する研究
1部 建築コース	堀内 健史	事務所建物におけるトイリリニューアルに関する研究
<b>野部研究室</b>		
1部 建築コース	井上 千里	環境選択性を具備した椅子の開発
1部 建築コース	織田 泰弘	オフィスの執務状況とコンセント電力消費量に関する実測調査
1部 建築コース	岸野 由梨	建築物のエネルギー消費構造に関する研究
1部 建築コース	古川 慎	環境選択性を具備した椅子の開発
1部 建築コース	嵯峨 晴子	室内温熱環境と環境調整行動に関する研究
1部 建築コース	新川 隆将	省エネルギー改修建築の実測評価
1部 建築コース	田邊 智子	室内温熱環境と環境調整行動に関する研究
1部 建築コース	矢沢 敦	スキンロードリアルタイムエミュレータの基礎的実験
1部 環境コース	長南 宏	環境選択性を具備した椅子の開発
1部 環境コース	横山 友紀	オフィスにおける環境適応行動に関する調査研究
1部 環境コース	遠藤 高史	スキンロードリアルタイムエミュレータの基礎的実験
2部 建築学科	日渡 邦明	ディスプレイスメント空調における居住者の総合評価に関する調査研究
2部 建築学科	湯浅 敏	タスク・アンビエントシステムの居住後評価
<b>野部研究室</b>		
院 建築学専攻	秋葉 友利	建築のエネルギー関連時系列データの集約的表現及び分類手法に関する研究
院 建築学専攻	庄司 睦美	都内大規模事務所のエネルギー消費特性解析及びデータベース化に関する研究
院 建築学専攻	真野 哲敬	建築物のエネルギー消費構造解析とシミュレーション適用過程の諸問題に関する研究
<b>高信研究室</b>		
1部 建築コース	小出 拓哉	空気集熱システムを利用した住宅の実測調査
1部 環境コース	青木 唯	空気集熱システムを利用した住宅の実測調査
1部 環境コース	佐々木 卓也	空気集熱システムを利用した住宅の実測調査
<b>村上研究室</b>		
1部 建築コース	北村 淳	我が国における認知症高齢者の居住環境に関する書誌学的研究
1部 建築コース	竹下 正光	機会犯罪の成立に関わる物的環境の解明に関する研究
1部 建築コース	山田 崇弘	機会犯罪の成立に関わる物的環境の解明に関する研究
1部 環境コース	上木 康司	我が国の環境犯罪学に関する書誌学的研究
1部 環境コース	小澤 佑貴	地域住民の防災活動支援技術の開発に関する研究
1部 環境コース	今野 かんな	2004年新潟県中越地震の建物被害に関する調査研究
1部 環境コース	佐藤 洋志	地域の防災関連情報データベースの構築とWebGISによる運用に関する基礎的研究
1部 環境コース	島村 学	地域防災活動がもたらす犯罪低減効果に関する基礎的研究
1部 環境コース	坂本 圭	熱環境と都市形態の関連に関する研究
1部 環境コース	野村 美帆	車椅子利用者を対象としたバリアフリーのまちづくりに関する調査研究
2部 建築学科	濱田 時会	住民の避難行動特性に関する基礎的研究
<b>小野里研究室</b>		
1部 建築コース	沼倉 宗之	R C耐震壁の最大強度の評価と柱主筋量に関する実験的研究
1部 建築コース	春田 寛子	集成材概式構造の研究
1部 建築都市デ	青木 雅史	R C耐震壁の最大強度の評価と柱主筋量に関する実験的研究
1部 建築都市デ	竹内 久人	しふくのじかん／可動構造建築の提案～公共トイレを題材にして～
1部 建築都市デ	春山 智史	集成材壁式構造の研究
1部 建築都市デ	藤 由佳	既往のP C耐震壁に関する実験資料とその耐震性能に関する研究
<b>阿部研究室</b>		
1部 建築コース	石井 俊之	フライアッシュによるASR抑制効果に関する実験
1部 建築コース	遠藤 大貴	促進中性化試験結果のばらつきに関する検討
1部 建築コース	水野 康正	モルタルのブリーディングに及ぼすスラグ細骨材の種類の影響
1部 環境コース	西谷 陽介	コンクリートの中性化に及ぼす各種要因の影響に関する調査
院 建築学専攻	斎藤 正城	電気炉灰化スラグ細骨材を使用したコンクリートの基礎的研究
<b>中島(裕)研究室</b>		
1部 環境コース	小宮 千鶴	住宅における環境情報表示モニタの活用可能性に関する調査研究
1部 環境コース	榎本 有希	廃棄物系バイオマスを利用した地区内エネルギーシステムに関する研究
1部 建築都市デ	伊本 浩	Green Sanctuary／保水性セラミックスを利用したルーバー装置の開発に関する研究
1部 建築都市デ	小沢 憲彦	伝統民家型住宅の熱環境とライフスタイルに関する研究
1部 建築都市デ	櫻尾 浩史	住宅における内装材廃棄物の削減手法に関する調査研究
1部 建築都市デ	高野 博則	ガラス建材のリユース・リサイクルに関する調査研究
1部 建築都市デ	武井 由貴	「環境モニタリング」を活用した環境教育手法に関する研究～愛知万博における環境モニタリングシステムの構築～
1部 建築都市デ	福澤 浩	N HL(天然水硬性石灰)の環境性能に関する基礎的研究
2部 建築学科	閔川 幸作	ガラス建材のリユース・リサイクルに関する調査研究
2部 建築学科	竹内 翔平	N HL(天然水硬性石灰)の環境性能に関する基礎的研究
2部 建築学科	角田 和紀	住宅用窓における居住環境性能に関する調査研究
<b>大塙研究室</b>		
2部 建築学科	下山田 敏	多重吊り型免震装置の開発と免震効果に関する実験的研究
<b>中島(裕)研究室</b>		
1部 建築コース	大学学部第1部 建築学科 建築コース	
1部 環境コース	大学学部第1部 建築学科 環境コース	
1部 建築都市デ	大学学部第1部 建築都市デザイン学科	
2部 建築学科	大学学部第2部 建築学科	
院 建築学専攻	大学院 工学研究科 建築学専攻	

# 建築士・宅建

確かな実績に基づく指導ノウハウで合格に導きます

平成16年度  
1級建築士試験

当学院  
最終合格率

76.9%

当学院基準達成者合格率(出席8割、課題提出8割)

平成16年度  
2級建築士試験

当学院  
最終合格率

85.2%

当学院基準達成者合格率(出席8割、課題提出8割)

★建築士・宅建の無料ガイダンス実施中★



無料

法人向資格取得支援サービス実施中!

お気軽にお問い合わせください

試験情報満載 <http://www.shikaku.co.jp>

1級建築士

2級建築士

宅地建物取引主任者

1級建築施工管理技士

1級土木施工管理技士

厚い信頼と合格実績で25年

# 総合資格学院

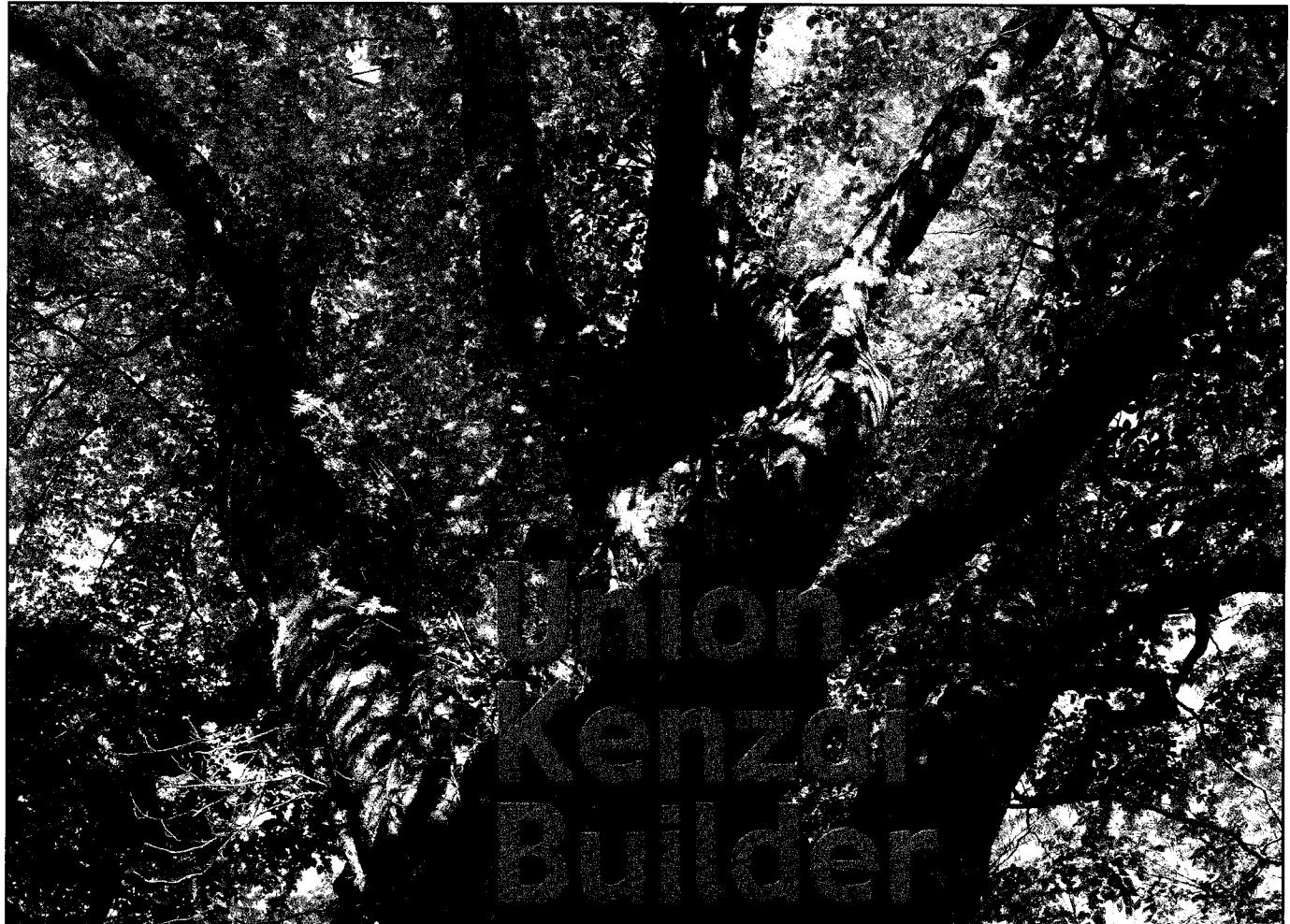
★ 1980-2005 ★  
**Thanks**  
**25th**  
Anniversary  
ありがとう25周年

札幌校 TEL.011-219-3511  
仙台校 TEL.022-217-8421  
水戸校 TEL.029-300-4721  
土浦校 TEL.029-835-5181  
宇都宮校 TEL.028-614-4881  
前橋校 TEL.027-226-7501  
大宮校 TEL.048-642-9811  
越谷校 TEL.048-990-6971  
所沢校 TEL.04-2926-6241  
川越校 TEL.049-291-5211  
熊谷校 TEL.048-599-3531  
船橋校 TEL.047-425-8941  
千葉校 TEL.043-290-7341  
松戸校 TEL.047-369-3821

柏校 TEL.04-7168-9111  
成田校 TEL.0476-24-5851  
新宿校 TEL.03-3366-2181  
池袋校 TEL.03-3982-8211  
上野校 TEL.03-3832-7201  
五反田校 TEL.03-3495-8671  
吉祥寺校 TEL.0422-23-6011  
立川校 TEL.042-524-7841  
町田校 TEL.042-724-3061  
横浜校 TEL.045-316-6811  
横浜校 TEL.046-226-5788  
藤沢校 TEL.0466-55-2611  
厚木校 TEL.046-226-5788  
新潟校 TEL.025-242-2811  
金沢校 TEL.076-237-6811

岐阜校 TEL.058-277-3701  
静岡校 TEL.054-275-3311  
浜松校 TEL.053-456-2211  
名古屋校 TEL.052-202-1751  
小牧校 TEL.0568-42-1211  
岡崎校 TEL.0564-57-8161  
豊橋校 TEL.0532-57-0311  
津田校 TEL.059-238-0711  
四日市校 TEL.0593-59-0711  
草津校 TEL.077-566-6911  
京都校 TEL.075-352-3011  
梅田校 TEL.06-6374-1411  
京橋校 TEL.06-6882-8211  
なんば校 TEL.06-6648-5511

堺校 TEL.072-222-9311  
尼崎校 TEL.06-6430-6811  
神戸校 TEL.078-241-1711  
姫路校 TEL.0792-24-1411  
奈良校 TEL.0742-30-1511  
岡山校 TEL.086-235-5901  
広島校 TEL.082-542-3811  
福山校 TEL.084-991-3811  
福岡校 TEL.092-716-2081  
小倉校 TEL.093-522-7511  
久留米校 TEL.0942-36-7141  
熊本校 TEL.096-212-6811  
川崎校・沼津校・山口校・博多校  
**NEW OPEN**



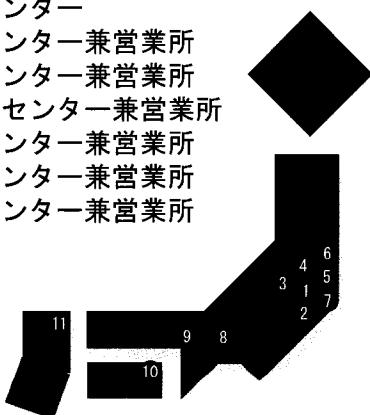
#### 会社概要

社名 株式会社ユニオン建材ビルダー  
設立 1996年10月24日  
資本金 3,000万円  
売上高 134億円（2003年度実績）  
162億円（2004年度実績）  
200億円（2005年度予測）  
220億円（2006年度計画）  
役員 代表取締役社長 伊藤正一  
従業員 135名（平成16年4月1日現在）  
事業内容  
●建築用材料の工事付き販売  
●建築の設計・施工  
（東京都知事許可（般-10）第110691号）  
●建築材料の物流  
●建築構造用パネル及びプレカット材生産

新卒・中途社員募集のお知らせ  
木造住宅 設計・積算  
現場監理  
住宅用建材 営業・商品開発・購買

#### 所在地

- ①東京本社  
〒104-0031 東京都中央区  
京橋1-10-3 服部ビル8F  
TEL. 03-3564-5461（代）  
FAX. 03-3564-5462  
②神奈川物流センター兼営業所  
③埼玉物流センター兼営業所  
④栗橋工場  
⑤古河物流センター  
⑥水戸物流センター兼営業所  
⑦千葉物流センター兼営業所  
⑧名古屋物流センター兼営業所  
⑨大阪物流センター兼営業所  
⑩高松物流センター兼営業所  
⑪福岡物流センター兼営業所



住宅イノベーション  
株式会社 **ユニオン建材ビルダー**

# 日建設計

代表取締役社長 中村光男

東京	〒102-8117	東京都千代田区飯田橋2-18-3	電話 (03)5226-3030
大阪	〒541-8528	大阪市中央区高麗橋4-6-2	電話 (06)6203-2361
名古屋	〒460-0008	名古屋市中区栄4-15-32	電話 (052)261-6131
九州	〒810-0001	福岡市中央区天神1-12-14	電話 (092)751-6533
東北	〒980-0021	仙台市青葉区中央4-10-3	電話 (022)221-4466
支所・その他	北海道(札幌)・東北(仙台)・秋田・神奈川(横浜)・静岡・北陸(富山)・京滋(京都)・神戸・中国(広島)・北九州・熊本・鹿児島・沖縄(那覇)・上海・台北		

<http://www.nikken.co.jp/>



FOR YOU planning consultant inc.

都市環境のトータル・アドバイザー  
株式会社 フォーユー プランニング  
コンサルタント

三好 薫  
井坂 光宏  
関口 映次  
渡辺 博之

東京都世田谷区赤堤4-22-11

TEL:03(3323)7311

<http://www.fy-g.co.jp>

# MUTOH

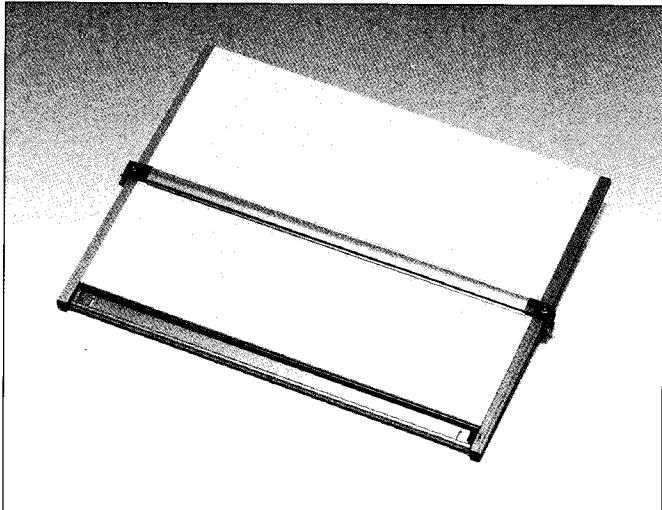
教えるのも、教わるのも、  
MUTOHなら安心です。

設計現場の即戦力となる人材育成には、優れた教材を使用したい。  
そんな声に応えるのは、やっぱりMUTOHです。  
あらゆる設計現場で、高い信頼性と  
納入実績を誇るMUTOHの設計製図ツールは、  
教育の現場でも活躍してくれます。

## LINER BOARD **UM-09NK**

工学院  
特別仕様

場所を選ばず高い精度と操作性が得られる  
コンパクトな平行定規 ライナー・ボード。  
耐久性に優れ快適な操作性を提供する  
シンクロベルト方式を採用した本格派。  
A1サイズまでの作図に対応。図面への  
固定は、付属のマグネットプレートでワン  
タッチ。しかも軽量・コンパクトです。簡単に  
持ち運びできますので、思いついたら  
そこがワークスペース。アイディアを生  
み出す頼もしい片腕です。



株式会社 ムトー エンジニアリング 東京都世田谷区池尻3-1-3 〒154-8560 TEL(03)5486-7139(直) FAX(03)5486-7172

文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。  
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをつくるおしてくれる“水”。  
地球規模の環境汚染が問題となっている今、  
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、  
社会に貢献してまいります。

より快適な  
水環境をめざして。



水と人のあいだに  
**NISHIHARA**

株式会社 西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18 TEL.(03)3452-7441大代表 支店／札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋・大阪・九州 事業内容／給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工

勇気をくれる空気。



あ、ここにも高砂の空気

## 大空間 空調技術

たった一度の数秒間、数分間。そのために何年も費やす選手たち。そんな彼らがすべてをかける瞬間、会場の空気はピンと張りつめます。その空気の中に、暑さや寒さ、湿気、ホコリなどがあつて選手たちの集中力がそがれないように。私たちは体育館の様な大空間へも、オーダーメイドの空調システムを提供。高品質な空気をお届けし、記録と勝利に挑む選手たちの勇気をあと押しします。

人・空気・未来  
**高砂熱学工業**  
本社 〒101-8321 東京都千代田区神田駿河台4-2-8

空気と水のエンジニア

# SUGA

## 風は心地よいですか、水はおいしいですか。

オフィス環境の快適を見つめて1世紀

わたしたちは空気と水のエンジニア 須賀工業です  
ビル設備のご提案を通して、都市再生のお手伝いを続けています

空気調和・給排水衛生設備  
創業1901年  
**須賀工業株式会社**  
本社 〒110-0005 東京都台東区上野5-18-10  
電話 03(568) 8100  
URL <http://www.suga-kogyo.co.jp/>



## 人がつくる、人の場所。

そこには落ち着ける空間があります。そこには快適な環境があります。

そして、そこには豊かな時間が流れています。

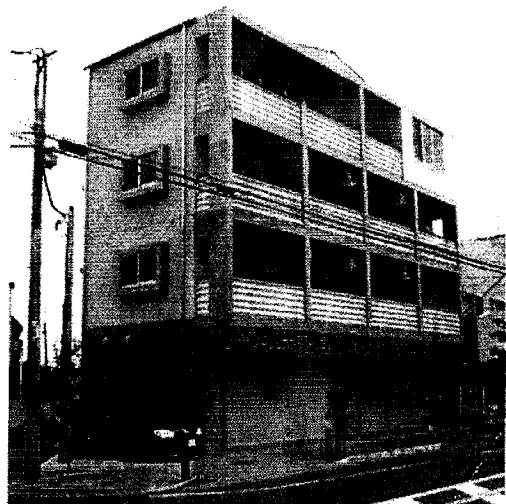
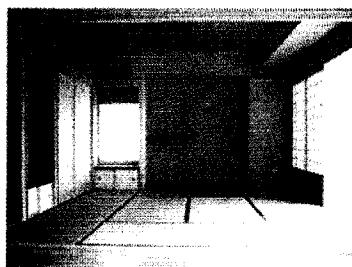
大切なのは人の息吹が感じられる場所であること。

私たちはこれからも想いを込めてつくり続けます。

SHIMIZU CORPORATION  
**清水建設**

<http://www.shimz.co.jp/>

新しい家。これから増える  
アルバムの最初の1ページに、  
私たちが建築した建物を入れてください。



新築・建替・増改築など  
構造・工法問わず。  
建物のことなら何でも  
お気軽にお問合せください。

**NAKAJIMA**

**株式会社 中島建設**

〒228-0813 神奈川県相模原市松が枝町4番5号  
TEL.042-733-7000 <http://www.nakajimax.co.jp>

ISO 9001 / 14001 認証取得  
国土交通大臣 許可(特-14)第 19807 号

# 中電工は「総合設備エンジニアリング企業」として 社会の発展に貢献します。

- ◆ 電気設備工事
- ◆ 水道施設工事
- ◆ 土木建築工事
- ◆ エネルギー関連
- ◆ 環境関連
- ◆ 電気機器の設計・製作・販売・修理・据付・保守
- ◆ 送配電線工事
- ◆ 防災・消防設備工事
- ◆ ソフトウエア関連
- ◆ 情報通信設備工事
- ◆ リニューアル・リフォーム
- ◆ コンサルティング・メンテナンス業務
- ◆ 空調管設備工事
- ◆ 鉄塔工事
- ◆ 電気通信事業



# 中電工

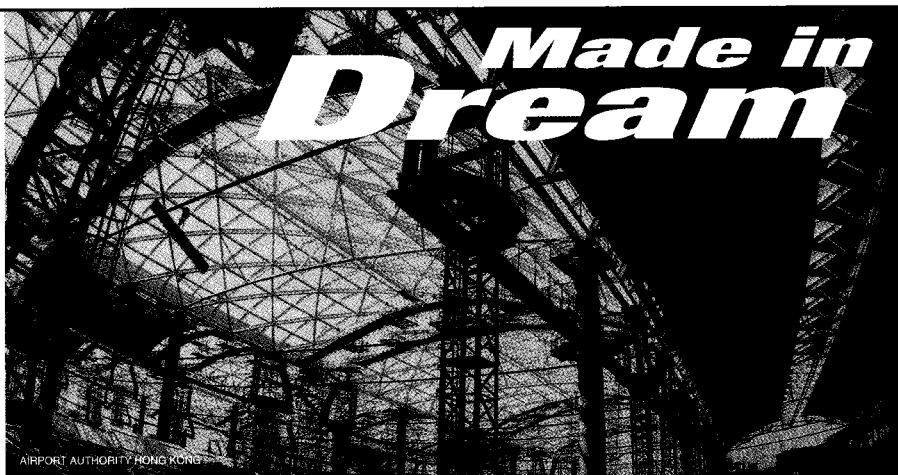
本店／広島市中区小網町6番12号 TEL 082(291)7411  
広島・岡山・山口・島根・鳥取支店  
東京・大阪本部、名古屋・九州・四国支社

<http://www.chudenko.co.jp>

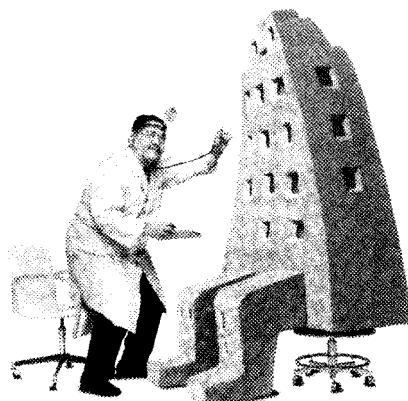
夢を紡いで現実を創りだすのが、  
人間の仕事です。  
前田建設は、夢に挑み、  
21世紀を開拓します。



〒102-8151 東京都千代田区富士見2丁目10番26号  
<http://www.maeda.co.jp>



20歳過ぎたら  
健診を。  
人間の話では  
ありません。



KANDENKO

電気設備など、中から疲れやすくなっているビルは、関電工でリニューアルを。ビルを診断、設計、施工してビル内環境を改善します。設備に関することは、ビルのドクター関電工にご相談ください。

ビルの誕生からリニューアルまで  
総合設備の

△ 関電工

# 建築系学科同窓会ホームページにアクセス！

建築系学科同窓会HPのアドレスが新しくなりました。

(新アドレス) <http://www.kogakuin.or.jp/kenchiku/>

(旧アドレス) <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

<主なコンテンツ紹介>

## ○資格支援WEB講座

現役学生を対象とした建築に関わる各種資格を同窓会がバックアップ！

## ○研究室LINK！

各研究室が持っているHPに直接アクセス！

## ○PARTNER'S LINK！

掲載を希望する同窓会関係者（卒業生、研究機関、ビジネスパートナー、学生個人等）のHPをご紹介！あなたも是非！

## ○各種EVENT掲載

同窓会主催のイベントを中心に、工学院大学や建築系学科の最新話題を同窓会誌NICHEよりも一足お先にお届けします！

## NICHE企画2006 お勧め！

卒業生は現役生の足長おじさん！

NICHE on WWW

## 資格支援WEB講座

現役学生の資格勉強を同窓会がサポート。  
e-ランニングを使って効果的に勉強しよう！  
「宅地建物取引主任者」  
「2級福祉住環境コーディネーター」  
「CADトレース技能審査」  
「CAD利用技術者試験」  
「2級エクステリアプランナー」

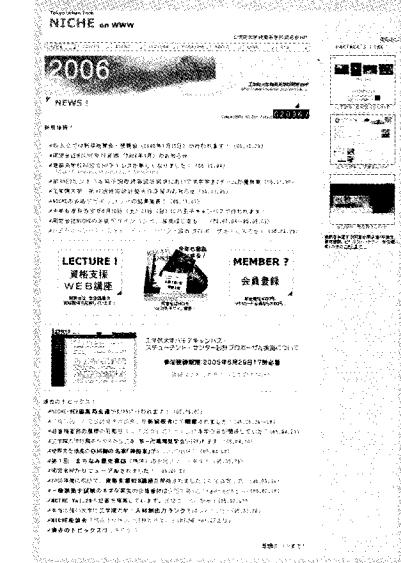
## NICHE企画2006 お楽しみ！

同窓会の活動をリアルタイムに掲載！

NICHE on WWW

## 各種イベント掲載！

同窓会主催のイベントを中心に、  
工学院大学や建築系学科の最新話題を  
同窓会誌NICHEよりも一足お先に  
お届けします！



## NICHE on WWW

## NICHE企画2006 必見！

どんな様子かな？

NICHE on WWW

## 研究室LINK！

各研究室が持っているHPに  
直接アクセスできます！  
現在の研究室がどんな活動を行っているのか、  
あなたの目で確認してみましょう！

## NICHE企画2006 あなたも！

あなたのHPをリンクしよう！

NICHE on WWW

## PARTENR'S LINK！

掲載を希望する同窓会関係者（卒業生、  
研究機関、ビジネスパートナー、学生個人等）  
のHPをご紹介！  
あなたも是非、参加してみては？

建築系学科同窓会HPアドレス

<http://www.kogakuin.or.jp/kenchiku/>



## 表紙デザインのコンセプト 嵐嶋彰仁

本校の特徴の一つに新宿という場所の立地性があげられる。この場所で建築を学ぶことの意義はどのようなものだろうか。一つには利便性の良さが上げられるかもしれない、または新宿の多様な要素に活力を見い出せるかもしれない。その捉え方は人により様々だろう。しかし近代の日本を象徴するようなこの場所で建築を学んでいることにある種の責任感や使命感を感じ、そこから何かを得て新たな可能性を発見していくことが本大学で建築を学ぶことの意義なのではないだろうか。そういった意味において、この場所で学んでいることを再認識するための、また新宿に対するイメージを感化するような表紙になればと思い作成しました。

工学院大学大学院 工学研究科建築学専攻修士課程2年 谷口研究室  
大分県立東高等学校出身

### NICHE発行時期変更のお知らせ!

工学院大学建築系学科同窓会 会長 田野邊幸裕

昨年の「NICHE編集会議」(2005年8月)で、例年秋の発行では毎年編集時間が不足して大変である…発行日時変更

に伴う経費を節減すべし…。などの理由により、発行日時の変更が提案されました。この意見を尊重し、今期から発行時期

を春(2006年3月)に変更することとしました。同窓会関係者の皆様の深いご理解とご協力をお願い申し上げます。なお、ご

意見お問い合わせがございましたら、下記NICHE編集担当者までご連絡戴けますようお願い致します。

### NICHE 2006 Vol.29 編集後記

#### ■配布時期変更と経費節減の検討について

現在、学内では日本初の「建築学部」(仮称)構想が進展しており、2005年度内にその概容が決まる予定でした。しかも、八王子校地の「スチューデントセンターの公開競技設計」結果報告など…同窓会記事として見逃せない重要な情報を、何とか掲載しようとすると、例年どおりの秋では発行不能という結論になりました。その後、この構想は継続審議で延期(学科便り参照)となってしまいました。こうした事情もあって、編集部ではVol.29号を思い切って2006年3月発行することにし、次のようなメリットがあると判断しました。

①編集時間にゆとりが出て、一層の内容充実に貢献できる。

②全国の同窓生への配付は、2006年4月頃「工学院大学校友会誌」に同封し、同時送付とする。

2006年3月20日(月曜日)卒業式には、新卒業生へ配付。

在校生には、新入生を含め4月に配付することで、年度の区切りが明瞭になる。

③同窓生へは、総会案内・校友会誌と一緒に校友会の費用で

送付することで経済的に有利。  
送料約70~80万円程度の節約が可能となる。

#### ■この変更により次のような対策を講じましたが、種々の問題も起こりました

校友会企画部会のメールアドレスを利用して全国の建築系学科同窓生300~400名の方々に、平成17年11月10日付けでお知らせしました。その後もメールやハガキなどでお知らせましたが、全員の方々にはお知らせすることが困難でした。新年会の席で「NICHEを首を長くして待っているのに、会費を払ってないから届かないの?」と聞かれたいたしました。会費も払って戴きたいのですが、お知らせが充分に行き渡りませんでした。

また、時間的ゆとりがあることで油断し、却って高度な画像処理を行おうとし、大変手間取りました。特にCADデータは谷口研究室で対応しましてもバージョンが異なるとお手上げです。図面は縮小しますと線が細くなります。A4版にレイアウトする小さい画像の場合は別途作図して線を太めに書き直す手間が生じます。また、レイアウトデザインの

際に、写真や画像を多数添付されましたが、原稿優先でレイアウトしました。文字数の多い原稿は画像の面積が少なくなります。そのため写真や画像を充分掲載することが困難になりました。執筆者の方々に改めて深くお詫び申し上げます。

また多くの執筆者の方々にゲラ原稿をお届けして修正のご返事を戴きました。大幅な変更には時間的に手間取り、締切り間際には大変困難が伴いました。今年は納期がずれ込む危機感を感じるなど、最後迄厳しい状況が続きました。

#### ■今期も盛りだくさんな内容です!

日本最初の本格的「新建築学部」創設!の夢が延期になりました。この記事を何とか掲載することを契機に発行時期変更も実行したのですが、実現の見通しなど、具体的な内容を掲載出来ず非常に残念です。次号にその記事が大きく報道されることを、OBの皆さんと共に祈りましょう!こうした発行時期延期が原因?編集終了間近になって、多くの情報が入ってきました。それらはなるべく NICHE Topics として取り上げま

したが、掲載しきれないものも多く出ました。それらはできるだけ次回掲載に譲るとして…。さて、今年の「NICHE」の内容はいかがですか?今回は、時間が伸びた分、樋口清先生にお会いして、伝説の遠藤新、天野太郎先生のお話、南迫先生のフランク・ロイド・ライトの記事など興味深いものがあります。平成17年5月同窓会総会でライト・ツアーアの企画が発表され、その後平成18年中に実施検討中と伺いました。次号にはライトツアーアの記事も掲載できればと思っています。

#### ■執筆者、関係者の皆様!ご協力ありがとうございました!

NICHEの編集作業を遂行するにあたりご協力戴きました多くの関係者の皆様に、厚くお礼申し上げます。今回も皆様のご感想や次号NICHE 2007 Vol.30の企画に関するご意見を、下記 NICHE編集部アドレスまでメールでお願い申し上げます。

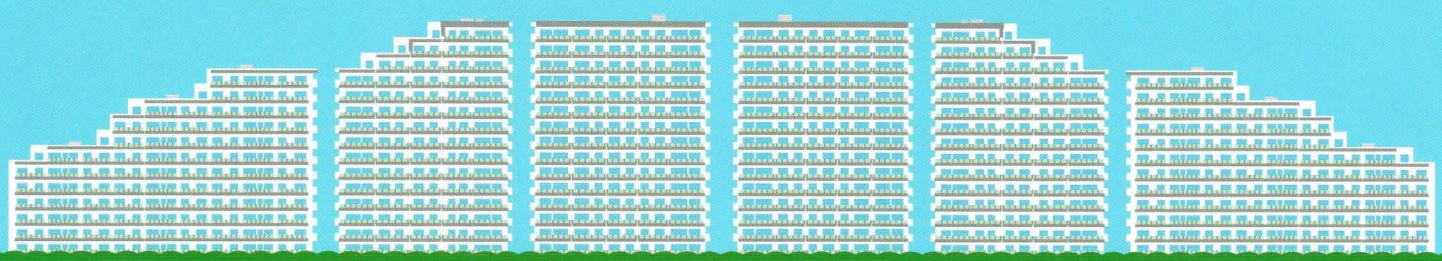
NICHE編集長 大場光博  
E-Mail : miu@tkg.att.ne.jp

朝、ベランダに立つ。

今日から、深呼吸が新しい日課になりそうだ。

ヨーロッパのセレブリティ達が、世界的な社交場ヴェネツィア・リドの喧騒を嫌って移り住んだと言われる、アドリア海に面した北イタリアのリゾート地「ポルトフィーノ」。

「桜木坂」はこの、エメラルドグリーンの入り江を豊かな色彩の家並みが囲む美しい宝石のような街をモチーフに、建築家 久保田章敬が意匠設計を行ったイタリアンリゾート感覚のコミュニティです。



[www.takara-house.co.jp](http://www.takara-house.co.jp)

販売価格  
1877万円～(3LDK中心)

専有面積  
66.61m<sup>2</sup>(19.48坪)～

月々4万円台からのご返済

この価格には理由があります!

販売価格

コスト	クオリティ
-----	-------

一括発注方式による  
従来のプロジェクト

コスト

クオリティ

分離発注方式による  
宝ハウスのプロジェクト



「桜木坂」は、三浦半島の豊かな自然と、  
生活・レジャー・教育と3拍子の生活環境が  
揃うモデル都市「湘南山手」に誕生する、  
お子様からお年寄りまで安心して暮らせる  
ユニバーサルな居住空間です。

携帯サイトは  
こちらから

QRコードでアクセス



空メールでアクセス

m@tkrh.net

宝ハウスが供給するマンションは、直接施工、直接販売方式の採用により、中間マージンを省き、そのコストダウン効果を購入者に還元することで、卓越した品質とコストパフォーマンスを両立させることに成功しました。是非一度モデルルームをご覧頂き、この新しい住宅水準の素晴らしさを体感して下さい。

お問い合わせは湘南山手桜木坂マンションギャラリーまで

0120-664-616

午前10時～午後8時(水曜日定休・祝祭日)

ご購入相談会  
開催中

職種 建築技術者、セールスエンジニア  
学歴 専門学校卒・大卒・院卒  
給与 経歴、資格、能力等により決定  
諸手当 通勤交通費全額支給 賞与:年2回  
休日休暇 週休1日(但し毎月、第2・第4週は週休2日)  
保険 社会保険完備

宝ハウスグループ

宝林産  
有限公司

シティライフ  
株式会社

アトリエシティ  
株式会社

[宝ハウス株式会社 会社概要]

■設立 1967年3月  
■所在地 神奈川県横須賀市日の出町1-2  
■代表者 蚊爪信吉  
■事業内容 マンション 注文住宅、売建住宅、宅地分譲、店舗・ビル・アパート建築、  
買い替え仲介、建て替え、増築・リフォーム、共同事業、等価交換  
■登録 社団法人日本住宅建設産業協会会員・神奈川県知事(11)4473号  
神奈川県建築業許可(般-12)第14823号 一級建築士事務所登録第1945号

～地域密着40年・  
「人に優しい住まい」を  
追求し続けて～

宝ハウス株式会社

## 「新・発想人」募集！

「あたりまえ」ではつまらない。

新たな価値創造へのチャレンジを、宝ハウスは応援します。

既成概念や業界慣習にとらわれず、斬新な発想と迅速な行動で、

宝ハウスはこれまで一般には不可能と思われていたことを一つ一つ実現してきました。

制約から知恵が生まれる。自分たちのリソースが限られたものであるからこそ、

宝ハウスは戦略的であることができたのです。

「失敗」は恐れるものではなく、そこから何かを学び取るもの。

次代のスタンダードも、いつも最初は大胆な試みから生まれてきました。

さあ、あなたも私たちとともに、「新しい常識づくり」にチャレンジしてみませんか。

採用に関するお問い合わせはこちらまで

046-827-2111 mail: recruit@takara-house.co.jp

## NICHE (ニッチ)

niche(nich),n. {Fr.niche,form Lnidus a nest}

- 1.a recess or hollow in a wall usually intended for a statue,bust or vase.
- 2.a place or position particulary suitable for the person or thing in it.  
-webster's New Twentieth Century Dictionary-

校名の愛称「Tokyo Urban Tech」について

工学院大学ではグローバル化の一環に、校名の愛称「Tokyo Urban Tech」を商標登録として申請。